大宰府史跡発掘調査報告書 Ⅰ

平成12年度



2001.3

九州歴史資料館

大宰府史跡発掘調査報告書　正誤表

ページ	行	誤	正
P15	2行	SA4512(Fig.7, PL.3)	Fig.9
P18	下から9行	表採・撹乱(Fig.11・12, PL.7)	Fig.11
P22	下から4行	SD4521(Fig.17, PL.8)	Fig.14
P26	6行	SX4522(Fig.14・15, PL.9)	PL.6
P55	下から9行	SX135	SX134
P64	Fig.43	右端の杭	番号11
P77	1行	杭（14）	杭（20）
	Fig.51	27	11
	〃	28	12
	〃	29	13
	〃	30	14
	〃	31	15
	〃	32	16
	〃	33	17
	〃	34	18
	〃	35	19
	〃	36	20
	〃	37	21
P81	8行	木札（30）	木札（14）
	11行	半球状（27）	半球状木製品（11）
	Fig.53	5	6
	〃	6	5
P83	2行	SX1139	SX139
PL.3	中段	写真	天地逆
PL.8	左から5段目	16—2	17—2
	左から6段目	16—5	17—5
	右1段目	16—11	17—11
	2	16—13	17—13
	3	16—14	17—14
	4	16—15	17—15
	5	16—16	17—16
	6	16—27	17—27
PL.9	左1段目	18—2	18—3
	左2段目	3	2
PL.22	上段	(1) SX137覆土土層	（北東から）を挿入
PL.27	最下段	48—5	48—6
PL.29	右中段	40—7	40—8
	左下段	40—8	40—7
PL.31	下段中央	45—4	45—5
	下段左側	45—5	取る
	下段右側	45—6	45—4
PL.32	上段中央	43—3	43—6
	下段右側	43—9	45—3

大宰府史跡発掘調査報告書 Ⅰ

平成12年度

2001.3

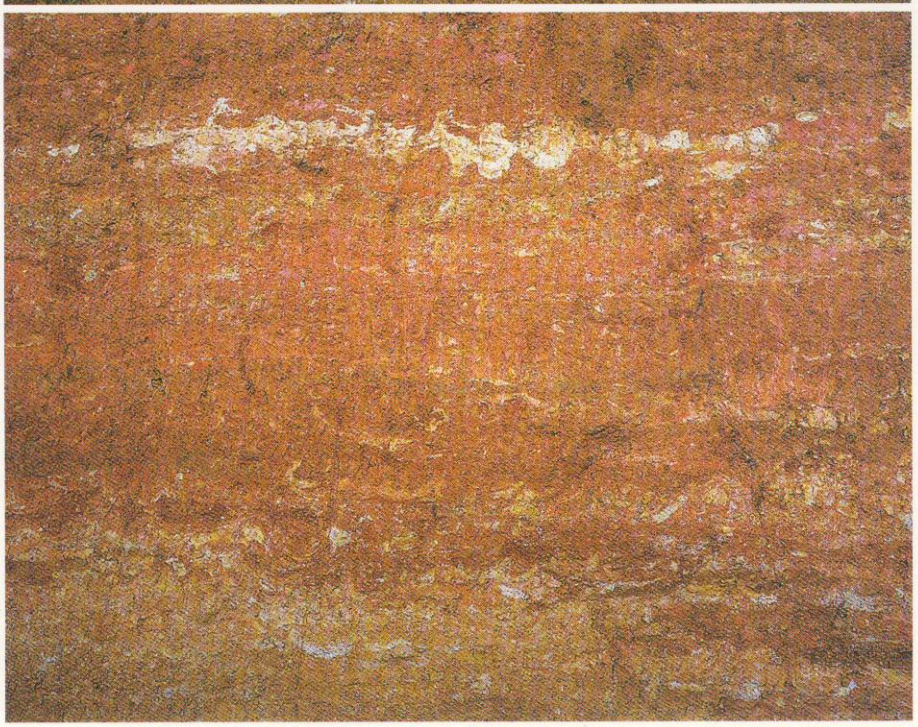
九州歴史資料館



(1) 第184次調査区全景
（南から）



(2) 水城第26次調査
補足南壁西寄部分



(3) 水城第26次調査
補足南壁東寄部分

序

「大宰府史跡発掘調査報告書Ⅰ」として平成12年度に実施した発掘調査の調査報告書を刊行することになった。この報告書は，計画調査として実施した水城西門東部外側基底部の調査を中心に，史跡地内で計画された現状変更申請に伴う緊急調査として実施した政庁後背地，観世音寺子院のひとつと考えられる「安養院推定地」の調査，それに平成８年度に実施した水城西門跡西側土塁の補足調査分埋め戻しに際してのものである。

今回，特に記しておかなければならないのは，昭和43年に発掘調査を開始して以来，その年度の発掘調査の成果については，これまで年度の概報として刊行してきたが，本年度からはそれを改め正式の報告書として刊行するようにしたことである。これまで概略報告として扱ってきたのは，広大かつ複雑な歴史の展開をしてきた「大宰府」という大規模遺跡の性格上，致し方のないことでもあった。しかしながら，大宰府史跡の発掘調査も本年で33年を経過し，遺跡の状況も開始当時に比べれば格段の進展がみられることも事実である。そして，ご存知のように数年後には国立博物館の設置が決まっており，それに伴って調査体制・組織も何らかの改変が否応なしに求められることは必定となっている。このような状況を鑑みて，概報から本報告書の刊行への転換を図った次第である。

この度，記念すべき第１冊目を刊行することになり，その内容については十分に検討したつもりではあるが，読者には必ずしも満足のいくものではないかもしれない。本篇の内容等に大方諸賢の御叱正をお願いしたい。

最後に，発掘調査にあたっては大宰府史跡調査研究指導委員会をはじめ，文化庁，太宰府市教育委員会，大野城市教育委員会，それに地元関係者各位に多大なる御指導と御協力を頂いた。記して謝意を表したい。

平成13年３月31日

九州歴史資料館長　光　安　常　喜

例　言

1．本書は平成12年度に福岡県教育委員会が国庫補助を受け，九州歴史資料館において実施した大宰府史跡発掘調査の記録であり，大宰府史跡発掘調査報告書の第１集にあたる。

2．本書では，第６次５ヶ年計画に基づき実施した水城跡第32次調査，現状変更による特別史跡大宰府跡（政庁後背地区）第182・183次調査，観世音寺境内および子院跡（安養寺地区）第184次調査，それに水城跡第26次調査の成果について収録している。なお，今年度計画の水城跡第33次調査成果の報告については，次年度に譲る。

3．本書に掲載した遺構実測図については，国土調査法第Ⅱ座標系をもとに基準点を設けて作成した。

4．発掘調査については，大宰府史跡調査研究指導委員会の指導と承認のもとに実施した。また，検出遺構及び出土遺物については各指導委員の御指導と御教示を得た。

5．本書に掲載した遺構実測図については，調査課横田賢次郎・中間研志・齋部麻矢・杉原敏之と，太宰府市教育委員会城戸康利・深江暁子・平島義孝で作成した。

6．本書に掲載した写真については，当館学芸第二課石丸洋及び各調査担当職員の撮影による。空中写真については，（有）空中写真企画に委託した。

7．金属製品の保存修復作業は，当館学芸第二課横田義章による。

8．出土遺物の整理・復元作業は，大宰府史跡坂本発掘調査事務所において行い，大田千賀子・中田千枝子・市川千香枝の協力を得た。

9．出土遺物の実測・製図作業については調査課員のほか，橋之口雅子が行った。また，高橋佑佳の補助を得た。

10．本書の執筆分担については，以下のとおりである。

Ⅰ	1・2	横田
Ⅱ	1　182次調査—	城戸
	2　183次調査—	杉原・城戸・栗原和彦
	3　184次調査—	中間
	4　水城跡第26次調査補足—	中間
	5　水城跡第32次調査—	齋部

11．本書の編集は調査課員で協議し，齋部が行った。

凡　例

遺構番号の頭に付した記号は奈良国立文化財研究所の分類に従っている。

Ｓ－遺構

Ａ－柵・土塁・堀　Ｂ－建物　Ｃ－廊　Ｄ－溝　Ｅ－井戸　Ｇ－苑池　Ｈ－広場　Ｋ－土壙

Ｘ－その他

本 文 目 次

Ⅰ　緒言

1　調査計画と組織

(1)　調査計画……1

(2)　調査組織……1

2　調査経過……3

立会調査（水城基底部の調査）……4

Ⅱ　調査の内容

1　第182次調査（政庁後背地区の調査）

(1)　概要……7

(2)　基本層序……7

(3)　遺構と遺物……8

(4)　小結……8

2　第183次調査（政庁後背地区の調査）

概要……9

A 地区の調査

(1)　基本層序……12

(2)　遺構と遺物……12

(3)　小結……18

B 地区の調査

(1)　基本層序……20

(2)　遺構と遺物……21

(3)　小結……27

3　第184次調査（安養寺地区の調査）

(1)　概要……31

(2)　基本層序……33

(3)　遺構と遺物……35

(4)　小結……44

4　水城跡第26次調査補足

(1)　概要……47

(2)　土層の観察……47

(3)　小結……52

5　水城跡第32次調査（水城跡木樋埋設推定地の調査）

(1)　概要……53

(2)　基本層序……55

(3) 遺構と遺物……55
(4) 小結……82

挿 図 目 次

Fig. 1 大宰府史跡発掘調査地域図（1/5,000）……折込
Fig. 2 第182次調査位置図（1/600）……7
Fig. 3 第182次調査遺構配置図（1/80）……7
Fig. 4 調査区土層実測図（1/60）……8
Fig. 5 出土土器実測図（1/3）……8
Fig. 6 第183次調査Ａ・Ｂ区，立会調査地点……10
Fig. 7 第183次調査Ａ区遺構配置図（1/200）……12
Fig. 8 Ａ区土層図（1/60）……13
Fig. 9 SA4511実測図（1/60）……14
Fig.10 SK4513・4514・4515実測図（1/40）……15
Fig.11 Ａ区出土土器実測図（1/3）……16
Fig.12 Ａ区出土瓦実測図（1/4）……17
Fig.13 Ａ区出土鉄器・石器・土製品実測図（1/2）……18
Fig.14 第183次調査Ｂ区遺構配置図（1/200）……20
Fig.15 Ｂ区土層図（1/60）……折込
Fig.16 SD490出土土器実測図（1/3）……21
Fig.17 SD4521出土土器実測図（1/3）……22
Fig.18 SX4522，包含層出土土器実測図（1/3）……24
Fig.19 Ｂ区出土瓦実測図（1/4）……25
Fig.20 「鍛冶」関係遺物実測図（1/3）……27
Fig.21 Ｂ区出土石器・石製品実測図（1・4：1/2，2・3：2/3）……27
Fig.22 政庁後背地区主要遺構配置図（1/1,000）……28
Fig.23 第184次調査区位置図（1/1,500）……31
Fig.24 第184次調査遺構配置図（1/120）……33
Fig.25 試掘トレンチ土層実測図（1/60）……34
Fig.26 試掘トレンチ出土遺物実測図（土器1/3，瓦1/4，鉄器1/2）……35
Fig.27 SX4530実測図（1/60）……36
Fig.28 SX4530出土遺物実測図（土器1/3，瓦1/4，鉄器1/2）……38
Fig.29 SB4531実測図（1/60）……41
Fig.30 上位整地層・その他の遺構出土遺物実測図（土器1/3，瓦1/4，鉄器1/2）……42
Fig.31 SX4540・表土出土遺物実測図（1～12：1/3，13～19：1/4，20・21：2/3，22・23：1/2）…43

Fig.32　水城跡発掘調査地域図（1/5,000）……折込
Fig.33　水城跡第26次調査補足K区南（大分類）・東・西壁土層実測図（1/60）……48
Fig.34　K区南壁土層実測図（1/40）……50
Fig.35　K区南壁土層細部実測図（1/10）……51
Fig.36　水城跡第32次調査遺構配置図（1/100）・地区割略図……54
Fig.37　調査区中央南北土層，東西土層・SX136実測図（1/60）……56
Fig.38　SX134東西トレンチ・調査区北壁土層実測図（1/60）……57
Fig.39　SX134・135出土土器実測図（1/3）……59
Fig.40　SX134出土瓦拓影・実測図（1/4）……61
Fig.41　SX134・135・137・138出土木製品実測図（1/4）……62
Fig.42　SX134出土石製品・金属製品拓影・実測図（1：1/1，2：1/3，4～8：2/3）……63
Fig.43　SX135・136出土木製品実測図（1/8）……65
Fig.44　SX137実測図（1/30）……66
Fig.45　SX137出土木製品実測図（1/8）……67
Fig.46　SX138実測図（1/10）……69
Fig.47　枕木状木製品出土状況実測図（1/30）……70
Fig.48　SX135・137・140出土土器実測図（1/3）……71
Fig.49　SX135出土瓦拓影・実測図（1/4）……73
Fig.50　SX135埋土出土木製品実測図（1～9：1/4，10：1/8）……75
Fig.51　SX135・140出土木製品実測図（1/4）……77
Fig.52　SX135出土枕木状木製品実測図（1/8）……78
Fig.53　耕作土出土土器実測図（1/3）……81
Fig.54　水城跡木樋埋設位置模式図……83

表　目　次

Tab.1　調査計画表 …… 1
Tab.2　大宰府史跡調査研究指導委員名簿 …… 2
Tab.3　調査実施表 ……折込
Tab.4　平成12年度史蹟地内現状変更申請等対応状況表 ……折込
Tab.5　SX134出土銭貨一覧表 ……60

図　版　目　次

巻頭図版　(1)　第184次調査区全景（南から）

PL.18 (1) K区南壁西半（北から）
(2) K区南壁東半（北から）
(3) K区南壁中央下半付近近影（北から）
PL.19 (1) K区南壁西寄り下位近影（北から）
(2) K区南壁中央東寄り下半（14・18層）近影（北から）
(3) K区南壁東寄り上半（6層）（北から）
PL.20 (1) 水城跡第32次調査調査区全景（空中写真　北東から）
(2) 同上（空中写真）
PL.21 (1) 調査区（上層）全景（北東から）
(2) SX135全景（北西から）
(3) 枕木状木製品出土状況（北西から）
PL.22 (1) SX137　覆土土層
(2) SX137（南東から）
(3) SX137（北東から）
PL.23 (1) SX137堆積状況（北から）
(2) SX137繊維細部
(3) SX137木製品出土状況（北東から）
PL.24 (1) SX136（北から）
(2) SX138（北西から）
(3) 枕木状木製品共伴土器出土状況
PL.25 (1) 南北中央ベルト北側土層
(2) 東西中央ベルト西側土層
(3) SX140（南東から）
PL.26 SX134・135出土土器
PL.27 SX135・137出土土器
PL.28 SX135・140出土土器
PL.29 SX134出土瓦
PL.30 SX134・135出土瓦
PL.31 SX134出土木製品
PL.32 SX135・136出土木製品
PL.33 SX134・137・138出土木製品
PL.34 SX135出土木製品
PL.35 SX135・140出土木製品
PL.36 枕木状木製品
PL.37 出土石製品・金属製品・獣骨，耕作土出土遺物

(2) 水城跡第26次調査補足南壁西寄部分
(3) 水城跡第26次調査補足南壁東寄部分
PL.1 (1) 第182次調査区全景（東から）
(2) 第182次調査区東壁土層（西から）
(3) 第182次調査区南壁土層（北から）
PL.2 (1) 第183次調査Ａ区全景（南から）
(2) 第183次調査Ａ区全景（北から）
PL.3 (1) SX4512（南から）
(2) SK4513（東から）
(3) SA4516土層（西から）
PL.4 (1) 第183次調査Ｂ区全景（東から）
(2) 第183次調査Ｂ区西側全景（西から）
(3) 土層堆積状況（南から）
PL.5 (1) SD490東半（南から）
(2) SD490西半（南から）
(3) SD4512（南から）
PL.6 (1) SX4522（東から）
(2) SX4522下層土器出土状況（南から）
(3) 花崗岩検出状況（東から）
PL.7 第183次調査Ａ区　出土土器・陶磁器・瓦類・鉄製品・土製品・石製品
PL.8 第183次調査Ｂ区　SD490・4521出土土器・陶磁器類
PL.9 第183次調査Ｂ区　SX4522出土土器・陶磁器類
PL.10 第183次調査Ｂ区　瓦類・鞴羽口・石製品・石器
PL.11 (1) 第184次調査区全景（南から）
(2) 第184次調査区全景（北東から）
(3) SX4530（南から）
PL.12 (1) Tr.1(SX4530南東隅）上半（南から）
(2) Tr.1(SX4530南東隅）下半（南から）
(3) Tr.2(SX4530北東隅）（北から）
PL.13 (1) Tr.2(SX4530北東隅）（東から）
(2) 試掘トレンチ北壁（南東から）
(3) 試掘トレンチ南壁（北西から）
PL.14 第184次調査出土土器・陶磁器・丸瓦類
PL.15 第184次調査出土瓦類
PL.16 第184次調査出土瓦・鉄器・銅製品・円盤状品
PL.17 (1) 水城第26次補足　Ｋ区南壁（北から）
(2) 水城第26次補足　Ｋ区東壁（西から）
(3) 水城第26次補足　Ｋ区西壁（東から）

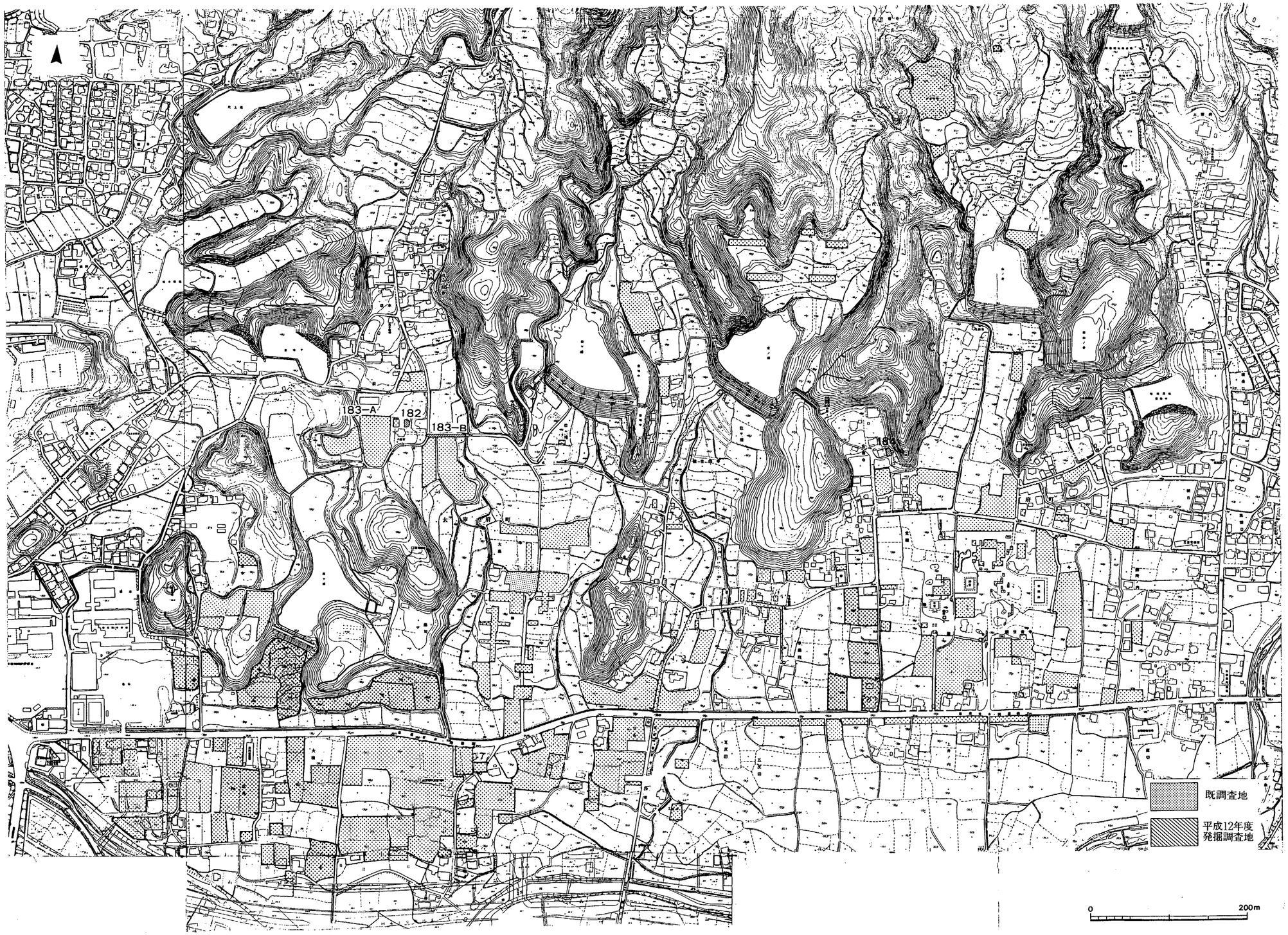


Fig.1　大宰府史跡発掘調査地域図（1/5,000）

Ⅰ 緒 言

1 調査計画と組織

(1) 調査計画

本年度は第6次5ヵ年計画の第4年次にあたる。第4年次の調査計画は特別史跡水城跡の諸施設の解明を目標とし，水城の西門東部外側基底部と木樋および外濠の構造解明，そして水城の瓦窯と木樋埋設推定部分の解明に，その主眼をおいた。しかしながら，平成11年12月27日から12年3月28日にかけて太宰府市教育委員会によって実施された史跡環境整備に伴う水城第31次調査によって瓦窯跡が新たに発見され，本年度実施予定であった瓦窯跡の調査を再度検討することにし，大宰府史跡調査研究指導委員会に審議をお願いすることにした。

また，この他に緊急調査として政庁後背地における太宰府市の事業として下水道工事に伴う現状変更の事前調査があり，さらに2件の事前調査が見込まれていた。また，可能ならばここ数年調査計画に掲げていながら，その目的が達成出来ないでいる政庁前面の調査にも対処することでその基本方針を設定し計画を立案した。現状の体制ではやや無理な計画であることは十分承知の上で可能な限りの実現を目標にした。平成12年度の調査計画案を実施するにあたり，本年度の大宰府史跡調査研究指導委員会を5月25日・26日の両日に開催し，審議をお願いした。本年度の大きな議題は平成12年度に刊行する予定であった政庁地区の正式報告書については正殿の調査が1年延長したことにより，延期せざるを得なかったこと，第6次5カ年計画の目的のもう一つの柱である水城の解明についての調査で，諸般の事情により，13年度調査予定地と14年度調査予定地とを入れ換えて，調査を実施すること等と本年度の調査計画について概ね了承を頂いた。

当初の計画では平成11年度の調査予定地であった水城西門東部外側基底部と木樋および外濠の構造解明についての調査は平成11年度の後半に着手したばかりで，平成12年度に継続実施していたが，本年度の事業として本格的に取り組むことで，現地にて調査方法や注意点について有益なご助言を頂いた。

平成12年度の発掘調査計画は下表のとおりである。

区　分	場　所	所在地	面積(㎡)	備　考
水城跡	西門東部外側基底部(木樋および外濠)	大野城市下大利四丁目691-1	300	現状変更(計画調査)
水城跡	瓦窯跡	太宰府市国分一丁目23番	300	現状変更(計画調査)
大宰府跡	政庁後背地区	太宰府市坂本三丁目15～17	300	現状変更
観世音寺および子院跡	観世音寺の子院推定地区	太宰府市観世音寺四丁目808番	300	現状変更
広丸地区官衙	政庁前官衙地区	太宰府市観音寺字広丸375	375	緊急調査
大楠地区官衙	政庁前官衙地区	太宰府市観音寺字大楠685	658	緊急調査
不丁地区官衙	政庁前官衙地区	太宰府市観音寺字不丁1100	1100	緊急調査
大野城跡	百間石垣	糟屋郡字美町大字大垣311-1		現状変更(環境整備)

Tab.1 調査計画表

(2) 調査組織

調査主体は九州歴史資料館であり，発掘調査は調査課が担当した。その組織は以下のとおりである。

総括

館長　光安　常喜
副館長　宮小路賀宏
参事　栗原　和彦

庶務・会計

〔総務課〕

課長　丸山　弘子
副長　野田　正
主任主事　田嶋　朋子

調査

〔学芸第一課〕

参事(兼課長)　副島　邦弘
参事補佐　倉住　靖彦
主任技師　井形　進

調査

〔学芸第二課〕

参事(兼課長)　横田　義章
参事補佐　石丸　洋
参事補佐　新原　正典

〔調査課〕

課長　横田賢次郎
参事補佐　中間　研志
主任技師　齋部　麻矢
主任技師　杉原　敏之

大宰府史跡について総合的に調査研究を推進するため，考古学，歴史学，建築史学，造園学，都市工学などの専門家で構成する「大宰府史跡調査研究指導委員会」を引き続き設置し，同指導委員会の指導のもとに5カ年計画を策定し，その計画に従い調査を進めていくことにした。委員は下記のとおりである。

	氏　名	職	専　門
委員長	笹山晴生	学習院大学教授	歴史学
副委員長	小田富士雄	福岡大学教授	考古学
委員	八木　充	京都学園大学教授	歴史学
	川添昭二	九州大学名誉教授	歴史学
	狩野　久	京都橘女子大学教授	歴史学
	佐藤　信	東京大学大学院教授	歴史学
	坂上康俊	九州大学助教授	歴史学
	西谷　正	九州大学教授	考古学
	町田　章	奈良国立文化財研究所長	考古学
	山中　章	三重大学教授	考古学
	鈴木嘉吉	元奈良国立文化財研究所長	建築史学
	澤村　仁	九州芸術工科大学名誉教授	建築史学
	中村　一	京都大学名誉教授	造園学
	杉本正美	神戸芸術工科大学教授	造園学
	渡辺定夫	工学院大学教授	都市工学

Tab.2　大宰府史跡調査研究指導委員名簿（平成12年4月1日現在）

調査次数	調査地区	調査面積(㎡)	調査期間	備　　考	担当者
第182次	6AYT-A-K	20	000808～000822	政庁後背地	杉原・城戸
第183次	6AYT-B-C	151	000807～001012	政庁後背地	杉原
第184次	9KAY	79	000831～000918	推定安養院	中間・齋部
水城第26次補足	6AMK-V	50	001017～001124	水城西門西側中段テラス	中間
水城第32次	6AMK-R	110	000221～000825	水城西門東側博多側基底部	齋部・中間
水城第33次	6AMK-P	775	001128～010330	水城西門南側テラス	杉原・中間
大野城跡	6AON		010213～010330	百間石垣の補修工事に伴う	田上

Tab.3　発掘調査実施表

	提出月	申　請　者	目的・理由	地　　番	申請面積(㎡)	指　定　区　分	九歴等の対応	文化庁等指示
1	11年12月	福岡県那珂土木事務所長　山下英昭	道路標識の設置	福岡県太宰府市大字観世音寺1105番1	0.81	特別史跡大宰府跡	九歴立会	県教委九歴指導指示
2	12年1月	九州歴史資料館長　光安常喜	発掘調査	大野城市下大利4丁目691-1，702-2外	300	特別史跡水城跡	九歴発掘調査	文化庁許可
3	〃	福岡県福岡農林事務所長	遊歩道復旧工事	太宰府市観世音寺字大浦谷715-55		特別史跡大野城跡	太宰府市教委立会	県教委九歴指導指示
4	12年2月	太宰府市長　佐藤善郎	上下水道管敷設工事	太宰府市坂本3丁目1602外	584.8	特別史跡大宰府跡・史跡観世音寺境内および子院跡	九歴・太宰府市教委立会・発掘調査	文化庁九歴発掘調査指示
5	〃	太宰府市教育委員会教育長　長野治己	園路整備工事	太宰府市観世音寺5-185-1・2，国分4-688-1外	304.5	史跡観世音寺境内および子院跡	九歴立会	文化庁九歴指導指示
6	〃	宇美町長	法面復旧工事	糟屋郡宇美町大字四王寺312		特別史跡大野城跡	宇美町教委立会	文化庁町教委立会指示
7	12年4月	福岡県農林事務所長	予防治山工事	大野城市大字乙金618-2	5.6	特別史跡大野城跡	太宰府市教委立会	文化庁市教委立会指示
8	〃	個人	住宅増築	太宰府市観世音寺5丁目184番2	226	史跡観世音寺境内および子院跡	太宰府市教委立会	文化庁市教委立会指示
9	5月	個人	住宅改築	太宰府市観世音寺4-16-15	740	史跡観世音寺境内および子院跡	九歴発掘調査	文化庁九歴発掘調査指示
10	〃	大野城市教育委員会　堀内貞夫	排水溝設置工事	大野城市旭ヶ丘1丁目788-1，788-2	11.85	特別史跡水城跡	許可	文化庁市教委立会指示
11	6月	個人	住宅改築	太宰府市観世音寺6丁目715-109，1827-5	340.26	史跡観世音寺境内および子院跡	九歴立会	文化庁市教委立会指示
12	〃	太宰府市教育委員会教育長　長野治己	確認調査	太宰府市坂本3丁目20-2，14-2，13	20	特別史跡大宰府跡	九歴・太宰府市発掘調査	文化庁許可
13	8月	個人	住宅増築	太宰府市観世音寺4丁目558-1	905.12	特別史跡大宰府跡	太宰府市立会	文化庁市教委立会指示
14	9月	㈱クロスウェイブコミュニケーションズ	光ケーブル埋設工事	太宰府市大字水城1000番1　大字国分1300番	84	特別史跡水城跡	太宰府市立会	文化庁市教委立会指示
15	〃	福岡県福岡農林事務所　所長　田熊剛	予防治山工事	太宰府市大字太宰府字大原569-1　524-1		特別史跡大野城跡	太宰府市調査	文化庁市教委発掘調査指示
16	10月	九州歴史資料館長　光安常喜	発掘調査	太宰府市吉松175・176・178外	3.5	特別史跡水城跡	九歴発掘調査	文化庁許可
17	9月	太宰府市長　佐藤善郎	水路改良工事	太宰府市水城1丁目1227番地	210.4	特別史跡水城跡	九歴立会	文化庁九歴立会指示
18	〃	太宰府市長　佐藤善郎	水路改良工事	太宰府市観世音寺4丁目1528	50	特別史跡大宰府跡	太宰府市教委立会	文化庁市教委立会指示

Tab.4　平成12年度史跡地内現状変更申請等対応状況表

2　調査経過

本年度の計画調査の中心は水城の西門東部外側基底部の木樋および外濠の解明であった。調査は平成12年２月下旬に着手し，本格的に調査に入ったのは４月になってからである。この地点の調査を計画した大きな理由は，基底部と称される部分のこの地が西側の隣接地より約1.5mほど下がっていることである。この理由については，これまで言及されたことはなく大きな疑問としてあった。外側（博多側）の基底部については西門跡から東側に向かって傾斜しているが，この部分にみられるような強い段差は他の部分にはみられない。この段差が後世の地下げ等による削平であるのか，隣接地の西側部分が盛土されたためのものかは判然としなかった。このような非常に稚拙な疑問ではあったが，基底部と濠との関係が御笠川より東側の土塁にみられるような明らかな高低差はなく，この付近ではほぼ平坦となっている。このようないくつかの問題点を解明するため調査を実施した。

調査は平成12年２月下旬に着手し，表土および旧表土を重機により除去した。この段階で平成11年度事業を終了し，遺構の検出作業は平成12年度の当初の事業として開始することにした。４月の中旬には上層の遺構を検出し，５月の委員会ではその遺構について現地にて指導をお願いした。その後，下層遺構の解明のため更に掘り下げ，そして８月中旬にはほぼ調査を終了し，遺構図の作成作業にはいった。また，水城跡第32次調査を継続しながら，６月初旬（５日）には，政庁正殿跡の芝張り作業に入った。平成11年度に調査を終了した後，埋め戻しまでは行っていたのであるが，芝張り作業については次年度の事業として残していたため，芝生の植栽が最も適したこの時期を待って，作業を実施した。この芝張り作業をもって，政庁正殿跡については発掘前の現状復帰が完了したといえる。そして，８月末日からは坂本地区における下水道工事に伴う調査を開始した。また，８月29日には観世音寺の字安養寺にて，個人住宅の建設に伴う現状変更申請に対応して調査を実施することとし試掘調査を実施した。その結果，３層にわたる遺構を試掘トレンチで確認し，遺構の残存状況が良好との判断から，本格的な調査が必要との結論を得ることとなり，事前調査（第184次調査）を９月４日から実施し，18日には埋め戻しを終了した。観世音寺子院のひとつである「安養院」については現存する字名と近くにある少弐武藤資頼の墓とされる宝篋印塔が存在することから，以前よりこの周辺地域に推定されている。しかしながら，その実態については殆ど不明であり，調査も昭和45年に住宅の建設による事前調査で１箇所を実施しただけで，遺構の存在すら確認するには至らなかった。今回の調査結果から断定はできなかったが，その可能性が指摘できるようになったことは大きな成果であろう。現在地は未買収地が多く，早急な遺構の確認が必要と考えられ，その対応が迫られているところであり，今回の遺構確認は今後の調査計画等を考慮する上で貴重である。

８月の下旬には第183次調査（坂本地区の下水道工事に伴う事前調査）を開始した。調査は工事の進行に合わせて実施することとし，予め重要な遺構が考えられる地点では，道路敷の全面について発掘調査を行うことで太宰府市の下水道課と協議し，第24次・102次・10次調査の隣接地の３箇所について実施することとした。大部分は立会調査で対応し，重要な遺構と推定された時は，一時工事を中断し調査を行うことにしていた。

10月の中旬から11月末にかけては，水城第26次調査（平成８年度調査）の補足調査を実施した。平成８年の西門跡の調査の際，土塁の構造解明のために，土塁線に平行にトレンチを設定し調査を行った結果，版築を行う際に使用した柱の痕跡（５箇所）を確認した。このことにより水城土塁の本体は版築を行っていることが，ほぼ確認されたことになったのである。しかしながらこの時点では，断面の観察が十分ではなく確定できない部分も多いため，できるだけ多くの目で観察し検討することを目的として，暫くの間埋め戻さないでおくことにした。

本年度末には西門地区の調査を計画しており，その関連で未完成であった本体部分の土層図の作成作業を実施することにした。これまで，土塁本体の断面を平行的に断ち割り調査した例はなく，今回がはじめての調査例である。平成８年からの継続的な調査によりこれまで不明であった版築の工法について新知見を得ることができた。断面観察では径10cm 前後の突き棒により細かく突き固めていることが確認できた。これまで，土塁の構築については判然としなかったが，今回の調査でそれが証明されたことは大きい。

11月28日には本年度計画の水城西門東側基底部について水城第33次調査として着手した。諸般の事情により，12月の下旬(26日)から１月の約１カ月間を休み，作業を中断した。

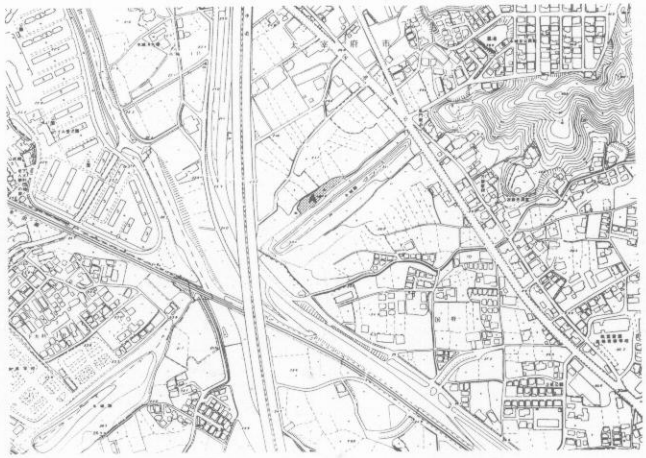
また，12月20日から１月27日には水城の水路改修に伴う現状変更の調査として立会調査を実施した。改修される水路は水城東門の西側（県道112号線の西側）にあたり，土塁の外側（博多側）にあたる部分で，基底部の裾部に設けられた，現状は水田用の素掘りの溝となっているところである。この溝は雨期になると毎年のように崩壊するため，恒久的な溝への改修が以前から地元より要求されていた。遺構と景観を損なわないよう配慮する事で，今回許可されることになった。工事は平成12年12月18日から平成13年１月末日の約１カ月の工期で行われ，その工期に合わせて立会調査を行った。工事の区間は総距離267m で旧国道３号線と御笠川間の水城本体のほぼ全域にわたっている。工事は現状の溝のヘドロを除去し，極力遺構を壊さないことで進めてもらうことにした。それでも，全工事区間のほぼ中央部より西側で一段高くなって張り出す部分がみられるが，この部分では工事の都合で，本体部分を若干削らざるを得ない状況となりそのことにより，その壁面の土層観察から新たな知見を得ることができた。この高まりについては調査前は近年の整備による土盛りであるとの認識があったが，今回の調査により，これは地山が高く遺存していることによるものであることが明らかとなった。

現状の地形をみると，西側の御笠川に向かって下降しており，工事区間内の西辺部ではかなりの落差のある低湿地になるであろうとの認識をしていた。しかしながら，結果はそのことを否定することとなり，水城の築造の解明の一端を知る重要な手掛かりを得ることとなった。

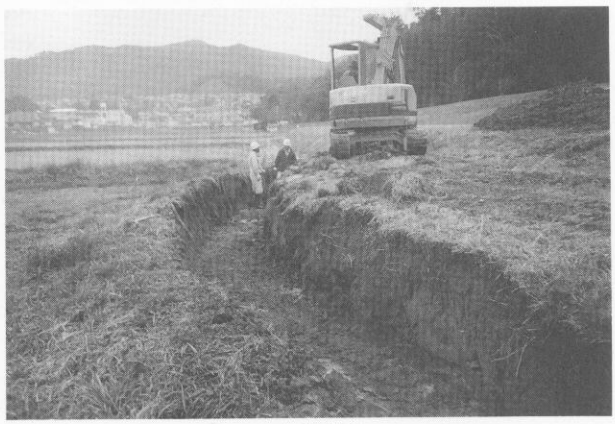
２月１日から水城第33次調査を再開した。現在，まだ上層の遺構を継続調査中であり，本年度の報告からは省くことにした。本書の報告は水城跡第32次調査を中心に，第183次調査，第184次調査，水城跡第26次調査補足について報告する。

立会調査（水城基底部の調査）

水城基底部の裾部の水路改良工事に伴う現状変更に対応して立会調査を実施した。工事の進捗状況に合わせて立会し，状況に応じて写真撮影と簡単な土層図を作成した。先述したように，現状の素掘り溝を若干削る程度で大きな掘削はなかったが，一部壁面を削らざるを得ない部分



水城周辺地形図



調査状況

もあり，状況をみながら作業を進めていった。

今回の調査では顕著な遺構は認められなかったが，工事区間のほぼ中央より西側部分(参照図の網の部分)で，地山層を確認したことは大きな成果であった。Ａの部分（網掛け部分）は北側（博多側）の濠跡に推定されている面（現状では水田）より約１ｍ程高くなっており，円弧状に張り出した形になっている。先述したが，この高まりは土塁の基底部とは約２ｍの高低差がある。この高まりについては，近年の水城整備に伴う盛土がかなりなされたのではないかとの見方がなされていたのであるが，今回の立会調査では高いところで地表下約40ｍの深さで地山（黄色粘土）が検出された。現状の地形と，部分的ではあるが，調査の結果をみると，Ａの付近では地山がかなり深くなるのではないかとの，予測があった。しかしながら，今回の立会調査ではその予想を大きく覆す結果となった。この結果から推定すると，Ａ付近にはかつて独立の小丘陵があり，その小丘陵を利用することにより水城の土塁が築かれたと考えることができるのではないだろうか。確かに，水城の土塁は東・西側の丘陵が迫り，平坦部が最も狭まったところに築かれているが，その間には幾つかの独立した小丘陵が存在し，それを繋ぐようなことでその築造はなされたとみられないだろうか。水城築造の選定にこのような地形的条件が大きく働いたことは十分考えられる。今回の調査では，確定的なことは言えないが，水城築造地の旧地形の復元にひとつ手がかりを得たといえる。

倉住靖彦氏の訃

学芸第１課の倉住靖彦氏は四大不調により，治療中でありましたが，そのかいもなく，平成12年10月30日に逝去されました。

氏は昭和47年に当館に補職されて，以来28年余にわたり，専門の文献史学の立場から文化財の保護と顕彰に務められ，とくに，昭和43年に開始された大宰府史跡の発掘調査では，出土木簡をはじめとして，その意義を全国に示され，大宰府が日本古代史学の研究において重要な位置をしめることを認識させるなど，氏の功績には大なるものがあります。ここに調査関係者として皆様にお報せし，遺憾の意を表すとともに，氏の残された成果に対して，お礼を申し上げたいと思います。

Ⅱ　調査の内容

2　第182次調査（政庁後背地区の調査）

(1)　概　要

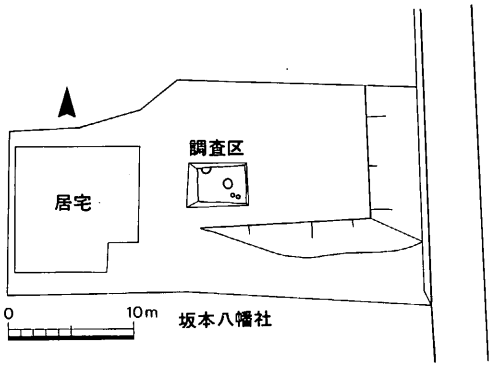


Fig.2　第182次調査位置図（1/600）

経過　調査地は特別史跡大宰府跡の北西部に位置する。地番は太宰府市坂本３丁目13,14－2,20－２で，調査対象面積は503㎡である。平成11年２月地権者である福岡基三郎氏から住居建て替えの話しが太宰府市教育委員会文化財課に伝えられた。文化財課は福岡県教育庁文化財保護課および文化庁記念物課と協議をおこなった。その結果，現状変更許可に関する資料収集のために現地の一部を発掘調査することとなった。調査は太宰府市教育委員会が調査主体となり，平成12年８月８日から同年８月22日まで行った。家屋前の庭で５×４ｍの調査区を設定した。調査面積は20㎡，担当は市教委の城戸康利である。

環境　大宰府政庁跡後背地の北西に位置し，標高約48ｍの地点である。隣接地は坂本八幡神社，その南は第24次調査が行われ，西側でも大宰府史跡第102・151次調査が行われている。遺構面は地権者の話や昭和48年の地図等から現地表面よりかなり低くなっていることが予測された。

(2)　基本層序（Fig.4，PL.1）

表土下は約１～1.5ｍの厚さで，マサ土の客土を行っている。特に南東側が厚くなっている。その下位には厚さ0.5ｍの近世以降の包含層がある。旧耕作土と考えられる黒灰～黒茶色をした土である。さらに下位の中世以降の包含層が0.2～0.5ｍの厚さで堆積しているが，南東側で

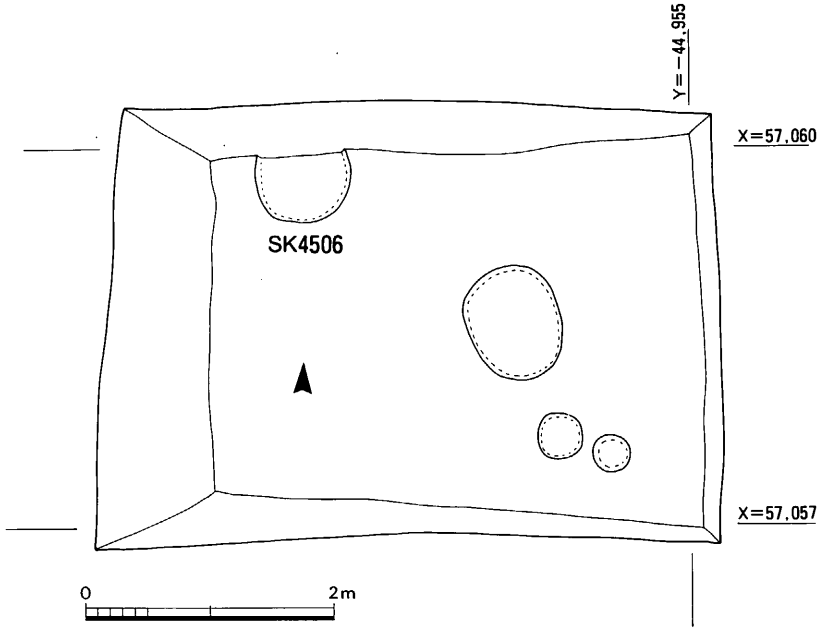


Fig.3　第182次調査遺構配置図（1/60）

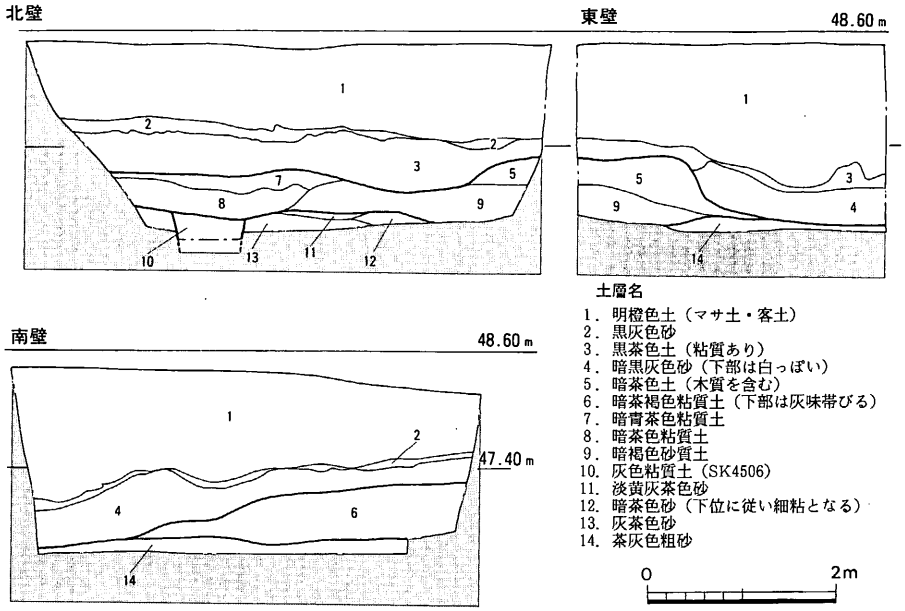


Fig.4　調査区土層実測図（1/80）

は中世の包含層はなく，近世以降の包含層の下位は地山である。土師器・瓦小片のほか同安窯系青磁片が出土した。地表下約２ｍで検出した茶～灰色の砂質土が地山と考えられる。ピットや土坑を検出した。

(3)　遺構と遺物

遺構保護のため検出後は一律３㎝の掘削を行ったため，ごく一部の情報しか得ていない。

土壙

SK4506（Fig.３，PL.１）

調査区北東で検出した。径0.75mの円形になると考えられる。灰色粘質の埋土から多くの土器，瓦片を出土した。遺物は10世紀代のもので廃棄土坑と考えられる。

他の３つのピットは北から黒茶色粗砂，砂っぽい茶色土，硬質の茶灰色粘土などの埋土でいずれも遺物は出土していない。

出土遺物（Fig.５）

土師器椀（１・２）　1は口径15.4㎝で，内面にミガキｂが残る。淡黄茶色を呈する。２は高台部分である。高台径9.0㎝を測り端部は外反する。淡黄茶色を呈する。

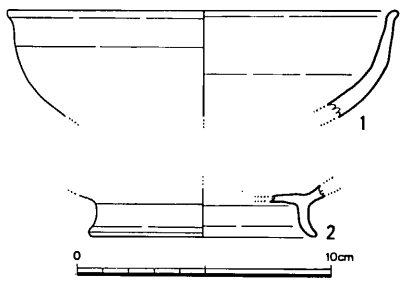


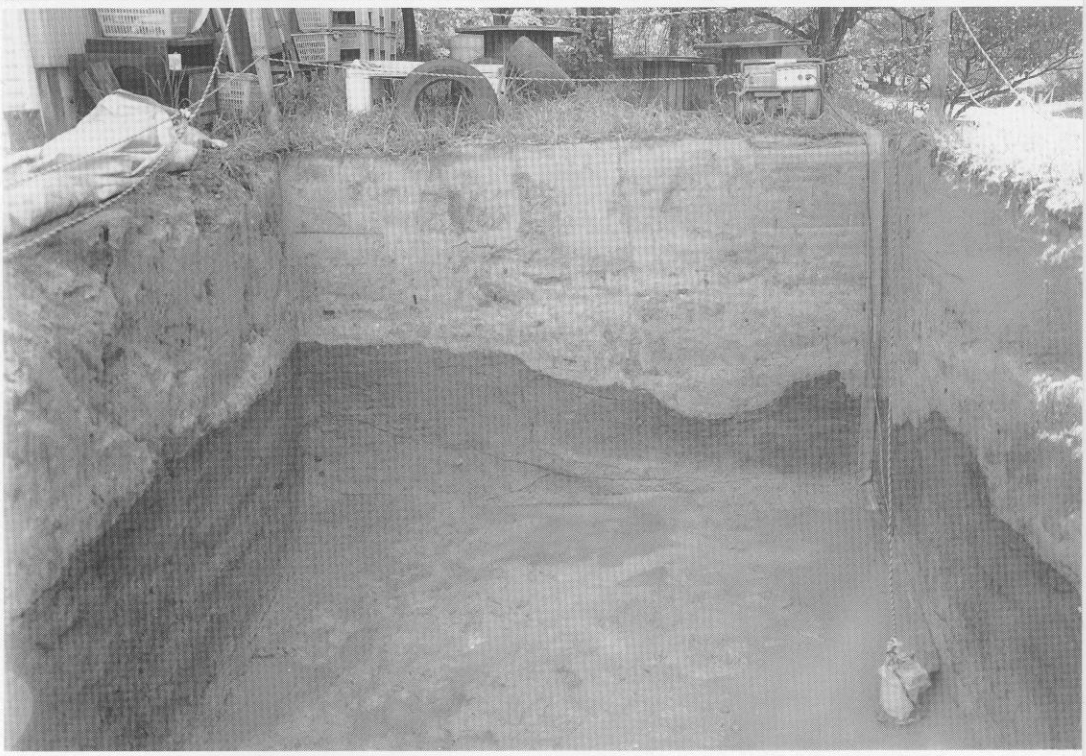
Fig.5　出土土器実測図（1/3）

(4)　小　結

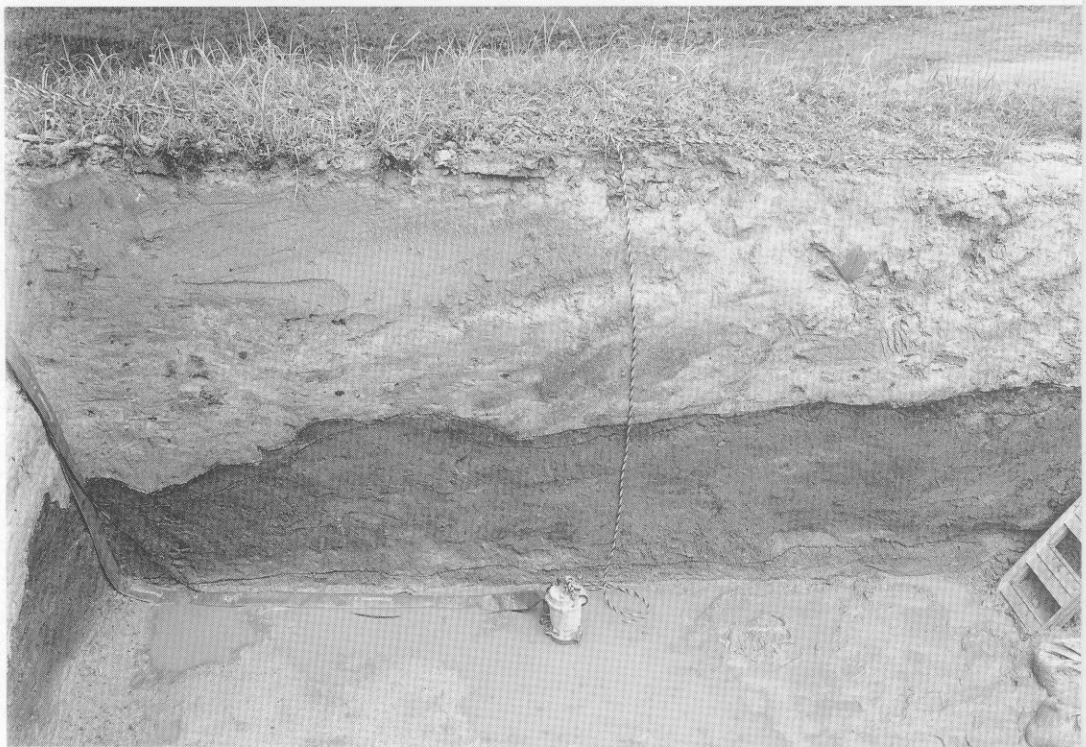
調査地は盛土造成されているものの，平安時代の遺構面が，現状東側道路面とほぼ同じ高さで検出されることが判明した。東の道路側は古地図や周辺の聞き取りから現道路面より低いと考えられるが，大宰府史跡第183次調査と合わせると，当該地に遺構が残存する可能性を否定できない。



(1) 第182次調査区全景
（東から）



(2) 第182次調査区東壁
土層　（西から）



(3) 第182次調査区南壁
土層　（北から）

2　183次調査（政庁後背地区の調査）

概　要

経過　本次調査は，特別史跡大宰府跡，史跡観世音寺および子院跡を対象とする平成12年度坂本地区下水道工事に関わる現状変更に伴い実施した。この下水道工事に関わる事業については，平成12年度当初より，太宰府市企業施設課，同教育委員会と共に事前協議による調整を行ってきた。なかでも，これまでの周辺地の調査によって，遺構の包蔵が予測された 2地点（A・B地点）については，工事前に本調査を行うことで合意した。また他の地点については，立会調査による対応とし随時土層観察と記録を行うこととした。特に立会地において，破壊される遺構の保護については，水道管埋設深度など若干の工法変更も協議することで業者側に了解を得た。この下水道工事は大きく3工区に分けて行われた。平成12年度7月末より開始され，12月には終了した。そして平成13年1月には舗装を終え事業を完了している。

位置　今回の調査対象地域は，大宰府政庁の西北に位置し，丘陵地を中心とした政庁後背地区とその上流の観世音寺子院地区とに分かれる。大城山より派生する丘陵の平坦地から斜面にかけてが，その範囲となる。両地区の上方（北方）には，大野城跡坂本口城門があり，同地区にその通用路が想定される。また，その下方には「花の屋敷」の旧小字名が残っており，周辺の段丘平坦地は観世音寺子院の一つ，「花蔵院」の推定地となっている。また，大宰小弐武藤資頼の館とする伝承もある。この谷部の河川については，そのまま蛇行しながら政庁跡西側の側溝につながっている。このことから今日までに幾度かの土砂が流れ地形を改変してきたと考えられる。

環境　政庁後背地区では，計6次の調査を行っている。現在の坂本神社前を南北に走る道路上でB地点の南側の第24次調査では，14世紀代にその埋没の下限が想定される南北溝や8世紀代の掘立柱建物を検出している[1]。一方，A地点西側の第100次調査区では，後世の削平により遺構は認められなかったが，その東側の102次調査では，7世紀後半代から9世紀後半代にかけての，掘立柱建物や土坑，さらには埋納をおこなった地鎮遺構を検出している[2]。特に7世紀後半代に位置づけられる掘立柱建物や土馬を出土した土坑などは，Ⅱ期政庁成立以前の大宰府の様相を示すものとして重要である。また，祭祀土坑や地鎮遺構などが集中して検出されることから政庁西北の同台地は大宰府内の祭祀を行う場の一つであったと考えられている。この調査では，これらの遺構廃絶後も北側の東西溝が14世紀代まで残存することが明らかとなっている。B調査区南側の第105調査では，8世紀前半から11後半代にかけての掘立柱建物などを検出している[3]。以上のほか，第141，151調査を行っているが，明確な遺構を検出できていない。今回の第183次調査に先立ち，坂本神社北側に隣接する民家の庭先を試掘調査した結果，10世紀代の土坑を検出している。この調査についても，今年度本報告する（第182次調査）。

A地区　調査は8月7日より開始した。対象となったのは102次調査区西側の道路，約3×40mの範囲である。まず，重機を使って調査区北側よりアスファルトを除去し，表土剥ぎを行った。調査区北側では路面より約1 m，南側では約0.5mのところでそれぞれ遺構面を確認した。

調査概要

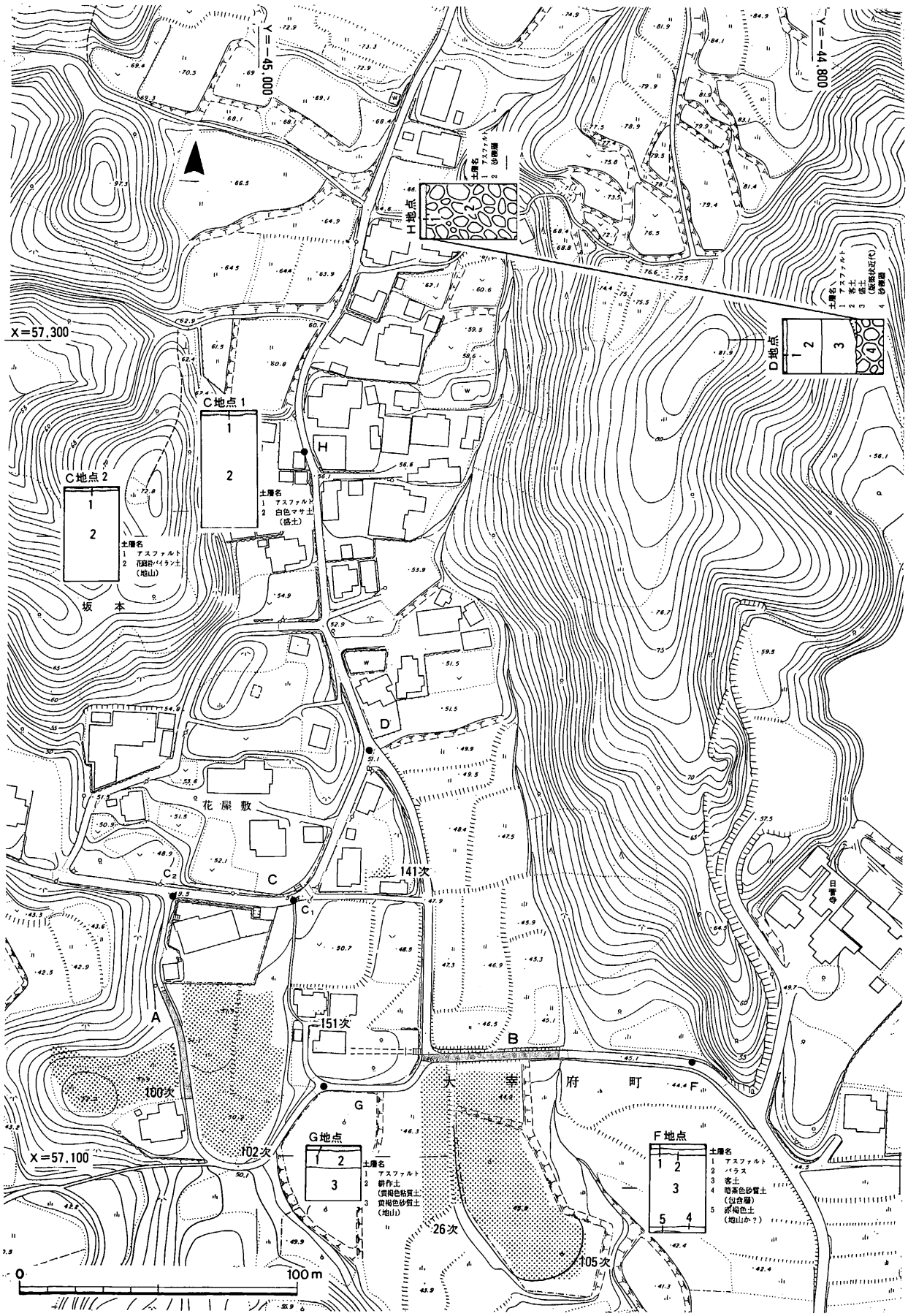


Fig.6　第183次調査Ａ・Ｂ区，立会調査地点（1/2,000，土層は1/100）

この遺構面は，北側が花崗岩の風化バイラン土であるのに対し，南側では風化礫との混土である。このため，南側で礫をよけながらの表土剥ぎは難航した。表土剥ぎ後，調査区内の杭打ち作業を行い，北側より遺構検出を開始した。北側では，SA4511，SA4512，SX4516などを検出した。一方，南側ではSK4513，SK4514，SK4515を検出した。ただし，調査区の南側では，100次調査区と同じく大きく削平を受け，地山面まで耕作土で覆われており，整地層などは残っていなかった。このため，掘立柱建物などの柱穴の検出は現実的に不可能であった。第102次調査区との関係で言えば，調査区北側においてSD2955の痕跡を確認した程度である。その後，8月25日に遺構全景の撮影，図面作成を行い，9月1日に全作業を終了した。

A地区の調査地番は，太宰府市坂本3丁目22－1他で，調査面積は75㎡である。

B地区　調査は，A地区が終了した翌週の9月4日より開始した。調査区の一部は道路三叉路も対象となっており，大きく2地区に細分して通行を完全閉鎖することなく実施した。対象地は道路幅約3×40m分である。まず，東西部分を対象としアスファルト除去後，東側より表土剥ぎを行った。東端は隣接する河川の氾濫のため，遺構の依存は認められなかった。さらに，調査区内も，過去に敷設された水道管により，東西にわたり大きな撹乱を受けていた。そのため，遺物包含層の確認できる地点の掘り下げ幅は法面の関係もあり，狭いところでは1m程度となった。一方，路面から遺構面までの深さは約1.5mであった。調査では東西区の西端で礎石の可能性のある花崗岩礫を検出した。しかし，柱座の痕跡などは認められなかった。これについては，路面量上げにおける土止め地業などの可能性も考えられる。その後，調査区東端でSD4521，SX4522などを検出した。道路南北を遮断する坂本神社前拡張区の調査は 9月20日より部分的に開始した。まず，コーナー部分となる地点で，第24次調査で確認していたSD490の延長部分を検出した。これは，東側で不明瞭ながらも確認していた暗茶色の整地層より切り込んでいる。さらに，この西側では坂本神社の旧参道と関係するSX4524を検出した。B地点の調査では，周辺住民の生活道路確保のため終了した地点より随時供給となったため，図面作成や写真撮影は常に並行して作業を行った。調査は10月12日に終了した。

B地区の調査地番は，太宰府市坂本3丁目16－1他で，調査面積は76㎡である。

立会調査　調査は8月7日から，C地区より開始した。立会と土層図の作成は工事に合わせ掘削と矢板打ちの間に行った。同様の方法でD・E・F・G・H地区でも実施した。立会範囲の総延長距離は616.5mである。H地区が終了したのは年末であった。

註

1）九州歴史資料館「大宰府史跡　昭和47年度発掘調査概報」1973
2）九州歴史資料館「大宰府史跡　昭和61年度発掘調査概報」1987
3）九州歴史資料館「大宰府史跡　昭和62年度発掘調査概報」1988

A地区の調査

(1)　基本層序（Fig. 8）

層序の観察は，SX4516の堆積層が確認できる北側と南端を中心に地形の傾斜把握を含めておこなった。

現在の路面下には，土層1の南端や土層2で観察できるように，路面設置の際に敷かれたバラスがあり，その下層に旧耕作土の黒灰色土が堆積している。さらにその下層には，自然堆積である花崗岩の風化礫層がある。風化の度合や包含される礫の量などにより上下2層に分けることができる。検出した遺構は旧耕作土除去後，これらの風化土壌に切り込んだ形で検出でき，生活に関わる整地層などは残っていない。また，この風化土壌面で確認できる赤色系の埋土をもつプランについては，人為的なものではなく古い時期の撹乱と考えられる。これらの基本的層序は，調査区の中央や南端などで確認できる。

SX4516埋没の下限

一方，北側のSX4516周辺では，バラス下には，一部旧路面になると考えられる層がある。これは石垣遺構SA4512が築かれたあとに堆積している。その下層では，SX4516埋没に関わる層がある（土層17～36）。上・中層（17～29）については，直接埋没時期に関わるものと見られ，第102次調査・SD2955の埋没期と同じ，14世紀代頃が下限と考えられる。下層（30～34）については，10世紀代の土器片などが出土しており，その形状は別にせよ，SX4516の開削はこの時期までに行われたと考えられる。その下層には自然堆積である赤色に風化した花崗岩バイランの粘質土がある。ただし花崗岩礫は含まれていない。

(2)　遺構と遺物

柵

SA4511（Fig. 9）

調査区北端で検出した南北の柵である。段落ちSX4516埋没後，この遺構に沿って配されており，2間分を検出した。柱穴は約0.3m程度で痕跡は確認できない。そのため柱間については柱痕跡より割り出すことはできないが，約3.6m程度の等間と考えてよいであろう。座標北より28°52′12″西偏する。さらに柱間が3.6m南に伸びることを想定した場

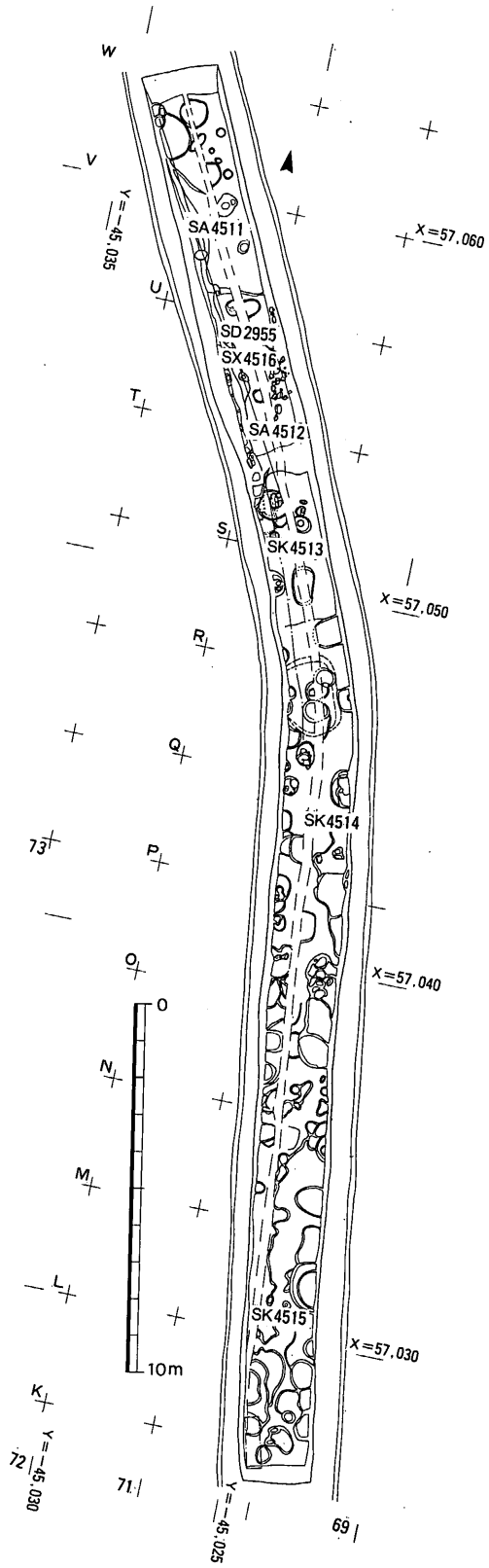


Fig.7　第183次調査A区遺構配置図（1/200）

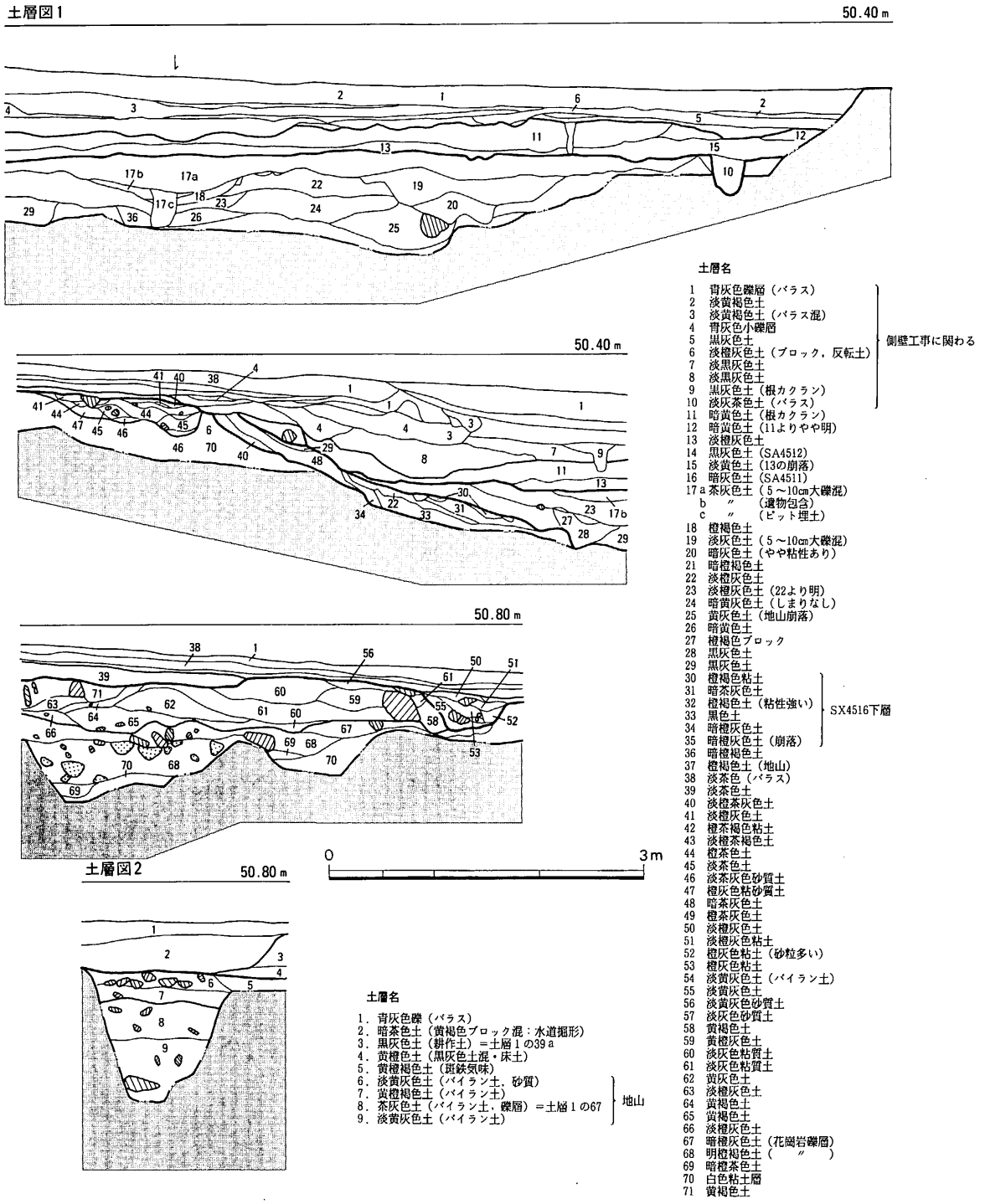


Fig.8　A区土層図（1/60）

合，レベル差が大きいがSX4516の南側の一段高い部分に配され，礫が埋め込まれているピットについても，共通する埋土であることから柵の延長として考えて良いかもしれない。その場合比高差は約0.8mである。いずれにせよ，これ以上南に伸びないことから崖の落ち際部分で台地を遮閉する柵であったと考えられる。出土遺物がなく正確な時期は不明だがSX4516埋没後の14世紀以降に配されている。さらに土層観察や柱穴の埋土から，石垣遺構SA4512に近い時期が考えられる。

時期

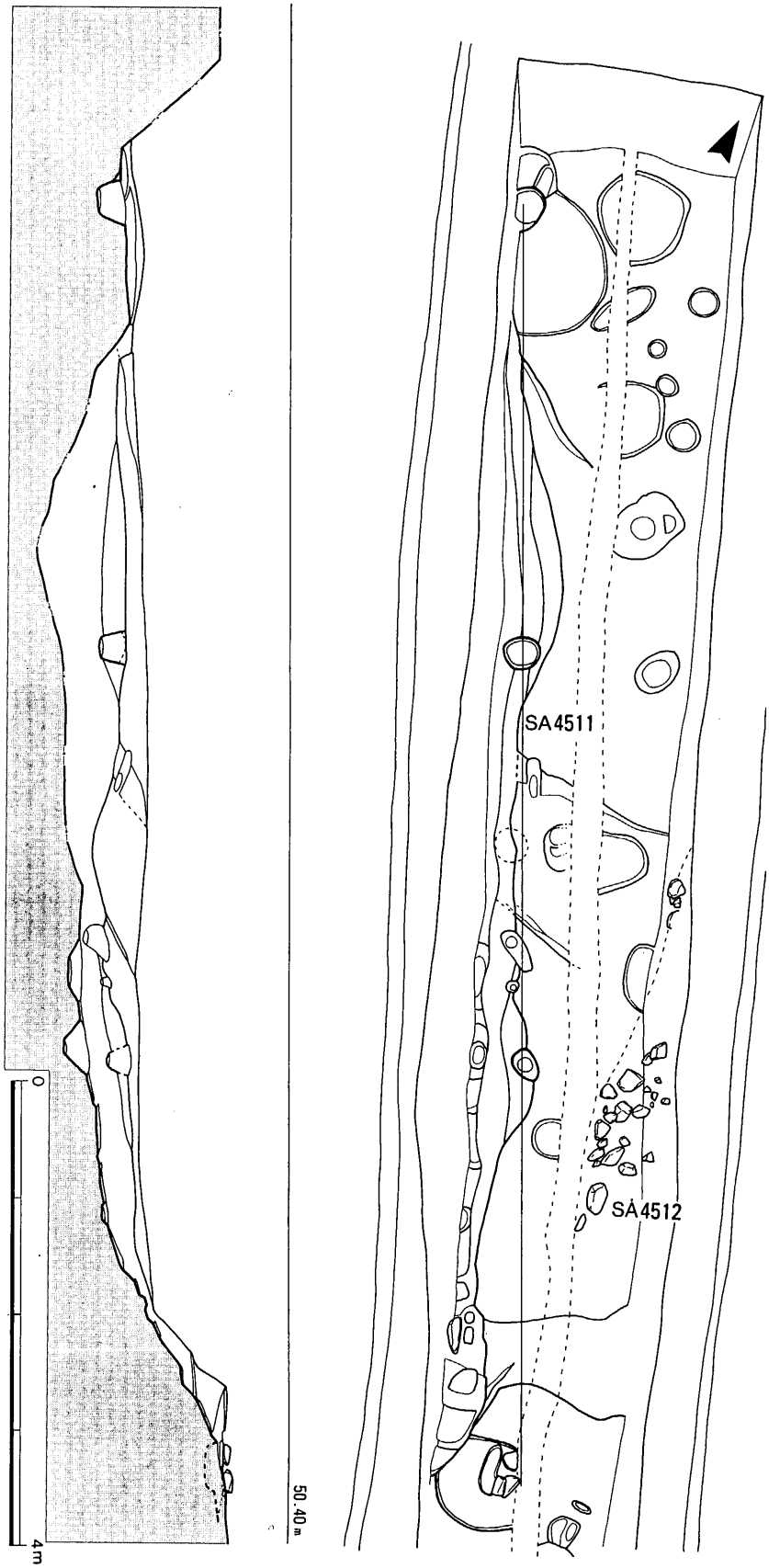


Fig.9　SA4511実測図（1/60）

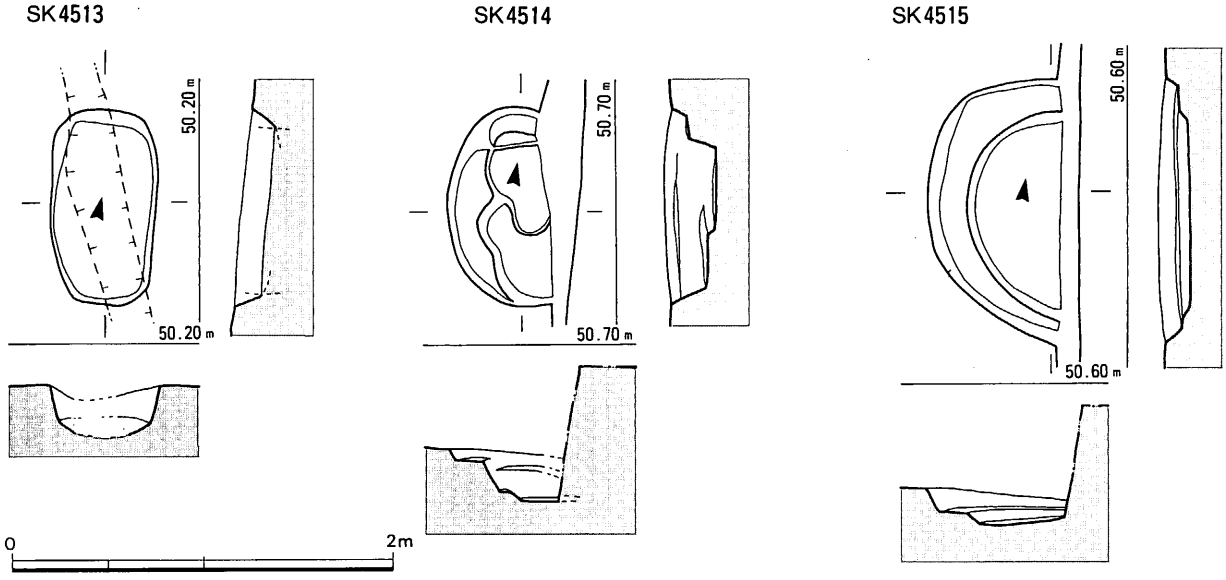


Fig.10　SK4513・4514・4515実測図（1/40）

石垣遺構

SA4512（Fig.7，PL.3）

調査区北側で検出した。段落ちSX4516埋没後に築かれている。試掘時に一部掘抜いてるが，南北へ伸びることが判っている。10～20cm大の石の間や裏に土を込めながら積み上げている。台地落ち際を巡ることから，土止めなどの役割が考えられる。出土遺物には，図示できなかったが須恵器の小片などがある。ただし，直接時期を示すものはない。

出土遺物（Fig.13，PL.7）

土製品（4）黒灰色埋土中より出土した土製品である。鈴に使われたものであろうか。胎土は細粒で，丁寧な面取りを行っている。径1.6cmを測る。

溝

SD2955

前回の第102次調査で検出した東西溝である。今回の調査区は，前回より約5m西側になる。溝の〝肩〟はいずれも失われており，わずかに底面が残る程度である。SX4516付近では痕跡も確認できない。土層の観察からSX4516埋没以前に機能した溝と考えられる。SX4516との境界は不明瞭であり，溝の埋土より出土した遺物はない。前回の調査では，埋土中より8～14世紀代の遺物が出土しており埋没時期の下限を14世紀代に，また開削時期については，周辺遺構の検出状況より9世紀前半には遡らないと考えられている。

SD2955の西端

土坑

SK4513（Fig.10，PL.3）

調査区中央付近で検出した。プランは隅丸方形であり，上縁長軸1.05m，短軸0.55mを測り，主軸方位をN9°Wにとる。深さについては，水道埋設時に破壊されており，確認できない。

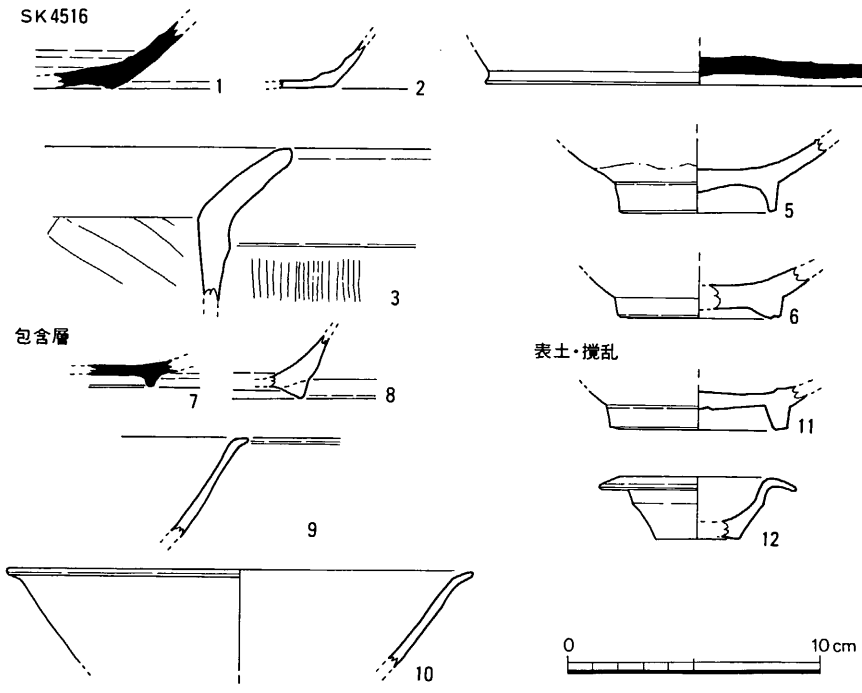


Fig.11　A区出土土器実測図（1/3）

花崗岩バイランの地山を掘抜いている。埋土については黄褐色の単一層で分層できない。遺物の出土もなく，一気に埋められたか，古い時期に堆積した可能性が考えられる。

SK4514（Fig.10）

調査区中央東側で検出した。プランは楕円形であり，上縁長軸1.05m，深さ0.30mを測り，主軸方位をN10°Wにとる。地山である花崗岩バイラン土と風化礫層を掘抜いている。土層観察では，耕作土である黒灰色土が落ち込む状態で大きく削平を受けており，その下層に赤色のバイラン土が堆積していた。遺物は出土していない。

SK4515（Fig.10）

調査区南側で検出した。プランは円形であり，上縁長軸1.30m，深さ0.20mを測り，主軸方位をN17°Wにとる。地山である花崗岩バイラン土と風化礫層を掘抜いている。黒灰色の耕作土除去後，検出できた。埋土は，暗茶灰色土に赤色の花崗岩バイラン土がブロック状に混じった状態の単層であり，人為的に埋められた可能性が高い。遺物の出土はなかった。

段落ち

SX4516（PL.3）

調査区北西際で検出した。台地の地形に沿った状態の段落ちで，検出した遺構面は赤色の花崗岩バイラン土である。北と南側では垂直に近い形状で落ちており，削り出しと考えられる。ただSD2955と交差する部分は緩やかな傾斜を持って西側へ落ちている。西壁の土層観察から，

台地の西端

溝の肩の痕跡は認められないが埋土の堆積は沈んだ状況であり，この辺りに台地と溝の西端がくると考えてよいであろう。

この段落ちの堆積層は大きく3層に分けられる。このうち上・中層は一部SD2995面を覆う

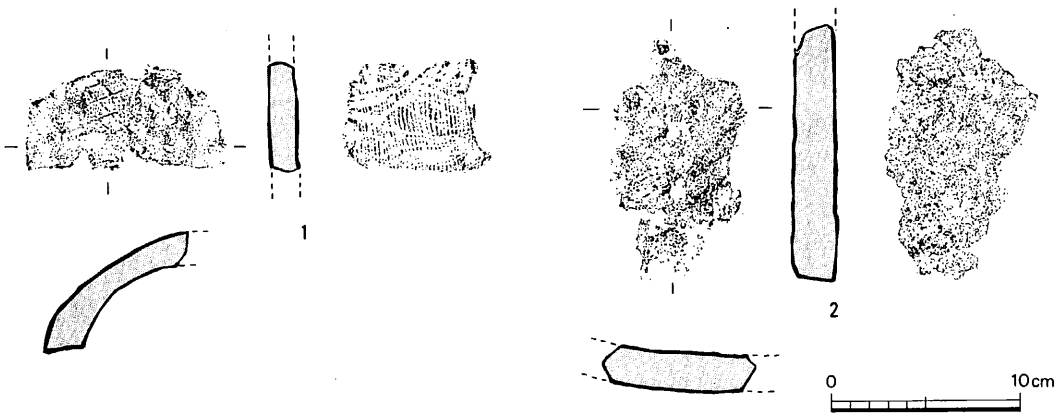


Fig.12　A区出土瓦実測図（1/4）

ことから溝廃絶後の堆積層と考えられる。出土遺物には，白磁椀Ⅳ－1類などがあり前回の第102次調査と同じくSD2955の完全な埋没を14世紀頃までと考えて良いであろう。ここで問題となるのは，南側で確認できた下層堆積である。上・中層とは明らかに埋土は異なり，暗茶灰色や橙褐色の粘質土が中心でしまりがある。出土遺物には，土器は砕片類が中心で時期決定は難しいが，一部瓦質ものが含まれている。胎土をみる限り，10世紀代以後とみられる。その他に10世紀代の瓦片も含まれている。この年代を台地際の開削時期の上限に近い時期とみてよいであろう。ただし，台地一体の地形開削期をこの時期に求めることは今回の調査では無理と言わざるを得ない。

開削時期

出土遺物（Fig.11・12，PL.7）

上層出土土器

須恵器鉢（1）外面体部下半は回転ヘラケズリで，底部の境は明瞭である。外底部は工具による回転ナデ。焼成はやや軟質で胎土に黒色粒子を含む。8世紀後半代であろう。

土師器皿（2）底部の器厚は薄い。外底部の調整は糸切り後にナデ調整する。外面は黒色で，黒色土器B類に属する。12世紀代であろう。

土師器甕（3）頸部以下外面はハケ目，内面はヘラケズリ。8世紀代である。

下層出土土器

須恵器杯（4）復元底径16.6cm。高台は底部端に付き外に跳ねる。8世紀後半～9世紀。

白磁椀（5・6）5は細く高く取りつく高台を持ち，内面見込みに沈線を有する。濁灰色で底径5.8cm。V－1類で11世紀後半代。6の復元底径6.6cm，見込みに沈線状の段を有する。高台部は厚くわずかな削り出しで，畳付を削り溝を有する。玉縁状の口縁がとりつくⅣ－1類で12～13世紀代。

丸瓦（1）広端近くの破片と思われ，側面の一部を残す。凸面はヘラケズリ調整され，斜格子文が部分的に残る。斜格子文は2と同一である可能性がある。凹面には布目が残るが，横糸は1箇所に固まった状況が見られる。側面は1.9cmほどの厚さが測れるが，裁面は1.2cmほどと薄い。横長の破片で6.0×9.8cmほど。断面の形状が側面側で厚く，反対側は1.5cm程度であることから，側面近くに粘土板の合わせ目があったと考えられる。灰色で比較的細かい石英粒子が用いられ，焼成は硬質である。橙褐色土層出土。

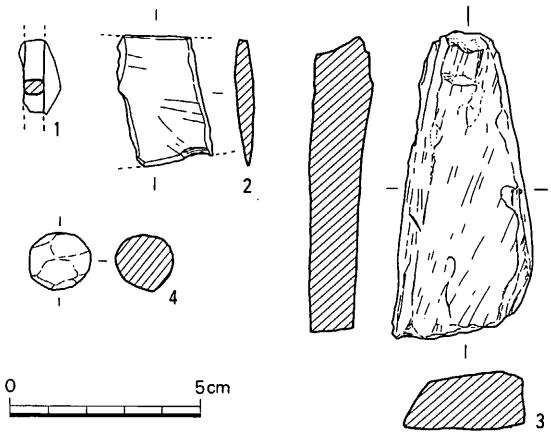


Fig.13　A区出土鉄器・石器・土製品実測図（1/2）

平瓦（2）端面の一部を残す。凹面はナデ調整され，布目の大部分が消されている。端面は，ヘラケズリ。破面に粘土板の合せ目痕跡と思われるものが見える。凸面もナデ調整されているが比較的細かい斜格子文がわずかに残る。縦長の破片で13.2×8.5cmほどである。暗灰色で石英粒子を多量に含む粘土が用いられている。焼成は硬質である。暗灰色土出土。

いずれも8世紀～9世紀代と考えてよいであろう。

不明鉄製品（1）上層・茶灰色土中より出土した。両端を欠損しており，本来の器形は特定できないが，断面は方形である。

石庖丁（2）両端を欠損した石庖丁である。残存状況から両刃であることが観察できる。緑色片岩製で6.7g。

砥石(3)表裏,左側面の3箇所に砥面が観察できる砥石である。石材は緑色片岩で重さ74.2gを測る。

その他の出土遺物

包含層（Fig.11，PL.7）

須恵器杯（7）外面はヨコナデ。焼成はやや軟質で胎土に黒色粒子が混じる。灰釉の可能性あり。SX4516周辺の茶灰色土中より出土。

土師器杯（8）磨滅著しい。底部端に高台がとりつく。8世紀後半代であろう。

白磁椀（9・10）9は濁灰色で体部は直線的で，口縁部は外反し端部は平らである。10の復元口径は18.2cmを測る。いずれもⅧ類で12世紀代以降である。どちらもSX4516周辺で出土した。

表採・撹乱（Fig.11・12，PL.7）

白磁椀（11）高台は高く，見込み部を輪状にカキ取っている。底径6.0cm。Ⅷ類で12～13世紀代以降。

陶器蓋（12）復元口径7.6cm，器高2.6cmを測る。釉は外彎する口縁内面まで。筑前系で近世ものであろう。

(3)　小　結

A地区の調査は，政庁後背地区西端部の状況についての知見を得ることが目的であった。調査では，第102次調査で検出したSD2955の痕跡や西端段落ちSX4516，SA4511などを検出した。ただし南側では，削平が大きく遺構の残りは良くなかった。

今回の調査では，後背地区建物群の西端と捉えることのできる柵列など囲繞施設の検出はできなかった。北側では，第102次調査区との間に一部残されている可能性もあるが，南側では，すでに削平され遺存しない可能性が高い。むしろ，遅くとも10世紀代に掘削される，SX4516を重視すべきかもしれない。この遺構は，その上面の掘削形状から人の手によるものと考えられる。また，座標に対して振れを持つことから，ある程度地形を利用した可能性が高い。埋土は，大きく上層と下層に分かれ，下層の堆積層は整地に関わるような橙褐色の粘質土などである。これらに包含される遺物などについては，平坦部第102次調査区の資料などと関わりを持つことは，十分推察できる。またその場合，この先にテラス状に掘削した進入路などの施設なども考慮する必要があろう。いずれにせよ，第102次調査で検出した建物群は，このSX4516まででまとまる可能性が高い。さらに，この下層の掘削がそのまま地形に沿って西へ折れていく場合，現在の地形は後背地区の建物設置とともに掘削された可能性も考えられる。一方，上層の埋土については，SD2955を埋めており，埋没の下限はおそらく14世紀代頃に求められる。

第102次調査で検出した東西溝SD2955については，今回もその痕跡を確認している。しかし，その西端については埋土で流されており，確定することはできなかった。ただし，西壁土層の広い範囲で中央に窪みながら落ちていく堆積状況から，このあたりを西の境とみることができる。その場合，直行する南北の区画については，やはり段落ちSX4516を充てて考えてよいであろう。

今回のA地区の調査では，掘立柱建物などの明瞭な遺構を検出することはできなかった。ただし，SX4516の検出は政庁後背地区建物群の展開を考える上では，一定の成果があったと言えよう。

B地区の調査

(1)　基本層序（Fig.15，PL.4）

層序の観察は，調査区北壁面で行った。調査区が谷を南北に横断するため，自然堆積を含めた現在の地形を観察するのに都合良い結果となった。

調査区の現状は，アスファルト舗装されており，その下位にはバラスが敷かれている。土層（東側）には，このバラス面に切り込む上下水道管埋設のための撹乱層が部分的に確認できる。さらに下層の9層において，舗装以前の旧路面層やその修復の痕跡が確認できる。この直下の8層については，路面の盛土整地である。その下位には互層となる積土層がある。ただこの上面を路面と判断することはできなかった。この積土の下部付近では幾つか柱穴を確認できるが，これは路面際の柵などの可能性が考えられる。

積土下位には畔の可能性のある17層・灰茶色土や，西端では神社参道の石段の可能性のある礫が埋設されている。これらの構築時期は，旧道路整備以前である。また，これらの下層に，調査区を東から西側へかけて大きく覆う18層・暗灰色土（西側21a層）が位置する。また，調査区東のSD4521・新期はこの18層を切り込んでいる。下限は，18世紀以降である。この暗灰色土については，断定的なことは言えないが，南隣接地の105次調査区全体を覆う暗茶色土層やSX3095埋没に関わる暗褐色土層に比定される可能性が高い。

中世の整地層

18層・暗灰色土の下層には暗茶色土整地層（東側20層，西側81層）が調査区東西にわたり認められる。この整地層は，東側では下層の礫層SX4522埋没後（12世紀以降）に位置づけられる。そして，その後SD4521・古期が開削される。西側では，SD490がこの整地層を切り込み開削されている。両溝の下限はそれぞれ，14世紀代頃と考えられる。いずれにせよ，本調査区では鍵層となる整地層である。

さらに東側では，この下層に多時期にわたる遺物を包含する礫層SX4522がある。そして花崗岩の風化バイラン土へと至る。一方，西側では砂と礫が混じる自然堆積層が位置づけられる。SX4522は西へ向うにつれ薄くなり砂と礫からなる自然堆積層を覆っている。調査区西側では，この自然堆積の礫層下位に水成作用を受けたバイラン土が基底に位置づけられる。

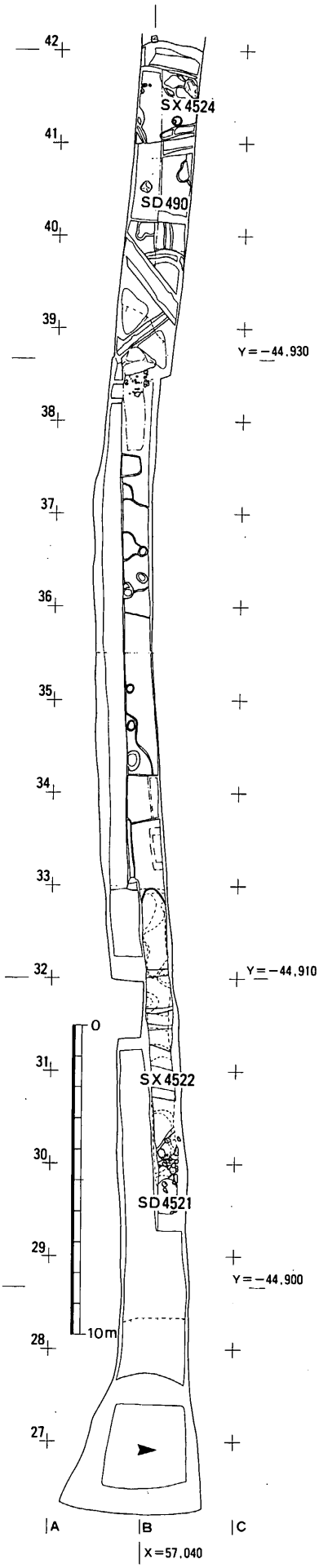
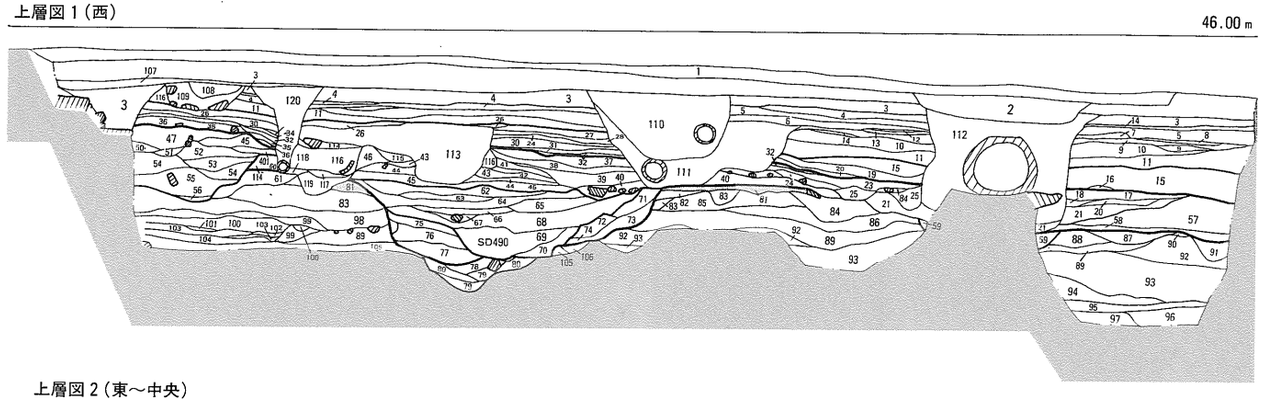
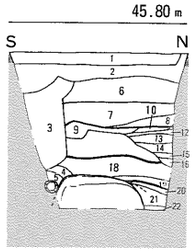


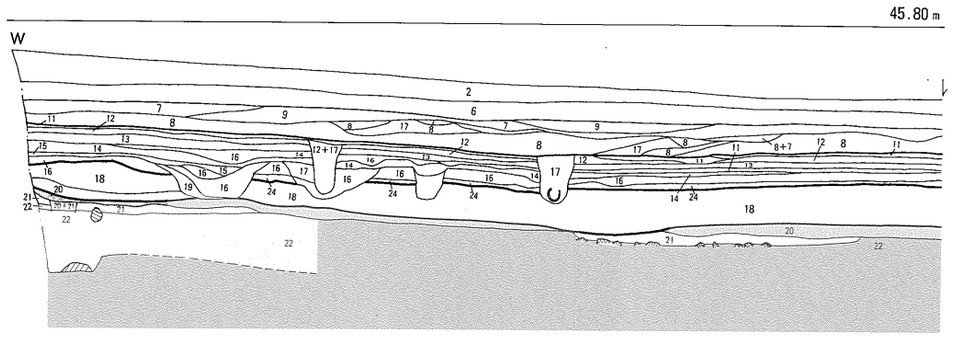
Fig.14　第183次調査B区遺構配置図（1/200）

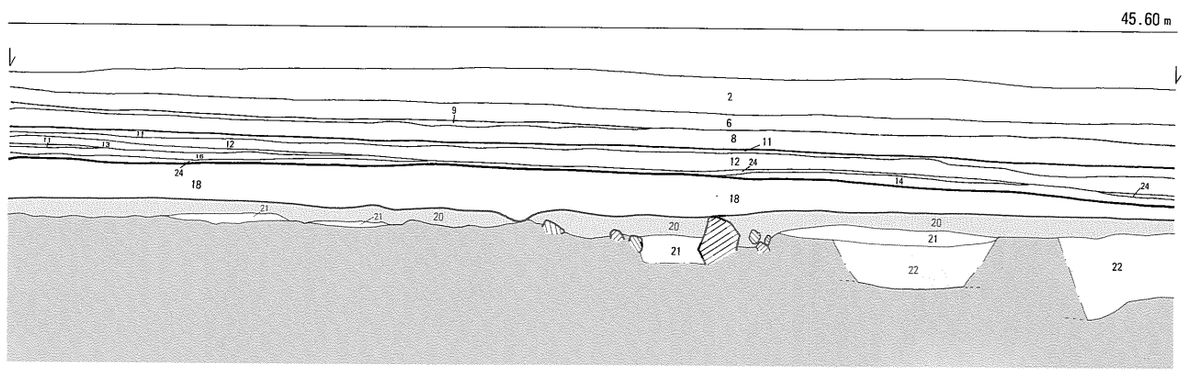
上層図1（西）

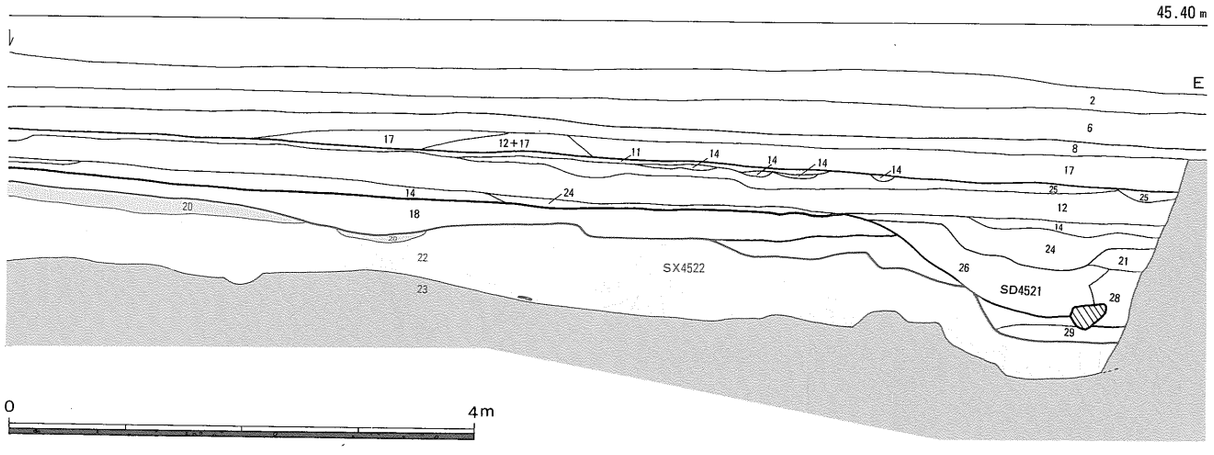


上層図2（東～中央）









土層名（西側）

近代以降（1～46）
1 アスファルト
2 砕石（青灰色）
3 砕石（淡灰色）
4 黒灰色土
5 暗茶灰色土
6 淡黄灰色土
7 暗黒色土
8 暗黒色土
9 青灰色シルト
10 橙褐色土
11 橙灰色土
12 暗灰色粘土
13 暗青灰色粘土
14 暗灰色粘土
15 暗黄灰色粘土
16 橙褐色土
17 淡灰色粘土
18 灰色粘土
19 暗黄茶灰色粘土
20 淡黄灰色土
21 茶灰色土
22 橙褐色土（砂質、斑鉄層）
23 淡黄灰色土（19に同じ）
24 明灰色粘土
25 茶灰色土
26 暗灰色粘土
27 青灰色シルト
28 黒灰色粘土
29 淡黄灰色土
30 黒茶灰色土
31 灰色土
32 橙褐色土（盛土整地）
33 明灰色粘土
34 暗青灰色土
35 灰色土
36 淡橙灰色粘土
37 黄灰色砂
38 明灰色粘土
39 黄灰色土
40 茶灰色土
41 暗灰色土
42 灰色土
43 灰色土
44 茶灰色土
45 青灰色シルト
46 淡灰色粘土

神社石垣埋土（47～56）
47 暗灰色粘土
48 淡橙灰色土
49 淡青灰色土
50 黒灰色土
51 淡青灰色土
52 淡茶灰色粘土
53 暗青灰色粘土
54 淡橙灰色土
55 暗青灰色土
56 青灰色粘土
57 暗灰色土
58 灰色土
59 暗灰色粘土
60 暗灰色粘土（耕作土）
61 淡黄灰色土

SD490・新（62～70）
62 淡灰黄色砂
63 茶色細砂
64 灰茶色粗砂
65 茶褐色砂
66 淡灰褐色粗砂
67 灰褐色粗砂
68 茶色砂（混淡灰色砂）
69 暗灰色粗砂
70 灰茶褐色砂

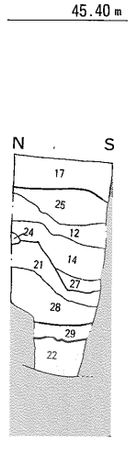
SD490・古（71～77）
71 茶褐色土
72 黄褐色土
73 淡灰色砂
74 黄茶褐色土
75 灰茶色粘質土
76 灰茶褐色砂
77 灰茶色粗砂

ピット（70～80）
78 茶灰色砂
79 茶灰色粗砂（礫含む）
80 淡茶灰色砂

整地層（81～82、東：20）
81 暗茶色土（SD490検出面）
82 淡黄茶灰色砂
83 黒茶色土
84 淡黄灰色土

自然堆積層（84～106）
85 明黄灰色砂質土
86 暗黄灰色土
87 茶灰色土
88 淡灰色粗砂
89 暗茶色礫
90 暗灰色粗砂
91 暗灰色粘砂
92 淡黄灰色砂
93 暗灰色礫
94 灰色細砂
95 黒茶色礫
96 暗灰色細砂
97 暗灰色粘土
98 黄灰色粘土
99 暗茶灰色砂
100 黄灰色細砂
101 暗灰色砂
102 暗灰色砂
103 黄灰色粘土
104 暗茶褐色砂
105 黄灰色土（風化岩盤）
106 茶灰色粘土

現代（107～120）
107 黄灰色土
108 淡黄橙色土
109 〃
110 淡黄茶色土（水道管埋設）
111 橙褐色土（マサ土）
112 黄灰色土
113 暗黄茶色粘土
114 暗灰色粘土
115 淡灰色粘土
116 暗黄茶色粘土
117 淡灰色砂質土
118 青灰色粘土
119 青灰色シルト
120 茶灰色土＋暗灰色粘土



土層名（東～中央）

1 アスファルト（現道路）
2 砕石
3 砂層
4 暗灰褐色粘質土
5 黄茶色土（＋暗灰褐色粘質土マサ土）
6 暗黄褐色土（砕石混）
7 黄白色土（マサ土補修盛土）
8 暗黄褐色土（マサ土旧道路盛土）
9 灰色土（やや粘質・旧道路盛土）
10 黒色粘質土
11 灰色粘質土
12 灰黒色土（黒色粒を含む）
13 灰黄色土
14 橙白色土（マサ盛土）
15 灰色土（やや砂質）
16 淡灰色砂質土（旧耕作土）
17 灰茶色土（畦か？）
18 暗灰色土
19 灰色土
20 暗茶色土（整地層）
21 茶灰色土（砂質）
22 淡黄色砂（礫多く含む）
23 花崗岩パイラン土（地山）
24 橙茶灰色土（旧床土状）
25 暗茶褐色土
26 濃灰青色土（溝状埋土）
27 青灰色粘質土
28 茶灰色土（砂、礫含む）
29 茶灰色土

Fig.15 B区土層図（1/60）

(2) 遺構と遺物

溝状遺構

SD490（Fig.14・15，PL.5）

調査区西側で検出した南北溝である。暗茶色土整地層面で検出した。溝の幅は上縁約2.5m，下縁（開削当初）2.1m，整地層（検出面）から最も深いところで約0.7mを測る。今回の調査では，約1.8m分を検出した。昭和47（1973）年には，南側隣接地を調査しており，その際にも約50m分を検出している（第24次調査）。

今回検出した溝は掘り直されており，2時期に分かれる。このうち古期の溝は，幅広の逆台形状で埋土最下層は砂層である。これは流水の痕跡と考えられる。その上層で褐色粘土などが堆積するが，中央部については掘り直しが行われた新期の溝に切られており，堆積状況は不明である。一方，新期の溝は下縁0.7mであり，下層より細くなる逆台形状である。埋土下層は同じく砂層で流水の痕跡と考えられる。土層の観察から，古・新期の溝の埋土は，どちらも人為的に一気に埋められた状況ではない。

この古・新期溝の出土遺物には，白磁，青磁，瓦質土器，瓦類などがある。遺物から判断して遺構の下限としては，14世紀代を考えてよいであろう。これは第24次調査の所見を追認するものである。

SD490の下限

出土遺物（Fig.16・19・21，PL.8・10）

白磁椀（1）体部から口縁端部へは直線的に立ち上がるV類である。11～12世紀の年代が与えられる。

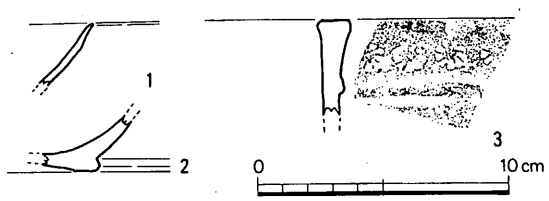


Fig.16 SD490出土土器実測図

越州窯系青磁椀（2）底部は円盤状でケズリ出しによる上げ底である。高台端部は丸みを持つ。釉調は粗雑で体部外面下半にはなく，内面には目跡がある。溝中層より出土。Ⅱ－2類で9～10世紀の年代が与えられる。

越州窯系の青磁椀

瓦質土器鉢（3）口縁端部は平でその下位に菊花文を押印する。溝上層より出土。14世紀代であろう。

丸瓦（1） 丸瓦広端部の先端である。凸面には木製長手叩打具による斜格子文が残り，先端部はヘラ削りされている。軒丸瓦用に作られたかもしれない。凹面には布筒の痕（布目）が見られる。灰色～黒灰色で砂粒を含む。須恵質で硬く焼成される。中層出土。

平瓦（2～4）2の凹面の布目は比較的粗い。左側面の一部が残るが裁面は浅く，広い破面が残る。凸面には木製長手叩打具による斜格子が残る。斜格子文の一部に菱形の枠を作り，左文字「左」が認められる（文字瓦902Bb）。松倉瓦窯に出土例がある。胎土に灰色・砂粒を含む粘土が用いられ，焼成は硬い。中層出土。 3は広端部の破片である。凹面の布は粗くよりが見られる。端面はヘラ削りされる。凸面は斜格子文がわずかに残る。斜格子を打った後，ナデ消したものであろう。灰色・砂粒を含む。焼上がりは硬い。中層出土。 4は左側縁を残す。凹面の布目は比較的細かい。側面には内側から深さ0.4cmほどの裁面が残る。破面は0.8cmほどである。凸面の斜格子文は2のそれにに近い。灰色・砂粒を含む粘土が用いられる。焼成は硬い。

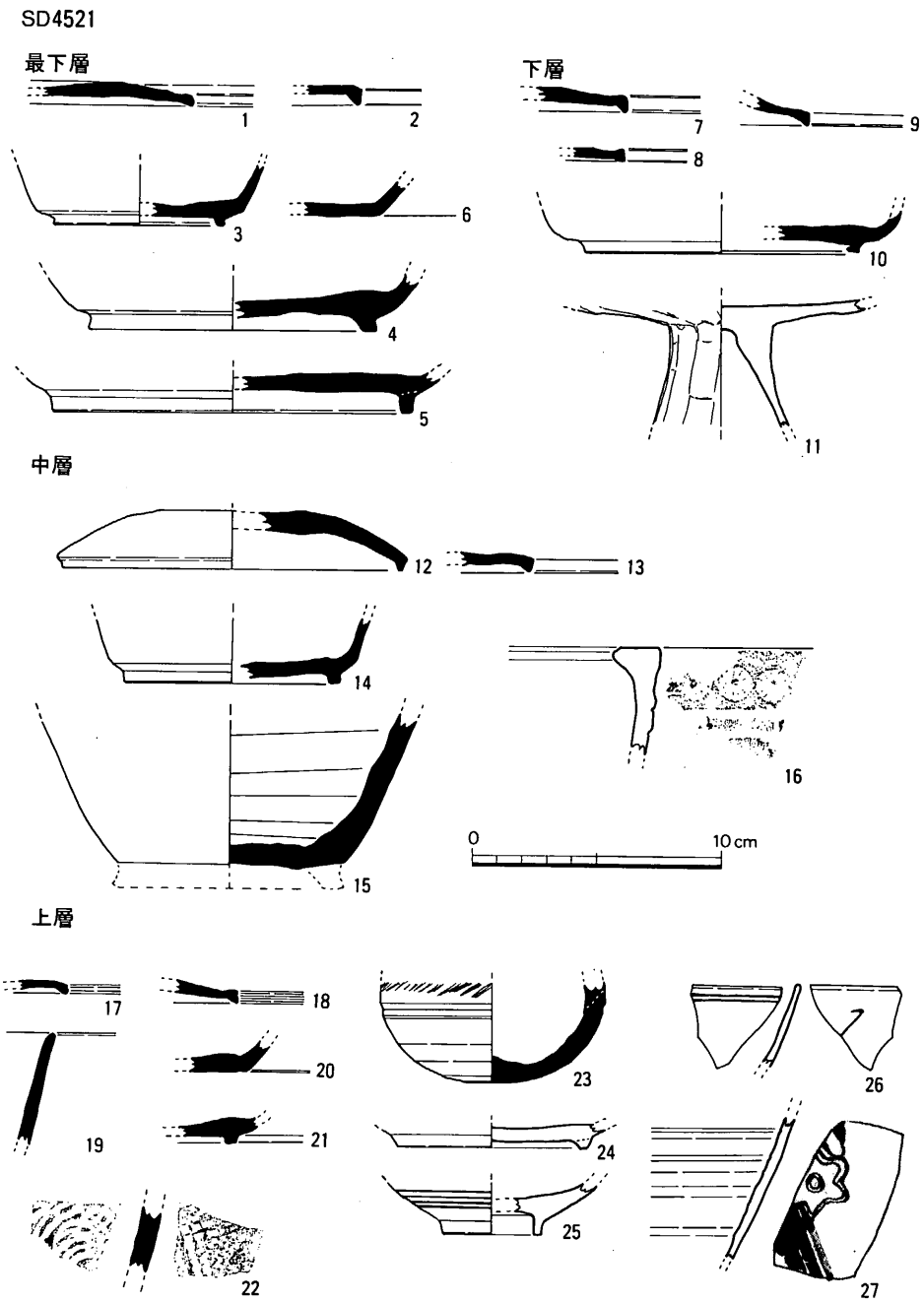


Fig.17　SD4521出土土器実測図（1/3）

下層出土。

石製品（1）滑石片を砥いで面取りしているが用途は不明。重さ11.4g。中層より出土。

SD4521（Fig.17，PL.8）

調査区東端で検出した南北溝である。溝の幅については調査区外へ伸びており不明である。深さについては約1.0mを測る。SX4522やその上層の暗灰色土層を切り込む形で開削されている。南北への広がりについては不明だが，現在東に位置し，政庁西側を流れる谷沿いの河川と

一部重複する可能性が高い。

溝の新・古関係

溝の堆積については，大きく新期と古期に分けることができる。このうち調査区暗灰色土(18)を切る土層・濃青灰色土（26）が新期溝の埋土に対応する。古期については，SX4522上面に堆積する茶灰色土（21)と濃青灰色土（29）が対応する。それぞれ上層，中層出土土器として報告する。これらの出土遺物より，SD4521の古期については14世紀代に，新期については17世紀以降に，それぞれ下限を求めることができよう。この古期溝の下限については，暗灰色土下位にある西側のSD490とほぼ対応する。

ところで，調査では湧水の中で作業を進めたため，土層と対応させながら一部人工層位的に地山のバイラン土面まで掘り進めた。そのため，出土遺物の一部については，後述するSX4522下層資料に対応するものが含まれる。ここでは一応分けて，最下層，下層遺物として図示した。

出土遺物（Fig.17，PL.8）

最下層・暗灰色礫層下部

須恵器蓋（1・2）1の外天井部は回転ヘラケズリで，口縁端部はわずかに三角形に肥厚する。2は磨滅激しい。口縁端部を嘴状に折返す。

須恵器杯（3～5）3の体部と底部の境は明瞭で高台は外側へ踏ん張る。復元底径6.8cm。4は外面体部下半は回転ケズリ。外底面は工具によるナデ。焼成はやや軟質。5の高台は底部の端に付す。外底面中央部付近は回転ケズリ。復元底14.4cm。土層採集資料。

須恵器皿（6）体部と底部の境は明瞭で，外底部の調整はナデ。

7～8世紀代の資料

最下層資料は，2・3のように7世紀第4四半期的様相もあるが，概ね8世紀第1四半期に収まる。

下層・暗灰色礫層上部

須恵器蓋（7～9）7は口縁端部を嘴状に折返している。8の天井部は低く，口縁端部にわずかに段が付く程度である。9は口縁端部を強くナデている。

須恵器杯（10）高台は低く内彎ぎみで内側へ折り返している。外底部はナデ調整。復元底径10.8cm。

土師器高杯（11）外底部ならびに脚部を工具によるケズリで面取りする。脚内面は工具によるナデ。

土師器11は7世紀後半代，その他は8世紀代中頃までに収まる。

中層・暗茶灰色礫層

須恵器蓋（12・13）12の口縁端部は三角形に肥厚し，外面は強くナデられ沈線を巡らす。外天井部の調整は回転ケズリ。復元口径13.4cm。13の口縁端部は強くナデられ三角形に肥厚する。

須恵器杯（14）体部と底部の境は丁寧にナデられ丸みを持つ。外底面の調整はナデ。復元底径8.6cm。

須恵器壺（15）高台を欠損する。体部外面下半の調整は回転ケズリ。

瓦質土器鉢（16）口縁端部は内側へ折れ，屈折部は平である。菊花文を押印し，その下位に2条の沈線を巡らす。

12～15の資料は8世紀第1四半期頃までに収まるが，16の瓦質土器から中層の下限を14世紀代に考えることができる。

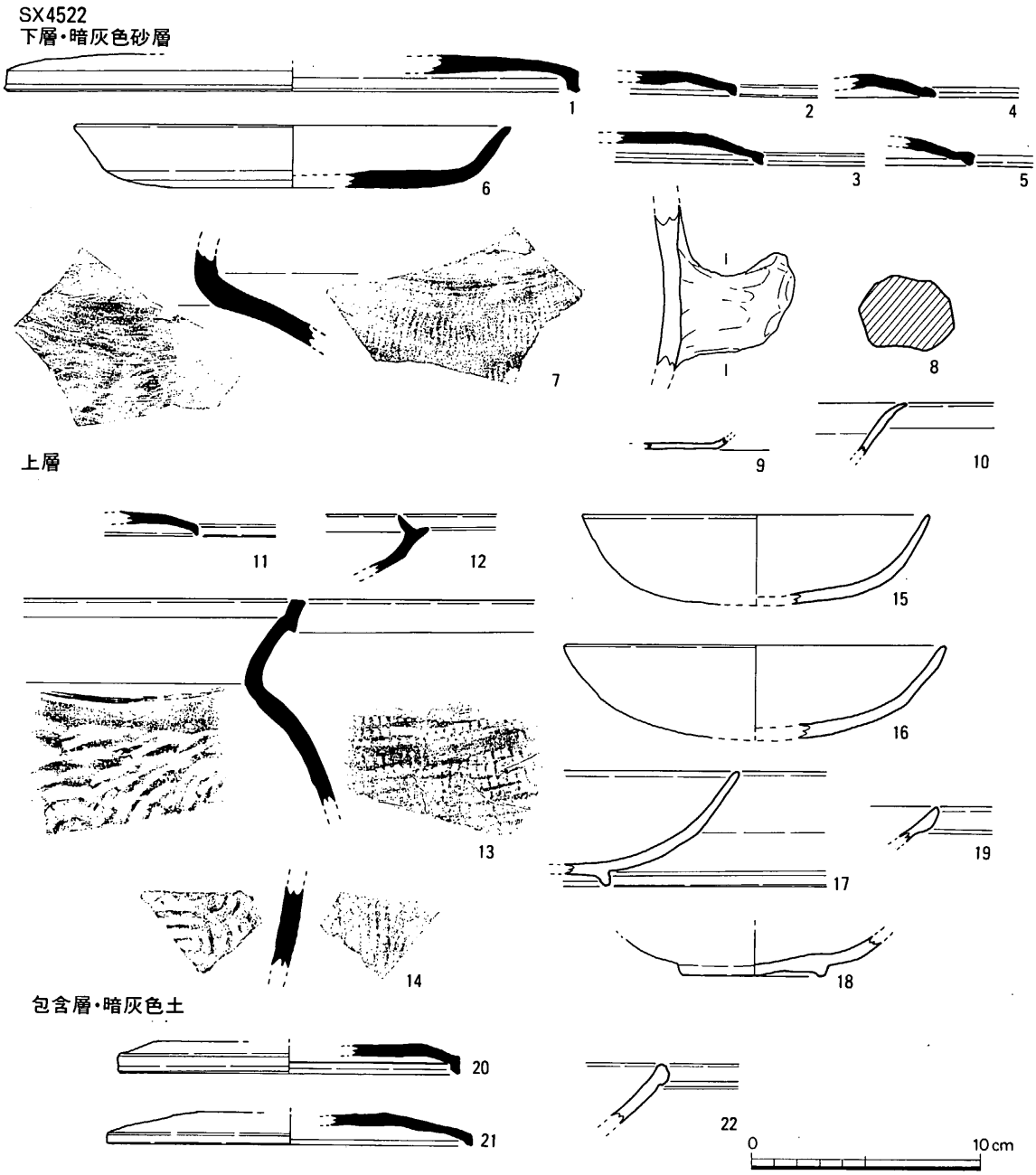


Fig.18　SX4522，包含層出土土器実測図（1/3）

上層

須恵器蓋（17・18）17の口縁外面には沈線を巡らす。18の口縁は三角形に折り，外面に２条の沈線を巡らす。いずれも８世紀前半までの資料。

須恵器杯（19～21）19は体部から口縁へは直線的に立ち上がる。20の外底部はナデによる調整。21の高台は低く丁寧なつくり。21は８世紀中頃までと考えられる。

須恵器甕（22）同心円の当具痕を残す。

甑（23）胴部以下は回転ケズリによる調整。穿孔部をわずかに観察できる。 6世紀後半代の資料。

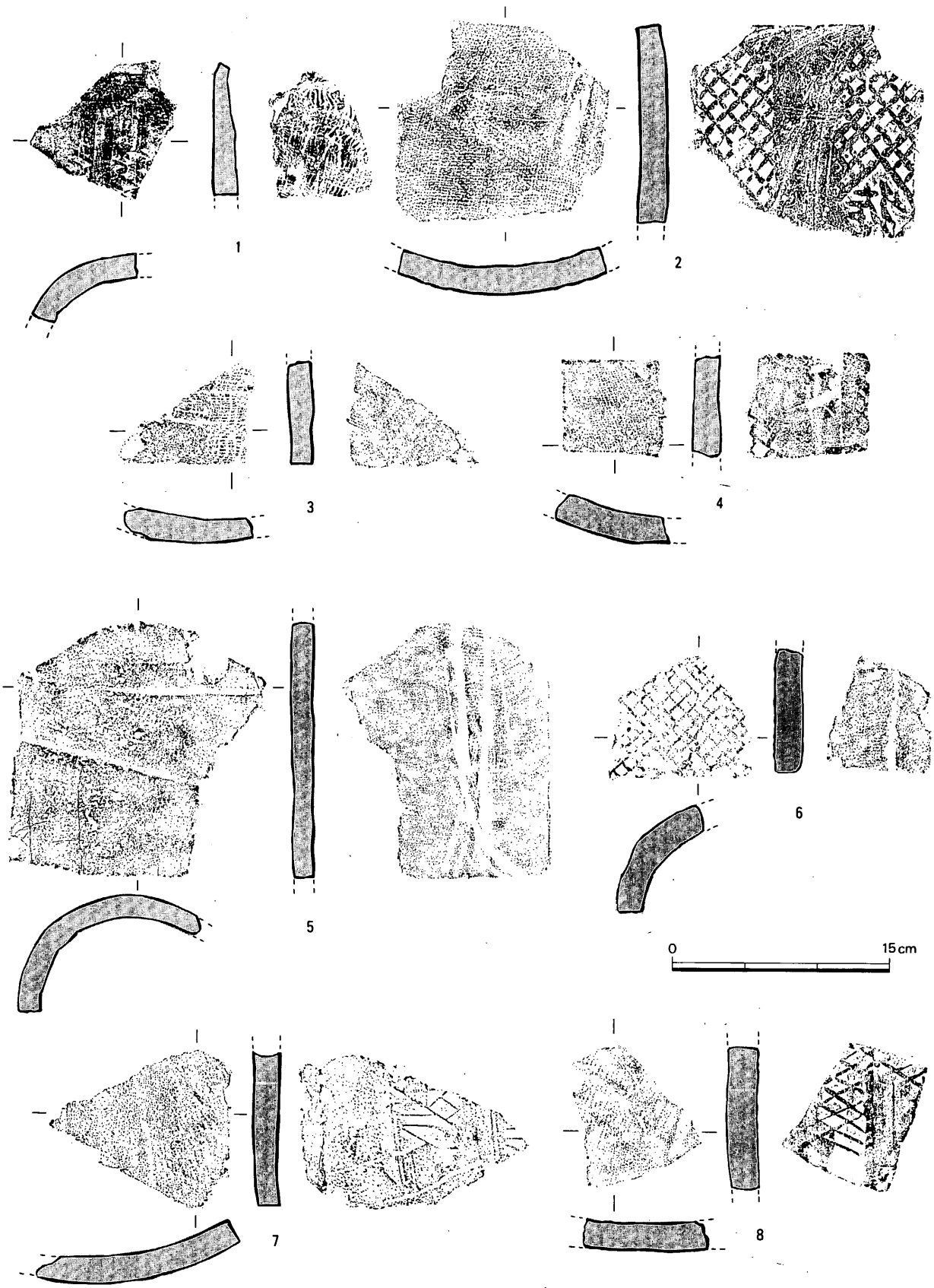


Fig.19　B区出土瓦実測図（1/4）

土師器杯（24）磨滅著しい。復元底径7.4cm。

陶器・磁器椀（25～27）25は外面体部下半に4条の沈線を巡らす。26は内面口縁部付近に2条の染め付けによる線を巡らす肥前系陶磁器。27は外面に花型の押印がある。

溝堆積の上限については，26の肥前系磁器により近世以降に考えることができる。

礫層

SX4522（Fig.14・15，PL.9）

調査区東西にわたり検出した拳大から人頭大の花崗岩礫と流砂からなる堆積層である。この地区の遺跡形成に関わるため，ここであえて取り上げた。これらの礫層は，花崗岩バイラン土の地山を削りながら，低い谷の中央へ向かうにつれ厚くなる。また，SD490の東，現在の南北に走る道路あたりでなくなる。このような堆積状況から，谷の上流から下流へ向かって流れ，単期間のうちに谷を埋めたと考えられる。SD490はこの礫層面の上面を整地して開削されている。出土遺物からこのSX4522の形成を12世紀代頃とみることができる。これは，政庁の廃絶期やSD490，SD4521開削期に関わる時期でもある。

出土遺物（Fig.18～20，PL.9・10）

下層・暗灰色砂層

須恵器蓋（1～5）1の天井部外面は口縁屈折部付近まで回転ケズリによる調整。復元口径25.0cm。2の口縁端部はわずかに肥厚する。3は口縁屈折部内面に沈線を巡らす。4は天井部から体部へ直線的に至る。5は口縁外面と内面屈折部に沈線を巡らす。いずれも8世紀前半代までの資料。

須恵器皿（6）体部と底部の境は丸味を持つ。外底部はヘラ削り後ナデている。復元口径18.8cm，器高2.8cmを測る。8世紀第1四半期を下らない。

須恵器甕（7）胴部に張りを持つ，8世紀代の特徴を有する。土層断面採取資料。

土師器甑（8）把手部は張り付けで煤が付着している。

皿（9）器厚は薄い。外底面に板状圧痕を残す。

白磁椀（10）口縁部は外反する。Ⅷ類で12～13世紀代。

瓦類・丸瓦（5）左側縁を残す。凸面は全面をナデ，縄目の打痕を消している。凹面には細い目の布筒痕が残る。布筒は使われたことによる疲労であろう，縫合せ部分が裂けている。この部分（中央の3角形）は，一木模骨の痕を残している。側面には0.4cmほどの裁面と0.9cmほどの破片が残る。細かい粘土が用いられ，茶褐色で硬く焼成される。

上層

須恵器蓋（11）口縁を緩やかに三角形に折曲げる。

須恵器杯（12）蓋受けと口縁の境に沈線を巡らす。

須恵器甕（13・14）13は口縁外面に突帯を有し，内面はやや沈線状に窪み接合痕を残す。14は土層断面採集資料。

土師器椀（15～17）15は，内外面磨滅が激しく調整は不明。復元口径は15.0cmを測る。11世紀代の資料。16の底部はヘラ切り離し後，ナデつけている。復元口径16.4cmを測る。12世紀代。17は，磨滅が激しいが内面に一部ミガキを残す。

瓦器椀（18）復元底径5.4cm。12世紀代であろう。

白磁椀（19）口縁端部が玉縁状になるⅢ類。12～13世紀代の資料。

丸瓦（6）左側縁を残す。凸面は全面に斜格子文が残る。凹面には，布筒の痕を残すが左側縁には一木模骨の痕を残している。側面には裁面と破面が残るが，裁面の深さは0.3cmほどである。粘土に砂粒を含み，灰色で硬く焼成される。



平瓦（7・8）7は右側縁を残す。凹面の布目は比較的細い。側縁付近では布目がスリ潰されている。側面は裁面である。凸面は斜格子文を基調とするが「十」文字，横線文を付加した叩打文が残る。叩打痕は間隔を開けて打たれている。8の凹面には糸切り痕布目が残る。凸面には斜格子文が残り，叩打具の側端を写しとっている。砂粒を含む粘土が用いられ，灰色で硬く焼成される。

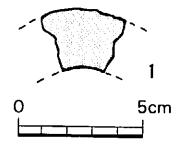


Fig.20 「鍛冶」関係遺物実測図（1/3）

鞴羽口（1）小型の羽口で端部付近に溶解物が付着している。割れ口にも熱を受けた痕跡があり，使用中に破損したと考えられる。

その他の出土遺物

包含層・暗灰色土（Fig.18・21，PL.10）

須恵器蓋（20・21）20の復元口径は14.8cm。21は口縁は方形に折り端部は平にする。復元口径15.8cm。

白磁椀（22）玉縁状の口縁部を持つⅣ類で12～13世紀の年代が与えられる。

石器（2～4）ここでは，一括して報告する。2は折断した剥片端部を刃部加工したスクレイパー。黒耀石製で重さ16.4gを測る。暗灰色土より出土。3は黒耀石製の調整剥片で重さ3.1g。4は分割されたサヌカイト礫片である。多久周辺の資料に類似する。重さ0.3g。

(3) 小　結

B地区の調査は，政庁西を南北に走る溝SD490の延長の確認と谷部の堆積を確認することが目的であった。調査では，第24次調査で確認していたSD490をはじめSD4521，SX4522などを検出した。

SD490は，第24次調査を含めた成果により僅かに蛇行するものの，ほぼ南北に走る溝である。今回の調査で，少なくとも約60mの範囲に延びることを確認した。溝は，掘り直しされており2時期に分か

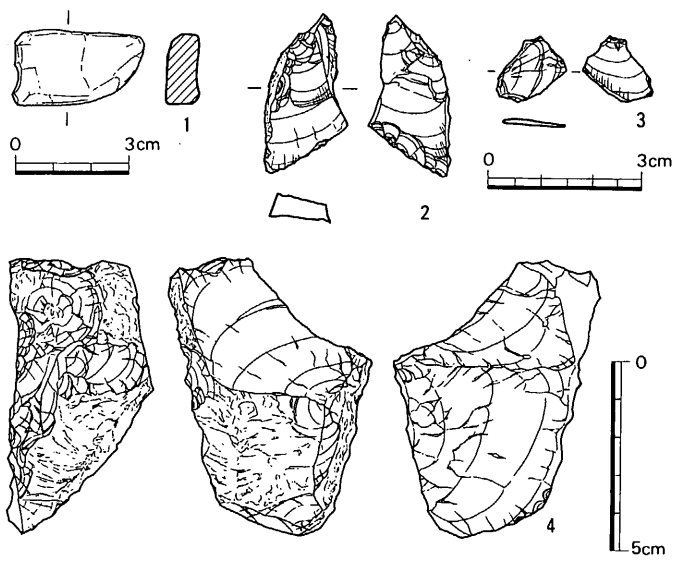


Fig.21 B区出土石器・石製品実測図（1・4:1/2，2・3:2/3）

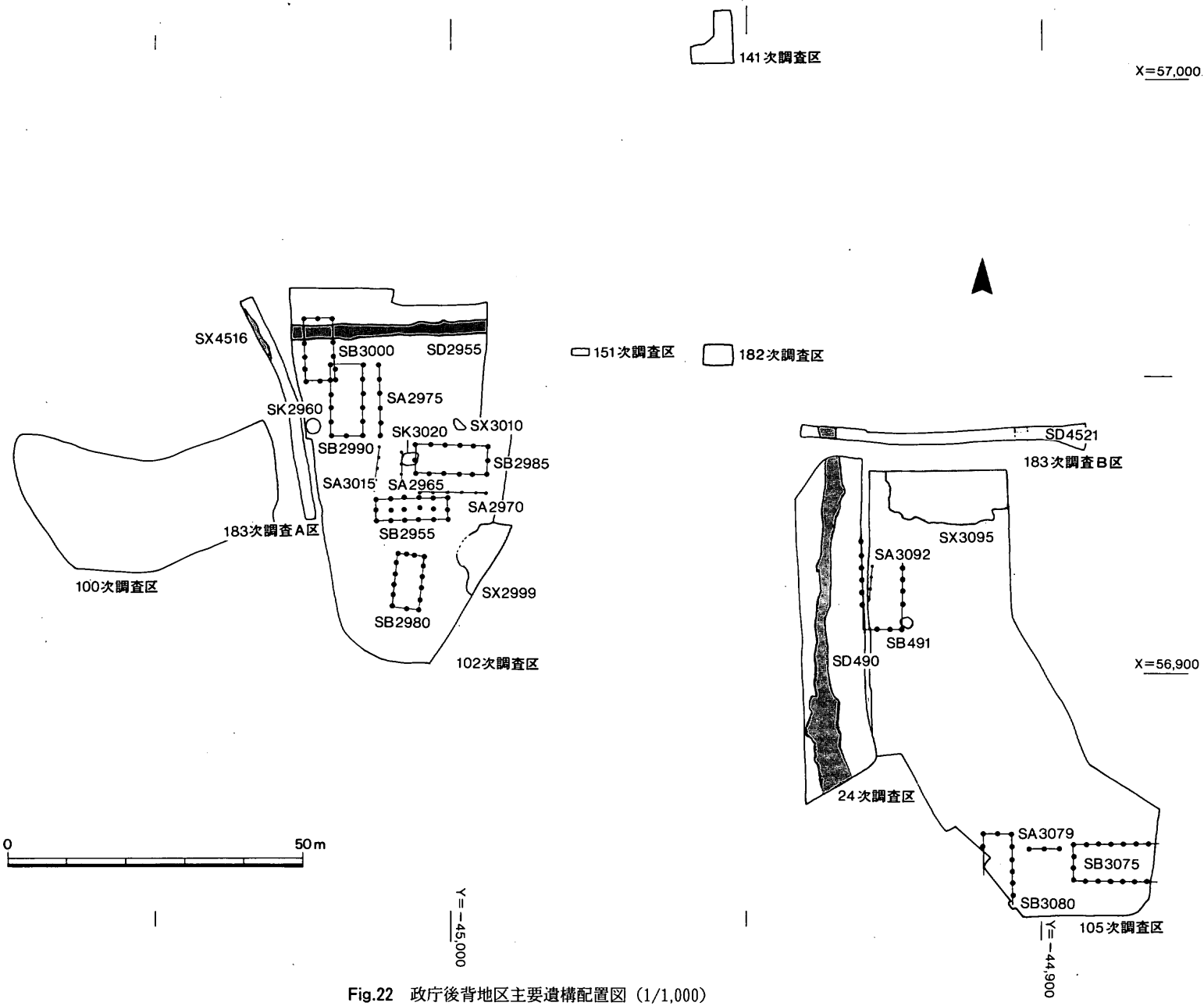


Fig.22 政庁後背地区主要遺構配置図 (1/1,000)

れる。ただ出土遺物よりどちらも大きな時期差はなく，埋没年代の下限は14世紀代と考えられる。また，どちらも流水の痕跡と考えられる砂層堆積があり，溝として機能していたことは明らかである。この溝は現在の道路の東側を併走する形で確認していることから，まだ北へ延びる可能性が高い。

SD4521は調査区東側で検出したが，政庁西側を流れる現在の河川と重複する可能性が高い。そのため，正確なプランを把握することは不可能である。また調査では，大きく2時期に分かれるが，この正確な埋没時期の確定も難しい。ただ現段階では，その古期の埋没の上限をとりあえず14世紀代に考えることができる。

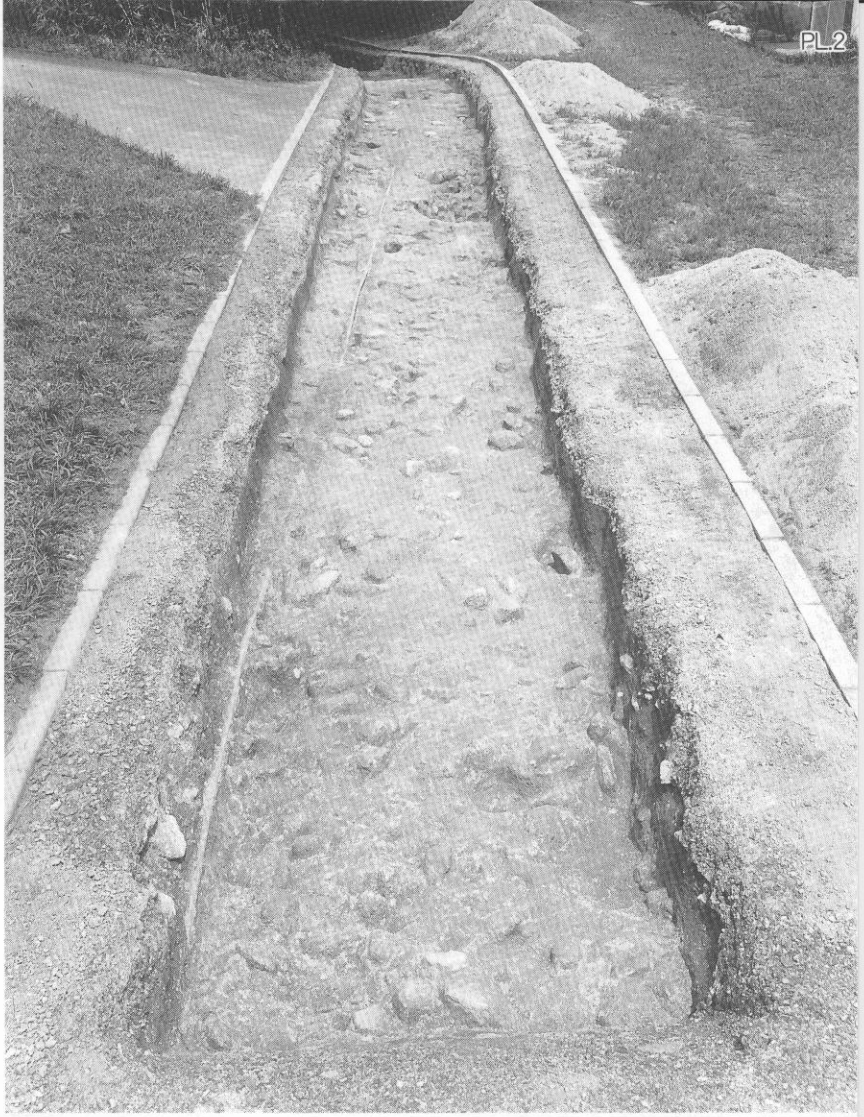
中世整地層

ところでSD490やSD4521は，調査区内で広く確認することができる暗茶色土整地層面を切り込む形で検出した。この暗茶色土整地層は，谷部を広く覆う礫層SX4522堆積後に形成されている。ただし東側の谷の深いところでは，薄くなり礫層が露出している。このSX4522の形成年代については，現段階では，出土遺物からみて12世紀代を下限に考えることが可能である。つまり，これは暗茶色土整地層形成時期の上限でもある。この間の時間幅をどう考えるかは今後の課題だが，とりあえずSD490やSD4521などの開削も12世紀頃を上限とみることができるようである。ただし，両者の並存については資料も少なく確定できない。一方，SD490と同様の事例として102次調査の東西溝SD2955などがある。これについては，区画溝などが想定されているが，この溝の廃絶についてはその下限は14世紀代と考えることができる。SD490とSD2955の両溝はある時期並存していたとみてよいであろう。しかしながら，これまでの調査では，直接これらの溝に囲まれる建物などの施設については確認できていない。

SD490とSD2955

中世大宰府における政庁後背地区

12世紀は，官衙としての大宰府の実態が失われる時期にあたる。これまでの調査成果により，政庁の脇殿や西回廊，政庁前面官衙の廃絶は11世紀後半であることが明らかとなっている。一方，中世の大宰府は観世音寺東方を中心とした地域に寺院などが建立される。また，条坊内などでは11世紀後半から12世紀前半にかけての新たな区画溝が多数検出されている。つまり，この12世紀初め頃はそれまでの大宰府とは異なった集落景観形成の画期にあたる。今回検出の溝SD490も，このような動向の一端を示すものとして理解できよう。



(1) 第183次調査A区
全景　（南から）



(2) 第183次調査A区
全景　（北から）



(1) SA4512・SX4516
付近　（南から）



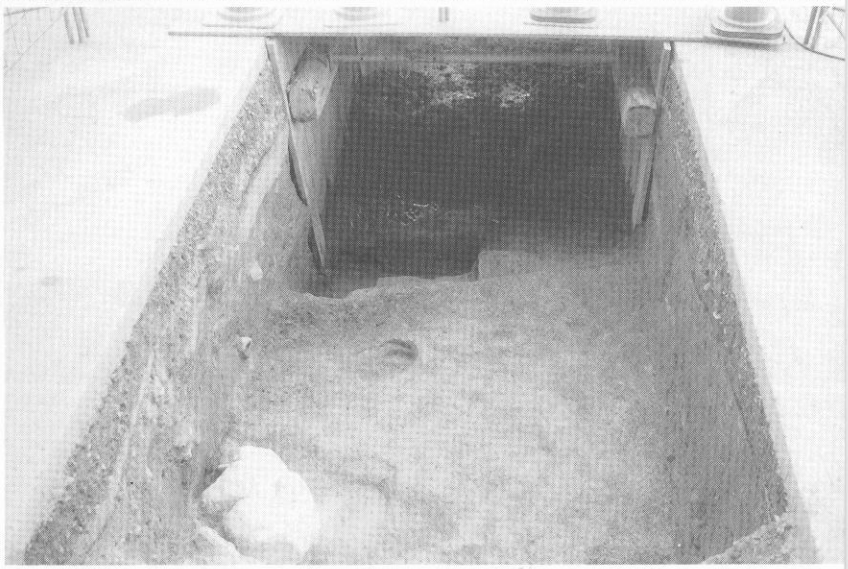
(2) SK4513（東から）



(3) SX4516土層（西から）



(1) 第183次調査B区全景
（東から）



(2) 第183次調査B区西側
全景　（西から）



(3) 土層堆積状況
（南から）



(1) SD490東半（南から）



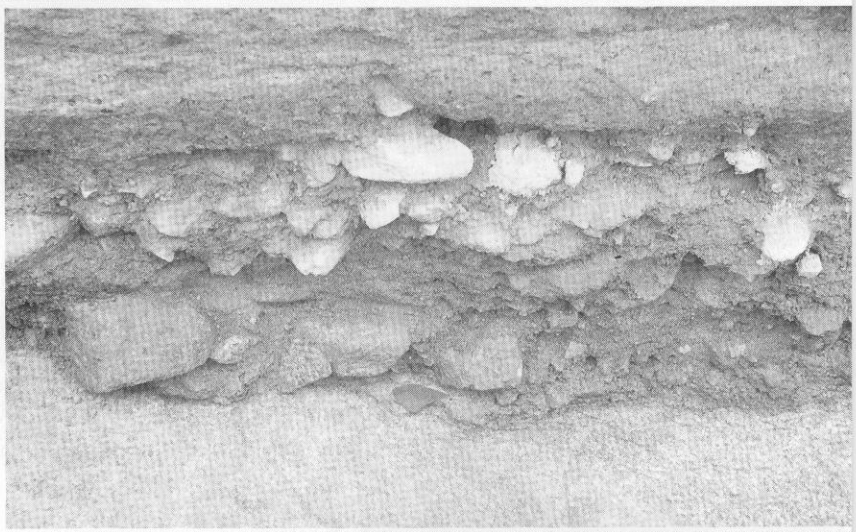
(2) SD490西半（南から）



(3) SD4512（南から）



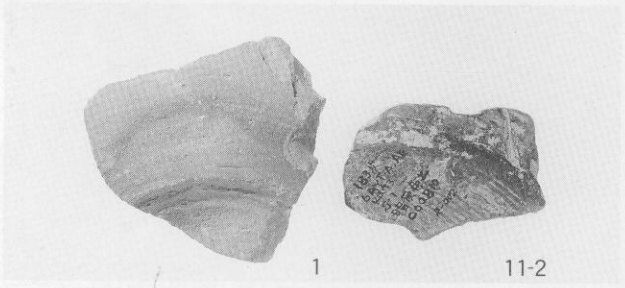
(1) SX4522（東から）



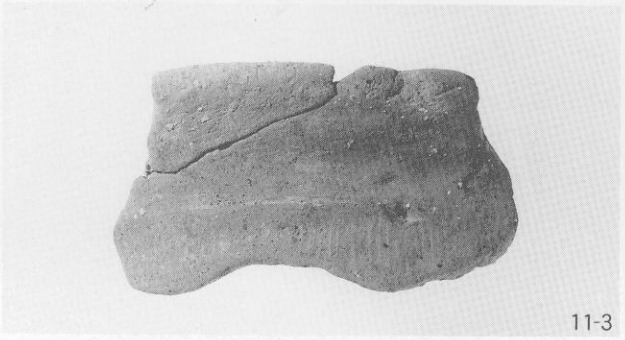
(2) SX4522下層土器出土状況 （南から）



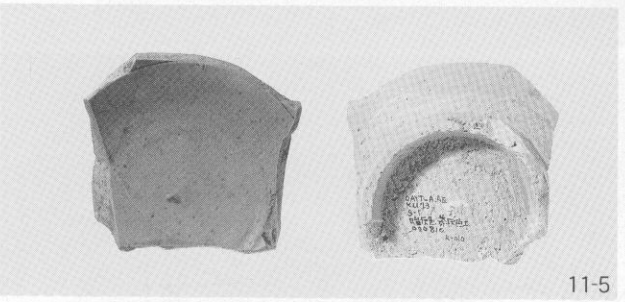
(3) 花崗岩検出状況（東から）

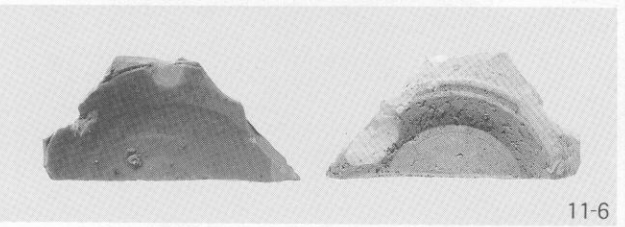

1

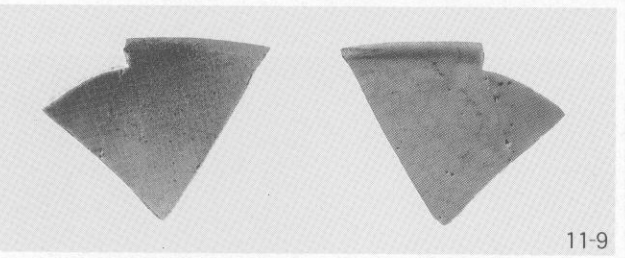
11-2

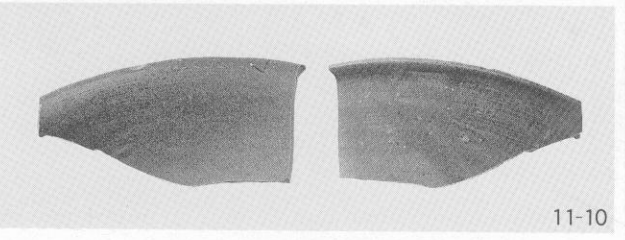

11-3

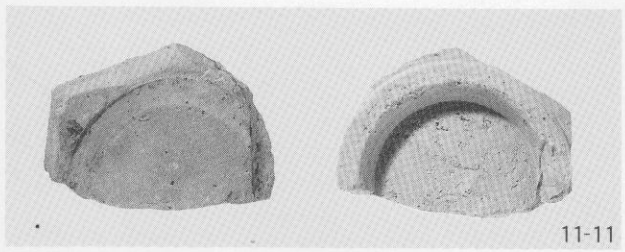

11-4

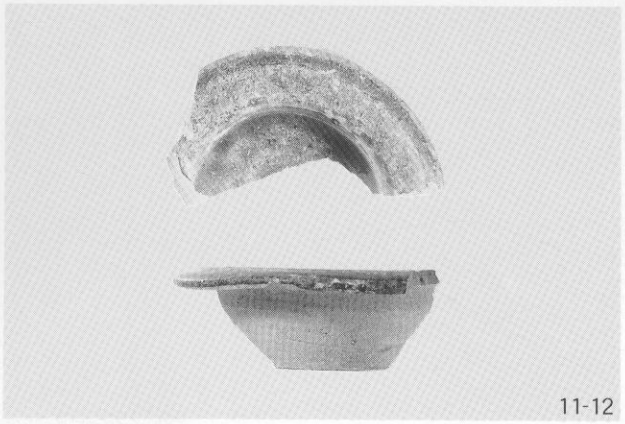

11-5

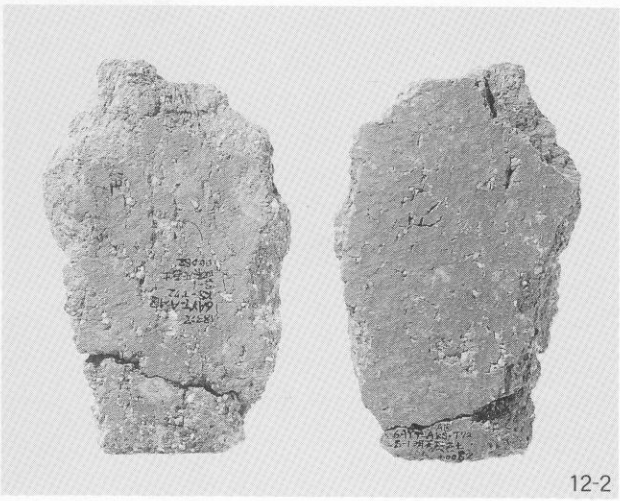

11-6

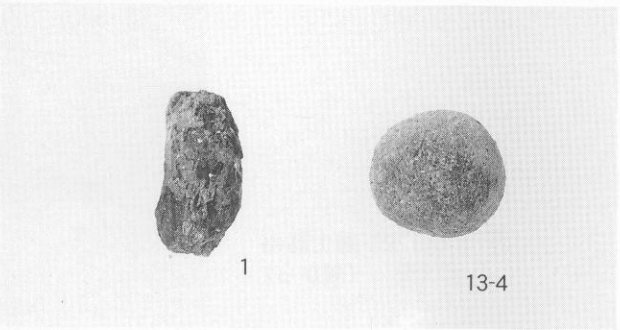

11-9


11-10

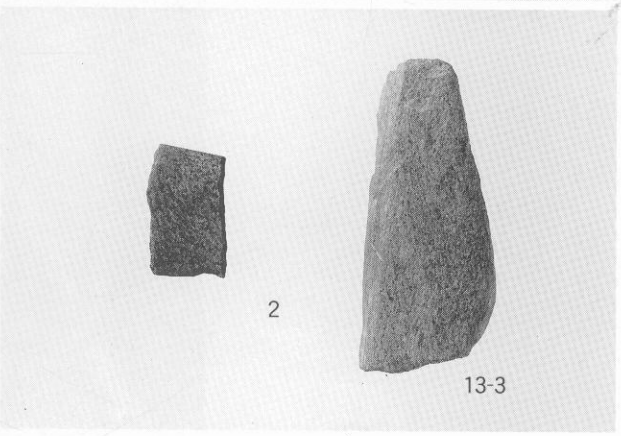

11-11


11-12


12-2

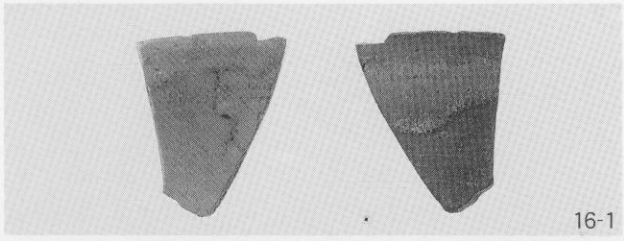

1

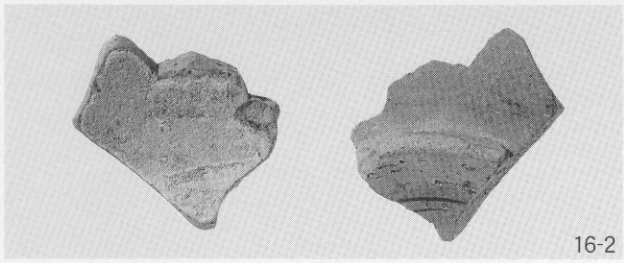
13-4

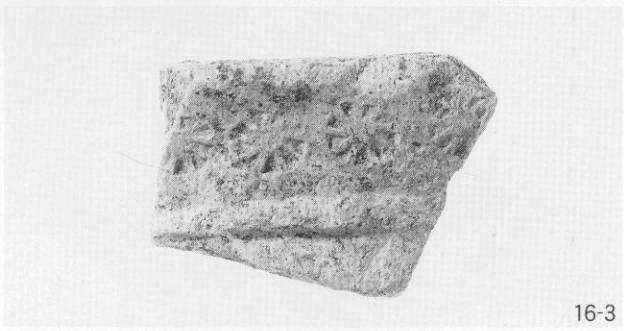

2

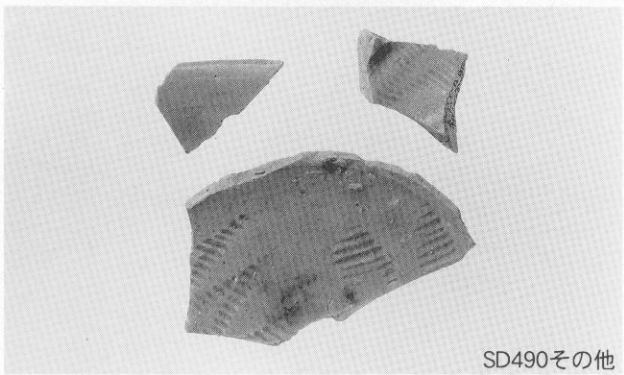
13-3

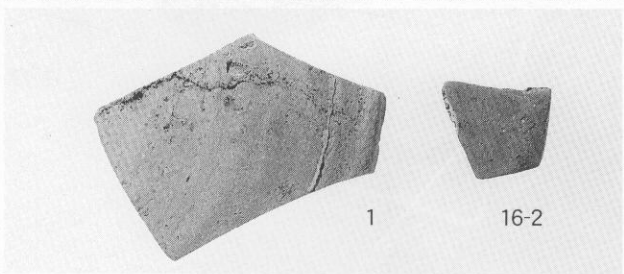
第183次調査A区　出土土器・陶磁器・瓦類・鉄製品・土製品・石製品

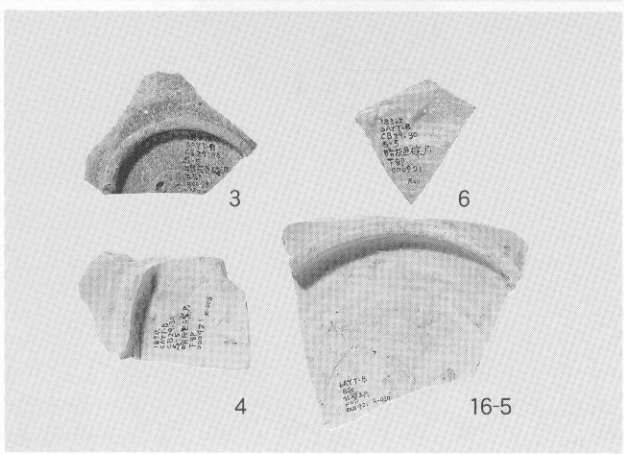

16-1


16-2

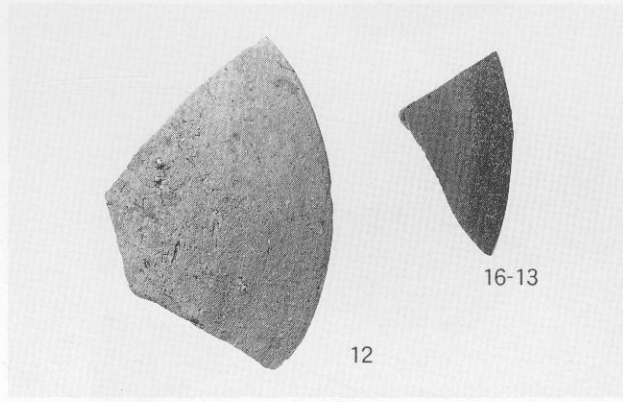

16-3

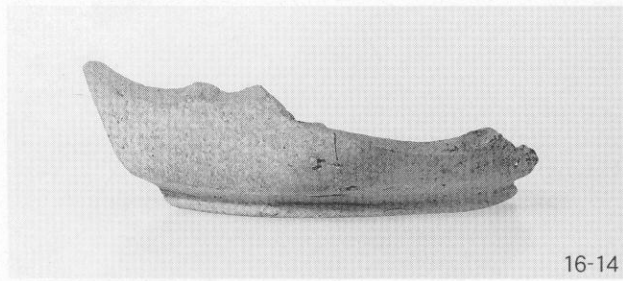

SD490その他

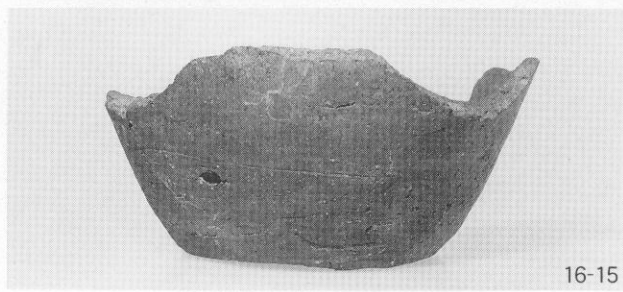

1 16-2


3 6 4 16-5

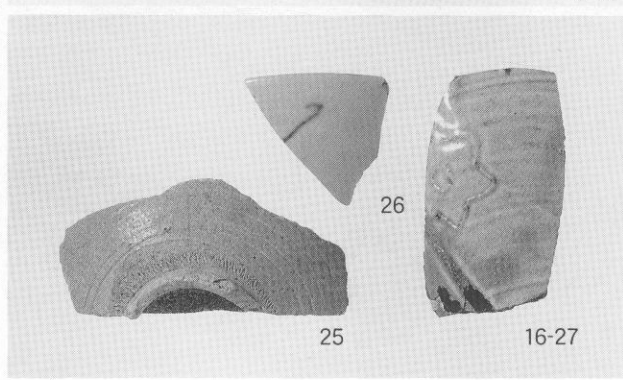

16-11


16-13 12

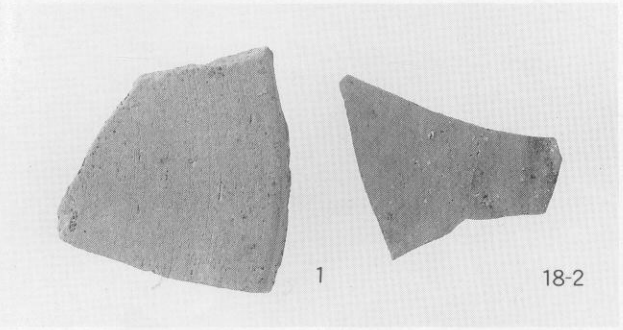

16-14

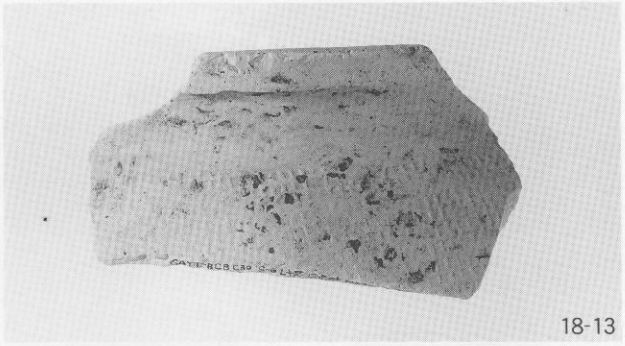

16-15

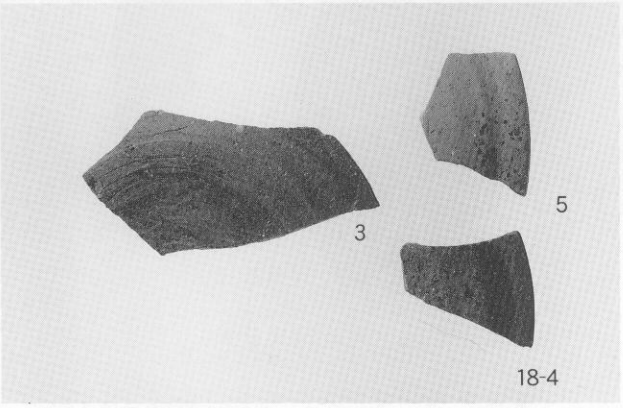

16-16

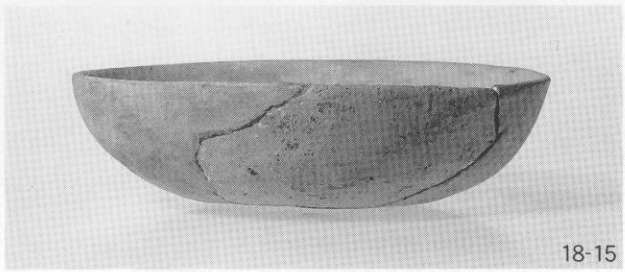

26 25 16-27

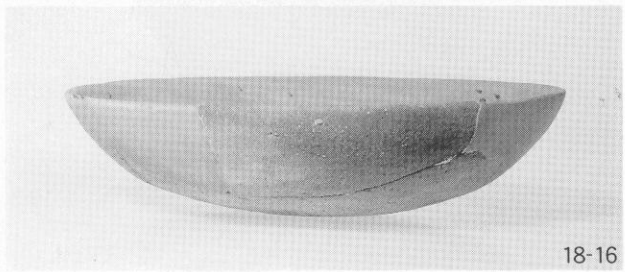
第183次調査B区　SD490・4521出土土器・陶磁器類

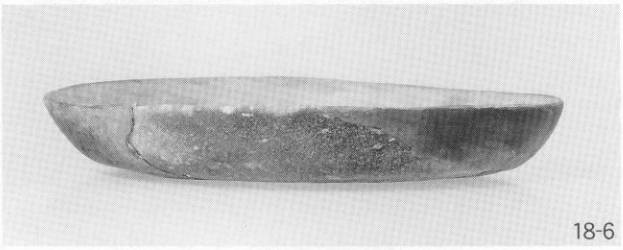


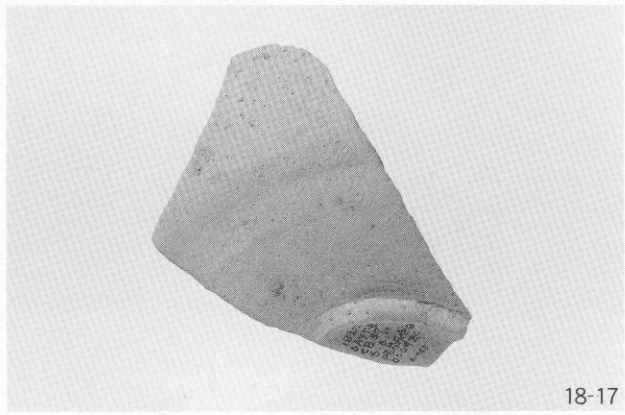


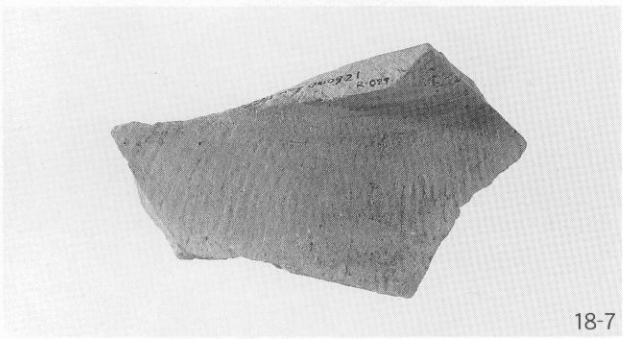


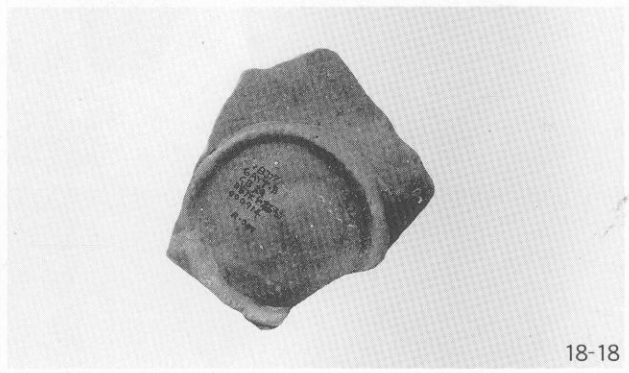




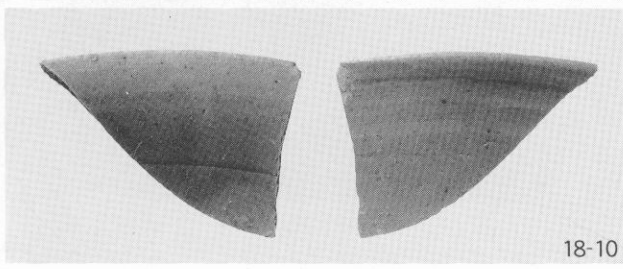


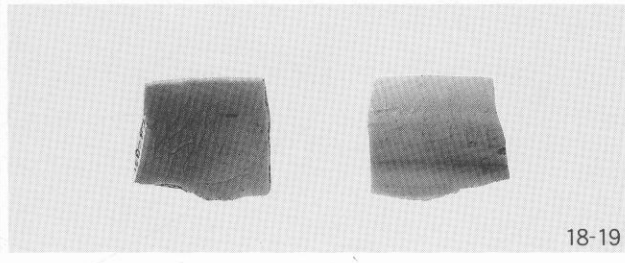




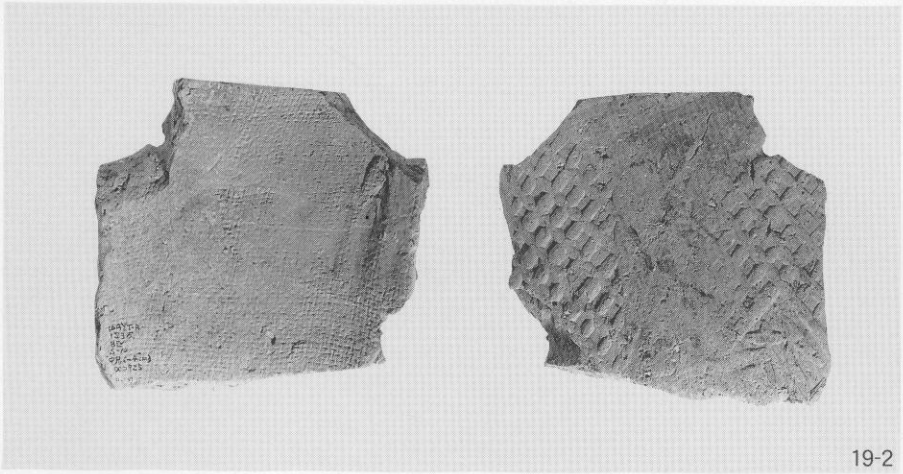


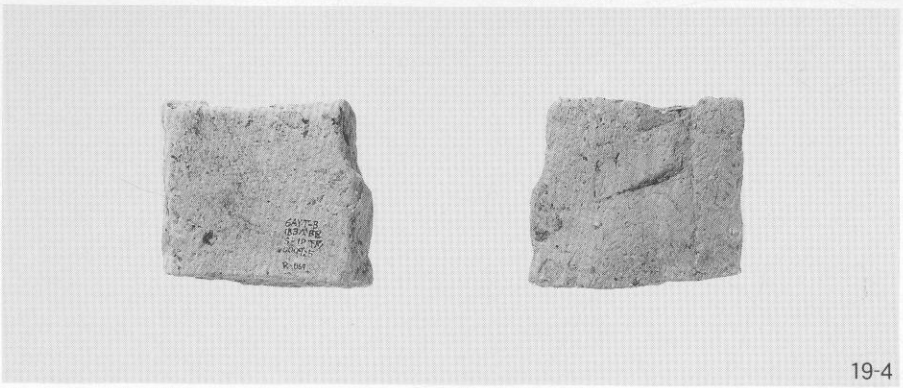




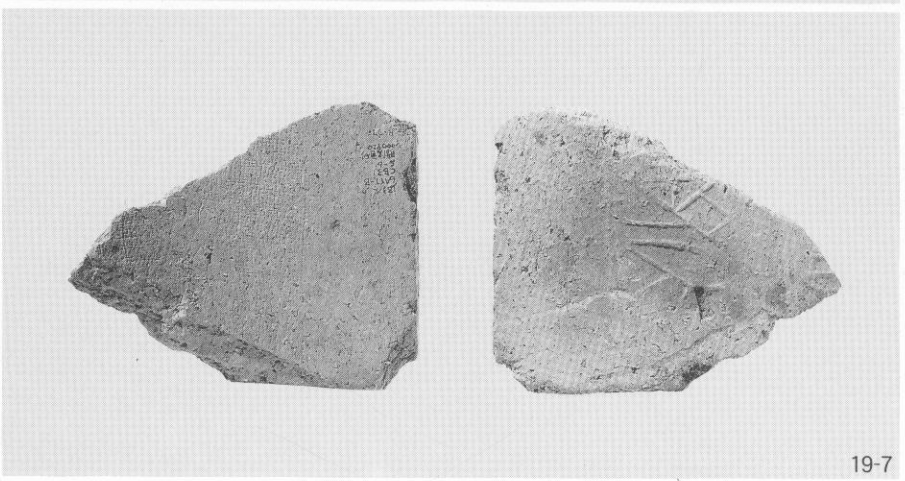


第183次調査B区　SX4522出土土器・陶磁器類

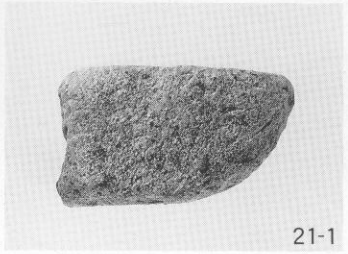

19-2


19-4

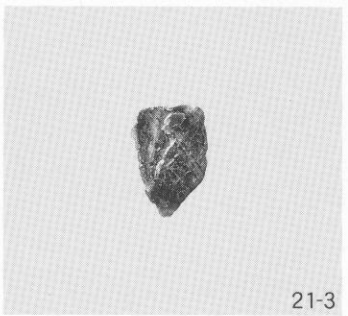

19-5

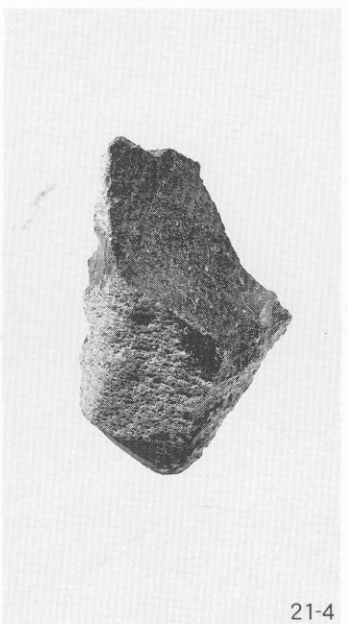

19-7


20-1


21-1


21-2


21-3


21-4

第183次調査B区　瓦類・鞴羽口・石製品・石器

3　第184次調査（安養寺地区の調査）

(1)　概　要

経過　この調査は個人住宅増改築のための現状変更に伴う事前確認調査である。「史跡観世音寺境内および子院跡」内に位置するため，平成12年８月29日に，太宰府市教育委員会と九州歴史資料館の各職員の立会いの下，予定地内の南端に東西方向８ｍ，幅0.6ｍの重機による遺構確認トレンチを入れた。この試掘トレンチの土層観察の詳細は後節にゆずるが，この結果，遺構面が少なくとも３面あり，しかもその最上位の整地層上面が現地表から20㎝の深さしか無いことが確認された。よって，改築範囲での遺構の深さ，拡がりを調べる必要があるとの結論を得たので，８月31日に現地にて発掘調査に向けての協議を整え，同日午後に重機による表土剝ぎを開始した。

伝武藤資頼の墓

調査の目的は，当該地が旧筑紫郡水城村大字観世音寺字安養寺にあたり，武藤資頼の墓と伝えられる五輪塔が近くに残されており，観世音寺の子院関連，あるいは他の中世の遺構の存在が予想されていたにも拘わらず，特にこの字安養寺北端の谷間の地区における調査がかつて為

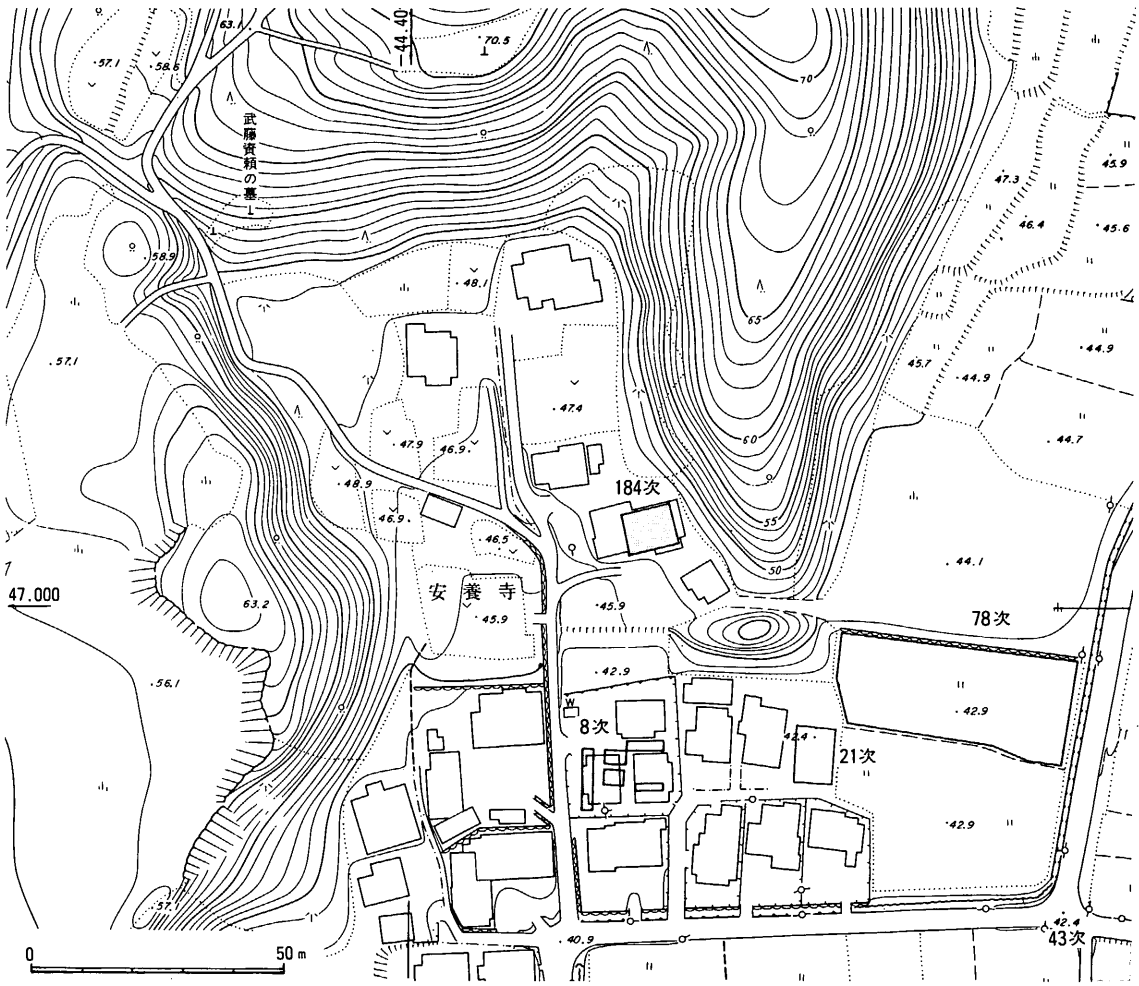


Fig.23　第184次調査区位置図（1/1,500）

されたことが無かったため，これらの確認のためであった。

9月4日から手掘りの調査を開始し，途中雨に見舞われて若干の期間の遅れがあったが，9月18日に全面埋戻しを行い，調査を了えた。調査面積は78.9㎡である。最上部の整地層は現地表下20cmと浅かったが，遺構面保護のための盛土等の遺跡保存協力の意向を受けて，その最上部整地層面までを調査するに止め，各々必要な部位だけに小サブトレンチを設けて下層の確認をする方法をとった。

最上位整地層面までを調査

位置　太宰府市観世音寺四丁目808番の北東四半部にあたる。(以下，Fig.23参照) 四王寺山塊の南麓に派生して伸びる低丘陵の間に挟まれた谷部分に位置する。この谷は，遺跡を取り囲む北・西・東側の各尾根からの花崗岩風化土壌の二次堆積で南半部中央付近が埋まっていると考えられるが，現状では谷奥から緩やかに南方へ向けて傾斜し，標高48～46mで，全体に平坦地の観を呈している。この谷間は，東南方の観世音寺の占地する平地から谷口で急な段をなして3.5m程高くなっており，谷全体の形状は東西約50m，南北（奥行き）約90m程の略方形をなす。南方に開いたコ字状の谷間と言える。更にここの地形を詳細に見ると，谷の平坦地の周縁，つまり北・東・西の尾根の内側斜面に，削り出された幅3～5m程のテラス部分が巡っている。いつの時期の地業であるかは定かでないが，今回調査した部位の北東側のテラス上には，江戸期の僧侶の墓石及び石塔基礎と思われる集石1ケ所が並んで残っている。このテラス全体が墓地等のための造成との見方もできよう。以上のことを勘案するに，この谷間は観世音寺を見下ろす位置でもあり，非常によくまとまった単位空間をなす，いわば，ひとまとまりの小じんまりとした小寺院・屋敷等を営むとすれば絶好の場所であったと考えられる。

削り出されたテラス部分

小じんまりとした単位空間

歴史的環境　近隣の調査例としては，まず南東へ150mの観世音寺講堂跡を中心とする塔跡・僧房跡・北辺ラインなどの各次の調査[1]（第43・45・70・126・163次）がある。観世音寺資財帳とのつき合わせをも含め，多大な成果を収めてきた。また，観世音寺自体が現在まで幾度もの建替を経て星霜を重ねてきたことから，遺構・遺物においても，各時代の変遷が複雑に認められる。今回調査の第184次に関連する時期である鎌倉～近世初頭期についても，観世音寺講堂・僧坊西半・戒壇院北半等において，遺構・遺物が顕著に確認されている。次に，今回調査地点から40m南方では第8次調査[2]が行われ，13世紀中頃前後の遺物と室町後半期の遺構・遺物が発見されている。更に，南東45mの地点では第21次調査[3]が行われており，上層が室町時代，下層では南北溝と礎石建物，完形の青銅製高台付鋺出土等が認められた。同じ字安養寺地区内で，113m南方では第42次調査[4]が行われ，13世紀後半～14世紀前半の土器を出土した井戸や近世までの遺物を含んだ南北溝が検出されている。以上の至近の字安養寺地区内における調査では，鎌倉～室町期の遺構・遺物が主に確認され，これらの時期の遺構が拡がっていると推定されるが，未だ具体的様相を把握するには，はるかに遠い現状である。次に，西隣の字山ノ井の地区に目を転じてみると，今回調査の第184次調査区から東南東へ36mの地点で第78次調査[5]が行われている。ここは上述の第21次調査区の北東隣でもあり，至近の調査区ではあるが，第184次とは尾根を隔てた東隣の大きな谷の入り口に位置する別途の建物群と考えられる。この第78次調査では14世紀中頃の建物3棟とそれ以後の増棟・建替で存続し，16世紀後半までには廃絶していたことが推定されている。また，ここでは「太宰府旧跡全図」（文化3年）に見える「サイフクジ」の記載とからめて観世音寺子院跡の一つである可能性も指摘されている。以上

近隣には鎌倉～室町期の遺構

の他にも，南東60ｍの位置で第68次，第93次調査が行われたが，いずれも住宅改築に伴う確認トレンチ調査で，顕著な遺構・遺物は確認されていない。

以上のように，字安養寺地区においては，今まで幾次かの発掘調査が実施されたが，その多くが住宅改築に伴う小規模確認調査的性格が強かったこともあって，まとまった遺構群の確認には至っていない。ただ，共通して見られることは，各遺跡とも鎌倉～室町～近世初頭期の遺構・遺物が主体をなしており，この一帯が中世を中心とした遺跡であることは確実と考えられる。これは，今回の第184次調査分と極めて密接に関連するものと推定できよう。

一帯が中世の遺跡

1）九州歴史資料館「大宰府史跡　昭和51年度発掘調査概報」 1977
九州歴史資料館「大宰府史跡　昭和52年度発掘調査概報」 1978
九州歴史資料館「大宰府史跡　昭和56年度発掘調査概報」 1982
九州歴史資料館「大宰府史跡　平成３年度発掘調査概報」 1992
九州歴史資料館「大宰府史跡　平成７年度発掘調査概報」 1996
2）福岡県教育委員会「大宰府史跡　昭和45年度発掘調査の概要」 1971
3）九州歴史資料館「大宰府史跡　昭和47年度発掘調査略報」 1973
4）九州歴史資料館「大宰府史跡　昭和51年度発掘調査概報」 1977
5）九州歴史資料館「大宰府史跡　昭和57年度発掘調査概報」 1983

(2)　基本層序

近・現代の層（Fig.24・27　発掘区西壁土層図）

発掘調査直前まで個人住宅が建っており，その取り壊しの為の撹乱及び整地をも含めた住宅の整地層までが最も新しい層である。次に，現地権者の記憶にある，恐らく明治期に建てられたと言われる住宅の土間のたたき面を明瞭に残す黄褐色土整地層（Fig.27 第４層）がその下にみられる。このたたき面には火を焚いて硬化した部分が３ケ

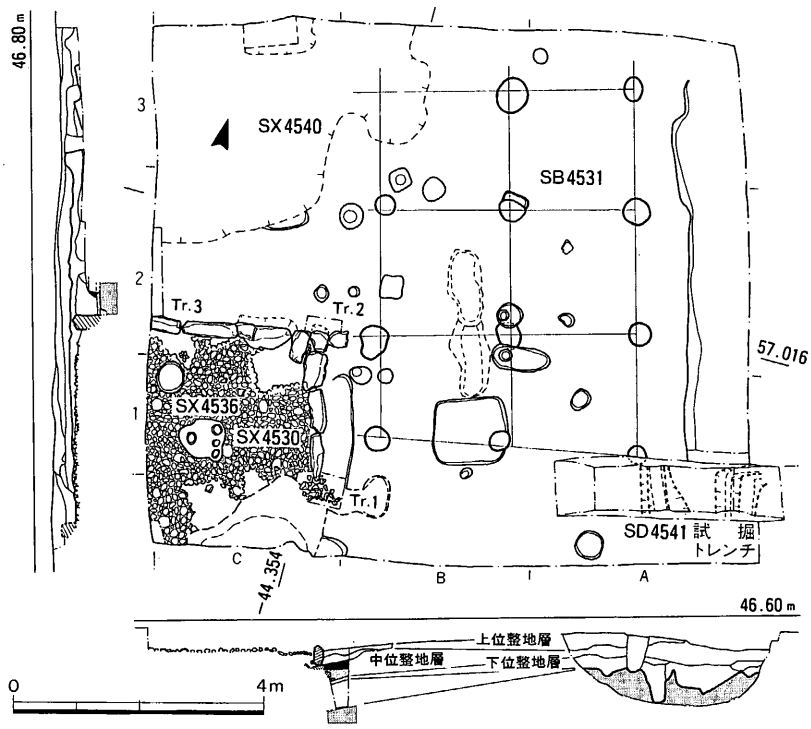


Fig.24　第184次調査遺構配置図（1/120）

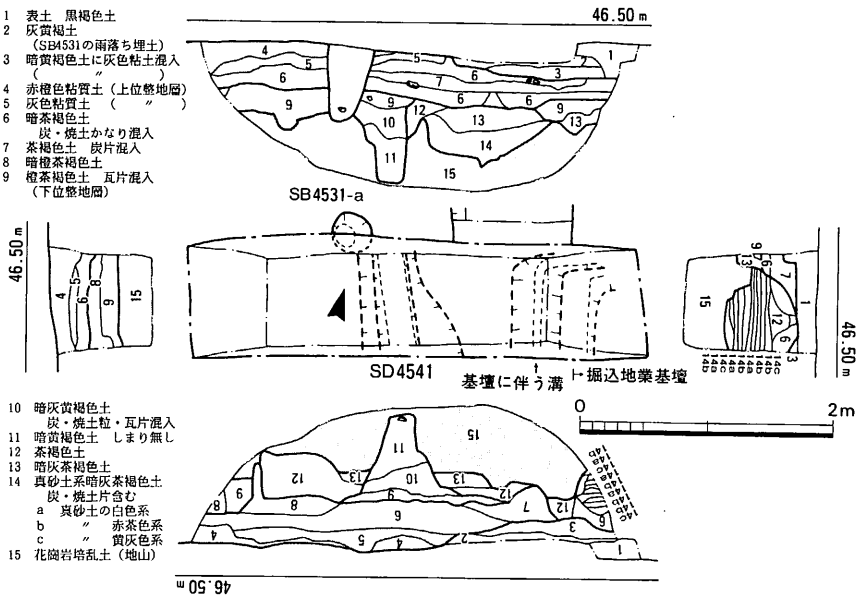


Fig.25　試掘トレンチ土層実測図（1/60）

所程認められた。また，発掘区北辺沿いの西寄りには，前・前々住宅の台所等の水気の多い撹乱部がみられ，SX4540（寛永通寶を含む落ち込み）を切っている。これらの下には暗褐色土，更に茶褐色土が

SX4540を覆う層

発掘区西半部に広く堆積していて，自然石基壇化粧構造物であるSX4530や最上位の整地層（第7層）を覆っている。これらの第5・6層は北西隅のSX4540の落ち込みへと連続するもので，出土遺物から見て，17世紀末を上限として明治期までの間の層と考えられる。以下の上位整地層から中・下位の整地層を含んだ下層遺構については，深掘りした試掘トレンチのみで確認したので，以下に記す。

試掘トレンチ（Fig.25，PL.13）

発掘区南東隅に重機による深掘り部があり，その壁の観察により，下層部の予測を得る作業

上位整地層

を行った。まず，目に鮮やかな赤橙色粘質土が上面に被り，叩き締められてその下の灰色粘質土とともに上位の整地層を形成している。この整地層はSX4530以東の略全面に拡がっていて，SB4531はこの層上面から掘り込まれているため，SB4531造営に伴う整地層と考えられる。このトレンチ東半部最上部では，この上位整地層が切られて，浅い段落ちが南北に伸びるが，これはSB4531の雨落部にあたると考えられる。この上位整地層の下には厚さ20～30cmの暗色系包含層が形成されるが，これには炭・焼土粒・瓦片等が多く含まれ，生活遺構に伴った，または

中位整地層

SX4530焼失後に堆積した可能性も考えられる。次に，今回調査分で中位整地層と判断した灰色粘質土層は，この試掘トレンチ内では検出されず，SX4530の基壇際の各サブトレンチで確認し

下位整地層

たものである。更に，下位整地層（第9層）は橙茶褐色土の瓦片等を混入したものである。この層は西側のSX4530 Tr.1ではSX4530の基礎礫群の下にもぐり込んでおり，SX4530よりも古い整地層であることが判る。また，この下位整地層で埋め込まれたSD4541は試掘トレンチの南北両壁にて確認されており，狭くて深い溝状の遺構となろう。地山は花崗岩風化土のやや軟質のものであるが，これに直接掘り込まれた遺構（第12～14層）も認められ，SD4541以前により古い遺構が存在していたことが判るが，その時期は現段階では見当がつかない。なお，試掘トレンチ東端付近において，層位的には下位整地層と同段階かと推定できる積み土基壇状の構造物

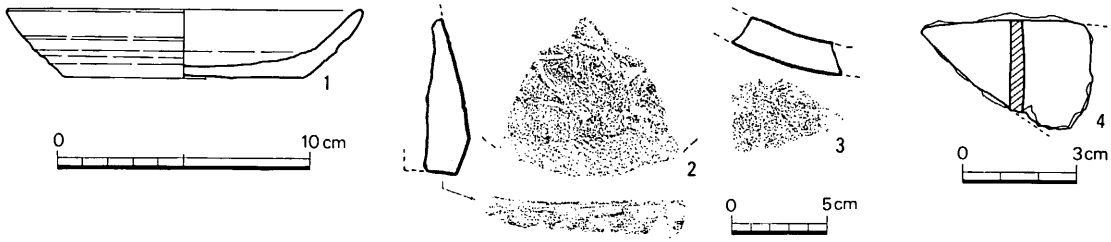


Fig.26　試掘トレンチ出土遺物実測図（土器1/3，瓦1/4，鉄器1/2）

が認められた。これは，深さ20cm強の掘り込みの中に厚さ3～6cmの版築状水平層が厚さ40cm程認められ，更にその上に粗い積土を施し，その結果下位整地層面から30cm弱の高さを持つ基壇状としたものである。この裾廻りには幅30～25cm，深さ15cm程の浅い溝を巡らすようである。ただ，これを掘込地業を伴う基壇とするには，版築状とした互層があまり締まりが無く，若干の疑問も残るので，ここでは遺構番号を強いて付すことをひかえ，今後の調査に俟つことにしたい。

以上の試掘トレンチ精査の結果，明確な整地層が上下2枚（発掘区全体としては3枚），遺構面としては各整地層上面を含めて少なくとも4面が確認された。

全体で遺構面が4面

出土遺物（Fig.26，PL14・16）

土師器杯（1）試掘トレンチ南壁最下部のSD4541底面出土品で，出土時は完形であったので，この遺構の時期に関わるものと考えてよかろう。底外面は回転糸切り離し。内底面はナデツケで口径14cm，器高2.7cm，底径9.4cm。

軒丸瓦（2）トレンチ壁崩壊土中出土品で層位は不明。瓦当下半の背面側のみの破片で，瓦当面との接合面できれいに剝げている。この剝げ面は指押さえ痕で凹凸が著しい。背面の縁に沿った幅2cmの間は平坦面をなし，一部に糸切痕が残る。その内側は雑な削り込みが施される。外周側面は雑なヘラ切りの後，回転方向のナデ仕上げ。瓦当面径は19cm前後となりそうで，焼成良好で黒色燻し。砂粒をかなり含む。

平瓦（3）試掘トレンチ北壁の下位整地層出土品で，凸面に粗大な斜格子文，凹面は磨滅するが糸切痕が残る。間隔が空いた縦長平行叩きの類で，粗・細砂粒を多く含み，凸面は黒色，凹面は灰色をなす。

鉄器（4）試掘トレンチ北壁の第6層（上位整地層の直下）出土品で，厚さ3mmの鉄板状製品。鋭角となった2辺は本来のものと思われるが，刃部は認められない。用途不明。

(3)　遺構と遺物

SX4530（Fig.27，PL.11・12，巻頭図版）

発掘区南西隅にて検出した，花崗岩の扁平な自然石を立て並べて基壇化粧とした構造物である。建物基壇とは思われるが，内側に敷石を施す等若干の疑問点もあり，明確な礎石配置もつかめないことから，今回は取り敢えずSXの番号を付しておく。東辺を基準にすると，N10°30′Wに南北軸をとり，SB4531とは少し主軸方位が異なる。

基壇北辺は2.9m以上，東辺は3.6m以上となり，北東隅とその西隣の石だけ柱状となるように縦長に立てるが，他はすべて厚さ36～22cm，長さ92～64cm，高さ50cm以上の板状石を横長に

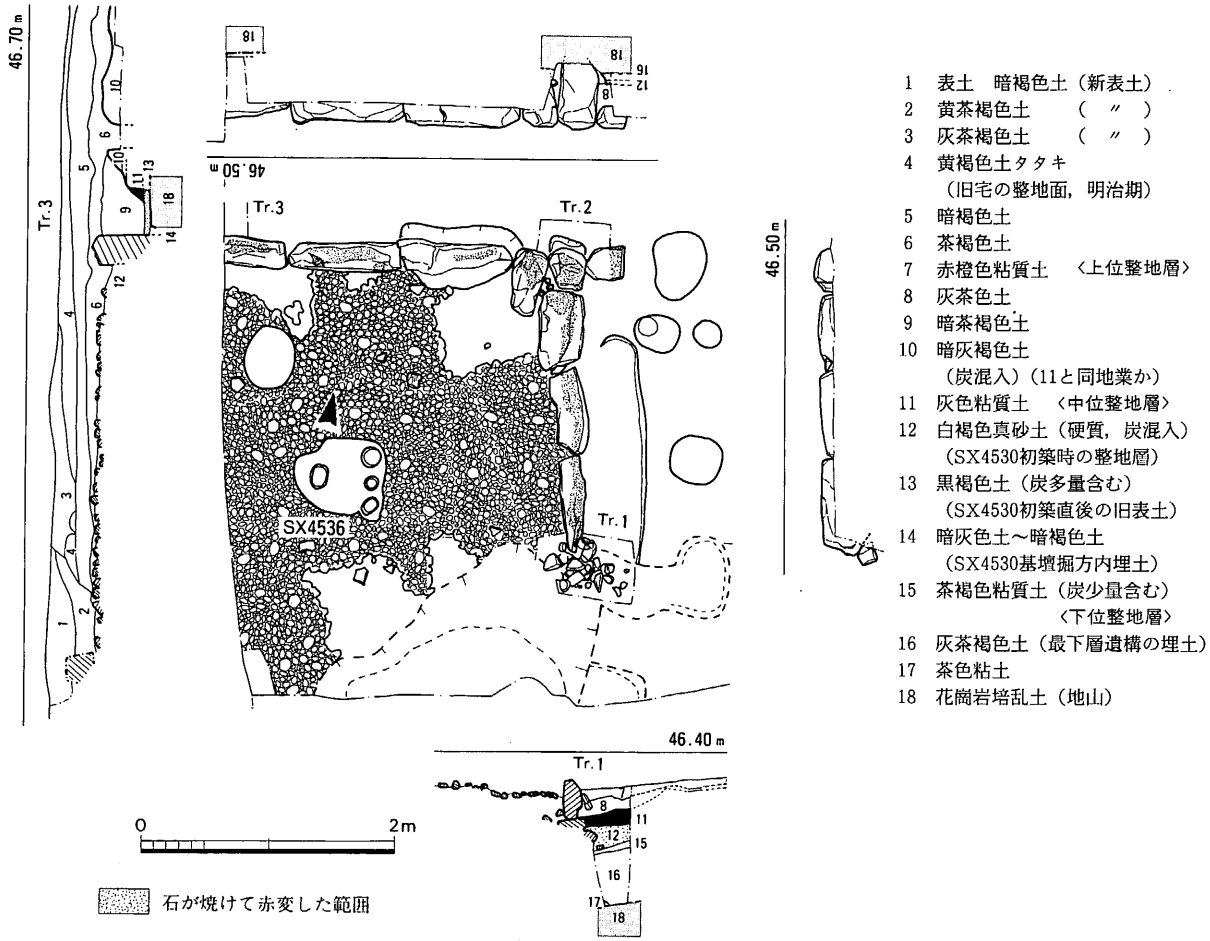


Fig.27　SX4530実測図（1/60）

全ての石上面が強い火熱

据えている。石の上面はほぼ水平に揃えられており，殆ど全ての石の最頂部縁辺が強い火熱を受けて赤変している。東辺南側は新しい撹乱により石が抜かれており，まだ南方へ続いていたものと推定される。北東隅立石の東側に接して1個の塊石が据えられていたが，Tr.2の掘り下げで確認した結果，上面は揃っているが，浮いた石であり，当初のものでは無いことが判った。ただ，この石の上面も焼けている事から，SX4530焼失以前の最終段階で据えられていたものと考えられる。また，北辺の西端から3番目の石のみに外側に上層からの掘り込みが認められ，石の据え直しが施された痕跡と判断される。

基礎に小礫を詰め込む

これらの基壇化粧石の本来の高さと，その外側の土層との関係はTr.1～3で確認した。Tr.1では下位整地層の上部に白褐色の真砂土を叩き締めて初築時の整地層とし，立石の基礎にあたる付近に礫を多く詰め込んでいる。このトレンチにかかる立石の南端下部には径12cm，長さ22cm程の長めの石を立石下辺の浮いた部分を補強するようにかませている。立石の下半部には東方からの中位整地層（第11層灰色粘質土）が拡がってきており，ここでは第12層の上面がこのSX4530の基壇外側の初築時の面であったと判断される。Tr.2では地山が浅く，北東隅の柱状の立石は初築時の整地層が薄くて地山まで掘り込んで据えられている。そのため，Tr.1で見られたような礫による基礎固めは施されていない。

地山に直接掘り込む

地山面は西方に向かって緩やかに傾斜しており，Tr.3では初築時の整地層が見られず，地山に直接掘り込まれて据えられており，地山直上に初

築後の旧表土が薄く形成され，立石外側に接している。この旧表土が立石掘方の上を覆っていることから，その上にのる第11層の中位整地層は，明らかに初築時以後のものであることが判る。以上のことから，これらの基壇化粧の立石は，地覆石を持たずに，直接に初築整地層または地山に埋め込まれており，その初築時の高さは40～48cmあったことが判った。また，すべての石の上面が焼けていることから，少なくとも焼失時には，これらの上に更に石を積むという構造のものではなかったと言えよう。

基壇の上面には，ほぼ全面に小礫が密に敷き込まれており，通常の基壇建物とは様相が異なる。これらの敷石は3/4が花崗岩の河原石，他は砂岩・石英・礫岩が少量ずつ含まれる。この基壇内の断ち割りを行っていないので正確ではないが，南側の大きな新しい撹乱壙の壁面で見ると，小礫群は最上面だけでなく，中位から下位にかけても，最上面のもの程密ではないが，かなり敷き込まれているようであった。なおこの基壇内の積土は，白褐色の真砂土が主で，かなり締まってはいるが，版築状ではなかった。

小礫を密に敷き込む

基壇最上面の小礫群中に，礫の抜けた部分が数カ所見られる。北東隅・北西隅・南側撹乱壙周縁部は，小礫だけが除去された状況だが，中央のSX4536とした穴は浅いながらも掘り込まれた遺構である。これは上面径74×62cmで，深さ10cm前後となり，基壇全体との位置関係から想定すると，基壇北東隅の礎石の抜き跡と考えられなくもない。即断は避けるが，可能性の一つとして残しておこう。なお，礫群中には，小礫と一緒に踏み込まれた状態で，瓦片・土器片が少なからず出土した。

敷石面出土遺物（Fig.28－1～13，PL.14～16）

土師質土器（1）先端が尖り気味の凸帯を付け，外面に斜位のヘラ端痕が見られ，顎釜の一種かと思われるが，作りがやや粗い。凸帯下部には煤がこびりつく。30cm前後の大口径のものとなり，砂粒をかなり含む。

須恵質土器（2・3）2は底径7.2cmの鉢で，外面下半は回転ヘラケズリの上を横位ナデ，他は内外面回転ナデ。細砂粒を多く含み，焼成やや甘い。3は底径12cmの瓶で，底外面には1cmに7～8本間隔のハケ状調整痕が顕著で，胴部外面下半は回転方向のヘラケズリの上をナデている。底内面は回転方向の強い指頭ナデ。焼成堅緻で，粗石英粒を僅かに含む。

瓦質土器（4）17弁菊花文を横に連続押圧施文したもので，復原口径14cmの小型類。胎土に粗砂粒を僅かに含み，焼きは瓦質としてもやや軟質である。

菊花文スタンプ

軒平瓦（5）瓦当面中央部分だけ残存するもので，左行する偏行唐草文と考えられ，「大宰府出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧」の第580類になる可能性が高い。粗・細砂粒を多く含み，焼成不良で淡褐色をなす。全体に磨滅著しい。

丸瓦（6・7）6は凸面に大きめの細線斜格子の叩き，下端付近は横位ナデ仕上げ。凹面下半は横方向のヘラケズリで斜めに削ぎ落とした後，凹面全体を縦ナデする。下端小口面は円周方向へヘラケズリする。焼成須恵質で粗石英粒を多く含む。7は凸面に大きく深い斜格子の縦長平行叩きを施すが，これらの格子の中に更に十字や×字，一部が木葉状文的になる叩具を用いている。長側端面は内側から半分だけ瓦刀を入れ，割り離している。凹面は密な布目を全面に残す。焼成須恵質で，胎土に粗砂粒を僅かに含むのみ。

凹型一枚作り平瓦

平瓦（8～12）8は全面無文の凹型一枚作りで，凸面は細砂粒が多くみられザラつくのが特

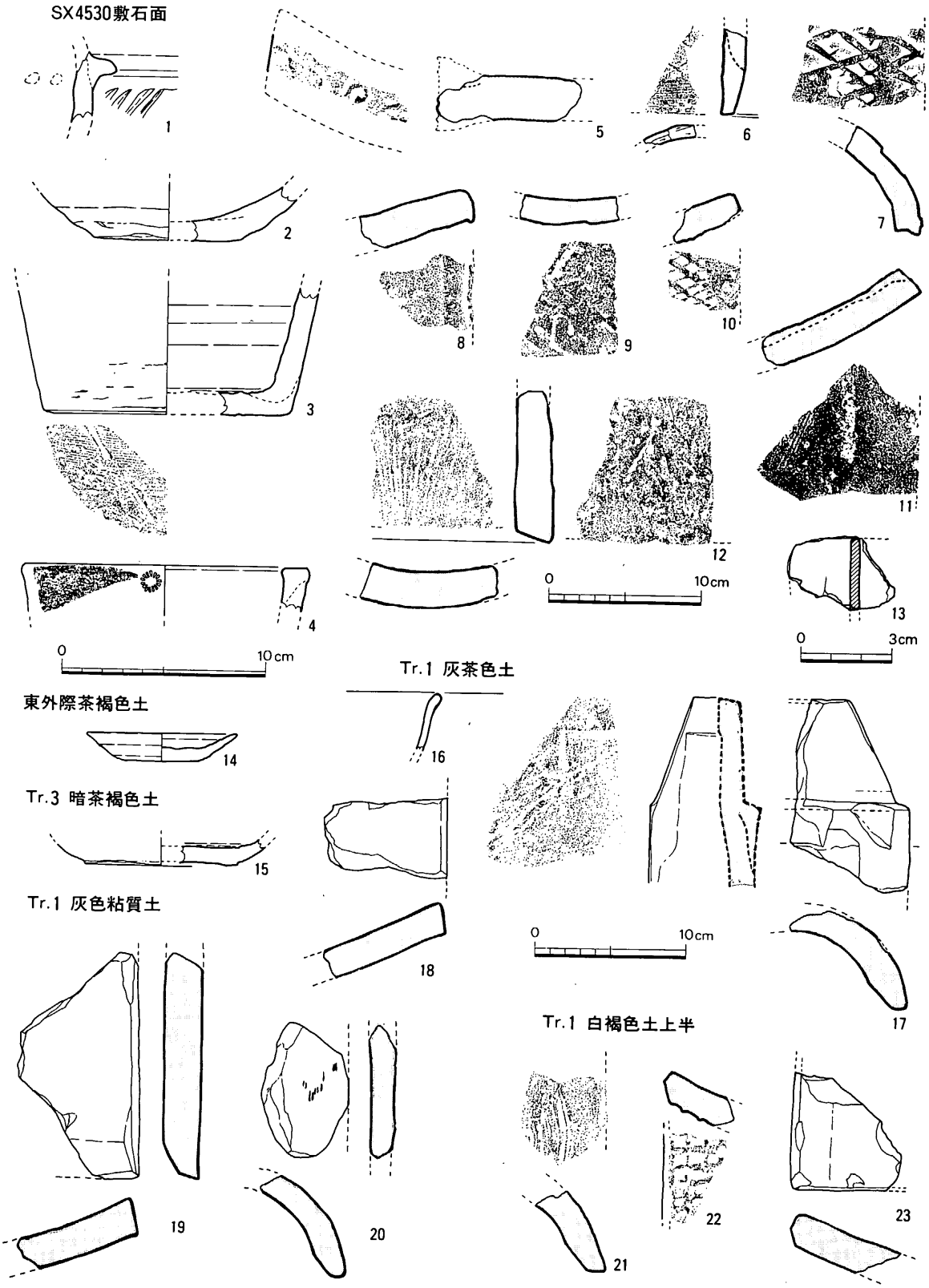


Fig.28　SX4530出土遺物実測図（土器1/3，瓦1/4，鉄器1/2）

徴。離れ砂使用か。凹面は縦方向の水引き(ナデ)仕上げだが，長側辺から1.5cm幅の間から長側面にかけては光沢のある丁寧な縦方向ナデ仕上げで角が丸くなる。それに対して凸面側の角には粘土はみ出しがそのまま残される。焼成軟質で灰白色をなす。9は狭辺に近い部位で，凸

面に大きな斜格子を施し，凹面上半は縦位削り，下半は布目を僅かに残す。粗・細砂粒を幾らか含み，焼成軟質で白灰色をなす。10は凸面に小さい斜格子叩き，長側面はヘラ切りのまま，凹面は磨滅する。粗石英粒を僅かに含み，焼成軟質で白色をなす。11は粘土板巻きつけによる桶巻き類か。凹面には布目が見えず，凹凸両面ともに縦位の削り状（糸切りか）の上を縦方向にナデている。長側面は内側から半分だけ瓦刀を入れ，割り離している。粗・細砂粒を多く含み，焼成は須恵質に近い。12は凸面が太めの縄目を磨り消し，凹面は縦位の櫛目状の粗い条痕を残す。糸切り痕との意見もある。下端面は斜めにヘラ切りする。粗砂粒をいくらか含み，焼成不良。

鉄器（13）厚さ3㎜の鉄板状で，刃部は見られない。現存長37㎜，幅24㎜で，用途不明。

以上の他に図示はしないが，龍泉窯系青磁椀口縁小片が出土している。灰色がかった水色釉で外面は発色しておらず，14世紀代。

以上のSX4530敷石中出土遺物は，5の軒平瓦が10世紀中葉を前後する時期で，6・7・10なども平安後半以前のもので，今回調査区の遺構の時期を示すものではない。1～4・8・11・12が室町期のもので，この基壇の最終段階を示すものを含むと考えられる。

東外際茶褐色土出土遺物（Fig.28）

土師器皿b（14）基壇の東辺に沿った外側に幅50cm程の浅い落ちがみられ，その中から出土したものである。上位整地層の上にかぶる土で，SX4530に対しては廃絶後の埋土となり，SX4530の下限を示すものとして取り上げた。糸切り底で，口径7.4cm，器高1.4cm，底径3.5cmとなり，底径が小さい特徴を示す。法量から見て15世紀後半以降と考えられる。

底径が小さい土師器

Tr.3 暗褐色土出土遺物（Fig.28）

土師器杯a（15）SX4530の北西端で，基壇側石の外側を何らかの理由で埋没途中で掘り込んだ土から出土したもので，この土は中位整地層を切っている。その意味で廃絶直前以前の遺物と言える。底径7.4cmに復原できる糸切り底で，14世紀代かと思われるが小片で詳細不明。

Tr.1 灰茶色土出土遺物（Fig.28－16～18，PL.14～16）

青磁椀（16）口縁端部が端反り気味に外反し，小さな玉縁的になる類で，丸く深めの体部となる。胎土は密で灰白色，内外面に灰緑色釉をかける。14世紀代の龍泉窯系。

丸瓦（17）玉縁部側縁を斜めに切り落して，上面観で上端が細くなるようにした類。凸面は磨滅するが，凹面は布目を残す。上端付近で明瞭な段が付き，筒型の段或いは端部を示すものか。側辺の凹面側の稜から内側へ1.5cm程が削り込まれている。更に玉縁部凸面側の側辺も面取りされている。粗・細砂粒を多く含み，焼成やや不良で淡灰色をなす。

玉縁部側縁も切り落し

平瓦（18）凹型一枚作りの両面無文類で，凹面は丁寧なナデ，凸面もナデかと思われる。側面は凹面側の稜が丸く，凸面側の稜はシャープで部分的に突出気味となる。凹凸面ともにザラつくのが特徴。細砂多く含み，燻し焼きだがやや軟質。

以上の他に，中国製天目椀の体部細片（PL.14－C）が出土している。黒茶色ガラス釉が内外にかかる。胎土は乳灰色。

以上の出土した層は，上位整地層直下で，基壇外側の埋没期を示す。上記した遺物はいずれも室町期以降のものだが詳細には決定し得ない。

Tr.1 灰色粘質土出土遺物（Fig.28－19・20，PL.15・16）

丸瓦（20）凸面は縄目叩きをナデ消し，凹面は布目を残す。凹面側縁は削り込まれ，凸面側の側辺稜は丁寧なナデで丸く仕上げられる。凹面には横位の紐状圧痕が3.7cm間隔で２条分見られる。粗砂粒をやや多めに含み，焼成やや軟質の燻し瓦。

平瓦（19）両面とも縦ナデかと思われる無文の凹型一枚作り品。凸面側の側辺稜部は粘土突出気味で，凹面の広辺沿いを斜めに削り落とした上をナデている。凹凸両面ともに細砂粒が多

離れ砂使用

くザラつく。離れ砂使用か。

以上を出した層は中位整地層で，この基壇北側にも認められる。初築以後の層ではあるが，土質や上面レベルから見て，廃絶した後の埋没土ではなく，再建，或いは周辺の他の建物のための整地層と考えられる。上記瓦類は層位的に上の灰茶色土出土瓦（17・18）より古いとは言えず，やはり室町期以降の所産。

Tr.1白褐色土上半出土遺物（Fig.28－21～23，PL.15・16）

丸瓦（21）凸面は縄目の上を雑な縦方向ナデ。凹面は細かい布目で，1.4cm間隔で２条の布

布かがり紐の圧痕

かがり紐の圧痕がみられる。凹面の側辺沿いは2.2cm程削り込まれる。粗砂幾らか含み，焼成軟質で淡灰～白色をなす。

平瓦（22・23）22は凸面に深い格子目，凹面の調整は磨滅して不明。側辺凸面側を面取りしている。砂粒を多く含み，焼成やや軟質で暗灰色をなす。23は両面無文の凹型一枚作り品で，凹面は縦ナデ，側辺の凹面側の稜は丸みを持つ。凹凸両面ともに細砂粒が多く付着する。胎土には粗砂を少量含み，黒色に燻している。

以上の瓦片を出した白褐色土は，硬く突き固められたSX4530初築時の整地層と考えられるが，出土品はこれより上の層のものと比べて，古いものの混入品とされる22を除いては，現状ではより古い時期のものとは判断し難い。やはり室町期の範囲内の整地層と考えざるを得ないだろう。

SB4531（Fig.29，PL.11）

調査区の東半にて検出した２×３間の掘立柱建物で，北及び西方へはまだ延びる可能性もある。南側へは東辺延長上を一部精査したが，延びないことを確認した。南北軸をN16°Wにとり，現状で東西4.085m，南北5.901mの全体規模となる。柱間は１尺＝30.26cmとして南北各柱間が6.5尺等間，東西は東側が6.5尺，西側が７尺に復原できる。南辺の西側の２柱穴(b・c)は北寄りにずれる。柱穴は径50～30cmの円形で，深さはａだけで確認したが，62cmもあり深くしっかりしている。柱痕は検出できなかった。北西端の柱穴はSX4540とした江戸期の落ちに切られて不明。

赤橙色の上位整地層

この建物建築のために，赤橙色の粘質の強い，目にも鮮やかな整地(上位整地層)が行われている。この整地層は東側で柱筋から60cm程離れて途切れて，雨落ち状に南北に沿って段落ちをなしている。更に西側では基壇に接し，西北半では西列柱筋付近で無くなる。南側は発掘区外側まで拡がりそうで，南側にも同期遺構が存在するのかもしれない。

上位整地層出土遺物（Fig.30，PL.15・16）

摺鉢（１）復原底径11.2cmのやや軟質の須恵質品で，内面は使用磨耗でつるつるして，縦位

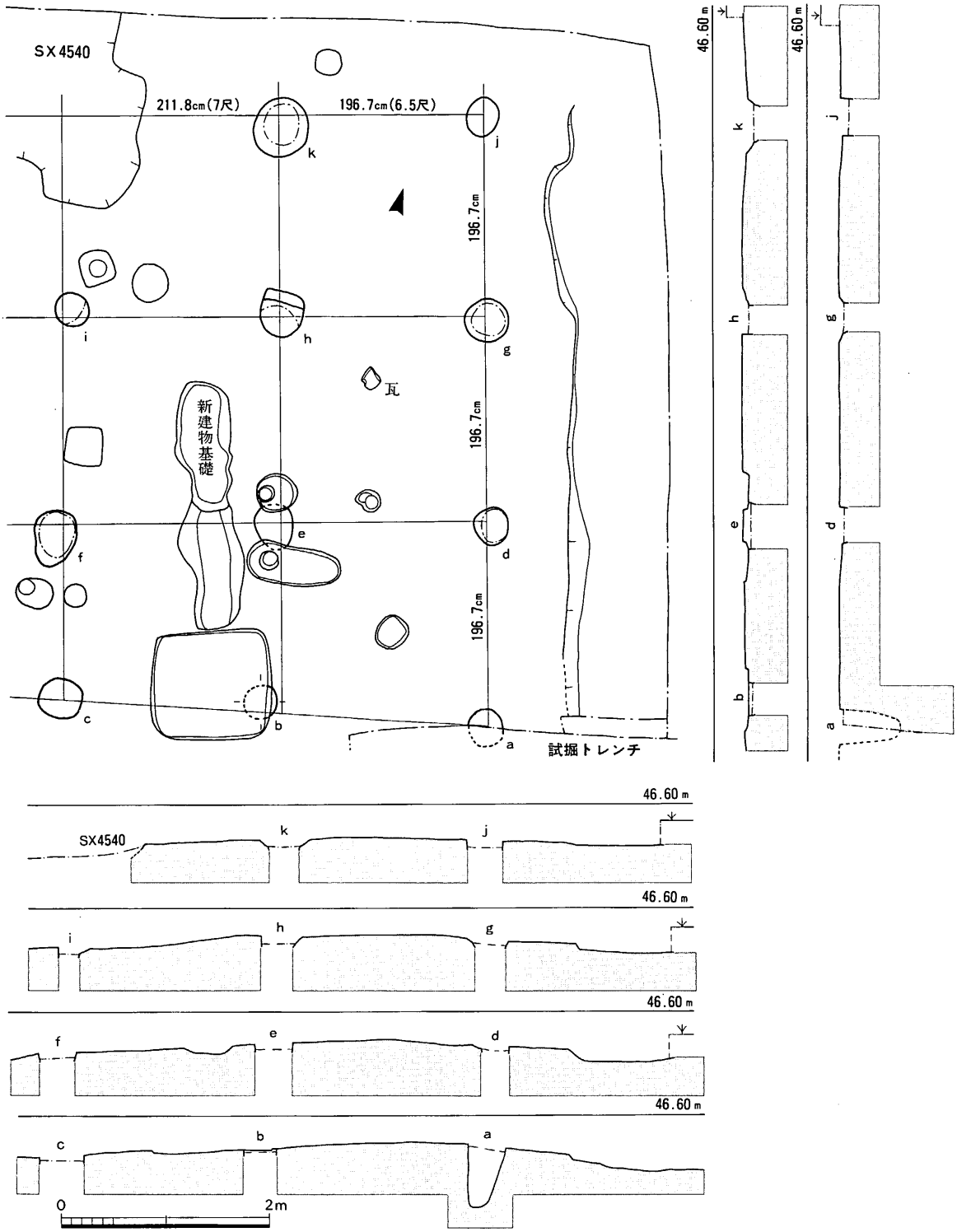


Fig.29　SB4531実測図（1/60）

の筋目も下端部にしか残っていない。外面は雑な横位ヘラ削り。粗砂多く含む。

平瓦（２～５）２は両面無文の凹型一枚作り品。凹面は縦ナデ，凸面には細砂が多く付着し，離れ砂使用と思われる。側辺凹面側の稜は丁寧なナデで丸く仕上げられ，凸面側稜は粘土はみ出しが明瞭。３は凸面に粗大な斜格子，凹面は布目と糸切り痕がみられ，粘土板桶巻作り時の接合部が観察される。凹面の側辺沿いはヘラ削りされる。粗砂少量含み焼成軟質。４は凸面に

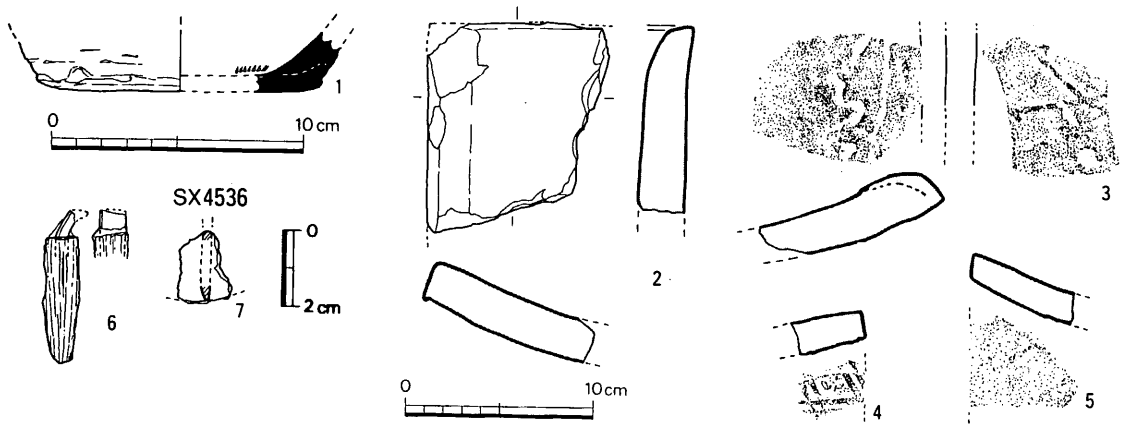


Fig.30　上位整地層・その他の遺構出土遺物実測図（土器1/3，瓦1/4，鉄器1/2）

複線斜格子，凹面は細かい布目で，側辺沿いと端面はヘラ切り。焼成須恵質。5は凸面に大きな斜格子，凹面は側辺沿い2cm幅部分がナデ。砂粒をかなり含み，焼成軟質。

鉄釘（6）断面が7×3mmの扁平な頭部を持つ。現存長4.2cmで下端は木質に覆われて釘部分の長さは判らないが，短い角釘となろう。

SX5430の上限を示す

以上の上位整地層出土品は，SB4531の上限年代を示す性格のものだが，3～5の平安期の混入品の他は，室町期以降とされる。2の瓦は今回報告する中でも最新の一群に含まれ，更にこの建物がSX4540に切られることから，SB4531の時期は元禄10年(1697)以前で15世紀後半までの間が与えられる。

SX4536出土遺物（Fig.30，PL.16）

鉄器（7）錆がひどい小片で，下辺が片刃になるかもしれない。刃物の種類は確定できない。この遺構はSX4530の礫敷面にて検出した浅い穴で，既述したので詳細は省く。

SX4540出土遺物（Fig.31，PL.14～16）

以下のうち，16・17・19は表土中出土品であるが，ここでまとめて報告しておきたい。

須恵器蓋杯（1・2）1は端部外面が浅くへこむシャープな作りで，天井外面はかなり下まで回転ヘラ削り。焼成堅緻。2は復原底径7cmで体部外面は高台まで回転ナデ。胎土精良で生焼け品。これらは8世紀初葉期の混入品。

土師器皿b（3～5）いずれも底部糸切りで，3は底径3.4cm，口径は6cm以内となりそうな小型類。4は底径3.8cm。5は口径6.8cm，器高1.4cm，底径4.6cm。5は14世紀前半を中心とする時期だが，3・4は極めて小型で16世紀まで降るもの。

土師器皿a（6）径5cmの糸切り底で，胎土精良。内面磨滅しており，焼成不良。

土師器高台椀（7）高台径9.5cmで，外面は高台までヨコナデ。胎土精良で内面は磨滅。

白磁壺（8）口径9.6cmで，折り曲げて下垂させた口縁を持つ四耳壺の類。胎土は密で淡灰色，釉はこの器種にしては濃い感じの灰色。

青磁小壺（9）口径7.2cmの小型品で，内外ともにやや厚めの淡い緑色釉をかけた龍泉窯系。胎土は密で乳白色。内外に貫入顕著。

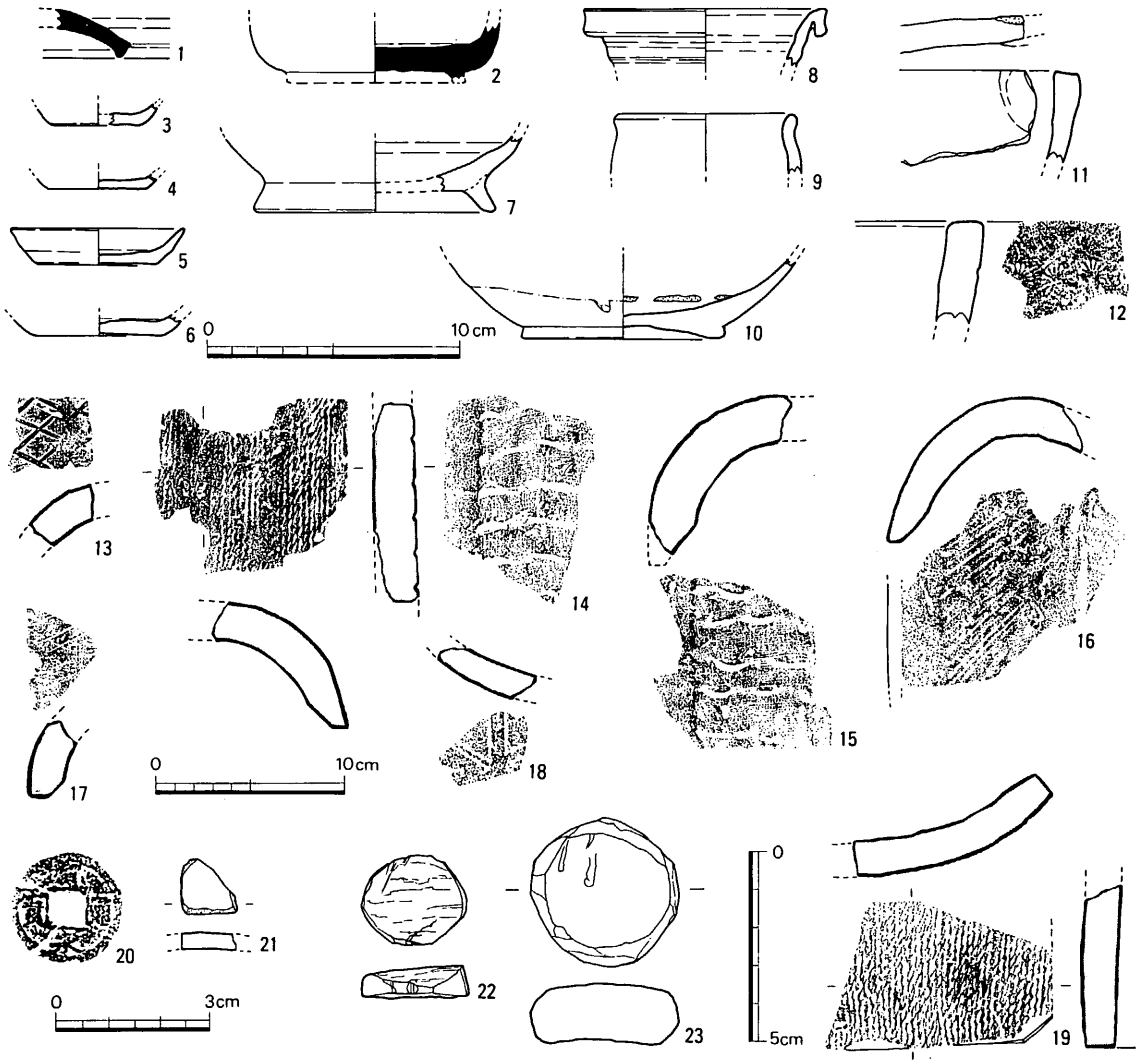


Fig.31　SX4540・表土出土遺物実測図（1～12：1/3，13～19：1/4，20・21：2/3，22・23：1/2）

越州窯系青磁椀

青磁椀（10）底径8㎝で暗黄緑色の薄い釉をかける越州窯系。外面下位から底部は露胎。胎土は淡灰色。底外面は回転方向のナデで，中央のみナデツケ。内面見込みに目跡6ヶ所。

陶磁類は以上の他に，龍泉窯系大型盤体部小片（PL.14－B）1点。これは青緑色釉を厚くかけ外面に草花文，内面に平行凹線を施す類で14世紀代か。また，龍泉窯系青磁椀口縁小片1点。これは口縁下1㎝でゆるく折れて外反する深めの器形で，端部が上方に尖り気味。暗灰緑色釉をやや厚くかけ，14世紀代。他に，朝鮮時代か唐津かと思われる16世紀代の濃灰色釉の椀体部下半片（PL.14－D）1点も出土。胎土は粗く暗灰色。なお，表土中出土品だが，見込みに双魚文を施した水色釉龍泉窯系青磁小片（PL.14－A）もある。

土師質鉢（11）片口の付く，直径30㎝程となる類。口縁上端はへこみ，内面はやや雑なヨコナデ，口縁内面直下から外面にかけては丁寧なヨコナデ。砂粒をかなり含み焼成不良で肌色。

瓦質鉢（12）口縁下に15弁で直径12㎜の菊花文スタンプを2個ずつ接して押したもの。内面はヨコナデでやや大口径類。細砂幾らか含み，焼成不良で土師質に近く，器表がやや黒色を帯びる程度。

丸瓦（13～17）13は大きめの斜格子を縦位に施し，粗石英粒をかなり含む。焼成須恵質。14

横位の布かがり紐圧痕

は凸面に縦位の縄目，凹面には2㎝間隔に6条の布かがり紐圧痕が横位に走る。この紐は2～3㎜の太いもので，圧痕を良く観察すると，撚った紐状の痕跡は認められず，横位の繊維状の筋しか見えないことから，蔓状のものを使ったものか。側辺端面とその凹面側はヘラ切り。粗砂幾らか含み，焼成やや軟質。15は凸面が縄目をナデ消し，凹面は14と同様に横位の布かがり紐圧痕が5条残る。凹面の側辺沿いは大きくヘラ切りされる。粗砂少量含み，焼成軟質。16は凸面が縄目のナデ消し，凹面は細かい布目だが，粗い糸切り痕が残る。側辺端面とその凹面側

3本のヘラ描き平行沈線

はヘラ切り。砂粒を多く含み，焼成不良。17の凸面は縄目をナデ消すが，斜位の3本のヘラ描き平行沈線が見られる。現段階では意味不明。側辺端面とその凹面側はヘラ切り。粗砂粒を僅かに含み，焼成軟質で白色。

平瓦（18・19）18は凸面に粗大な斜格子，凹面はナデで平滑。細石英粒をかなり含み，焼成不良。19は凸面に縦位の縄目，凹面は細かい布目。凹面の側辺沿いは幅1.5㎝程ヘラ削り。角

角を切り落とし

をヘラ切りして落としているのが特異。砂粒を多く含み，焼成須恵質。

銅銭（20）C2区の茶褐色土最下部から出土したものだが，この落込的なSX4540の上限を知る資料となる。「貝字」の新期寛永通寶で，元禄10年(1697)初鋳品。直径2.25㎝。

銅製品（21）12×11㎜分しか現存しない小破片で，厚さ3㎜。全体が曲面をなし，容器の胴部片となろう。内外無文。

円盤状品（22・23）22は赤味がかった灰色の質の悪い滑石製品で，径28×24㎜，厚さ8～1㎜。表裏面ともに剝離面のままで，周縁のみを刃物により削り取っており，一部には切り込み状部分もみられる。用途不明。6.5ｇ。23は縄目叩きの丸瓦片を利用した土製円盤。周縁を打ち欠き，雑に角落とし程度に磨いている。径39㎜，厚さ15㎜，重さ24.6ｇ。細砂多く含み，生焼け。

以上のSX4540及び表土中出土品は，1・2の奈良前半期までのもの，7・8・10・13・18の鎌倉期とそれ以前のもの等を除いた外が，本遺跡の各遺構に伴うものと考えられ，特に5・6・9・11・12・14～17・19などが14世紀代のものと考えられ，本遺跡の最盛時期を示す。SX4540自体は，江戸期の遺物が寛永通寶以外には殆どみられないことから，生活遺構とは関わらない江戸期の撹乱部と判断されよう。

(4) 小　結

今回の調査地点は，三方を丘陵に囲まれた谷の前方東寄りに位置し，地形的に見て，ひとまとまりの建物群があったとすれば，前面側の良好な位置を占めた部位と言えよう。
その観点から，今回検出した各遺構は，この一群の中でも主要施設のひとつであったと想定できる。

時期的にはSD4541が13世紀前半代を中心とする時期で，それ以前にも遺構が在ることが確認された。その上の整地層の後，更にSX4530のための整地が行われ，SX4530の造営が行われる

14世紀代が中心

が，各部位出土遺物からみて室町時代をはずれることは無いようだ。中でも14世紀代の遺物が多いことから，この時期にSX4530の盛期があったものと推定される。次に，SX4530周辺の埋没に伴い，中位整地層，上位整地層が形成され，東半側にSB4531掘立柱建物が営まれる。その間には，SX4530が焼失して廃絶した模様で，その正確な時期は確定できないが，SB4531が

元禄以前で15世紀後半までの間とみられることから，遅くとも15世紀代には廃絶していたと考えられる。

遺構の性格としては，SX4530が自然石を立てた基壇化粧を持つ施設であるが，上面に敷石を施す等，建物としては類例に乏しい構造であることから，墓ではないかとの意見もあり，正確には今後の調査に俟つことにする。ただ，位置的に谷口部の目立つ好位置に在り，堂屋的な主要建物と考える方が自然ではある。次にSB4531は，柱穴が小さく，小規模建物である。概要の項で述べた通り，江戸期の僧職のものと思われる墓地が北東上方の中段テラスにみられることもあり，これらと関係する小寺院の存在を示すものかもしれない。

類をみない構造

出土遺物は既述の如く14世紀代のものが多いが，今回注目されるのは，瓦類であろう。丸瓦の凹面に布かがりの紐圧痕を有するものは，横岳崇福寺(1586年焼失)，観世音寺SB3800D整地層出土の巴文軒丸瓦に伴うもの，推定金光寺跡(第57・67次調査)，更に山口県大内氏館跡でも出土していると言う。大内氏系の土師器杯ｂ等の九州への影響が指摘されている該期の現象として興味深いものがある。次に，平瓦の場合に凸面（時に凹面の場合もある）に細砂粒が多く付着するものが多く認められ，凹型一枚作りと考えられる平瓦に特定される。現状では具体的な技術流入の様相は明らかに示し得ないが，関西方面からの技術導入によって，このような離れ砂使用の平瓦凹型台一枚作りの技法が入ってきたのではないかと考えられる。

離れ砂使用の平瓦凹型一枚作りの技法

少弐(武藤)資頼の墓と伝えられる五輪塔が今回発掘区の北西100ｍの谷奥北西隅に残されている。一石造成隅切五輪塔で全国でも珍しい作りで，各輪四方に円相中仏形坐像を薄肉浮彫している点も異例とされる。原位置を保ってはいないが，近辺にて発見されたらしい。無銘であるが，慶応元年に博多承天寺住職が大石上に安置し，資頼の墓と比したことが横の石碑に記されている。承天寺に残る位牌には「捨地安養院殿太宰府都督司馬少卿覺佛大禪定門」とあり，「安養院」を号していたことがわかる。これと観世音寺49子院のひとつである安養寺とどのような関係があるのか，未だ詳らかに出来ないが，これらの状況から見て，現在の字安養寺の地区と資頼との関係は強いと見る方が自然であろう。建久年間(1190～1199)に筑前・豊前・肥前三カ国の守護となり，嘉禄２年(1226)に大宰少弐を兼ね，天福元年(1233)に没した少弐資頼の生涯の時期から見ると，今回調査の古い段階のSD4531の時期と符合するが，どこかで両者が結びつくのかもしれない。以後の少弐氏の盛衰の中で，1361～1372年の「大宰府征西府」期は，常に争奪の場となっていた大宰府の地のつかのまの小康期と認められる。今回調査分のSX4530の基壇構造物が14世紀代のある時点と推定されることと時期的に関連する可能性も残しておこう。この後の文明10～天文20年(1478～1551)の間は大内氏による豊前・筑前の平定により当地方の安定期が訪れる。今回調査遺構の終末段階の時期との関連も考慮され，この時期に大内領を通して西の文化・瓦等の生産技術等の交流があった事も想像できよう。

安養院

少弐氏と結びつくのか？

以上の如く，調査結果は微少ながら，課題は山積するばかりである。極めて小規模調査であった故，何ら確定できる現状には無い。今後，当地の谷間を巡る中段テラスを含めた地形測量，観世音寺49子院の具体的遺構と時期の解明等を含めた上での，当地区への更なる調査にすべてを期待したい。



(1) 第184次調査区全景
（南から）



(2) 第184次調査区全景
（北東から）



(3) SX4530（南から）



(1) Tr.1（SX4530南東隅）
上半　　（南から）



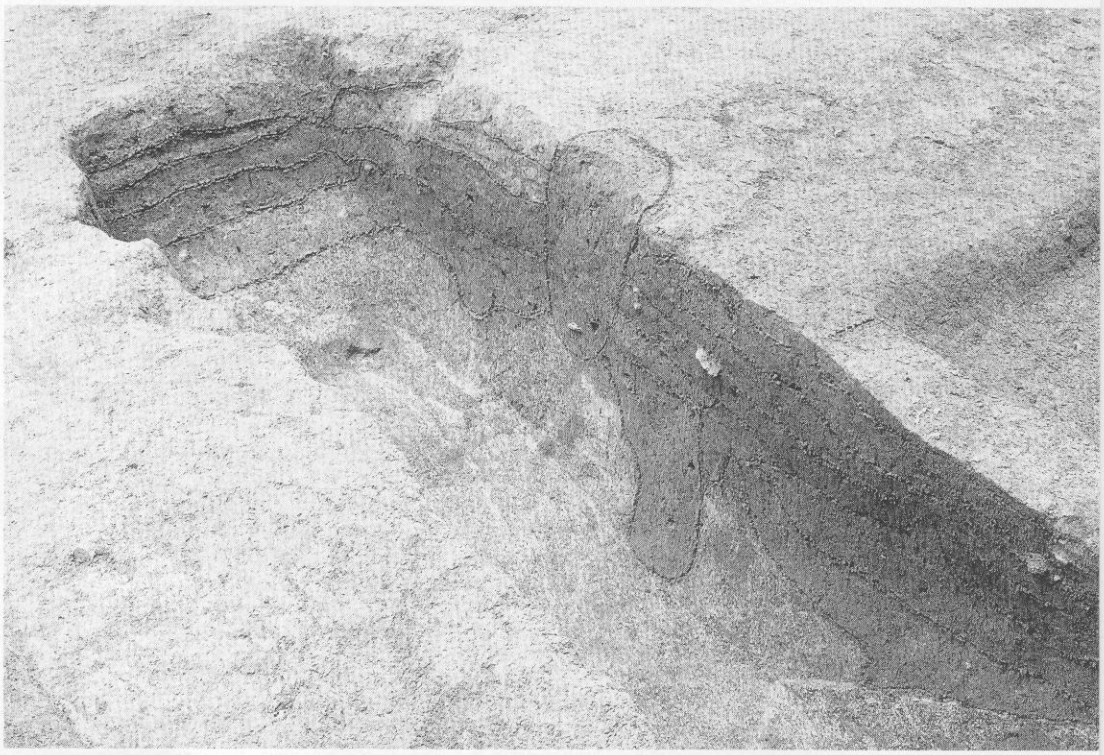
(2) Tr.1（SX4530南東隅）
下半　　（南から）



(3) Tr.2（SX4530北東隅）
（北から）



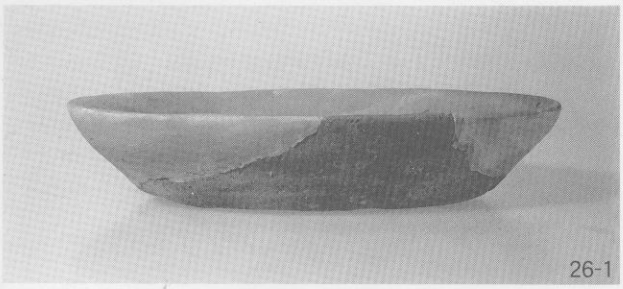
(1) Tr.2（SX4530北東隅）　（東から）

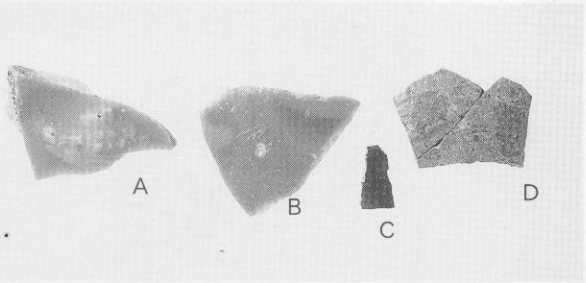


(2) 試掘トレンチ北壁（南東から）



(3) 試掘トレンチ南壁（北西から）

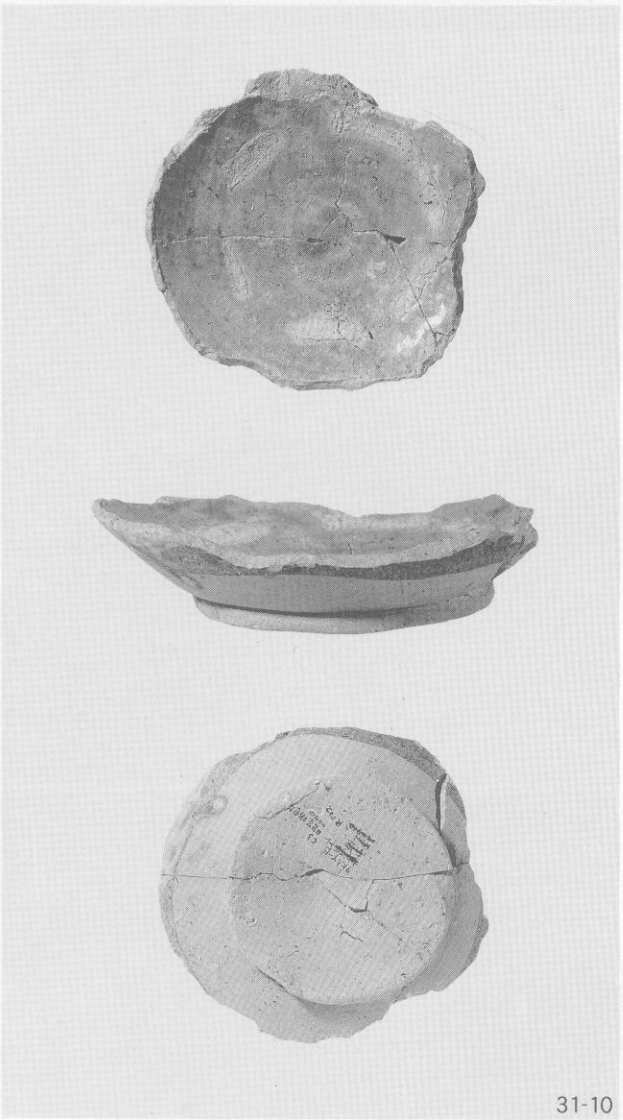

26-1




31-5

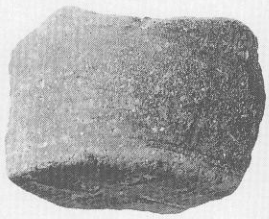

28-4

31-12

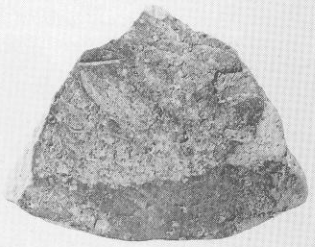

31-10

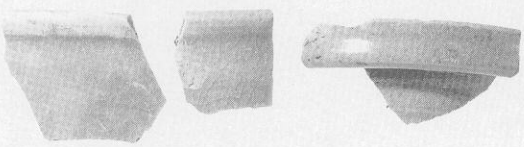

31-11


28-1


28-3


28-2


26-2

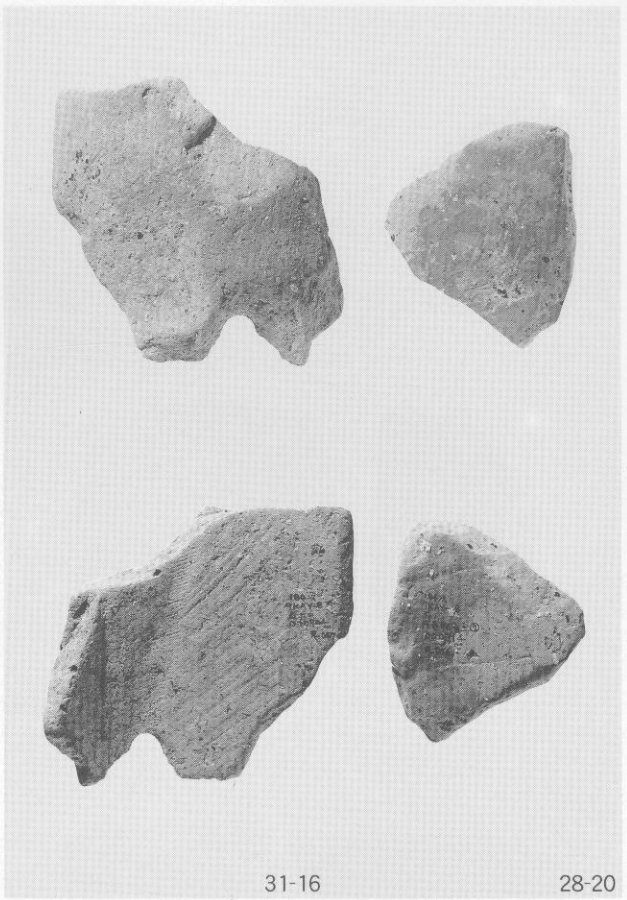

28-16 31-9 31-8


28-6 31-13 28-7

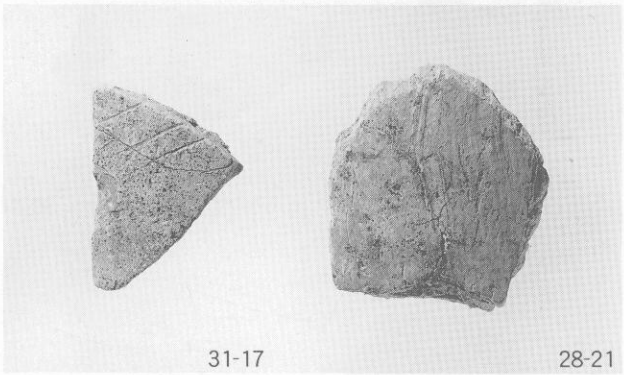
第184次調査出土土器・陶磁器・丸瓦類



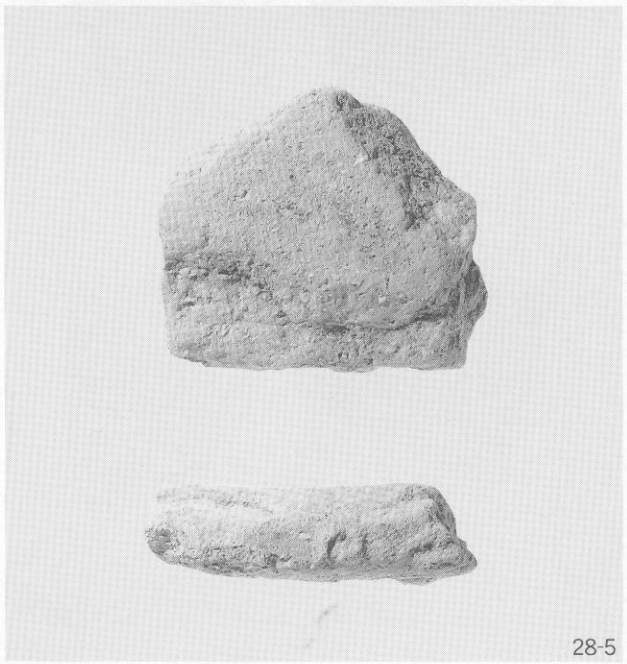
31-14　31-15



31-16　28-20



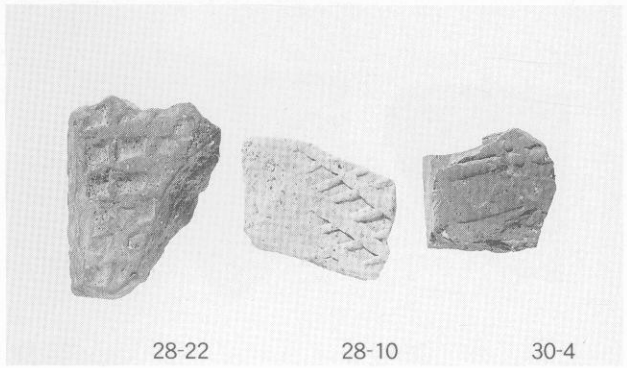
31-17　28-21



28-5

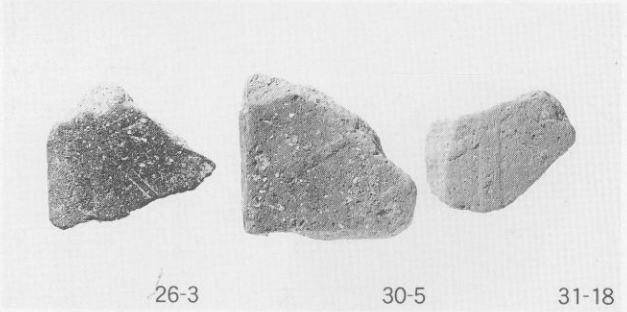


28-17

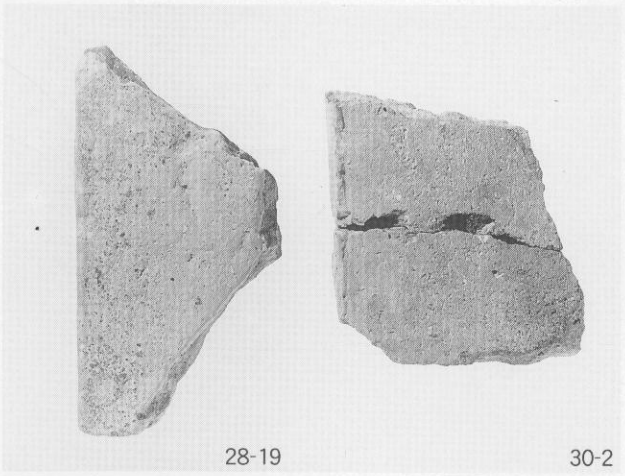


28-22　28-10　30-4

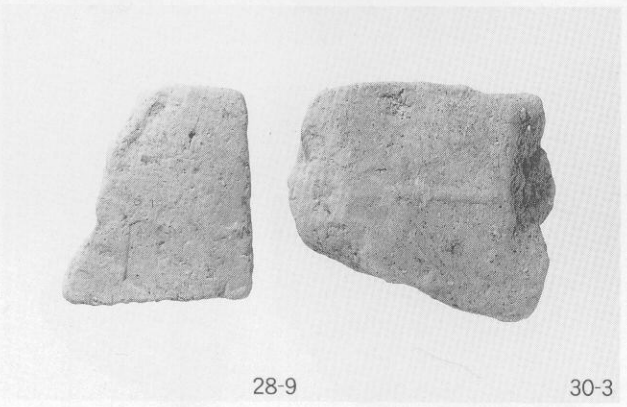
第184次調査出土瓦類



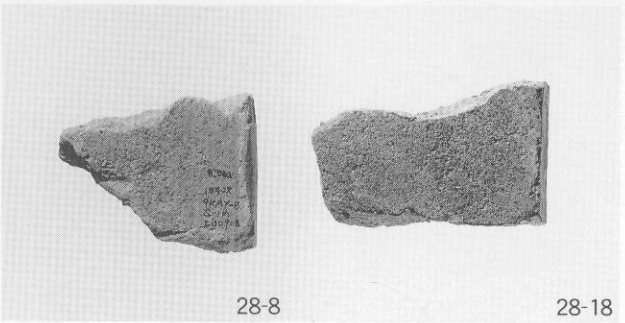
26-3　30-5　31-18



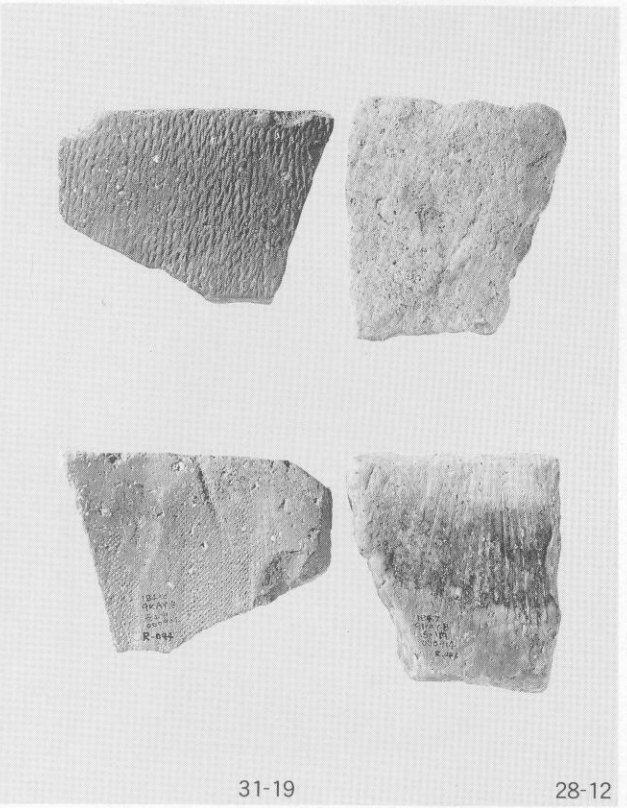
28-19　30-2



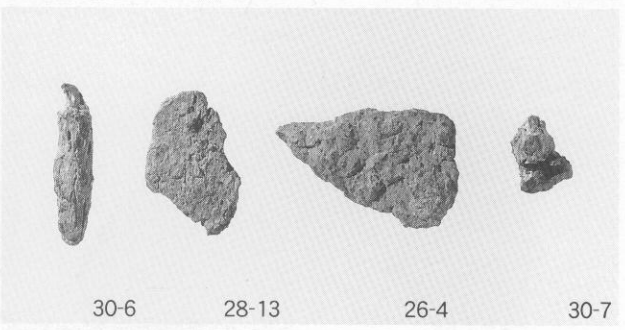
28-9　30-3



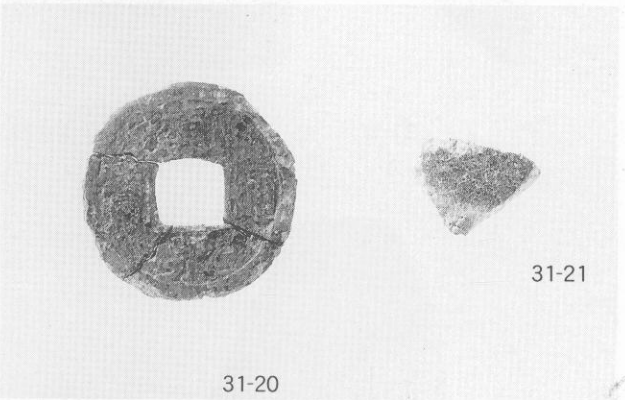
28-8　28-18



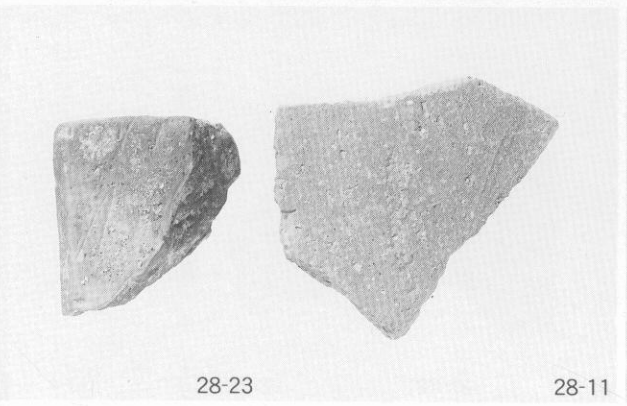
31-19　28-12



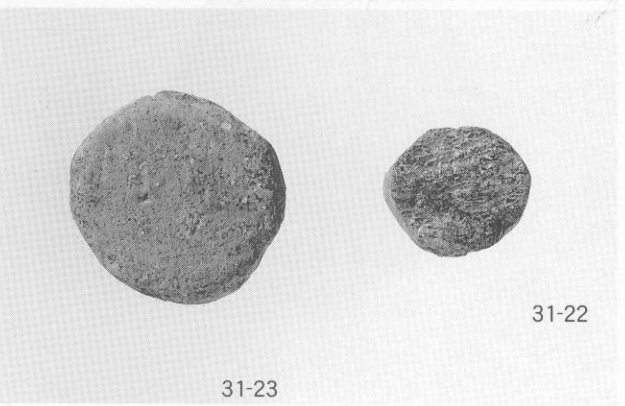
30-6　28-13　26-4　30-7



31-21　31-20

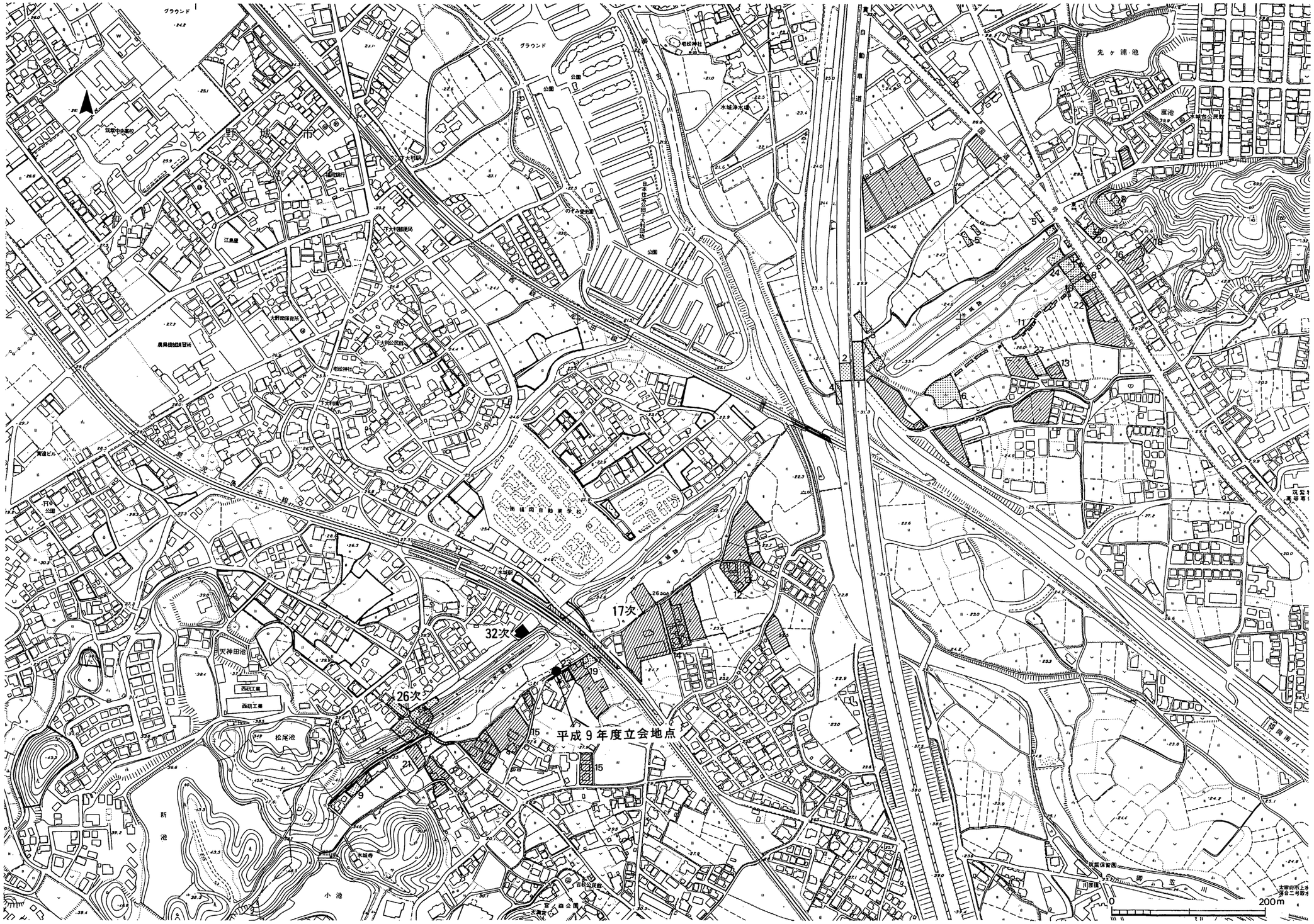


28-23　28-11



31-22　31-23

第184次調査出土瓦・鉄器・銅製品・円盤状品


大野城市
水城跡
水城西門跡
水城東門跡
水城
水城小
水城中
水城駅
水城西公民館
水城東公民館
水城西小学校
水城東小学校
水城公園
水城浄水場
水城ダム
水城ダム管理棟
水城ダム駐車場
水城ダム公園
水城ダム公園駐車場
水城ダム公園トイレ
水城ダム公園管理棟
水城ダム公園第一駐車場
水城ダム公園第二駐車場
水城ダム公園第三駐車場
水城ダム公園第四駐車場
水城ダム公園第五駐車場
水城ダム公園第六駐車場
水城ダム公園第七駐車場
水城ダム公園第八駐車場
水城ダム公園第九駐車場
水城ダム公園第十駐車場
水城ダム公園第十一駐車場
水城ダム公園第十二駐車場
水城ダム公園第十三駐車場
水城ダム公園第十四駐車場
水城ダム公園第十五駐車場
水城ダム公園第十六駐車場
水城ダム公園第十七駐車場
水城ダム公園第十八駐車場
水城ダム公園第十九駐車場
水城ダム公園第二十駐車場
水城ダム公園第二十一駐車場
水城ダム公園第二十二駐車場
水城ダム公園第二十三駐車場
水城ダム公園第二十四駐車場
水城ダム公園第二十五駐車場
水城ダム公園第二十六駐車場
水城ダム公園第二十七駐車場
水城ダム公園第二十八駐車場
水城ダム公園第二十九駐車場
水城ダム公園第三十駐車場
水城ダム公園第三十一駐車場
水城ダム公園第三十二駐車場
水城ダム公園第三十三駐車場
水城ダム公園第三十四駐車場
水城ダム公園第三十五駐車場
水城ダム公園第三十六駐車場
水城ダム公園第三十七駐車場
水城ダム公園第三十八駐車場
水城ダム公園第三十九駐車場
水城ダム公園第四十駐車場
水城ダム公園第四十一駐車場
水城ダム公園第四十二駐車場
水城ダム公園第四十三駐車場
水城ダム公園第四十四駐車場
水城ダム公園第四十五駐車場
水城ダム公園第四十六駐車場
水城ダム公園第四十七駐車場
水城ダム公園第四十八駐車場
水城ダム公園第四十九駐車場
水城ダム公園第五十駐車場
水城ダム公園第五十一駐車場
水城ダム公園第五十二駐車場
水城ダム公園第五十三駐車場
水城ダム公園第五十四駐車場
水城ダム公園第五十五駐車場
水城ダム公園第五十六駐車場
水城ダム公園第五十七駐車場
水城ダム公園第五十八駐車場
水城ダム公園第五十九駐車場
水城ダム公園第六十駐車場
水城ダム公園第六十一駐車場
水城ダム公園第六十二駐車場
水城ダム公園第六十三駐車場
水城ダム公園第六十四駐車場
水城ダム公園第六十五駐車場
水城ダム公園第六十六駐車場
水城ダム公園第六十七駐車場
水城ダム公園第六十八駐車場
水城ダム公園第六十九駐車場
水城ダム公園第七十駐車場
水城ダム公園第七十一駐車場
水城ダム公園第七十二駐車場
水城ダム公園第七十三駐車場
水城ダム公園第七十四駐車場
水城ダム公園第七十五駐車場
水城ダム公園第七十六駐車場
水城ダム公園第七十七駐車場
水城ダム公園第七十八駐車場
水城ダム公園第七十九駐車場
水城ダム公園第八十駐車場
水城ダム公園第八十一駐車場
水城ダム公園第八十二駐車場
水城ダム公園第八十三駐車場
水城ダム公園第八十四駐車場
水城ダム公園第八十五駐車場
水城ダム公園第八十六駐車場
水城ダム公園第八十七駐車場
水城ダム公園第八十八駐車場
水城ダム公園第八十九駐車場
水城ダム公園第九十駐車場
水城ダム公園第九十一駐車場
水城ダム公園第九十二駐車場
水城ダム公園第九十三駐車場
水城ダム公園第九十四駐車場
水城ダム公園第九十五駐車場
水城ダム公園第九十六駐車場
水城ダム公園第九十七駐車場
水城ダム公園第九十八駐車場
水城ダム公園第九十九駐車場
水城ダム公園第百駐車場
水城ダム公園第百一駐車場
水城ダム公園第百二駐車場
水城ダム公園第百三駐車場
水城ダム公園第百四駐車場
水城ダム公園第百五駐車場
水城ダム公園第百六駐車場
水城ダム公園第百七駐車場
水城ダム公園第百八駐車場
水城ダム公園第百九駐車場
水城ダム公園第百十駐車場
水城ダム公園第百十一駐車場
水城ダム公園第百十二駐車場
水城ダム公園第百十三駐車場
水城ダム公園第百十四駐車場
水城ダム公園第百十五駐車場
水城ダム公園第百十六駐車場
水城ダム公園第百十七駐車場
水城ダム公園第百十八駐車場
水城ダム公園第百十九駐車場
水城ダム公園第百二十駐車場
水城ダム公園第百二十一駐車場
水城ダム公園第百二十二駐車場
水城ダム公園第百二十三駐車場
水城ダム公園第百二十四駐車場
水城ダム公園第百二十五駐車場
水城ダム公園第百二十六駐車場
水城ダム公園第百二十七駐車場
水城ダム公園第百二十八駐車場
水城ダム公園第百二十九駐車場
水城ダム公園第百三十駐車場
水城ダム公園第百三十一駐車場
水城ダム公園第百三十二駐車場
水城ダム公園第百三十三駐車場
水城ダム公園第百三十四駐車場
水城ダム公園第百三十五駐車場
水城ダム公園第百三十六駐車場
水城ダム公園第百三十七駐車場
水城ダム公園第百三十八駐車場
水城ダム公園第百三十九駐車場
水城ダム公園第百四十駐車場
水城ダム公園第百四十一駐車場
水城ダム公園第百四十二駐車場
水城ダム公園第百四十三駐車場
水城ダム公園第百四十四駐車場
水城ダム公園第百四十五駐車場
水城ダム公園第百四十六駐車場
水城ダム公園第百四十七駐車場
水城ダム公園第百四十八駐車場
水城ダム公園第百四十九駐車場
水城ダム公園第百五十駐車場
水城ダム公園第百五十一駐車場
水城ダム公園第百五十二駐車場
水城ダム公園第百五十三駐車場
水城ダム公園第百五十四駐車場
水城ダム公園第百五十五駐車場
水城ダム公園第百五十六駐車場
水城ダム公園第百五十七駐車場
水城ダム公園第百五十八駐車場
水城ダム公園第百五十九駐車場
水城ダム公園第百六十駐車場
水城ダム公園第百六十一駐車場
水城ダム公園第百六十二駐車場
水城ダム公園第百六十三駐車場
水城ダム公園第百六十四駐車場
水城ダム公園第百六十五駐車場
水城ダム公園第百六十六駐車場
水城ダム公園第百六十七駐車場
水城ダム公園第百六十八駐車場
水城ダム公園第百六十九駐車場
水城ダム公園第百七十駐車場
水城ダム公園第百七十一駐車場
水城ダム公園第百七十二駐車場
水城ダム公園第百七十三駐車場
水城ダム公園第百七十四駐車場
水城ダム公園第百七十五駐車場
水城ダム公園第百七十六駐車場
水城ダム公園第百七十七駐車場
水城ダム公園第百七十八駐車場
水城ダム公園第百七十九駐車場
水城ダム公園第百八十駐車場
水城ダム公園第百八十一駐車場
水城ダム公園第百八十二駐車場
水城ダム公園第百八十三駐車場
水城ダム公園第百八十四駐車場
水城ダム公園第百八十五駐車場
水城ダム公園第百八十六駐車場
水城ダム公園第百八十七駐車場
水城ダム公園第百八十八駐車場
水城ダム公園第百八十九駐車場
水城ダム公園第百九十駐車場
水城ダム公園第百九十一駐車場
水城ダム公園第百九十二駐車場
水城ダム公園第百九十三駐車場
水城ダム公園第百九十四駐車場
水城ダム公園第百九十五駐車場
水城ダム公園第百九十六駐車場
水城ダム公園第百九十七駐車場
水城ダム公園第百九十八駐車場
水城ダム公園第百九十九駐車場
水城ダム公園第二百駐車場
水城ダム公園第二百一駐車場
水城ダム公園第二百二駐車場
水城ダム公園第二百三駐車場
水城ダム公園第二百四駐車場
水城ダム公園第二百五駐車場
水城ダム公園第二百六駐車場
水城ダム公園第二百七駐車場
水城ダム公園第二百八駐車場
水城ダム公園第二百九駐車場
水城ダム公園第二百十駐車場
水城ダム公園第二百十一駐車場
水城ダム公園第二百十二駐車場
水城ダム公園第二百十三駐車場
水城ダム公園第二百十四駐車場
水城ダム公園第二百十五駐車場
水城ダム公園第二百十六駐車場
水城ダム公園第二百十七駐車場
水城ダム公園第二百十八駐車場
水城ダム公園第二百十九駐車場
水城ダム公園第二百二十駐車場
水城ダム公園第二百二十一駐車場
水城ダム公園第二百二十二駐車場
水城ダム公園第二百二十三駐車場
水城ダム公園第二百二十四駐車場
水城ダム公園第二百二十五駐車場
水城ダム公園第二百二十六駐車場
水城ダム公園第二百二十七駐車場
水城ダム公園第二百二十八駐車場
水城ダム公園第二百二十九駐車場
水城ダム公園第二百三十駐車場
水城ダム公園第二百三十一駐車場
水城ダム公園第二百三十二駐車場
水城ダム公園第二百三十三駐車場
水城ダム公園第二百三十四駐車場
水城ダム公園第二百三十五駐車場
水城ダム公園第二百三十六駐車場
水城ダム公園第二百三十七駐車場
水城ダム公園第二百三十八駐車場
水城ダム公園第二百三十九駐車場
水城ダム公園第二百四十駐車場
水城ダム公園第二百四十一駐車場
水城ダム公園第二百四十二駐車場
水城ダム公園第二百四十三駐車場
水城ダム公園第二百四十四駐車場
水城ダム公園第二百四十五駐車場
水城ダム公園第二百四十六駐車場
水城ダム公園第二百四十七駐車場
水城ダム公園第二百四十八駐車場
水城ダム公園第二百四十九駐車場
水城ダム公園第二百五十駐車場
水城ダム公園第二百五十一駐車場
水城ダム公園第二百五十二駐車場
水城ダム公園第二百五十三駐車場
水城ダム公園第二百五十四駐車場
水城ダム公園第二百五十五駐車場
水城ダム公園第二百五十六駐車場
水城ダム公園第二百五十七駐車場
水城ダム公園第二百五十八駐車場
水城ダム公園第二百五十九駐車場
水城ダム公園第二百六十駐車場
水城ダム公園第二百六十一駐車場
水城ダム公園第二百六十二駐車場
水城ダム公園第二百六十三駐車場
水城ダム公園第二百六十四駐車場
水城ダム公園第二百六十五駐車場
水城ダム公園第二百六十六駐車場
水城ダム公園第二百六十七駐車場
水城ダム公園第二百六十八駐車場
水城ダム公園第二百六十九駐車場
水城ダム公園第二百七十駐車場
水城ダム公園第二百七十一駐車場
水城ダム公園第二百七十二駐車場
水城ダム公園第二百七十三駐車場
水城ダム公園第二百七十四駐車場
水城ダム公園第二百七十五駐車場
水城ダム公園第二百七十六駐車場
水城ダム公園第二百七十七駐車場
水城ダム公園第二百七十八駐車場
水城ダム公園第二百七十九駐車場
水城ダム公園第二百八十駐車場
水城ダム公園第二百八十一駐車場
水城ダム公園第二百八十二駐車場
水城ダム公園第二百八十三駐車場
水城ダム公園第二百八十四駐車場
水城ダム公園第二百八十五駐車場
水城ダム公園第二百八十六駐車場
水城ダム公園第二百八十七駐車場
水城ダム公園第二百八十八駐車場
水城ダム公園第二百八十九駐車場
水城ダム公園第二百九十駐車場
水城ダム公園第二百九十一駐車場
水城ダム公園第二百九十二駐車場
水城ダム公園第二百九十三駐車場
水城ダム公園第二百九十四駐車場
水城ダム公園第二百九十五駐車場
水城ダム公園第二百九十六駐車場
水城ダム公園第二百九十七駐車場
水城ダム公園第二百九十八駐車場
水城ダム公園第二百九十九駐車場
水城ダム公園第三百駐車場
水城ダム公園第三百一駐車場
水城ダム公園第三百二駐車場
水城ダム公園第三百三駐車場
水城ダム公園第三百四駐車場
水城ダム公園第三百五駐車場
水城ダム公園第三百六駐車場
水城ダム公園第三百七駐車場
水城ダム公園第三百八駐車場
水城ダム公園第三百九駐車場
水城ダム公園第三百十駐車場
水城ダム公園第三百十一駐車場
水城ダム公園第三百十二駐車場
水城ダム公園第三百十三駐車場
水城ダム公園第三百十四駐車場
水城ダム公園第三百十五駐車場
水城ダム公園第三百十六駐車場
水城ダム公園第三百十七駐車場
水城ダム公園第三百十八駐車場
水城ダム公園第三百十九駐車場
水城ダム公園第三百二十駐車場
水城ダム公園第三百二十一駐車場
水城ダム公園第三百二十二駐車場
水城ダム公園第三百二十三駐車場
水城ダム公園第三百二十四駐車場
水城ダム公園第三百二十五駐車場
水城ダム公園第三百二十六駐車場
水城ダム公園第三百二十七駐車場
水城ダム公園第三百二十八駐車場
水城ダム公園第三百二十九駐車場
水城ダム公園第三百三十駐車場
水城ダム公園第三百三十一駐車場
水城ダム公園第三百三十二駐車場
水城ダム公園第三百三十三駐車場
水城ダム公園第三百三十四駐車場
水城ダム公園第三百三十五駐車場
水城ダム公園第三百三十六駐車場
水城ダム公園第三百三十七駐車場
水城ダム公園第三百三十八駐車場
水城ダム公園第三百三十九駐車場
水城ダム公園第三百四十駐車場
水城ダム公園第三百四十一駐車場
水城ダム公園第三百四十二駐車場
水城ダム公園第三百四十三駐車場
水城ダム公園第三百四十四駐車場
水城ダム公園第三百四十五駐車場
水城ダム公園第三百四十六駐車場
水城ダム公園第三百四十七駐車場
水城ダム公園第三百四十八駐車場
水城ダム公園第三百四十九駐車場
水城ダム公園第三百五十駐車場
水城ダム公園第三百五十一駐車場
水城ダム公園第三百五十二駐車場
水城ダム公園第三百五十三駐車場
水城ダム公園第三百五十四駐車場
水城ダム公園第三百五十五駐車場
水城ダム公園第三百五十六駐車場
水城ダム公園第三百五十七駐車場
水城ダム公園第三百五十八駐車場
水城ダム公園第三百五十九駐車場
水城ダム公園第三百六十駐車場
水城ダム公園第三百六十一駐車場
水城ダム公園第三百六十二駐車場
水城ダム公園第三百六十三駐車場
水城ダム公園第三百六十四駐車場
水城ダム公園第三百六十五駐車場
水城ダム公園第三百六十六駐車場
水城ダム公園第三百六十七駐車場
水城ダム公園第三百六十八駐車場
水城ダム公園第三百六十九駐車場
水城ダム公園第三百七十駐車場
水城ダム公園第三百七十一駐車場
水城ダム公園第三百七十二駐車場
水城ダム公園第三百七十三駐車場
水城ダム公園第三百七十四駐車場
水城ダム公園第三百七十五駐車場
水城ダム公園第三百七十六駐車場
水城ダム公園第三百七十七駐車場
水城ダム公園第三百七十八駐車場
水城ダム公園第三百七十九駐車場
水城ダム公園第三百八十駐車場
水城ダム公園第三百八十一駐車場
水城ダム公園第三百八十二駐車場
水城ダム公園第三百八十三駐車場
水城ダム公園第三百八十四駐車場
水城ダム公園第三百八十五駐車場
水城ダム公園第三百八十六駐車場
水城ダム公園第三百八十七駐車場
水城ダム公園第三百八十八駐車場
水城ダム公園第三百八十九駐車場
水城ダム公園第三百九十駐車場
水城ダム公園第三百九十一駐車場
水城ダム公園第三百九十二駐車場
水城ダム公園第三百九十三駐車場
水城ダム公園第三百九十四駐車場
水城ダム公園第三百九十五駐車場
水城ダム公園第三百九十六駐車場
水城ダム公園第三百九十七駐車場
水城ダム公園第三百九十八駐車場
水城ダム公園第三百九十九駐車場
水城ダム公園第四百駐車場
水城ダム公園第四百一駐車場
水城ダム公園第四百二駐車場
水城ダム公園第四百三駐車場
水城ダム公園第四百四駐車場
水城ダム公園第四百五駐車場
水城ダム公園第四百六駐車場
水城ダム公園第四百七駐車場
水城ダム公園第四百八駐車場
水城ダム公園第四百九駐車場
水城ダム公園第四百十駐車場
水城ダム公園第四百十一駐車場
水城ダム公園第四百十二駐車場
水城ダム公園第四百十三駐車場
水城ダム公園第四百十四駐車場
水城ダム公園第四百十五駐車場
水城ダム公園第四百十六駐車場
水城ダム公園第四百十七駐車場
水城ダム公園第四百十八駐車場
水城ダム公園第四百十九駐車場
水城ダム公園第四百二十駐車場
水城ダム公園第四百二十一駐車場
水城ダム公園第四百二十二駐車場
水城ダム公園第四百二十三駐車場
水城ダム公園第四百二十四駐車場
水城ダム公園第四百二十五駐車場
水城ダム公園第四百二十六駐車場
水城ダム公園第四百二十七駐車場
水城ダム公園第四百二十八駐車場
水城ダム公園第四百二十九駐車場
水城ダム公園第四百三十駐車場
水城ダム公園第四百三十一駐車場
水城ダム公園第四百三十二駐車場
水城ダム公園第四百三十三駐車場
水城ダム公園第四百三十四駐車場
水城ダム公園第四百三十五駐車場
水城ダム公園第四百三十六駐車場
水城ダム公園第四百三十七駐車場
水城ダム公園第四百三十八駐車場
水城ダム公園第四百三十九駐車場
水城ダム公園第四百四十駐車場
水城ダム公園第四百四十一駐車場
水城ダム公園第四百四十二駐車場
水城ダム公園第四百四十三駐車場
水城ダム公園第四百四十四駐車場
水城ダム公園第四百四十五駐車場
水城ダム公園第四百四十六駐車場
水城ダム公園第四百四十七駐車場
水城ダム公園第四百四十八駐車場
水城ダム公園第四百四十九駐車場
水城ダム公園第四百五十駐車場
水城ダム公園第四百五十一駐車場
水城ダム公園第四百五十二駐車場
水城ダム公園第四百五十三駐車場
水城ダム公園第四百五十四駐車場
水城ダム公園第四百五十五駐車場
水城ダム公園第四百五十六駐車場
水城ダム公園第四百五十七駐車場
水城ダム公園第四百五十八駐車場
水城ダム公園第四百五十九駐車場
水城ダム公園第四百六十駐車場
水城ダム公園第四百六十一駐車場
水城ダム公園第四百六十二駐車場
水城ダム公園第四百六十三駐車場
水城ダム公園第四百六十四駐車場
水城ダム公園第四百六十五駐車場
水城ダム公園第四百六十六駐車場
水城ダム公園第四百六十七駐車場
水城ダム公園第四百六十八駐車場
水城ダム公園第四百六十九駐車場
水城ダム公園第四百七十駐車場
水城ダム公園第四百七十一駐車場
水城ダム公園第四百七十二駐車場
水城ダム公園第四百七十三駐車場
水城ダム公園第四百七十四駐車場
水城ダム公園第四百七十五駐車場
水城ダム公園第四百七十六駐車場
水城ダム公園第四百七十七駐車場
水城ダム公園第四百七十八駐車場
水城ダム公園第四百七十九駐車場
水城ダム公園第四百八十駐車場
水城ダム公園第四百八十一駐車場
水城ダム公園第四百八十二駐車場
水城ダム公園第四百八十三駐車場
水城ダム公園第四百八十四駐車場
水城ダム公園第四百八十五駐車場
水城ダム公園第四百八十六駐車場
水城ダム公園第四百八十七駐車場
水城ダム公園第四百八十八駐車場
水城ダム公園第四百八十九駐車場
水城ダム公園第四百九十駐車場
水城ダム公園第四百九十一駐車場
水城ダム公園第四百九十二駐車場
水城ダム公園第四百九十三駐車場
水城ダム公園第四百九十四駐車場
水城ダム公園第四百九十五駐車場
水城ダム公園第四百九十六駐車場
水城ダム公園第四百九十七駐車場
水城ダム公園第四百九十八駐車場
水城ダム公園第四百九十九駐車場
水城ダム公園第五百駐車場
水城ダム公園第五百一駐車場
水城ダム公園第五百二駐車場
水城ダム公園第五百三駐車場
水城ダム公園第五百四駐車場
水城ダム公園第五百五駐車場
水城ダム公園第五百六駐車場
水城ダム公園第五百七駐車場
水城ダム公園第五百八駐車場
水城ダム公園第五百九駐車場
水城ダム公園第五百十駐車場
水城ダム公園第五百十一駐車場
水城ダム公園第五百十二駐車場
水城ダム公園第五百十三駐車場
水城ダム公園第五百十四駐車場
水城ダム公園第五百十五駐車場
水城ダム公園第五百十六駐車場
水城ダム公園第五百十七駐車場
水城ダム公園第五百十八駐車場
水城ダム公園第五百十九駐車場
水城ダム公園第五百二十駐車場
水城ダム公園第五百二十一駐車場
水城ダム公園第五百二十二駐車場
水城ダム公園第五百二十三駐車場
水城ダム公園第五百二十四駐車場
水城ダム公園第五百二十五駐車場
水城ダム公園第五百二十六駐車場
水城ダム公園第五百二十七駐車場
水城ダム公園第五百二十八駐車場
水城ダム公園第五百二十九駐車場
水城ダム公園第五百三十駐車場
水城ダム公園第五百三十一駐車場
水城ダム公園第五百三十二駐車場
水城ダム公園第五百三十三駐車場
水城ダム公園第五百三十四駐車場
水城ダム公園第五百三十五駐車場
水城ダム公園第五百三十六駐車場
水城ダム公園第五百三十七駐車場
水城ダム公園第五百三十八駐車場
水城ダム公園第五百三十九駐車場
水城ダム公園第五百四十駐車場
水城ダム公園第五百四十一駐車場
水城ダム公園第五百四十二駐車場
水城ダム公園第五百四十三駐車場
水城ダム公園第五百四十四駐車場
水城ダム公園第五百四十五駐車場
水城ダム公園第五百四十六駐車場
水城ダム公園第五百四十七駐車場
水城ダム公園第五百四十八駐車場
水城ダム公園第五百四十九駐車場
水城ダム公園第五百五十駐車場
水城ダム公園第五百五十一駐車場
水城ダム公園第五百五十二駐車場
水城ダム公園第五百五十三駐車場
水城ダム公園第五百五十四駐車場
水城ダム公園第五百五十五駐車場
水城ダム公園第五百五十六駐車場
水城ダム公園第五百五十七駐車場
水城ダム公園第五百五十八駐車場
水城ダム公園第五百五十九駐車場
水城ダム公園第五百六十駐車場
水城ダム公園第五百六十一駐車場
水城ダム公園第五百六十二駐車場
水城ダム公園第五百六十三駐車場
水城ダム公園第五百六十四駐車場
水城ダム公園第五百六十五駐車場
水城ダム公園第五百六十六駐車場
水城ダム公園第五百六十七駐車場
水城ダム公園第五百六十八駐車場
水城ダム公園第五百六十九駐車場
水城ダム公園第五百七十駐車場
水城ダム公園第五百七十一駐車場
水城ダム公園第五百七十二駐車場
水城ダム公園第五百七十三駐車場
水城ダム公園第五百七十四駐車場
水城ダム公園第五百七十五駐車場
水城ダム公園第五百七十六駐車場
水城ダム公園第五百七十七駐車場
水城ダム公園第五百七十八駐車場
水城ダム公園第五百七十九駐車場
水城ダム公園第五百八十駐車場
水城ダム公園第五百八十一駐車場
水城ダム公園第五百八十二駐車場
水城ダム公園第五百八十三駐車場
水城ダム公園第五百八十四駐車場
水城ダム公園第五百八十五駐車場
水城ダム公園第五百八十六駐車場
水城ダム公園第五百八十七駐車場
水城ダム公園第五百八十八駐車場
水城ダム公園第五百八十九駐車場
水城ダム公園第五百九十駐車場
水城ダム公園第五百九十一駐車場
水城ダム公園第五百九十二駐車場
水城ダム公園第五百九十三駐車場
水城ダム公園第五百九十四駐車場
水城ダム公園第五百九十五駐車場
水城ダム公園第五百九十六駐車場
水城ダム公園第五百九十七駐車場
水城ダム公園第五百九十八駐車場
水城ダム公園第五百九十九駐車場
水城ダム公園第六百駐車場
水城ダム公園第六百一駐車場
水城ダム公園第六百二駐車場
水城ダム公園第六百三駐車場
水城ダム公園第六百四駐車場
水城ダム公園第六百五駐車場
水城ダム公園第六百六駐車場
水城ダム公園第六百七駐車場
水城ダム公園第六百八駐車場
水城ダム公園第六百九駐車場
水城ダム公園第六百十駐車場
水城ダム公園第六百十一駐車場
水城ダム公園第六百十二駐車場
水城ダム公園第六百十三駐車場
水城ダム公園第六百十四駐車場
水城ダム公園第六百十五駐車場
水城ダム公園第六百十六駐車場
水城ダム公園第六百十七駐車場
水城ダム公園第六百十八駐車場
水城ダム公園第六百十九駐車場
水城ダム公園第六百二十駐車場
水城ダム公園第六百二十一駐車場
水城ダム公園第六百二十二駐車場
水城ダム公園第六百二十三駐車場
水城ダム公園第六百二十四駐車場
水城ダム公園第六百二十五駐車場
水城ダム公園第六百二十六駐車場
水城ダム公園第六百二十七駐車場
水城ダム公園第六百二十八駐車場
水城ダム公園第六百二十九駐車場
水城ダム公園第六百三十駐車場
水城ダム公園第六百三十一駐車場
水城ダム公園第六百三十二駐車場
水城ダム公園第六百三十三駐車場
水城ダム公園第六百三十四駐車場
水城ダム公園第六百三十五駐車場
水城ダム公園第六百三十六駐車場
水城ダム公園第六百三十七駐車場
水城ダム公園第六百三十八駐車場
水城ダム公園第六百三十九駐車場
水城ダム公園第六百四十駐車場
水城ダム公園第六百四十一駐車場
水城ダム公園第六百四十二駐車場
水城ダム公園第六百四十三駐車場
水城ダム公園第六百四十四駐車場
水城ダム公園第六百四十五駐車場
水城ダム公園第六百四十六駐車場
水城ダム公園第六百四十七駐車場
水城ダム公園第六百四十八駐車場
水城ダム公園第六百四十九駐車場
水城ダム公園第六百五十駐車場
水城ダム公園第六百五十一駐車場
水城ダム公園第六百五十二駐車場
水城ダム公園第六百五十三駐車場
水城ダム公園第六百五十四駐車場
水城ダム公園第六百五十五駐車場
水城ダム公園第六百五十六駐車場
水城ダム公園第六百五十七駐車場
水城ダム公園第六百五十八駐車場
水城ダム公園第六百五十九駐車場
水城ダム公園第六百六十駐車場
水城ダム公園第六百六十一駐車場
水城ダム公園第六百六十二駐車場
水城ダム公園第六百六十三駐車場
水城ダム公園第六百六十四駐車場
水城ダム公園第六百六十五駐車場
水城ダム公園第六百六十六駐車場
水城ダム公園第六百六十七駐車場
水城ダム公園第六百六十八駐車場
水城ダム公園第六百六十九駐車場
水城ダム公園第六百七十駐車場
水城ダム公園第六百七十一駐車場
水城ダム公園第六百七十二駐車場
水城ダム公園第六百七十三駐車場
水城ダム公園第六百七十四駐車場
水城ダム公園第六百七十五駐車場
水城ダム公園第六百七十六駐車場
水城ダム公園第六百七十七駐車場
水城ダム公園第六百七十八駐車場
水城ダム公園第六百七十九駐車場
水城ダム公園第六百八十駐車場
水城ダム公園第六百八十一駐車場
水城ダム公園第六百八十二駐車場
水城ダム公園第六百八十三駐車場
水城ダム公園第六百八十四駐車場
水城ダム公園第六百八十五駐車場
水城ダム公園第六百八十六駐車場
水城ダム公園第六百八十七駐車場
水城ダム公園第六百八十八駐車場
水城ダム公園第六百八十九駐車場
水城ダム公園第六百九十駐車場
水城ダム公園第六百九十一駐車場
水城ダム公園第六百九十二駐車場
水城ダム公園第六百九十三駐車場
水城ダム公園第六百九十四駐車場
水城ダム公園第六百九十五駐車場
水城ダム公園第六百九十六駐車場
水城ダム公園第六百九十七駐車場
水城ダム公園第六百九十八駐車場
水城ダム公園第六百九十九駐車場
水城ダム公園第七百駐車場
水城ダム公園第七百一駐車場
水城ダム公園第七百二駐車場
水城ダム公園第七百三駐車場
水城ダム公園第七百四駐車場
水城ダム公園第七百五駐車場
水城ダム公園第七百六駐車場
水城ダム公園第七百七駐車場
水城ダム公園第七百八駐車場
水城ダム公園第七百九駐車場
水城ダム公園第七百十駐車場
水城ダム公園第七百十一駐車場
水城ダム公園第七百十二駐車場
水城ダム公園第七百十三駐車場
水城ダム公園第七百十四駐車場
水城ダム公園第七百十五駐車場
水城ダム公園第七百十六駐車場
水城ダム公園第七百十七駐車場
水城ダム公園第七百十八駐車場
水城ダム公園第七百十九駐車場
水城ダム公園第七百二十駐車場
水城ダム公園第七百二十一駐車場
水城ダム公園第七百二十二駐車場
水城ダム公園第七百二十三駐車場
水城ダム公園第七百二十四駐車場
水城ダム公園第七百二十五駐車場
水城ダム公園第七百二十六駐車場
水城ダム公園第七百二十七駐車場
水城ダム公園第七百二十八駐車場
水城ダム公園第七百二十九駐車場
水城ダム公園第七百三十駐車場
水城ダム公園第七百三十一駐車場
水城ダム公園第七百三十二駐車場
水城ダム公園第七百三十三駐車場
水城ダム公園第七百三十四駐車場
水城ダム公園第七百三十五駐車場
水城ダム公園第七百三十六駐車場
水城ダム公園第七百三十七駐車場
水城ダム公園第七百三十八駐車場
水城ダム公園第七百三十九駐車場
水城ダム公園第七百四十駐車場
水城ダム公園第七百四十一駐車場
水城ダム公園第七百四十二駐車場
水城ダム公園第七百四十三駐車場
水城ダム公園第七百四十四駐車場
水城ダム公園第七百四十五駐車場
水城ダム公園第七百四十六駐車場
水城ダム公園第七百四十七駐車場
水城ダム公園第七百四十八駐車場
水城ダム公園第七百四十九駐車場
水城ダム公園第七百五十駐車場
水城ダム公園第七百五十一駐車場
水城ダム公園第七百五十二駐車場
水城ダム公園第七百五十三駐車場
水城ダム公園第七百五十四駐車場
水城ダム公園第七百五十五駐車場
水城ダム公園第七百五十六駐車場
水城ダム公園第七百五十七駐車場
水城ダム公園第七百五十八駐車場
水城ダム公園第七百五十九駐車場
水城ダム公園第七百六十駐車場
水城ダム公園第七百六十一駐車場
水城ダム公園第七百六十二駐車場
水城ダム公園第七百六十三駐車場
水城ダム公園第七百六十四駐車場
水城ダム公園第七百六十五駐車場
水城ダム公園第七百六十六駐車場
水城ダム公園第七百六十七駐車場
水城ダム公園第七百六十八駐車場
水城ダム公園第七百六十九駐車場
水城ダム公園第七百七十駐車場
水城ダム公園第七百七十一駐車場
水城ダム公園第七百七十二駐車場
水城ダム公園第七百七十三駐車場
水城ダム公園第七百七十四駐車場
水城ダム公園第七百七十五駐車場
水城ダム公園第七百七十六駐車場
水城ダム公園第七百七十七駐車場
水城ダム公園第七百七十八駐車場
水城ダム公園第七百七十九駐車場
水城ダム公園第七百八十駐車場
水城ダム公園第七百八十一駐車場
水城ダム公園第七百八十二駐車場
水城ダム公園第七百八十三駐車場
水城ダム公園第七百八十四駐車場
水城ダム公園第七百八十五駐車場
水城ダム公園第七百八十六駐車場
水城ダム公園第七百八十七駐車場
水城ダム公園第七百八十八駐車場
水城ダム公園第七百八十九駐車場
水城ダム公園第七百九十駐車場
水城ダム公園第七百九十一駐車場
水城ダム公園第七百九十二駐車場
水城ダム公園第七百九十三駐車場
水城ダム公園第七百九十四駐車場
水城ダム公園第七百九十五駐車場
水城ダム公園第七百九十六駐車場
水城ダム公園第七百九十七駐車場
水城ダム公園第七百九十八駐車場
水城ダム公園第七百九十九駐車場
水城ダム公園第八百駐車場
水城ダム公園第八百一駐車場
水城ダム公園第八百二駐車場
水城ダム公園第八百三駐車場
水城ダム公園第八百四駐車場
水城ダム公園第八百五駐車場
水城ダム公園第八百六駐車場
水城ダム公園第八百七駐車場
水城ダム公園第八百八駐車場
水城ダム公園第八百九駐車場
水城ダム公園第八百十駐車場
水城ダム公園第八百十一駐車場
水城ダム公園第八百十二駐車場
水城ダム公園第八百十三駐車場
水城ダム公園第八百十四駐車場
水城ダム公園第八百十五駐車場
水城ダム公園第八百十六駐車場
水城ダム公園第八百十七駐車場
水城ダム公園第八百十八駐車場
水城ダム公園第八百十九駐車場
水城ダム公園第八百二十駐車場
水城ダム公園第八百二十一駐車場
水城ダム公園第八百二十二駐車場
水城ダム公園第八百二十三駐車場
水城ダム公園第八百二十四駐車場
水城ダム公園第八百二十五駐車場
水城ダム公園第八百二十六駐車場
水城ダム公園第八百二十七駐車場
水城ダム公園第八百二十八駐車場
水城ダム公園第八百二十九駐車場
水城ダム公園第八百三十駐車場
水城ダム公園第八百三十一駐車場
水城ダム公園第八百三十二駐車場
水城ダム公園第八百三十三駐車場
水城ダム公園第八百三十四駐車場
水城ダム公園第八百三十五駐車場
水城ダム公園第八百三十六駐車場
水城ダム公園第八百三十七駐車場
水城ダム公園第八百三十八駐車場
水城ダム公園第八百三十九駐車場
水城ダム公園第八百四十駐車場
水城ダム公園第八百四十一駐車場
水城ダム公園第八百四十二駐車場
水城ダム公園第八百四十三駐車場
水城ダム公園第八百四十四駐車場
水城ダム公園第八百四十五駐車場
水城ダム公園第八百四十六駐車場
水城ダム公園第八百四十七駐車場
水城ダム公園第八百四十八駐車場
水城ダム公園第八百四十九駐車場
水城ダム公園第八百五十駐車場
水城ダム公園第八百五十一駐車場
水城ダム公園第八百五十二駐車場
水城ダム公園第八百五十三駐車場
水城ダム公園第八百五十四駐車場
水城ダム公園第八百五十五駐車場
水城ダム公園第八百五十六駐車場
水城ダム公園第八百五十七駐車場
水城ダム公園第八百五十八駐車場
水城ダム公園第八百五十九駐車場
水城ダム公園第八百六十駐車場
水城ダム公園第八百六十一駐車場
水城ダム公園第八百六十二駐車場
水城ダム公園第八百六十三駐車場
水城ダム公園第八百六十四駐車場
水城ダム公園第八百六十五駐車場
水城ダム公園第八百六十六駐車場
水城ダム公園第八百六十七駐車場
水城ダム公園第八百六十八駐車場
水城ダム公園第八百六十九駐車場
水城ダム公園第八百七十駐車場
水城ダム公園第八百七十一駐車場
水城ダム公園第八百七十二駐車場
水城ダム公園第八百七十三駐車場
水城ダム公園第八百七十四駐車場
水城ダム公園第八百七十五駐車場
水城ダム公園第八百七十六駐車場
水城ダム公園第八百七十七駐車場
水城ダム公園第八百七十八駐車場
水城ダム公園第八百七十九駐車場
水城ダム公園第八百八十駐車場
水城ダム公園第八百八十一駐車場
水城ダム公園第八百八十二駐車場
水城ダム公園第八百八十三駐車場
水城ダム公園第八百八十四駐車場
水城ダム公園第八百八十五駐車場
水城ダム公園第八百八十六駐車場
水城ダム公園第八百八十七駐車場
水城ダム公園第八百八十八駐車場
水城ダム公園第八百八十九駐車場
水城ダム公園第八百九十駐車場
水城ダム公園第八百九十一駐車場
水城ダム公園第八百九十二駐車場
水城ダム公園第八百九十三駐車場
水城ダム公園第八百九十四駐車場
水城ダム公園第八百九十五駐車場
水城ダム公園第八百九十六駐車場
水城ダム公園第八百九十七駐車場
水城ダム公園第八百九十八駐車場
水城ダム公園第八百九十九駐車場
水城ダム公園第九百駐車場
水城ダム公園第九百一駐車場
水城ダム公園第九百二駐車場
水城ダム公園第九百三駐車場
水城ダム公園第九百四駐車場
水城ダム公園第九百五駐車場
水城ダム公園第九百六駐車場
水城ダム公園第九百七駐車場
水城ダム公園第九百八駐車場
水城ダム公園第九百九駐車場
水城ダム公園第九百十駐車場
水城ダム公園第九百十一駐車場
水城ダム公園第九百十二駐車場
水城ダム公園第九百十三駐車場
水城ダム公園第九百十四駐車場
水城ダム公園第九百十五駐車場

4　水城跡第26次調査補足

(1)　概　要

特別史跡水城跡の西門地区の発掘調査は，水城跡第26次調査として平成６～７年度の間にⅡ・Ⅲ期の門遺構，北面側の石垣，基底部石列，北側の官道との関連，東側土塁頂部の経塚等の多大な調査結果を得た[1]。平成８年度には待望のⅠ期の掘立柱建物の発見とともに，西土塁北面中段テラス部(K区)での柱穴４個の検出にも成功した[2]。この８年度の調査を第26次調査補足と称したが，今回K区の埋め戻しを行うに際し，土塁北面の土層観察を再度行い，記録に留めた後，埋め戻しを実施したものである。

作業はK区全体の再確認のため，清掃をやり直し，中段テラスより上の土塁北面の土層及びK区西壁の土層断面を実測・写真撮影し，土塁北面土層西半部の剝ぎ取りを実施した後，テラス面の埋め戻しと壁面保護の為の土嚢積みを人力で突き固めながら完了させた。調査期間は平成12年10月17日～11月24日。この間10月19日には九歴講座の受講者の見学，10月30日には周辺の大野城市住民の方々への現地説明等，他にも多くの見学者の来訪もあり，関心を呼んだ。

1）九州歴史資料館「大宰府史跡　平成７年度発掘調査概報」1996
2）九州歴史資料館「大宰府史跡　平成８年度発掘調査概報」1997

(2)　土層の観察

K区東・西壁の土層（Fig.33，PL.17）

この両面は，水城土塁北面中段テラスの土塁軸線に対して直交する方向の断ち割り土層だが，築造当初と思われる面より下は掘り下げておらず，初築以降の土層の状況を示す断面である。

東壁は既に平成８年度に土層実測が済んでいたものであるが，ここで図示しておきたい。まず，初築の上段土塁北面(K区の南壁)の下半を削り込み，土塁前面側に増補版築が施される。これは11m東方のD区の土塁断ち割りでも中段テラスを完全に埋める形で行われており，このK区では南北最大幅が40cm弱しか見られず，西壁土層に見られないことから，このⅢ期のものとされる地業の最西端部位にあたると考えられる。この地業は使用土・技法的には初築時本体のそれと何ら変わる所は無い。次に，中段テラス面を削り込んで厚さ30cm程のやや粗い盛土(東壁土層中11～13層)が施される。これは西壁側でも同様である。その後このテラス面はある一定期間放置されたらしく，チョコレート色の腐葉土成因の自然堆積土(旧表土)が厚さ20～30cm形成される。そして，次に上段土塁北面を幾らか削り落としてから類似版築の水平積土(図中の３～７層)が土塁前面側に継ぎ足されている。これは見た目には薄い互層の版築状に見えるが，褐色系の土がかなり混ざり，あまり締まっていない。この類似版築層は西壁側では認められず，このK区範囲内で終わっていると推定できる。この地業の後は人の手が加わった痕跡は見られず，土塁上端からの厚い自然流出土壌や腐植土で覆われて現在に至っている。

西門のⅢ期地業の最西端

類似版築層

以上のように，このK区東・西壁土層での観察の結果，当初の水城土塁築造の後に，更に都合３回の前面側への増補地業が施されたことが確認された。これも水城調査中における重要な

初築後に３回の増補

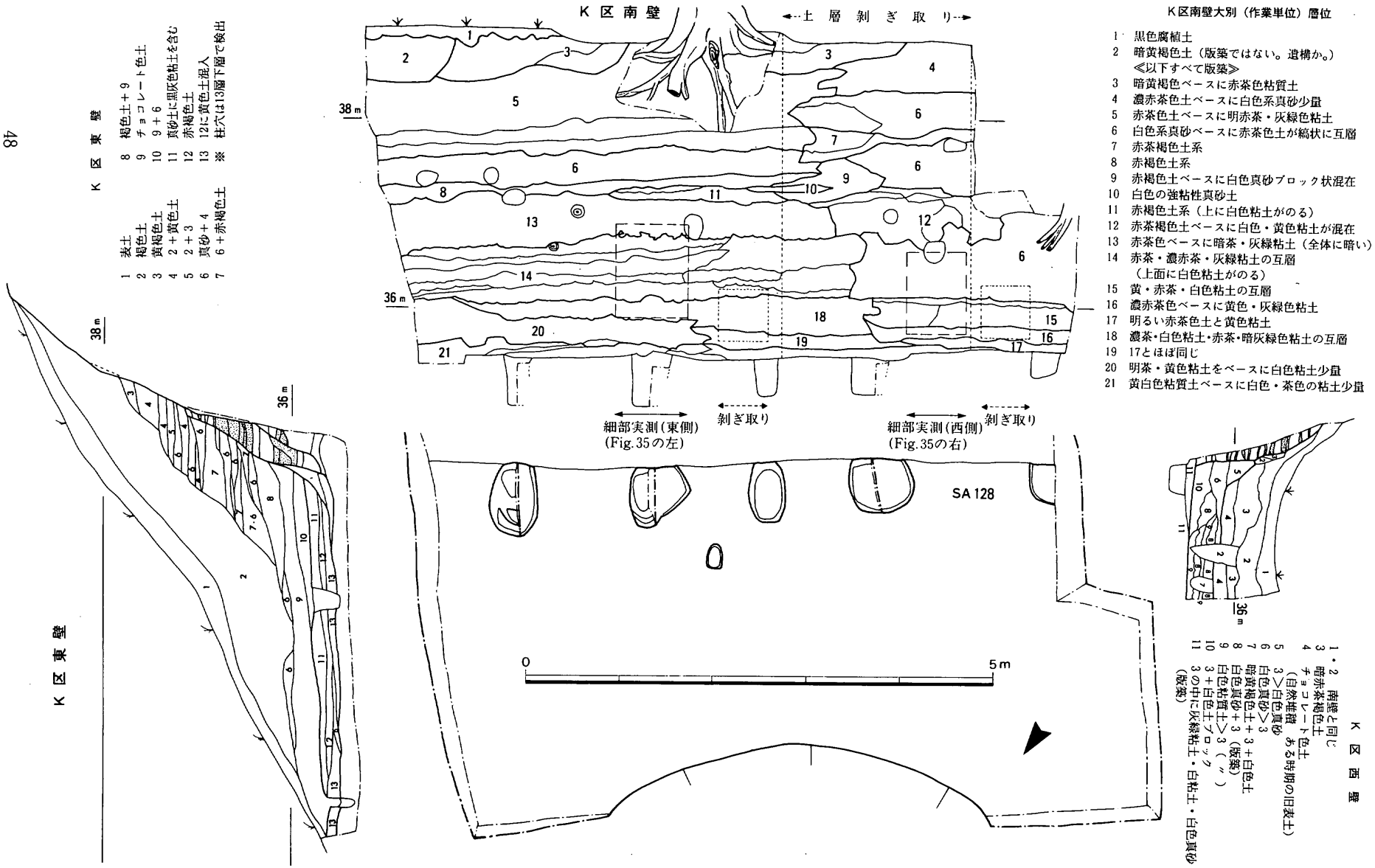


Fig.33 水城跡第26次調査補足K区南（大分類）・東・西壁土層実測図（1/60）

成果となろう。ただし，Ⅲ期以降と考えられる後半の2回の施工時期については出土遺物も無く皆目見当が付かない。

K区南壁（土塁上半北壁）の土層（Fig.33～35，PL.17～19，巻頭図版）

これは水城土塁の博多側に面した，土塁軸に対して平行の土塁側面の土層であるので，通常の断ち割り断面とは異なる。この壁面の直下には既報告のSA128の4柱穴が約1.5m間隔で位置し，堰板支柱とされている。また，この壁面は中段テラス面から3.6m程の高さがあるが，下から1.5m位までの下半部では70度，それから上は60度前後と，傾斜角度を変えている。

壁面は東西幅7.6m分を調査したが，大きく西側1/3部分とそれから東側とでは盛土の様相が異なる。即ち，図の右寄りのあたりで，上下方向の不連続線が集中する部位が認められ，このあたりに東西の「作業工区」の境界があったものと推定できる。堰板支柱とされるSA128の東から2・3・4番目の柱穴間が短くなっているのは，この工区の境目に近い位置である事を意識した結果を示すものかもしれない。また，この縦方向の不連続線は東西工区の新旧関係を示すものではない。各層毎には東側の積土の方が先にあり，それにかぶさるように西際の積み土が施されたり，またその逆の部位もある。よって，やや東側の工区が先行的に積土を行う傾向はあるが，全体としてはほぼ同時に，各大別土層段階毎に版築を行ったと解されよう。

「作業工区」

大別土層（Fig.33）を1～21層に分けたが，これらは土質の違いから，ほぼ各作業単位と把握できる。ただ，8～11層は他の各大別土層を区別する鍵層となると考えたため，ここであえて区別して示した。1・2層以外はすべて細かい版築土層である。

積土に使用された土は，白色系花崗岩培乱土・赤茶色粘質土・濃赤茶色粘土を最も多用しており，丘陵上～斜面におけるオリジナルな花崗岩風化土及び後2者はローム上部の風化土（所謂鳥栖ローム）である。次に淡赤紫色粘質土・淡黄色粘質土・白色粘土等が少量ずつ見られ，これらも花崗岩風化土中の脈沿いに少量認められる類ではあるが，八女ローム及びそれ以下の火砕流系土質の可能性も前2者には残される。また，灰緑色粘土がかなり他の土と混ぜられたり，単独で積まれたりしているが，これは土塁前面の濠側にて，水城に対しての基盤層として，水成堆積したものが各調査例で知られており，これを使用したものであろう。周辺の低地に二次堆積した真砂土や砂質系の土，砂利等は全く使用されていない。という事は，積土の大半が花崗岩風化土及びその上に載ったローム起因土壌ということになる。これらのことから盛土の膨大な量から見て，この近隣の八つ手状に平野部に延びてきた丘陵のうち幾つかが水城土塁築造のためにつぶされた可能性が強い。なお，現在発掘調査中の水城第33次調査（西門南東側テラス面）の所見から，小丘陵削り出しの状況が確認されており，この削り出された赤色系ロームも有効に積土に利用されたことが想定できる。次に，工程的観点から見てみると，各細層の積み上げに際し，上記した各々の土をきれいに互層に積んでいることから，各種土の採土時からの明確な選り分けが厳格に行われ，工事の現地においてもきちんと仕分けられていた事が判る。

砂質系土の不使用

採土時中の選り分け

大別土層毎に見てみると，まず6層とした赤白縞模様の，目にも鮮やかな独得な層が目に飛び込んでくる。これは白色系真砂土をベースに，赤茶色粘質土を間に丁寧に挟み込んでいった層で，西側では中位の各層に全体として厚さ2.3m範囲にみられ，東側では中位に1層だけ厚さ40cm部分にみられる。次に，濃赤茶色粘土や赤茶色粘質土をベースに灰緑色粘土が混ざった，全体に暗い感じのイメージを持つ層（5・8・13・14・16・18層）がある。この種の層は，東

赤白縞模様の互層

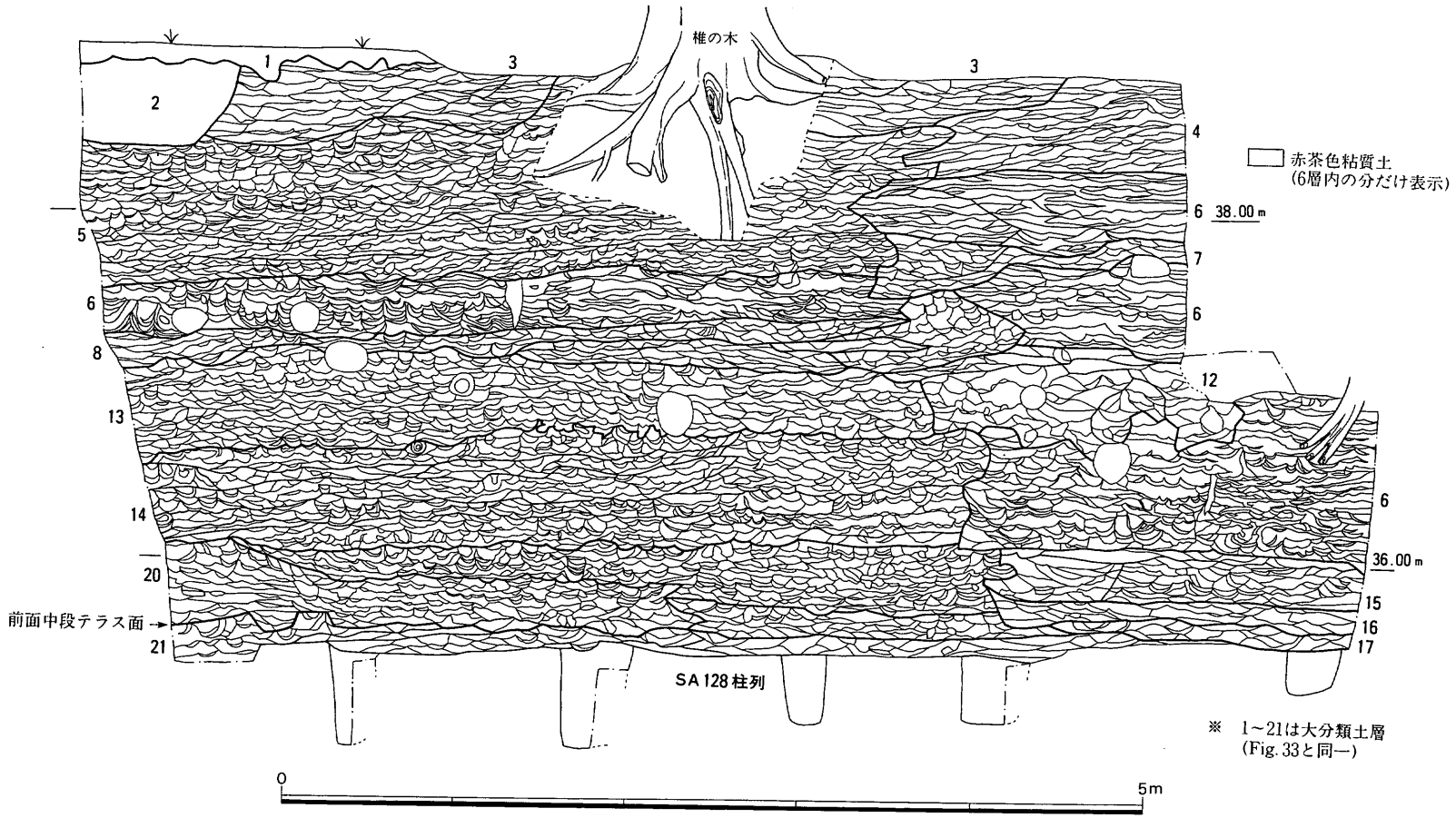


Fig.34 K区南壁土層実測図 (1/40)

半部では上～下位近くまで広く見られ，西半部では下位に僅か在るだけで，全体に東半が暗く，西半が明るいというイメージを抱かせる要因になっている。

中別土層分類（Fig.33の細線土層）までを含めて作業工程をみてみると，大きくは厚さ40～60cm毎の積土工程があり，更にその中は10～20cm毎の小工程が看取される。これを横方向(東西)の作業工程で見てみると，中小工程の中で，大旨２m(160～200cm)の長さで土質が変わる部分が各所に見られ，約１間毎の小作業単位が想定できる。

次に最小単位としての積み土の状況を見てみたい。Fig.34で示したように通常の土層実測図とは異質な観察結果となったが，各土質毎の区別による土層図であり，特に各積み土が10～15cm幅の単位で下方に彎曲している様子を敢えて図示したものである。Fig.35で示したものは，東西２ヶ所の小範囲を土質毎に実大転写したものを縮小して示したものである。これらの図に示すとおり，すべての部位が下方への湾曲状態をみせており，水平層というものは存在しない。この下方湾曲の横幅は10cmのものが最多で，12cm，８cmのものが次に多い。深さは，深いもので８～10cmあるが大半は５cm前後である。更に，ひとつの湾曲単位を見ると，少なくとも３種の土がタマネギの皮状に重なっており，薄く重層的に敷かれた幾種もの土の上から深く突き固められた状態が認められる。実際には土質毎に境目が区別出来ない，所謂マーブル状になる部位も多い事から，一種の土を敷き拡げる毎に常に突き固め作業が続けられたというのが実態で

タマネギの皮状の下方彎曲

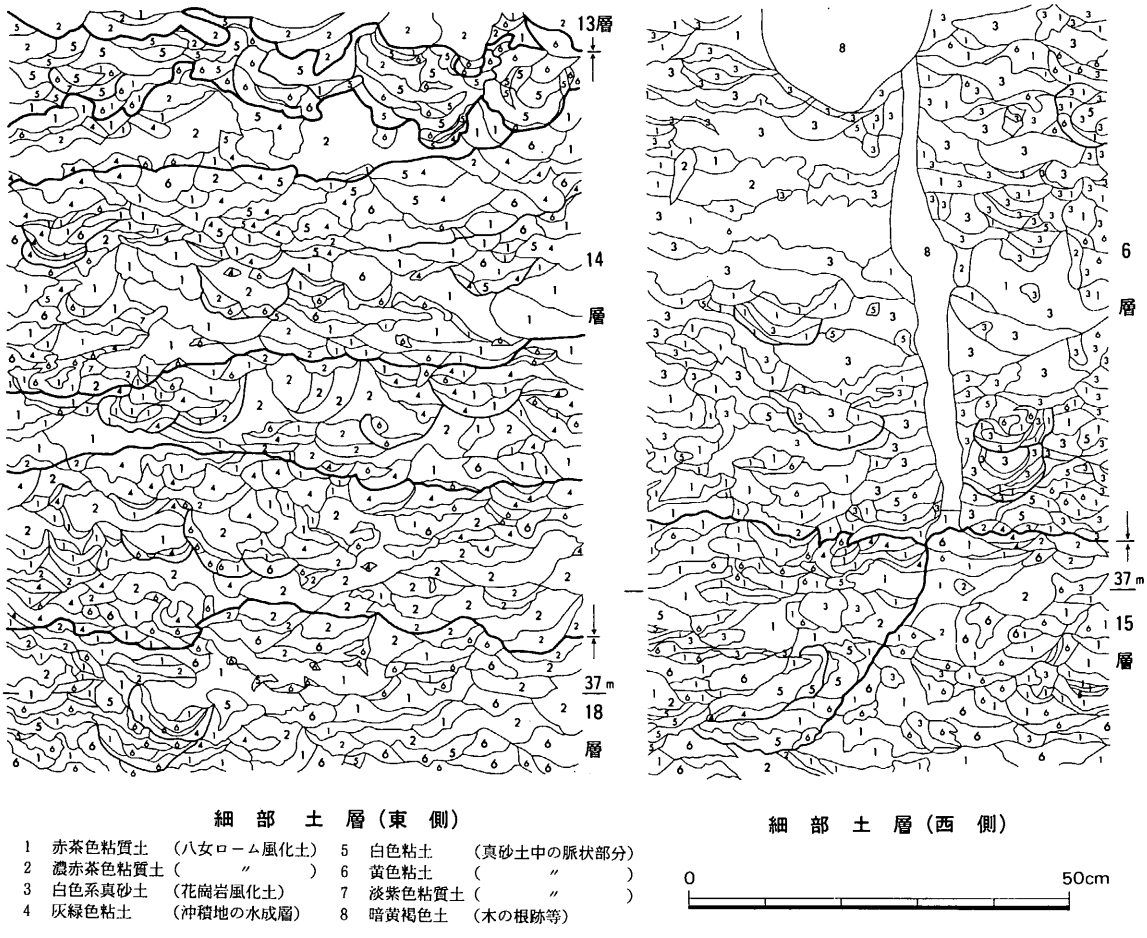


Fig.35 K区南壁土層細部実測図（1/10）

あろう。この下方彎曲状況は3層以下のすべての層において認められるが，上位の3・4層というのはそれ以下に比べ下方湾曲が浅く，遠くから見ると水平版築に近い感じに見える。また，同じ6層の赤白縞模様層でも，西半の上位のもの(標高38m前後)は下位のもの(同36m付近)に比べて下方湾曲がゆるく，両者は際立った差異を見せる。このことから，下方をより丁寧にしっかりと突き固めた意図が読み取れる。

下方をしっかり突き固める

この突き固め痕跡は，西側の水城跡第26次調査補足時の西門西側の各土層で既に確認しており，平面的にも版築土突棒痕としてボコボコの小穴状凹凸面が検出されている。この突き固めの道具が棒状のものであるとすれば，上記のように下方湾曲の横幅が12～8㎝であることから，それ以下の直径の細い棒状道具で，底面が丸くなったものと考えられる。ただ，これ程粘土や粘質土の多い積土で，しかも下方湾曲が深く入っている点からみると，かなり水分を含んだ状態で突いたという事になり，棒状のものであれば粘土が棒に付着して離れず，しかも粘り気の強い土であるから上下運動としての突き棒作業は極めて困難な状況ではなかったかと考える。この下方湾曲状況を仔細に観察すると，必ずしも真上からの垂直加圧だけではなく，右か左に偏った斜めの湾曲も見られ，これらの事からみて，これ程粘性の強い土を突くには棒などではなく，かえって足のかかとで踏み込んでいった方が良さような感想さえ抱く。

足のかかとで踏み込む

なお，このK区南壁面に直径25～10㎝大の丸い横穴状の土質の異なる部分が9ヶ所確認された。堰板を内側で固定する，土塁に直角方向の横方向木材の痕跡かと思い期待して精査したが，すべてそうではないことを確認した。すべて半裁して奥の方へ掘ってみたが，殆ど4～5㎝深さで周囲の積土と同じ土にぶつかってしまった。これらの成因の半数は古い時期の木の根に起因するもので，他は積土層の中での単なる土層の違いであることが判った。

(3)　小　結

今回の作業では，前回の排土中混入の瓦片数点の採集を除いては，新たな出土品は無い。

K区土層観察において，Ⅲ期の西門際西土塁上面の拡張（中段テラスを埋めた地業）がこのK区あたりで止まっており，更にその後2回にわたって前面テラス上に増補積土が行われたことが確認されたこと，次に，土塁軸線方向での積土「作業工区」の境目を確認したこと，積土が強い粘性を持つものを主体とし，上から下までの版築層にすべて下方湾曲の突き固め痕跡を認めた事等が今回の成果として掲げられる。

「作業工区」の一単位の範囲（東西長）については，今回の調査では明確にできないが，もし西門までの間だとすれば20m強の作業工区が考えられる。西土塁は尾根の北側削り出し部から西門まで約100m弱あるので，単純計算すれば5工区に分かれていたことになる。これについては今後の調査を俟つしか無い。

長さ20m強の作業工区

現状のK区南壁は，表土除去後の本体面が極めて硬化してガチガチ状態である。水城土塁が幾星霜を経て旧状を保ってきた由縁であろう。この築堤作業において想定されることは，積み土の種類毎に採土場において峻別し，それを現場に運搬し仮置きして，更にそれらを計画的に土の種類毎に積み上げ，すべての土に対して突き固めを施しているという，この作業手順の厳格差である。これらから推して，築堤作業全体の指揮系統システムのそれまでに無い異質な強固さが強く感じられる。強力な国家的事業としての強い意志を改めて読み取った次第である。

指揮系統システムの強固さ



(1) 水城第26次補足
K区南壁（北から）



(2) 水城第26次補足
K区東壁（西から）



(3) 水城第26次補足
K区西壁（東から）



(1) K区南壁西半
（北から）



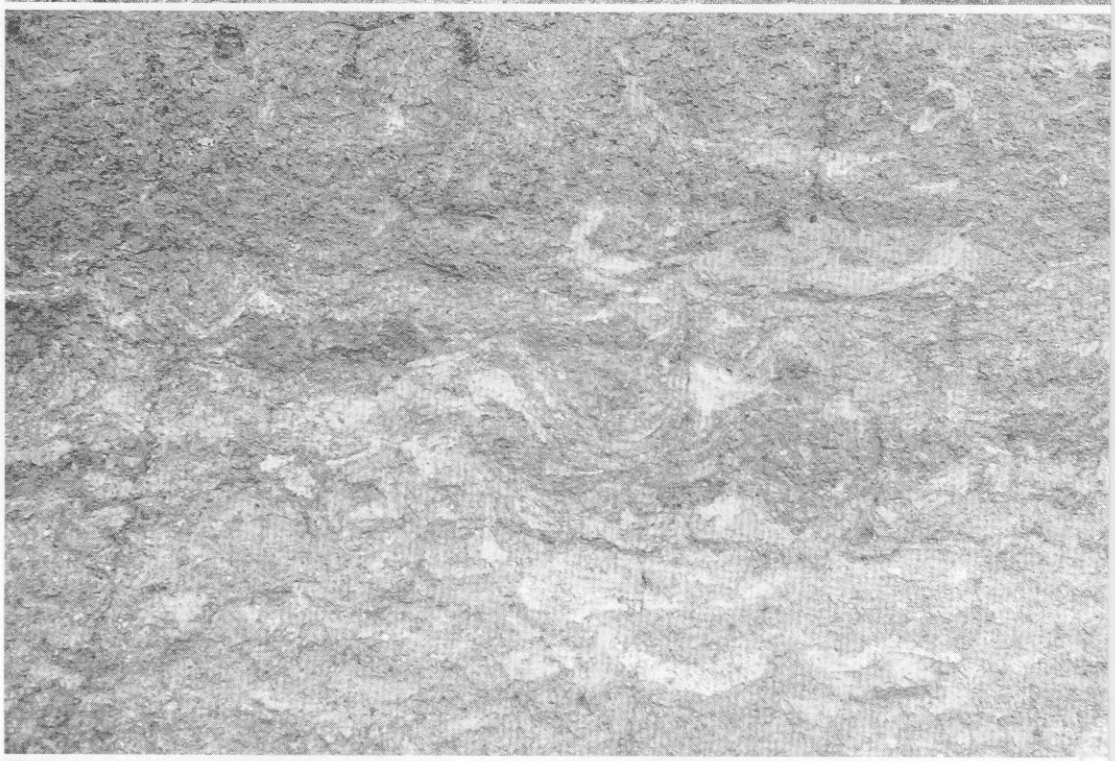
(2) K区南壁東半
（北から）



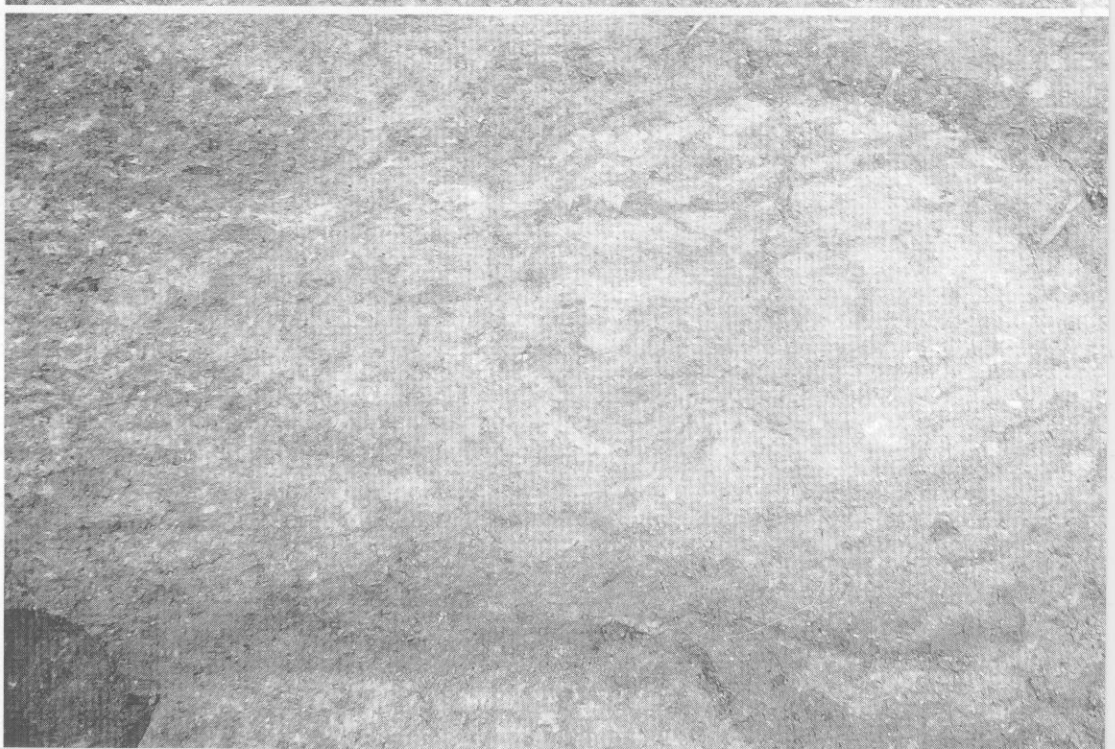
(3) K区南壁中央下半
付近近影（北から）



(1) K区南壁西寄り
下位近影（北から）



(2) K区南壁中央東寄り
下半（14・18層）
近影　（北から）



(3) K区南壁東寄り
上半(6層)(北から)

5　水城跡第32次調査（木樋埋設推定地の調査）

(1) 概　要

経過　今回の調査は，大宰府史跡発掘調査第６次５ヶ年計画の第３年次の計画調査になる。調査地は水城跡（博多側）の基底部にあたる。ここは西側の隣接地より1.5m程低くなっており，その理由が疑問点として残されていた。このことから，第６次５ヶ年計画を立案するにあたって，この部分の解明を一つの目的とした。平成９年度には，太宰府市公務課が実施した水城地区の側溝設置工事に伴うに立会調査において，調査地の南側にあたる，太宰府側の基底部裾部（Fig.32参照）で木樋の抜き取り跡と思われる掘形を検出した[1]。土層の観察で確認した掘形は，水城基底部の盛土層に切り込んでいた。土層観察では上端の東西幅は約8.5m，深さは1.5mまで確認しており，数段に分けて掘り下げられていた。この時点では本格的な調査を実施することは不可能であったため，遺構の確認と最低限の図面・写真記録に留めたが，３箇所目の木樋の存在を確認することができたことは大きな成果であった。この地点については平成７年度に行った電気探査（ウェンナー法による水平探査）の結果から，木樋の埋設が推定されている箇所でもあり，この立会調査でこれを確認し，証明することとなった。これらのことをふまえ，さらにこれを確定するため，平成11年度の計画調査については，木樋吐水口構造と外濠関連の解明を主眼として，博多側土塁裾部の木樋埋設推定地の調査を実施することとした。

隣接地より低い

電気探査

調査は平成11年２月から着手した。２月21日にトレンチを設定して，人力での発掘を開始したが，盛土の質やその深さから人力での発掘作業は困難と判断し，２月24日より重機による掘削に変更して作業を進めた。約30cmの耕作土（近世）を除去した段階で調査区北半部が北への段落ちになることが解り，広範囲での調査が必要と判断したため，年度が明けた４月20日に再度調査区を重機で東側と北側に拡張した。その結果，段落ち（SX134）は後世の掘削によるものであり，木樋は既に抜き取られていることが判明した。木樋抜き取り掘形（SX135）は遺構検出面から最深で３m程の深さがあり，全体を掘削することは不可能であったため部分的な調査となった。また，SX135を掘り下げた後，抜き取り以前の遺構として段状の落ち込み（SX140）と溝状遺構（SX139）を検出した。しかしSX135の埋土下層が軟質層であったため，調査途中で大雨によって調査区壁面が大きく崩落してしまった。このため土層図を完成することができず，報告中の挿図は空白のまま掲載した。調査は８月23日に終了し，24・25日に重機による埋め戻しを行い原状に復した。調査面積は110㎡である。

位置　調査地はJR鹿児島本線水城駅の西南側にあたり，道路（幅２m）を隔てて線路に接している。地番は大野城市下大利４丁目691－１である。水城土塁の外側（博多側）基底部で，西門跡から東に約190mの距離に位置する。そしてこの地の約160m東方には，平成２年度に太宰府市教育委員会が第17次調査[2]として調査した，木樋抜き取り跡が検出された箇所がある。また調査地の西側は，整備時の盛土となり，北側では個人住宅が築造されているなど，旧地形を全く留めていない。東側ではJR鹿児島本線の線路により土塁が分断される。

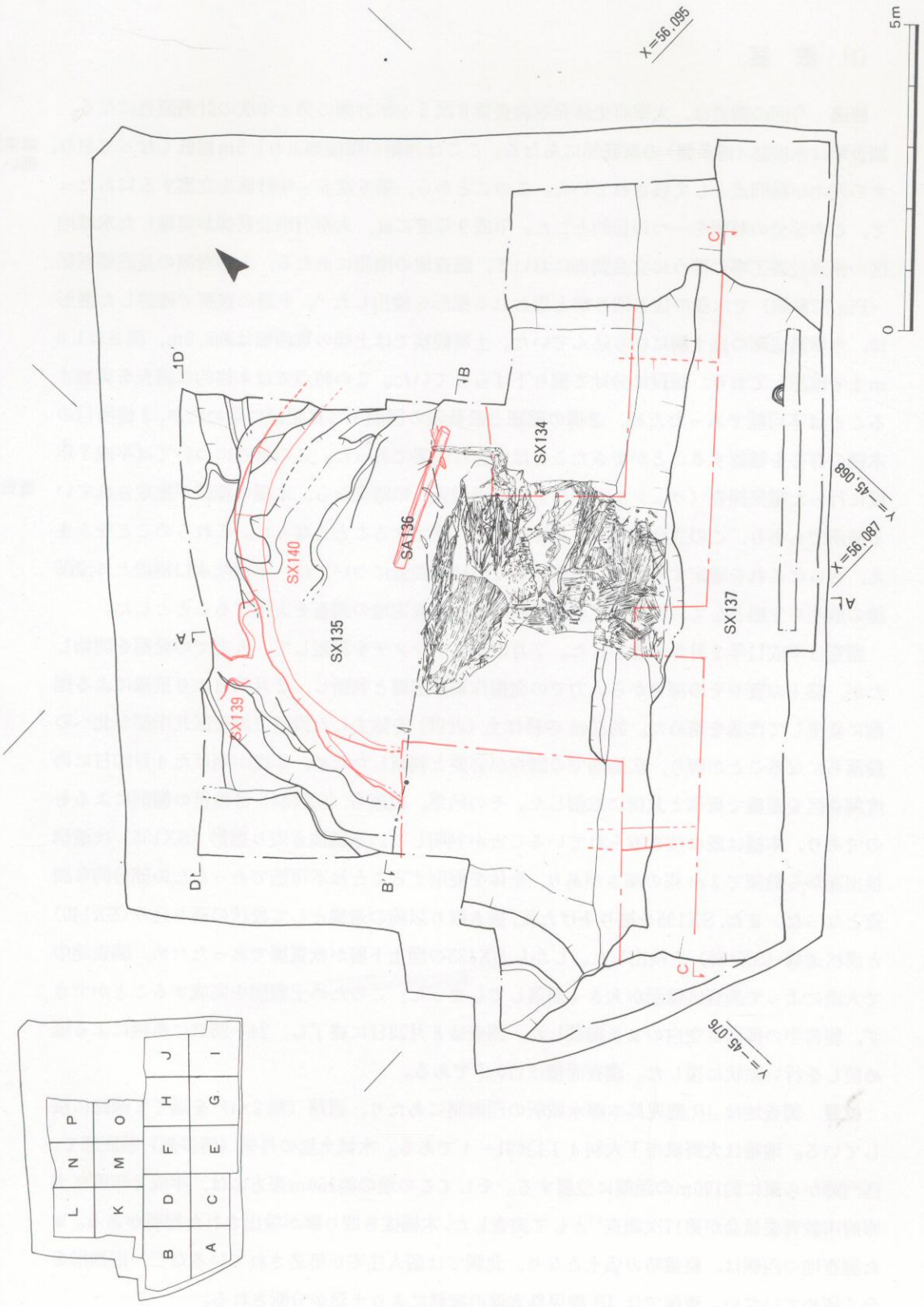


Fig.36　水城跡第32次調査遺構配置図（1/100）

遺跡の概要

水城跡は現在までに30箇所以上の調査が行われており，東・西の門や外濠，土塁や木樋の構造など断片的ではあるが明らかになっている。今回調査した木樋埋設地については，既に２箇所で調査が行われており[3]，木樋本体の構造や取水口部分の下部構造など，その解明のために多くの手がかりが得られている。外濠については，第３・５次調査で幅約60mを確認しており[4]，また，大野城市教育委員会の調査によって西門西側において60m幅の濠岸を検出するとともに，外濠内の砂層の堆積を確認している[5]。さらに，第26次調査では西門に通じる官道を検出するとともに，外濠が官道の東側で終わり，官道の西側には存在しない可能性が強いことを確認している[6]。しかし木樋吐水口とこれに繋がる外濠部分の構造は未だ解明されておらず，今回の調査ではこれらについての解明に期待がかけられた。

1） 九州歴史資料館「大宰府史跡　平成９年度発掘調査概報」1998
2） 太宰府市教育委員会「水城跡　大宰府の文化財第24集」1994
3） 福岡県教育委員会「水城　昭和50年度発掘調査報告」1976
4） 福岡県教育委員会「水城　昭和51・52・53年度の発掘調査概報と史跡環境整備事業実施概要」1976
1）・3）に同じ
5） 大野城市教育委員会「水城跡Ⅰ　大野城市文化財調査報告書第43集」1995
6） 九州歴史資料館「大宰府史跡　平成７年度発掘調査概報」1996

(2) 基本層序

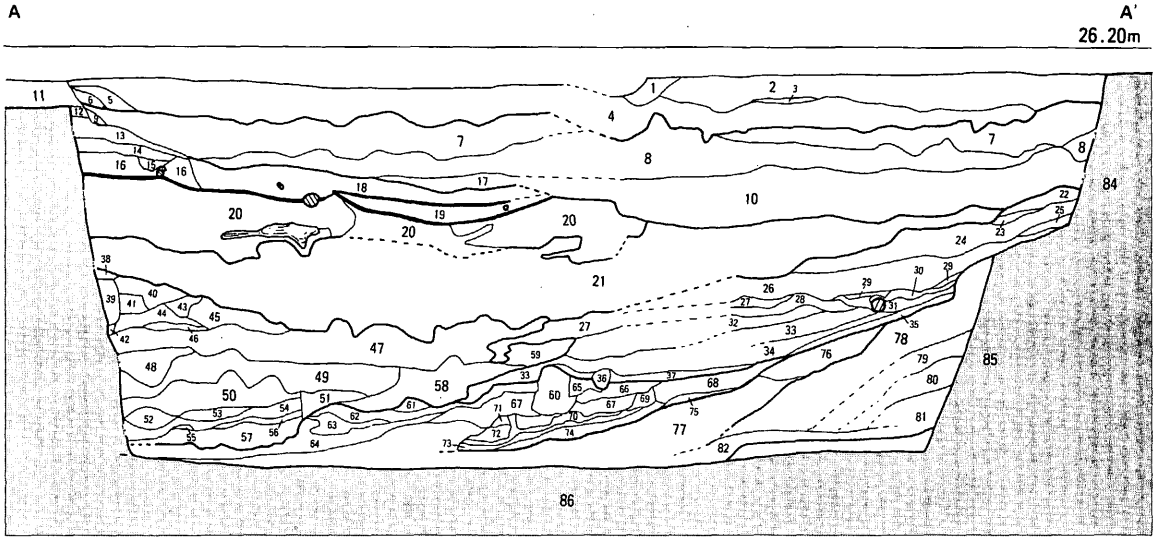
まず最上層には整備時の盛土が厚さ約１m程あり，この下には整備以前の農地と思われる耕作土と東西に走る水路がある。耕作土の厚さは約0.3mので，これを除去すると遺構面となり，北への段落ち遺構（SX134）と木樋抜き取り掘形（SX135）が現れる。このレベルで既に調査区西端には黄褐色粘質土の，東端には青灰色粘質土の地山が認められる。地山部分の標高は約26mで，調査地南側の太宰府側基底部で確認されている地山レベルとほぼ同じである。地山は上層から黄褐色粘質土，青灰色粘質土，暗茶色粘質土，灰色粘土，暗茶褐色腐植土の順で堆積している。遺構が掘り込まれるのは灰色粘土までで，最下層の暗茶色腐植土は調査区全面にほぼ同じレベルで遺存している。

(3) 遺構と遺物

段落ち遺構

SX135（Fig.36，PL.21）

A・C・E・G・I区に跨る段落ち遺構で，土塁中軸線にほぼ平行のプランをもち，北側へ緩やかに落ちる。検出当初は外濠の上端と考えたが，SX137を切っていることや出土遺物から，後世の掘削であると判断した。SX135が埋没した後に掘削される。埋土は大きく上下２層に分かれ，上層は暗灰色土と灰褐色粘質土中心の耕作土の層である。これらには近世の遺物が入る。下層は淡灰色粘質土・暗灰色粘質土・灰茶色土が整然と堆積しており，それぞれの層の上面が平坦になることなどから，人為的に整地された層位と考える。特に淡灰色粘質土・暗灰色粘質土中には木製品など遺物が包含される。以下，出土遺物は各層位ごとに記述する。



1 灰褐色土
2 黒茶色土（現代溝埋土）
3 黄色粗砂
4 暗灰色土
5 灰色砂混灰色粘質土
6 5より砂質
7 淡灰色粘質土
8 暗灰色粘質土
9 淡茶色砂質土
10 暗灰茶色土
11 黒色土
12 灰茶色土
13 白茶色土
14 青灰色粘土混暗灰色粘質土
15 暗茶色土
16 青白色粘土混黒色粘土
17 暗灰色砂混暗灰色土（c）か
18 黒褐色粘土ブロック＋淡黄色粘土
19 淡黄色粘質土
20 青灰色粘土・黒色粘土・淡黄茶色粘土の混
21 黒色粘質土
22 21より淡色

SX137上層
SX137上層
SX135①層
SX135③層
SX135④層

23 灰黄色砂
24 黒灰色砂質土
25 黒灰色粗砂
26 青灰色粘土（灰色土・黒色粘土混）
27 黒色粘土混灰色砂
28 暗茶色砂
29 青灰色粘土＋黒茶色粘土
30 暗茶色砂
31 暗茶色粘土＋26
32 淡灰黄色砂
33 26よりやや粗砂
34 黒茶色砂質土
35 黒茶色粘土
36 青灰色粘土ブロック
37 暗茶色粘質土（軟質・腐植土か）
38 炭混暗茶色粘質土
39 黒灰色粘土混青灰色粘土
40 44より炭多く粘質
41 白灰色粘質土
42 45よりやや軟質
43 白灰色粘土
44 灰色粘質土

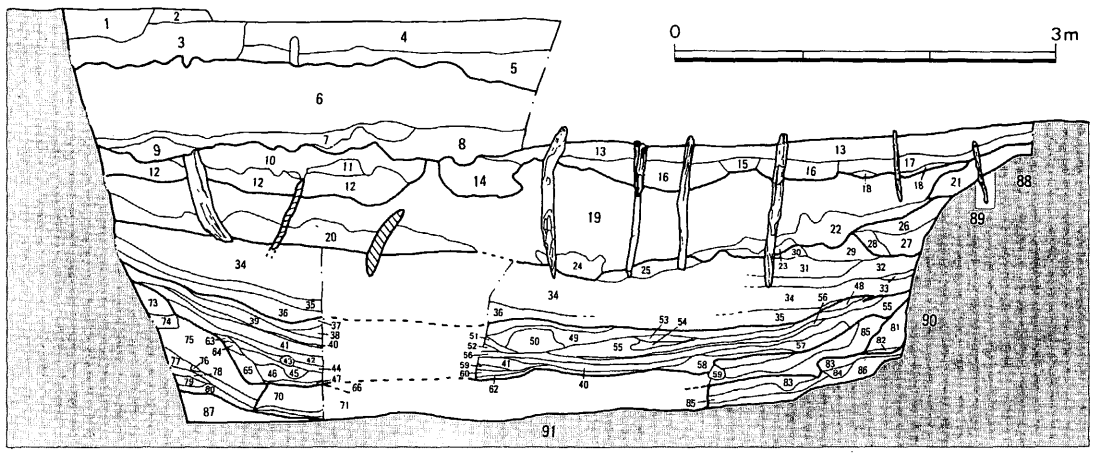
SX135⑤層
SX135⑥層

45 腐植土（黒茶色土）
46 黒灰色粘質土
47 茶灰色粘質土
48 白黄色粘土・青灰色粘土混灰色粘土
49 48より粘質
50 白黄色粘土（茶色粘質土混）
51 黒色粘土＋青灰色粘土の混ざり
52 暗黒色粘土（炭化物多く含む）
53 50＋84
54 60より粘質
55 82＋85
56 青灰色砂質土
57 青灰色粘土＋67
58 淡灰茶色粘土
59 61に似るがやや色濃い
60 黒茶色粘土ブロック
61 淡黄褐色粗砂（木質・砂利多し）
62 淡灰色粘土ブロック
63 青灰色粘土（小）混67
64 淡茶灰色砂
65
66 黒茶色粘質土（腐植土）

SX135③層
SX135⑦層

67 暗灰色粗砂
68 淡灰色粘土
69 茶褐色粗砂＋青灰色粘土
70 淡灰色粘土
71 黒茶色粘土ブロック
72 67＋71
73 青灰色砂
74 68と同じ
75 灰色砂（炭水木混）
76 明黄褐色粗砂
77 灰色粗砂
78 青灰色粘土（ブロック状）
79 灰色砂
80 80＋81
81 灰色粘土
82 灰色細砂
83 82＋86
84 青灰色粘土
85 灰色粘土
86 黒茶色粘質土

SX135⑦層
SXX140 a 層
SX140 b 層
SX140 d 層
地山



1 暗灰粘土
2 淡灰土（耕作土）
3 灰褐色土
4 暗灰色土
5 灰褐色粘質土
6 暗灰色粘質土
7 淡茶色砂混灰色土
8 暗灰茶色土
9 暗灰色砂質土
10 黒色粘土ブロック混淡黄茶色粘土
11 黒＋淡青灰＋淡茶色粘質土
12 淡青灰粘土混黒色（粘質）
13 青灰粘土＋白色粘土＋灰黄粘質土
14 淡青灰色粘土混淡黄茶色粘土
15 15の全部が細かく混ざる
16 15よりブロック大きく粘性高い
17 15より粘性高い
18 褐色粗砂
19 黒色粘質土
20 19に灰色砂混
21 黄色粘土混黒色土
22 19に粗砂混（14に同じか）

SX137上層
SX135①層
SX135③層
SX135④層

23 21に黄色粘土混
24 黄色粘土ブロック＋灰黄色砂
25 22に黄色粘土混
26 暗灰色砂質土
27 26に黄色粘土混
28 暗灰色土
29 青灰色粘質土
30 黄色粘土ブロック
31 灰色粗砂
32 黄色粘土混黒色粘質土
33 灰黄色粘質土
34 褐色粗砂
35 淡黄褐色粗砂
36 黄褐色粗砂
37 灰色粗砂
38 黒茶色粘土＋青灰色粘土
39 灰色砂質土
40 淡黄褐色粗砂
41 淡灰色粘土（64と同か）
42 70＋71
43 黒茶色粘土
44 41に同じ

SX135④層
SX135⑤層
SX135⑥層

45 白灰色粘土
46 黒色粘土
47 青灰色粘土
48 暗茶色粘土
49 黒茶色粘土
50 白黄色粘土
51 茶褐色粗砂
52 青灰色粘土
53 黄褐色粗砂
54 茶色粘質土
55 淡灰色粘土
56 淡黄色粗砂
57 55に同じ
58 淡黄色細砂
59 淡灰色粘土
60 白黄色細砂
61 灰色粗砂
62 暗茶褐色砂（硬化層）
63 淡灰色粘土（ブロック）
64 灰色砂
65 灰茶色砂
66 馬蹄層境混灰色砂

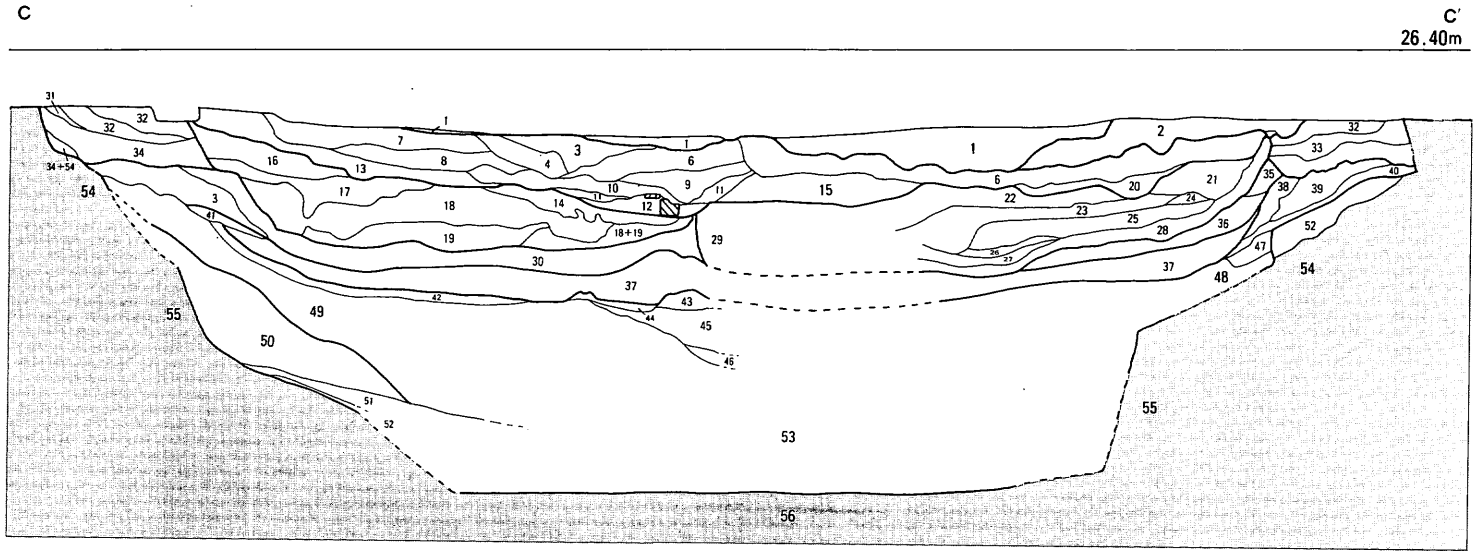
SX135⑪層
SX135⑦層

67 灰色・黄色粗砂の互層
68 黄色粗砂
69 黄褐色粗砂
70 淡青白粘土
71 灰色粘土混黄褐色粗砂
72 黄褐色粗砂
73 黒色粘土
74 淡灰色粘土（ブロック）
75 青灰色粗砂層（粘土混）
76 青灰色粘土
77 黒茶色粘質土
78 黄褐色粗砂
79 灰色粘土
80 黄褐色粗砂
81 灰色粘土
82 灰色細砂
83 灰色粘土
84 灰色粗砂
85 灰色粘土
86 黒茶色粘質土
87 灰色粗砂
88~91 灰色粘土・黒茶色粘質土

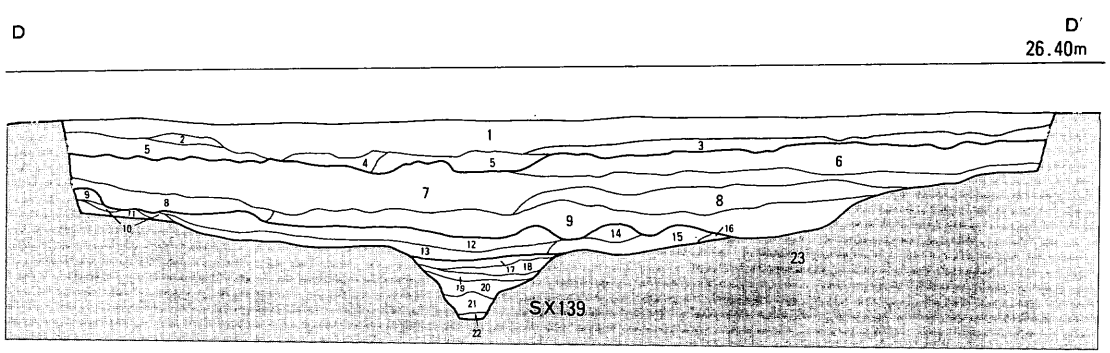
SXX140 a 層
SX140 b 層
SX140 c 層
SX140 d 層
地山

0
4m

Fig.37　南北土層，東西土層・SX136実測図（1/60）



1 黄白色粘土ブロック混灰色土
2 明茶褐色土
3 茶黄色土
4 白黄色粘土ブロック混暗灰茶土
5 暗灰色粘土若干混黒色土
6 淡灰茶色土
7 黄白色粘土ブロック混灰色土
8 灰黄色土
9 暗灰褐色粘質土
10 暗灰黄色土
11 黄灰色粘土ブロック混暗灰色土
12 黒茶色粘質土（SX134堰土）
13 茶灰色土（黄色粘土粒混）
14 暗灰色土
15 青灰粘土混黒色粘質土（ベトベト）
16 青白色粘土ブロック（大）混茶灰色土
17 青白色粘土ブロック（細）混黒茶色土
18 青白色粘土ブロック（大）多量混黒茶色土
19 黄茶色粘土ブロック・粒混黒茶色粘質土
20 暗茶色粘質土
21 青灰色粘土ブロック（細）混暗暗茶灰色粘質土
22 暗茶灰色粘質土（青灰粘土僅かに混）
23 青灰粘土ブロック混黒色粘土
24 33より粘土ブロック多い
25 青灰粘土ブロック混黒茶色粘質土（茶色粘土混）
26 26に同じ（やや黒色強い）
27 26より色薄く茶色濃い
28 暗黒色粘質土（青灰粘土・黄褐粘土若干混）
29 暗茶灰色粘質土（青灰粘土僅かに混）
30 黄茶色粘土粒・青灰色粘土粒混黒茶色粘質土（混ざり多し）
31 黄褐色粗砂
32 茶褐色土
33 暗茶褐色土
34 茶白色粘土ブロック（細）＋暗灰色粘質土（斑）
35 暗灰色粘質土
36 青灰粘土ブロック混黒色粘質土（20と同か）
37 黒色粘質土
38 茶白色粘土＋黒色粘土＋青灰粘土
39 青灰粘土ブロック・茶白色粘土ブロック（細）混黒色粘土
40 黒茶色粘質土（軟）
41 37＋51
42 黒灰色土（やや粘質）（削り屑多量）
43 黒茶色粘質土（腐植土・軟）
44 淡灰色粘質土（軟）
45 淡青灰色粘土（水分が多い）
46 45＋灰色粘土（軟）
47 黒茶色粘土
48 47よりやや砂質
49 粘質土の互層
50 青灰色粘土と粗砂の流転層
51 灰色粗砂
52 灰色粘土
53 粗砂層
54 青灰色粘土
55 灰色粘土
56 黒茶色粘質土（腐植土）



1 暗灰色土
2 淡灰褐色土
3 灰褐色粘質土
4 白灰色粗砂
5 暗灰褐色土
6 淡灰色粘質土
7 暗灰色粘質土
8 7よりやや淡色
9 暗灰茶色土
10 灰茶色粘質土
11 白灰色粘土
12 黒色粘質土
13 黒灰色粘質土
14 黄灰色粗砂
15 灰青色粗砂
16 暗灰色粗砂
17 黄褐色粗砂
18 灰色粗砂
19 灰色細砂
20 青灰色粘土混淡灰色粗砂
21 暗灰色砂
22 灰色粘土＋21
23 青灰色粘質土



Fig.38 SX134東西トレンチ・調査区北壁土層実測図（1/60）

淡灰色粘質土層出土遺物

須恵器（Fig.39，PL.26）

杯（1・2）いずれも底部のみの小片である。1は高台端部を欠き，高台が剥離する面には接合の沈線が観察できる。底部はヘラ切り未調整で高台付近はナデ。2は高台端部が若干跳ね上がるもので底部はヘラ切り未調整である。2は復元高台径6.0cmを測る。7世紀後半代。

甕（3）細かい格子文の叩きを有する胴部片。内面の欠損部分は焼き歪みによって剥落したものである。胎土は精良で，黒灰色を呈する。

瓦類（Fig.40，PL.29）

軒平瓦　軒平瓦（1）本調査で唯一出土した軒瓦で，剥離した顎部片である。左方に流れる唐草が観察できるが，摩滅が著しく文様を判別できない。顎部粘土接合面で剥離するが，平瓦接合の刻み目等はない。胎土は砂粒を多量に含み，黒灰色を呈する。

丸瓦（2）玉縁部分のみの破片。外面はヨコナデで下位に2条の沈線を有し，内面には布目痕が残る。側端部は凹面からの分割裁面と破面が見られ，端部は未調整である。胎土は精良で，黒灰色を呈する。

平瓦（3～5）3・4は斜格子叩きを有する。3は正格子に近い斜格子であるが摩滅が著しく不明瞭である。凹面には目の粗い布目痕が残る。4は細長い斜格子叩きで部分的にナデ消される。凹面には粗い布目痕が残る。須恵質で灰黄色を呈する。5は須恵質であるが摩滅の著しいもので，叩きは明瞭ではないが，縦位の縄目叩きと思われる。凹面には円弧を描く糸切り痕が観察でき，布目痕も見える。側端部は破損しているものの，分割界線らしき凹線があることと端部に分割面の段の名残があることから，桶巻き造りで側端部付近であると考える。胎土は粗悪で砂粒を大量に含み，灰色を呈する。

石製品（Fig.42，PL.37）

石鏃（1）黒耀石の打製石鏃である。粗い剥離で刃部の調整も粗い。長さ3.8cm，幅1.8cm，重さ2.7ｇ。

木製品（Fig.41，PL.33）

檜扇　檜扇（3）板目材の薄板に穿孔を1孔持つもので，檜扇の骨の基部片と思われる。要の孔は錐状のもので穿孔し，末部の片側に刳り込みを入れる。装飾もしくは綴紐のためのものか。現存長6.6cm，幅1.4cm，厚さ0.22cmを測る。最下部出土。針葉樹の板目材。

桶枠（6）薄板に切り込みを入れて曲げるもので，上端部以外は欠損する。桶の外枠であろう。厚さ1㎜で広葉樹の板目材である。

下駄（8）後部の約半分が残存する。差歯下駄と思われるが，腐植が著しくホゾや使用痕などは確認できない。横緒孔の一部が一箇所残る。厚さ2.7cmを測る。針葉樹の柾目材。

暗灰色粘質土層出土遺物

須恵器（Fig.39，PL.26）

蓋（4～10）4・5はいずれも身受けの返りを有する小片である。軟質のため摩滅が著しい。断面三角の返りは屈曲が鈍く，内外面ともヨコナデで，5は外面が黒灰色を呈する。復元口径9.4•10.9cm。7世紀中葉。6～10は端部を折り返すものと屈曲させるものがある。6は小型で

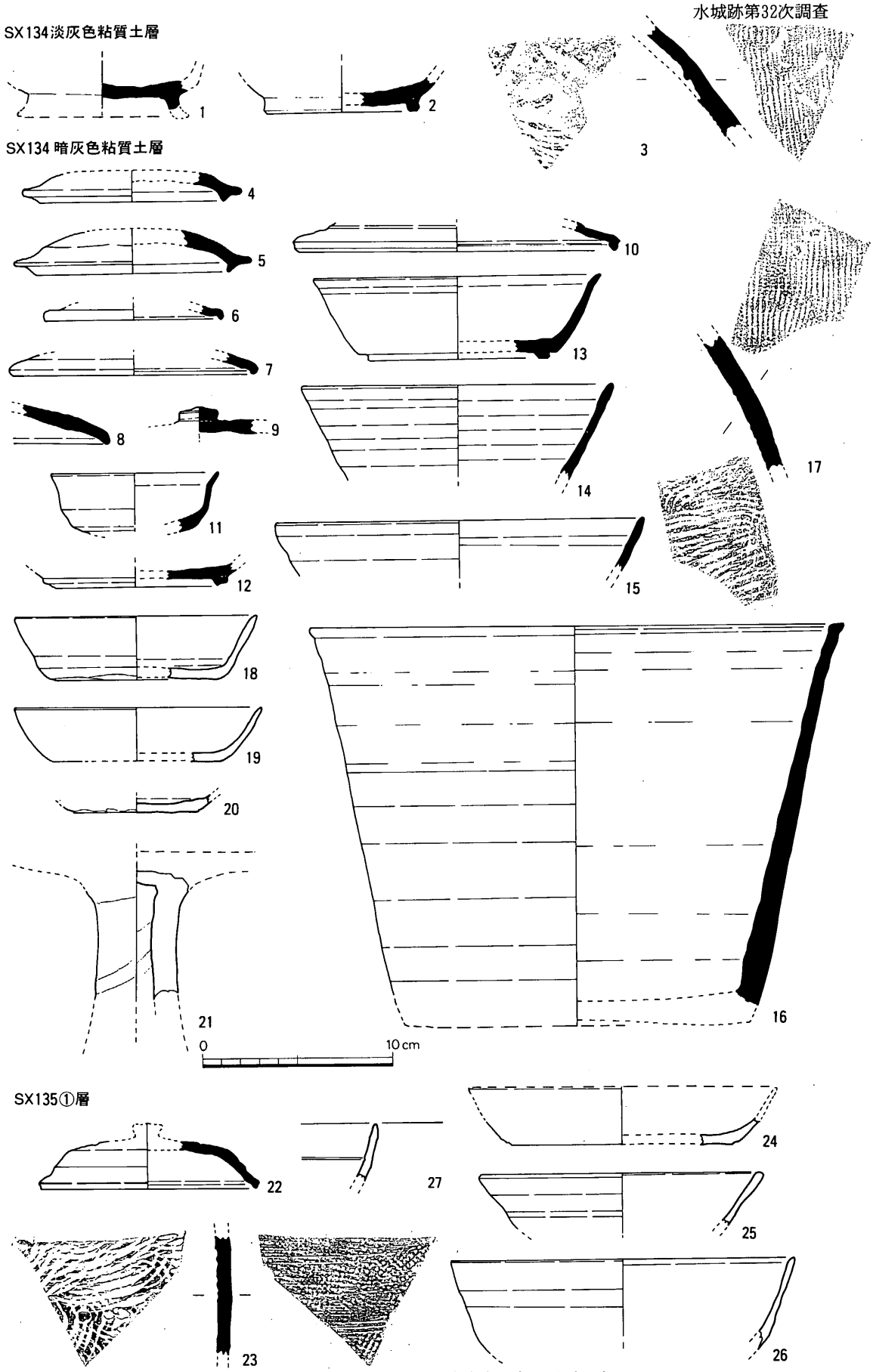


Fig.39　SX134・135埋土出土土器実測図（1/3）

器肉が薄く端部の稜が明瞭である。6・7は復元口径9.2・12.6cm。8・9は小片のため口径の復元はできない。9は天井部のみの破片で，低い宝珠形の撮を有する。10は大型で端部を強く屈曲させて稜をシャープに造り，段をもつ。復元口径16.4cm。

杯（11～13）11は小型の杯で体部と底部の境に稜をもち，口縁が緩やかに外反する。体部の器壁は薄く底部は肥厚する。外面は調整が粗く，体部に皺状の凹凸がある。堅緻に焼成され暗灰色を呈する。12・13は断面台形の高台を有し，12の高台は内側のみが接地面となる。12の外底部はヘラ切り未調整，13の外面は灰を被る。復元口径8.6・8.2cmを測る。

椀（14・15）14は体部が直線的に外に開く。口縁部は肥厚させるが体部の器壁は薄い。15は口縁部小片で，緩やかに湾曲する。いずれも内外面ともヨコナデで，復元口径15.8・19.2cm。

鉢（16）平底の深鉢で底部を欠損する。口縁端部は平坦につくり，内外面に若干突出する。外面は中位から下位にヘラケズリを施す。内面は燻されたような黒色を呈し，断面は白灰色，外面は灰色を呈する。復元口径26.2cmを測る。8世紀中頃～後半代。

甕（17）甕の胴部小片で，外面には縦位の細かい格子叩きを有し，その後上半に横位のカキメを施す。内面には平行線に近い大きい円弧と小さい円弧の青海波当て具痕が見られる。外面は灰を被り灰白色を呈する。

土師器（Fig.39，PL.26）

杯（18～20）いずれも糸切り離しで，内面はナデ仕上げする。18は口縁が肥厚し，底部に板状圧痕を有する。19は体部がやや内彎する。20は底部のみの小片である。復元口径12.5・13.0cm，復元底径8.4・9.2・6.4cmを測る。13世紀代

高杯（21）脚上部のみの破片で杯部を欠失する。外面は摩滅のため調整不明，内面には絞り痕が認められ上位はヨコナデ調整する。明赤褐色を呈する。

瓦類（Fig.40，PL29・30）

丸瓦（6～8）6・7は縄目叩き。6は凸面をナデ消しているが広端部付近に縄目痕が残る。凹面には布目痕が残り，端部のやや内側に縄目の分割界線が見られる。端部は凹面からの分割裁面と，破面が観察でき，端部はヘラ切り未調整である。胎土は精良でやや軟質，黒灰色を呈する。7は凸面をナデ消すが端部付近に縄目が残る。全体にタテナデで，図面上位はヨコナデ，下部には指頭圧痕が観察できる。内面は斜位の糸切り痕と布目痕があり，粘土板の合わせ目がある。端部は未調整。胎土は精良で暗灰色を呈する。8は緩やかな段の玉縁を有する瓦である。摩滅が著しく叩き痕は不明で，凹面には布目痕が残る。側面はケズリで凹面側を大きく面取りする。端部は未調整，砂粒を含み軟質である。

凸凹面に糸切り痕

平瓦（9）ほとんど彎曲がない瓦で，凹凸面とも円弧を描く糸切り痕が明瞭に観察でき，凸面側には僅かに縄目が残る。側面は接地面に対して垂直に切られナデ調整される。端部もナデ調整。一枚造りと思われる。やや軟質で暗灰色を呈する。

木製品（Fig.41，PL.33・34）

下駄（9）連歯下駄で，歯部が台部から独立しないものである。後壺のみが残る。台座部は表面・側面とも丁寧にケズられ平滑である。歯部は後方に向かって徐々に薄くなり，側面付近は面取りする。下面中央は摩滅が著しく使用痕であろう。横緒孔部分は裏面には1㎜ほどの段を作り出して穿孔する。現存最大幅9.5cm，厚さ2.2cmを測る。針葉樹の柾目材。

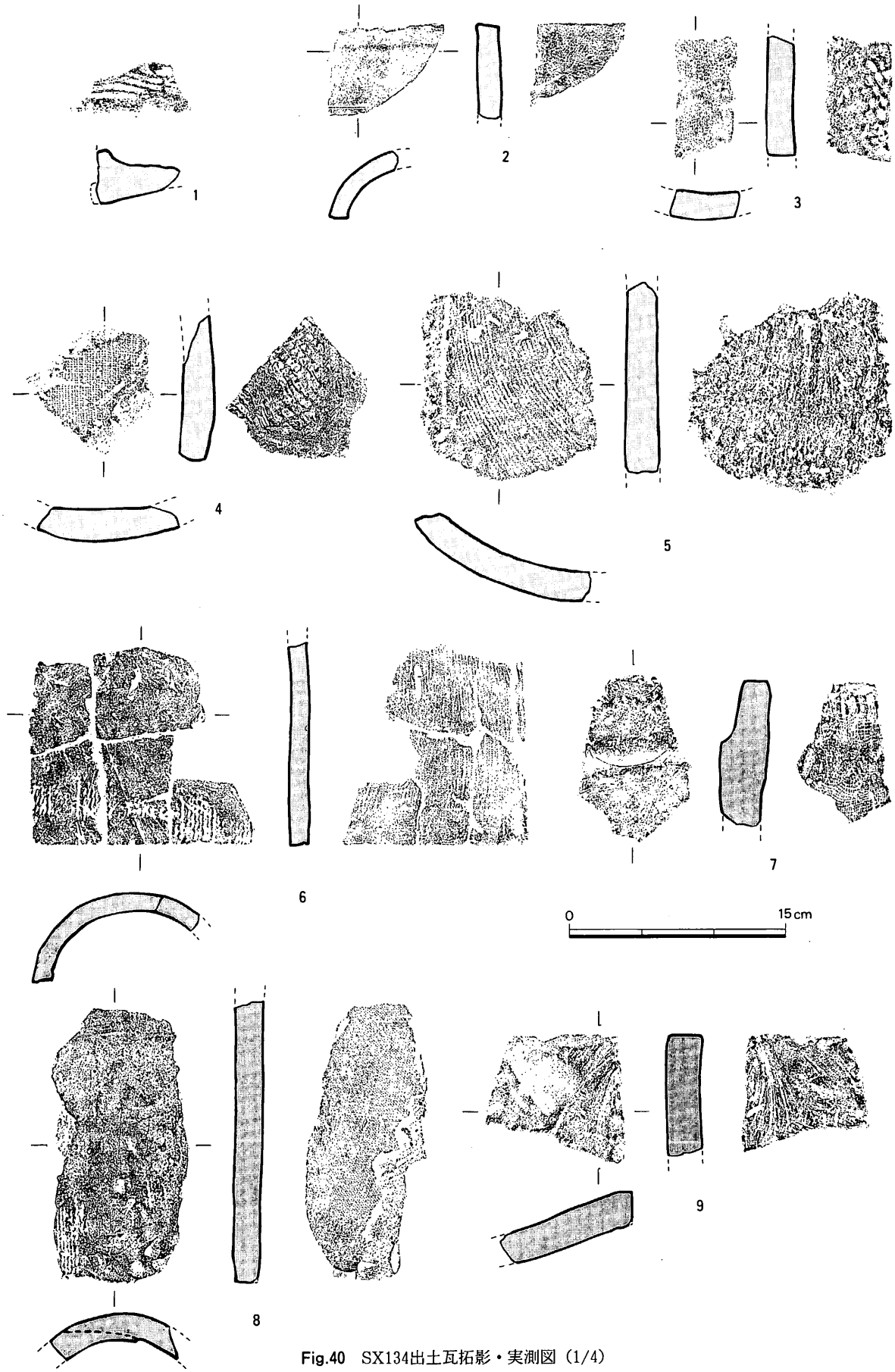


Fig.40　SX134出土瓦拓影・実測図（1/4）

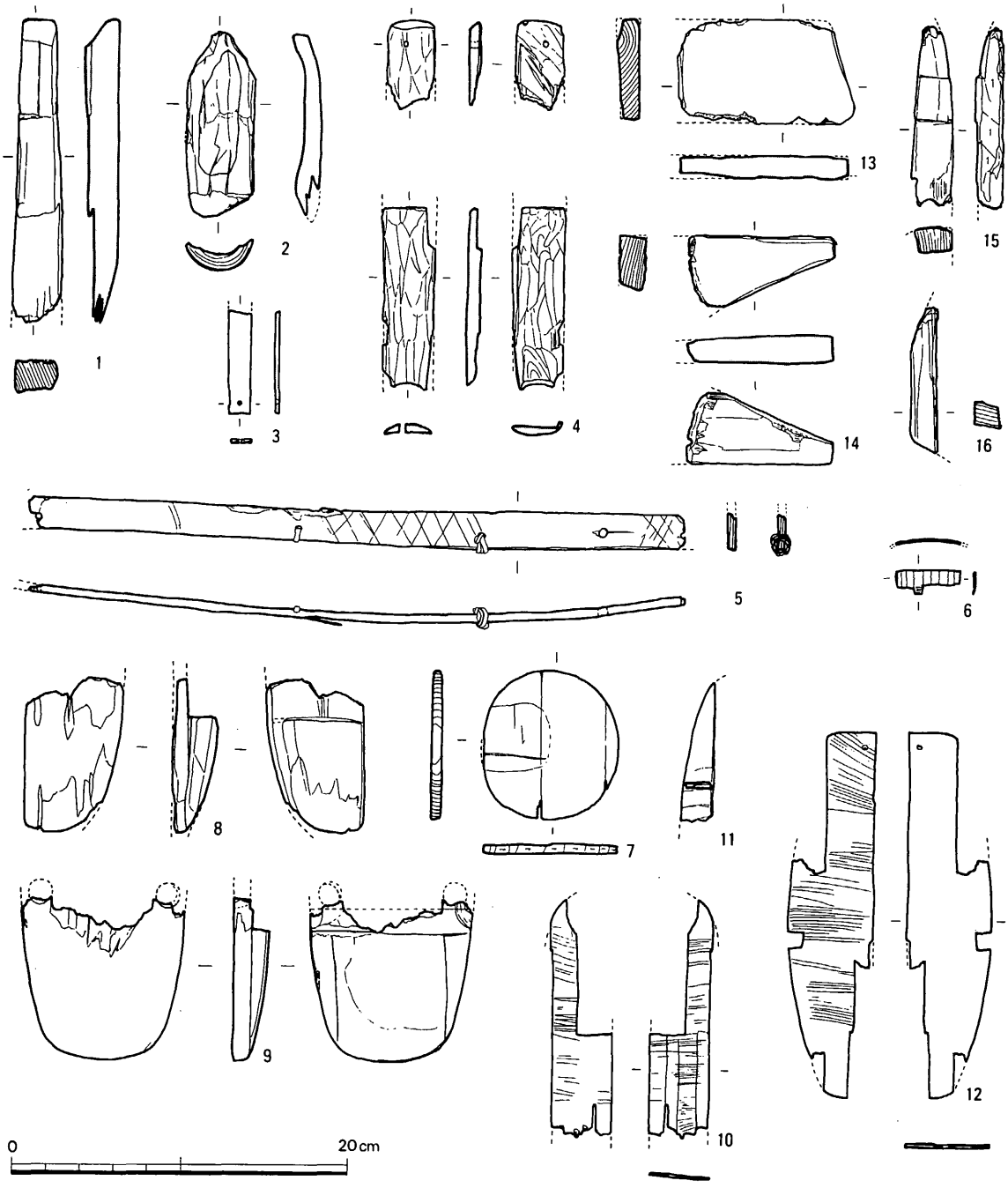


Fig.41　SX134・135・137・138出土木製品実測図（1/4）

草履片（12）形状から草履と判断したが繊維の痕跡は見られず，タテ方向の工具痕のみが残る。最下位から出土した。

下駄の歯（13）銀杏の葉形を呈する差し歯の下駄の歯の一部である。端部は丁寧に面取りする。現存長9.2cm，幅6.2cm，厚さ1.4cmを測る。針葉樹か。

また，馬の歯（PL.37－a）等の獣骨も出土している。

金属製品（Fig.42，Tab.5　PL.37）

銅銭（3～8）全て中国銭貨で，D区SX134の下層のほぼ同じ地点で出土した。

灰茶色土層出土遺物

木製品

(Fig.41, PL.33・34)

鞘（4）短刀の鞘で，中央部を欠損するため残存部の形状から長さを復元した。刃身の抉りを入れた2枚の板を合わせるもので，片面のみが出土した。上部には目釘孔がある。表面は丁寧な削りによって緩やかな曲面を造りだし，上端部は面取りする。裏面も細かい削りによって浅い段を造り出し，刀身が収まるようになる。先端付近と木口付近には刃部の当たりが付き，刀の形状が明瞭に観察できる。木口は呑み口式でU字を呈する。幅2.0cm，厚さ0.6cmを測る。西門跡の調査で経筒とともに出土したほぼ同型のものがあり，これは刀身が残る完形品である。

短刀の鞘

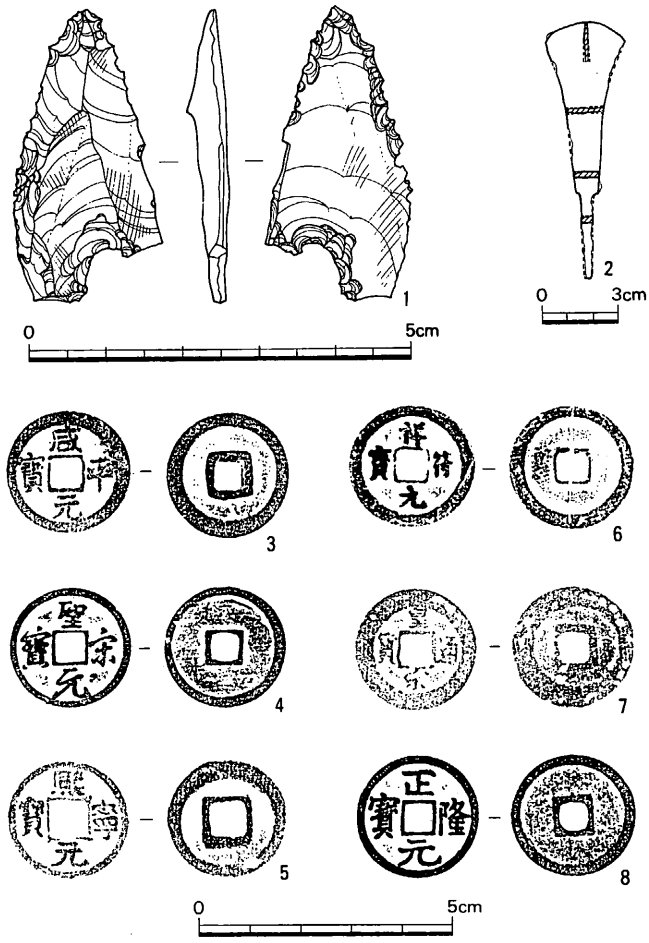


Fig.42 SX134出土石製品・金属製品拓影・実測図（1:1/1, 2:1/3, 4～8:2/3）

桶枠（5）厚さ5㎜の板に「×」の切り込みを連続して入れて，曲げている。5箇所に結合孔があり，2箇所に綴皮が残存する。内一箇所には5重の綴皮が残る。残存長39.1cm，幅2.2cmを測る。

5重の綴皮

桶底（7）柾目材の円形板で，表裏面にやや凹凸があり側面には工具痕が残る。穿孔や釘穴はなく蓋板になるものか。直径8.9cm，厚さ0.7cmを測る。針葉樹。

草履（10・11）いずれも半身だけが出土した。10は切り込みが認められず前部分の一部とした。側面はほとんどを欠失し平面形は不明。両面に幅2㎜ほどの繊維の痕跡が明瞭に残る。厚さ0.18cmを測る。12は前部にかがり孔を持つが，裏面では径が1㎜にも満たない。側面には方

No.	銭貨	径(孔)cm	初鋳年代	備考
3	咸平元寶	2.5 (0.6)	北宋咸平元（998）年	
4	祥符元寶	2.45 (0.6)	北宋祥符元（1008）年	
5	皇宋通寶	2.45 (0.6)	北宋宝二（1039）年	
6	熙寧元寶	2.35 (0.7)	北宋熙寧元（1068）年	
7	聖宋元寶	3.4 (0.6)	北宋建中靖国元（1101）年	真書体
8	正隆元寶	2.4 (0.55)	金正隆元（1156）年	

Tab.5 SX134出土銭貨一覧表

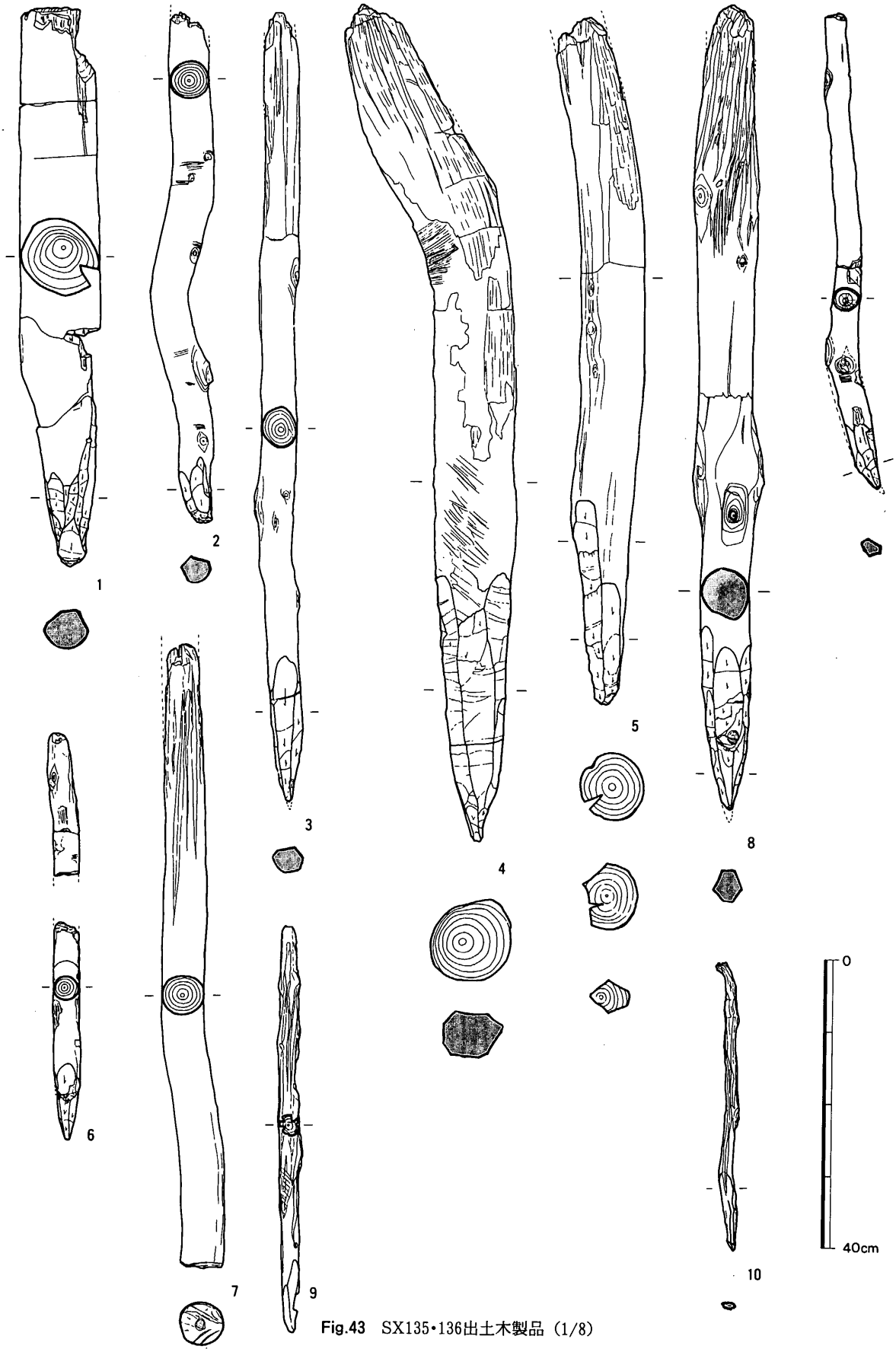


Fig.43　SX135・136出土木製品（1/8）

形の切り込みが見られる。表面は繊維の痕跡がよく残るが，裏面は剥離しているようで痕跡を確認できない。長さ21.8cm。どちらも針葉樹の柾目取りである。

棒状木製品（16）側面の3面が残存するが，全体の形状は不明である。針葉樹。

金属製品（Fig.42，PL.37）

鉄鏃（2）方頭式鉄鏃で，最上層から出土した。錆化が著しく表面は本来の形状をとどめない。頭頂部は円頭状になり，鏃身部はカーブを描いて篦被に至る。茎部の断面形は方形で端部を欠失する。鏃身長6.8cm，鋒長0.8cm，現存頸部長3.3cmを測る。

以上，出土遺物には7～8世紀代の資料が含まれるが，土師器杯や銭貨等から，SX135の埋没時期は13～14世紀代と考えられる。

これ以下は，SX135の埋土の中で遺構として取りあげたものを，個別に報告する。

杭列

SA136（Fig.37，PL.24） 調査区中央で検出した，土塁中軸線とほぼ平行に並ぶ杭列である。 **土塁中軸線とほぼ平行**
SX134の埋土③層の上面で頂部を検出した。杭は合計10本で，大小様々な自然木の先端を加工する。しがらみ等は残存せず，後述するSX137に廃棄された可能性がある。全て頂部を破損しており，上層の整地面造成時に削平されたものであろう。杭の打ち込み方は乱雑で，間隔にも統一性はない。2本が隣り合う箇所は打ち直したものか。SX137等が湿地状であったことに関連するものと思われる。 **湿地状**

出土遺物

杭列の東側から順に1～10の番号を付けて取り上げた。

木製品（Fig.43，PL.32）

杭（1～10） 全て広葉樹の丸木材で，基本的には先端を加工しただけの簡単なものである。頂部を破損するものが多く，上層の整地時に削平されたと思われる。1は中位やや上方に横方向の浅い切り込みが入れられ，頂部からの干割れがこの位置で止まる。この部分に表皮はなく切り込みが途切れる部分には表皮が残る。切り込みの理由は不明。先端は円周の約半分を6面に細かく丁寧に面取りし，先端は匙状に大きく平坦にケズリ出す。打ち込み時の折れを防ぐためか。4は太く大きく曲がったもので，先端の加工部分も他の杭に比べて長い。最先端は更に加工して細くする。5は先端を尖らせる加工が無く，水平に切り取っただけのものである。9・10は小枝状で，先端は加工しているものの，やや雑である。腐植が激しいが，打ち込み当初からかなり細い材を簡単に削っただけのものであったと思われる。長さは40.0cm～112.0cm，太さは2.0cm～10.8cmである。

SA136の時期については，次のSX137とほぼ変らない時期と考える。

溜まり状遺構

SX137（Fig.44，PL.22・23） 調査区の南部中央部C～H区で検出した。幅5㎜程の単位が観察できる樹皮を数層に重ねて敷き詰め，樹皮層の間には杭や板材などの木製品や小枝などの自然木，木の葉等が多量に投棄されていた。覆土は黄褐色や黒褐色の粘土ブロックを含む粘質土で，埋土は粘性の高い黒茶色粘質土が堆積し，部分的に黄褐色粘土が混入する。明確な掘り **樹皮を重ねる**

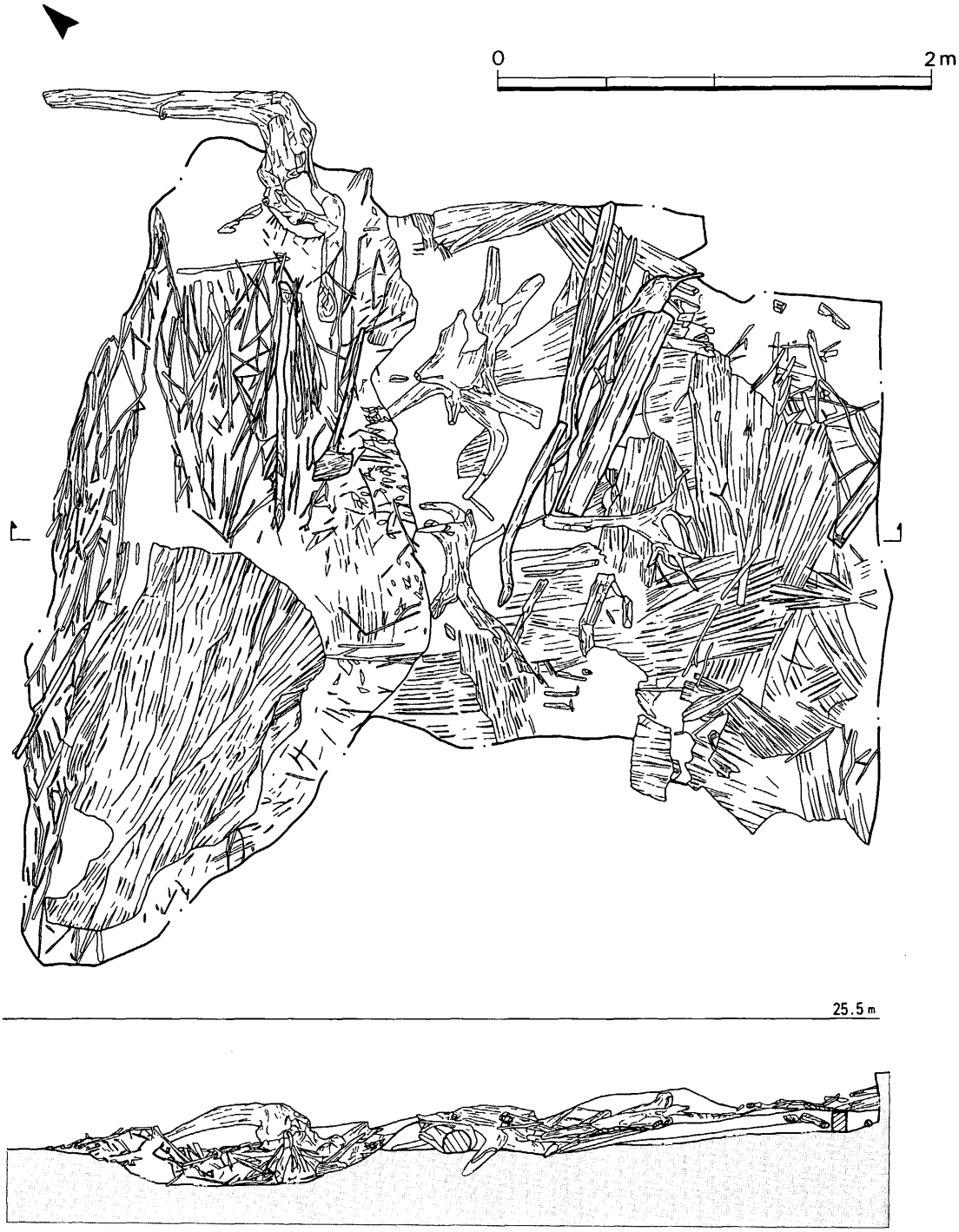


Fig.44　SX137実測図（1/30）

込みのプランはなく，緩やかな窪みに材や小枝を入れて埋め，樹皮を被せた状態である。杭など

枕木状に置く

の加工品は，遺構のほぼ中央に中軸線と直交する形で並んでおり，意識的に枕木状に置かれたように見える。自然木は小さな切り株や大枝，小枝など不規則に投げ込まれているようである。しかし北側に集中する小枝の中には，長い棒状のものも見られ，その北側にあるSA136の柵に利用されたものを廃棄時に投棄したものかもしれない。

樹皮は幅30～40cm幅の単位で重ねて並べたものを２～３層に分けて敷き，その各々の間に木製品等が置かれる。埋土が極めて粘性の高いものであることや，下の層も軟質で粘性が高い土

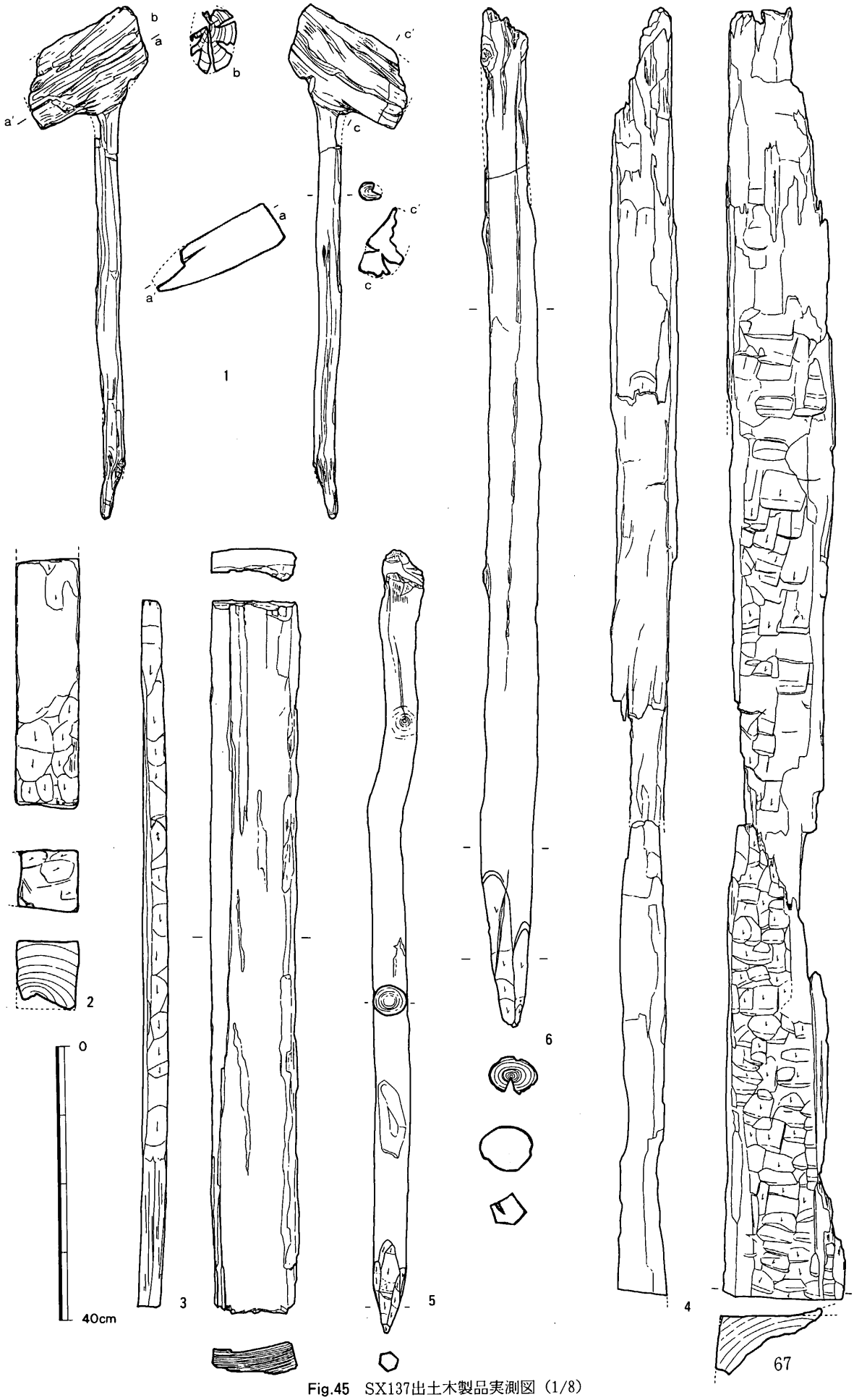


Fig.45　SX137出土木製品実測図（1/8）

が溜まり状に厚く堆積することから，湿地状の場所を整地するにあたって，地盤強化のために
地盤強化　なされた地業であると推測される。この遺構は土塁側にまだ続き，かつ上面が削平されており全容は確認できなかった。検出範囲は南北長3.7m，東西長4.1mである。

出土遺物

土師器（Fig.48，PL.27）

甕（1）口縁部の小片。ヨコナデで器壁は薄く，端部を丸く収める。軟質で淡黄色を呈する。

瓦器

椀（2）口縁部小片。端部から外面の1cmほどにかけては横位の丁寧な磨きを施しており，銀黒色の光沢を持つが，以下は不規則な磨きを施す。12世紀代。

木製品（Fig.41・45，PL.31・33）

縦斧柄　縦斧柄（1）遺構のやや南側上位で検出した。3の杭と平行に頭を西にして置かれる。自然木の幹を頭部に，枝を柄に利用したもので加工された部分は少ない。頭部の先端は半分を欠損するが，残存部は端部から3cmほどを削って薄く造り，斧を装着するようになっている。後端部は切り落としたままで，柄と頂部の境を僅かに削るのみである。残存長75.0cm，頭部長20.0cm，厚さ6.6cmを測る。広葉樹。

杭（2・3）遺構のほぼ中央部上位で検出した。2は3の下に重なりほぼ平行に置かれている。先端部と頭部を僅かに欠くもので，特に頭部は腐蝕が激しい。断面楕円形の直線的な枝の先端部分のみを加工し，他所は表皮を残したままである。先端部は5面カットし，削りの単位は大きく細かい調整を施さない。長さ113.5cm以上，最大幅4.9cmを測る。3はほぼ中央部のの北で出土した。この上には自然木が重なり，遺構の中軸線に対して直角に置かれる。先端は5面カットするがケズリは粗い。直径6.5～7.5cm，残存長147.5cm。いずれも広葉樹。

角材（4）断面方形の角材で，本来長いものであったが，南側の未掘部分に続いているため取り上げられず，現場で切断した。建築部材であろうか。釿等の道具で長軸方向に削って面を平滑にする。木口も同様に削る。現存長36.1cm，厚さ9.2～10.0cm。広葉樹と見られる。

板状木製品（5・6）5は中央部最下面で出土した。板状製品ではあるが，1面を残し欠損するため全体の形状は不明である。残存部には同一方向への削りの痕跡が明瞭に観察できる。平坦面は両面とも年輪部分での剥離である。残存長187cm，幅12.6cm，厚さ4.0cmで針葉樹板目材。6は遺構南辺部の樹皮の下から出土した。未掘部分に延びており取り上げられないため，現場に中途より残した。残存形状は板状になっているが，2面を除いて破損するため全体の形状はわからない。また覆土の土圧によって変形しているようで，原形は上面・側面共に平坦であったと思われる。上面には縦位の削り痕が明確に認められる。細かく削って平滑に仕上げられてはいるが，所々に刃部のあたりが確認できる。痕跡から復元できる工具刃部の幅は最大で5cm程である。側面も同様に削るものの，残存状態が悪いためほとんど確認できない。断面形状は上面と側面がほぼ直角となり，幅16cm以上，厚さ9.2cm以上，長さ180.0cm以上となる。

削り屑（Fig41－1）棒状の削り屑で，上面に斜めの切り込みが入る。側面は片側を表皮のまま利用し他方を削って平坦にする。上端部は斜めにカットし先端は垂直に切り落とす。下端部裏面は表面の切り込みと同方向に削り，端部にも2箇所の切り込みが入る。長さ13.0cm，幅3.0cm，厚さ2.0cm，針葉樹柾目材である。

SX137の年代については，土師器や瓦器からその上限を12世紀後半～13世紀と考える。

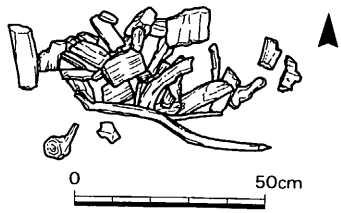


Fig.46　SX138実測図（1/10）

木片集中遺構

SX138（Fig.46，PL.24）

C区トレンチにおいて掘削時に検出した。削り屑と思われる木片が集中しており，自然木の枝や舟形がこれに混入していた。削り屑は針葉樹の柾目材で，下層にも多量に出土しているが，特に集中していることや，舟形を呈する特殊な木製品を含んでいることから，一遺構として取り上げた。しかし明確な掘形はなく，性格，時期等については不明である。

出土遺物

出土木製品（Fig.41，PL.33）

舟形（2）半裁の丸木を利用して舟形に整形したものである。上面は刳り込みを造って舟槽を表現し，先端は段をつけて尖らせ舳先を表現している。裏面は表皮のままで船尾部分に斜めの切り込みを入れる。長さ11.0cm，幅4.1cm，厚さ1.0cmを測る。広葉樹。

舟型

木樋抜き取り遺構

SX135（Fig.36・47，PL.21）

木樋を抜き取るために掘られたと考えられる大規模な掘形である。当初SX134の段上面で掘形のプランの一部を検出し，SX134埋土除去後に調査区全面で全体のプランを確認した。最大幅は11.4mで，南と北側の上端は調査区外に延びているため確認できないが，プランとしては北に長い半楕円形になると思われる。深さは検出面から最も深いところで2.9mとなり，擂り鉢状を呈する。掘形の底部は平坦であり，最下層は下の砂層と紛れて判別し難い。埋土は大きく7単位の層として捉えることができる。以下上層から①～⑦の番号を付して説明する。

木樋抜き取り掘形

①層　黒色土などから構成される自然堆積層で，粘性の土をほとんど含まない。堆積過程で遺構様の浅い掘り込みが観察できるが，遺物を含んでおらずプランとしての確認は行わなかった。最上層にある黒色土は堅く締まり，ここから若干の遺物が出土している。

②層　SX137の埋土で南半部の一部にのみ堆積する。詳細は前述したので省略する。

③層　青灰色粘土等のブロックが混入する黒色粘質土が中心の層で，SX137と一連の層と考えられるが，明らかに土質が異なるため個別に記述する。掘形南部のみに堆積し，東西端部付近には流れ込んだように砂質等の異質の層が入るため2分されるが，時期的に大きな差はないと考える。層中に混じる粘土は調査区内の地山と近似しており，地山を掘削した土を埋め戻したものであろう。粘性が高くかつ水分を多く含む軟質土層である。木製品など木質を多く含んでおりその残存状態も良いことから，当時も湿地状となっていたと考えられる。

④層　自然堆積の黒色粘質土層で，最も厚いところで0.6mの堆積がある。最下部はその下層にあたる砂層と少し混じるが，全体的に均等な堆積である。土器等の遺物はほとんど含まず，図化できるのは瓦が1点のみである。しかし木製品や削り屑，自然木などの木質を多量に包含し，③層ほどではないが粘性が高いことなどから，湿地状になっていたと考えられる。この層

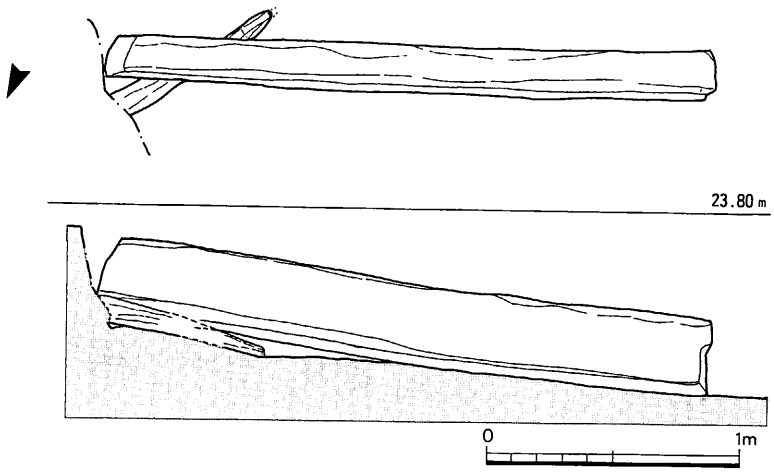


Fig.47　枕木状木製品出土状況実測図（1/30）

を境として上・下の層は土質や出土遺物が全く異なる。堆積層の厚さから考えて，かなりの期間，人の手は加わらなかったものと思われる。

以下の層は調査区壁面が崩落したため，土層図を完成させることができなかった。以下の部分についてはFig.37の南北土層図を参照して記述する。また各層が大きく南に傾斜するため北と南では大きく土層が変わる。

⑤層　粘質土で構成される層である。掘形南半部に堆積し，軟質の粘質土が入り混じり，木質や炭化物を含む。出土遺物は弥生土器の小片などが僅かにあるのみで時期を特定できるものはない。人為的に粘土ブロックを投げ込んだ状態とみてとれる。

⑥層　黄褐色粗砂層が殆どの層で，間に薄い粘土層が入る。北から南に一気に流れ込んだように堆積しており，自然木や木製品を多数含む。斎串もこの層から出土した。粗砂は砂粒の大小によって分層できるものの，大差はない。伐採されたままの大木が流れ込んでおり，かなりの勢いがあったと思われる。

⑦層　灰色粗砂と粘土の細かい互層で，枕木状の角材や須恵器片が出土した。この層を掘形の最下層と考える。堆積方向は⑤層と同じく北から南に流れており，粘土ブロックが所々に混入する。人為的なものではなく，流れ込みか自然堆積と思われる。枕木は最下部に貼り付くように横たわっていた。東端の下には杭が噛んでいるが，恣意的に置かれたものではない。同時期に廃棄されたものであろう。木樋抜き取り直後，最下部に枕木が放置され，その上に⑦層が流入したと考えると，合理的解釈ができる。

以上の堆積状況から，SX135は木樋抜き取り後完全には埋め戻されず，④層が堆積する程度の期間は窪み状のまま放置されたと考えられよう。

出土遺物

①層出土遺物

須恵器（Fig.39，PL.26）

蓋（22）口縁部のみの破片である。口縁端部の断面は方形で，一条の沈線を有する。外天井部はヘラ切り未調整，他は回転ナデで内天井部をナデ仕上げする。堅緻に焼き上がり体部内面には灰が被る。復元口径11.0cm。

甕（23）Fig.39の16と同様，外面には細かい格子目の叩きと横位のカキメ，内面には大小2種類の青海波を残す。16よりも器壁は薄く，灰色を呈する。

土師器（Fig.39）

杯（24）底部小片。底部は糸切りで，他は回転ナデを施す。復元底径12.0cm。13世紀代。

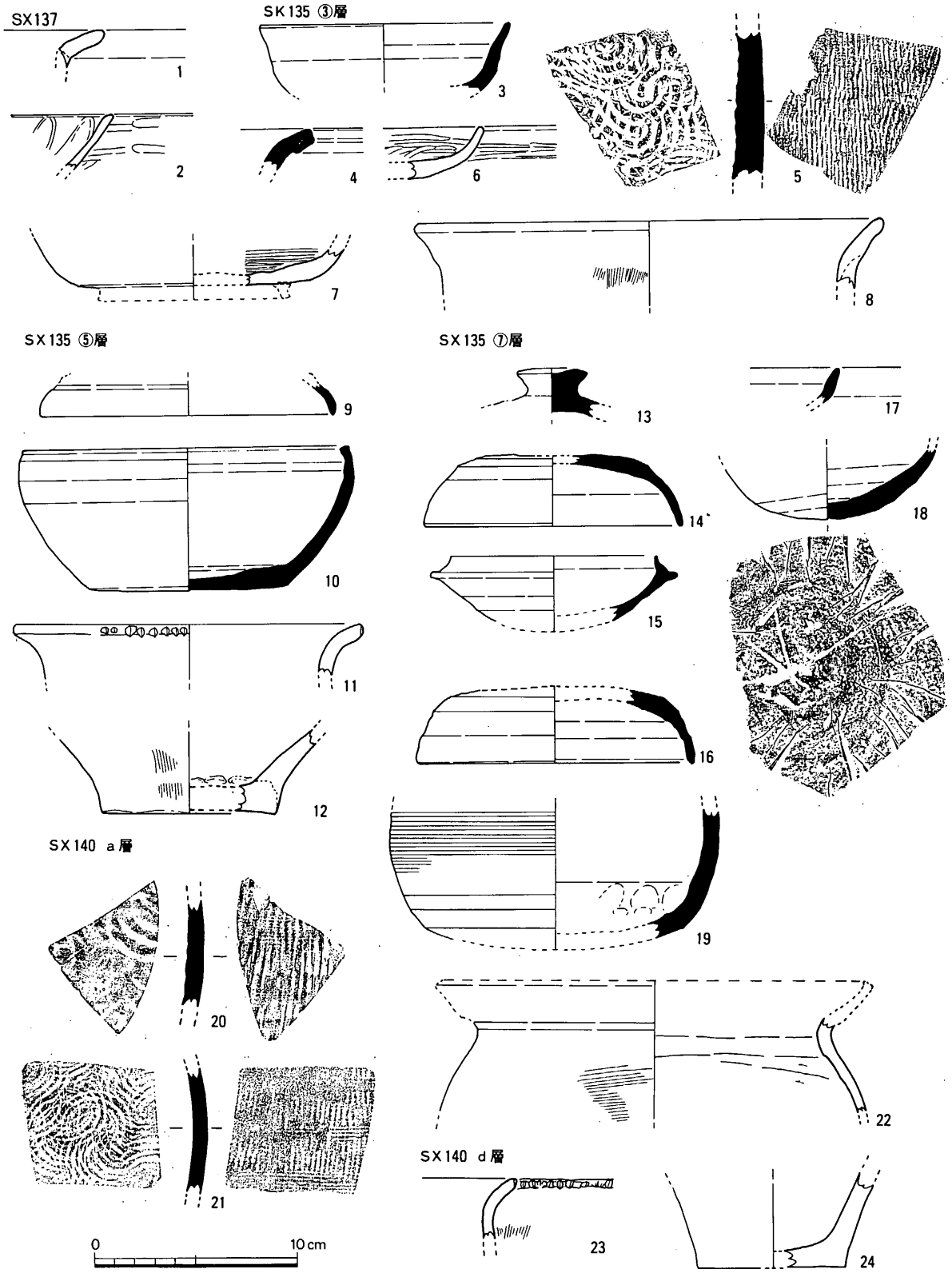


Fig.48　SX135・137・140埋土出土土器実測図（26は1/8，他は1/4）

瓦器（Fig.39，PL.26）

椀（25・26）25は端部内面に稜を持ち，外面は端部のやや下を強いナデで屈曲させる。この屈曲部までは内外面とも横位の丁寧な磨きを施し，銀黒色の光沢を放つが，以下は横位の粗い磨きになり淡灰色を呈する。26も端部下位で屈曲するが，下位は丸みをもつ。磨きは口縁端部と外面の1㎝幅は丁寧に施され光沢をもつが，以下は粗くなる。復元口径14.4・17.7㎝。13世紀代の資料。

青磁（Fig.39，PL.27）

同安窯系青磁

椀（27）同安窯系の椀口縁部片で，内面には一条の沈線が巡る。釉は灰緑色のガラス質で薄くかけられる。小片のため口径復元はできない。

木製品（Fig.41，PL.33）

板状木製品（14）板状木製品で，一方を細く造り端部を断ち切る。部材の一部か。現存長8.8㎝，幅4.2㎝，厚さ1.6㎝を測る。広葉樹の板目材。

下駄（15）連歯下駄の一部で，歯部は台部から折れて痕跡だけが残る。裏面の側面付近は面取りし，側面は削り，表面は腐植のため使用痕などは不明。厚さ0.6㎝，針葉樹の柾目材。

瓦器や青磁の年代から①層は，13世紀代以降の埋没と考えられる。

③層出土遺物

須恵器（Fig.48，PL.27）

杯（3）小型のもので，端部付近をナデによって薄く造りだし，やや外反させる。内面と体部外面はヨコナデ，外底部はヘラケズリする。やや軟質で淡灰色を呈する。復元口径12.4㎝。

壺（4）折り曲げた口縁は断面四角で，端部は平坦となる。

甕（5）胴部小片で，外面には縦位の条痕文状叩きを有し，内面には青海波の当て具痕がある。暗灰色を呈する。

土師器（Fig.48，PL.27）

皿（6）体部から底部への移行が緩やかな曲線になるもので，端部は丸く収める。体部は内外面とも横位の磨きを施し，内底部は斜位の磨き，外底部はヨコナデのみの調整である。小片のため口径復元はできない。7世紀代。

椀（7）高台の貼付するものであるが剥離しており，剥離面には接合を示す沈線が2条巡る。外面はナデ調整と思われるが摩滅が著しく不明瞭である。内面は横位の磨きを施した後に漆を薄く塗布する。7世紀代。

甕（8）緩やかに外反する口縁部の小片で，端部は少し玉縁状になる。胴部外縁は細かい縦位のハケ目，他はナデ調整する。復元口径22.5㎝。

瓦類（Fig.49，PL.30）

丸瓦（1～3）1・2は縄目叩きのもので，全面を粗くナデ消す。1は玉縁を有し一条の沈線がある。凸面はヨコナデ，凹面には玉縁まで布目痕が残り部分的に縦位の指ナデをする。側端部は凹面側からの分割裁面と破面が残り，破面の割り方は粗い。胎土は精良で黒灰色を呈する。2の凸面はタテナデで端部付近はヨコナデする。凹面は布目痕が残り，粘土板の接合部が見られる。側端部付近はタテナデ，端部付近は粗くヨコケズリする。側面は凹面からの分割裁面と破面が残り，端部は未調整。胎土は精良でやや軟質，灰色を呈する。3は正格子に近い斜

格子の叩きで，部分的にタテナデする。凹面には目の粗い布目痕があり，須恵質で灰色を呈する。

平瓦（4）極めて軟質なため摩滅が著しい。凸面は縦位の縄目叩きで，後に部分的にヨコナデする。凹面には細かい布目痕が残り，端部は未調整。白灰色を呈する。

出土遺物には7～8世紀のものが含まれるが，埋没年代についてはSX137と同じ頃まで下ると思われる。

④層出土遺物

瓦類（Fig.49，PL.30）

丸瓦（5）凸面は縄目叩きを粗いタテナデでナデ消す。凹面には布目痕が残るが端部付近は広くヨコケズリする。側面は凹面側からの分割裁面と破面を残し，端部はヨコケズリする。石英粒を含み焼成は比較的堅緻で，黒灰色を呈する。

木製品（Fig.50・51，PL.34）

円形板（3）円形板の破片で，僅かに加工面が残る。端部付近と裏面の一部を面取りする。

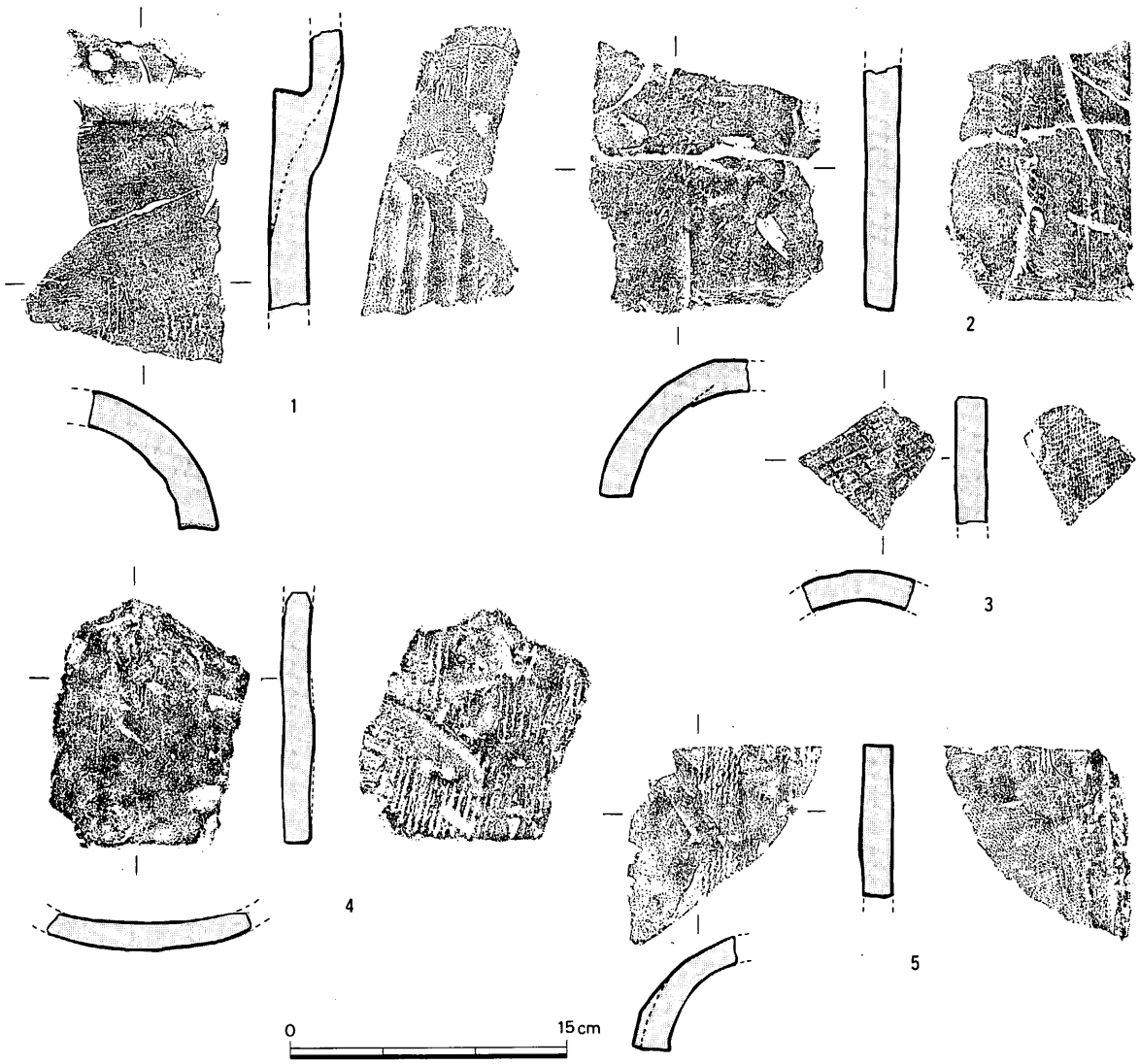


Fig.49　SX135出土瓦拓影・実測図（1/4）

残存部には段や溝，釘穴は認められないが，曲げ物の底板か蓋であろう。針葉樹の柾目材。

板状製品（4）形状から板材と考えるが，残存する表面の腐植が著しく，僅かに工具痕が確認できるのみである。側面は斜めにカットし，一部切り込みを入れる。裏面には端部付近に削りが残る。残存長35.5cm，幅7.6cm，厚さ3.1cmを測る。針葉樹の板目材。

板状製品（7・12）7は穿孔を有するもので，図示した表面と上縁・右側縁が残存している。上縁は年輪に沿う剥離にも見えるが，穿孔が同方向に施されるため，削り面と考えた。側面は斜めにカットし，表面には低い段がみられるが削り方によるものと思われる。残存横長12.2cm，縦長3.6cm，厚さ0.7cmを測る。針葉樹の柾目材。12は黒色粘質土と黄褐色粗砂の間層で出土した。図面の上が端部となり，左右と下部右端は破損する。3箇所に穿孔が認められ，下部は窓状に切られている。表面は上部の穿孔部分から斜めに削られ，横方向の細い切り込みが入る。裏面には粗い切り込みが見られるが製作に関連するものではない。

底板（5）方形の折敷底板と思われる。角を斜めにカットし，上面には長軸方向の工具痕が明瞭に認められる。側板を留めていたと思われる穿孔が，上端に沿って2個一対で4箇所にある。図右側端部は垂直に削るが，左端部は腰乗せ状に仕上げ，綴皮が残る穿孔がある。組み合わせ方法や組み合う部材の形状は不明。表面に切り傷があることから，まな板に再使用された可能性もある。最下部から出土した。

切り屑（6）針葉樹の柾目材で，数カ所に同一方向の切り込みが見られる。図示した下側は欠損するものの，端部に近い部分と思われる。製品の切り屑と思われるが，平面形状が鳥の横姿にも見え，左側の切り込みは羽を表現したものの様にも見える。黒色粘土層中のSX138からは舟形木製品も出土しており，関連する資料として掲載した。最大長19.0cm，最大幅6.2cm，最大厚2.0cmを測る。針葉樹。

不明部材（8・9）8は2面を斜めに，一面を水平にカットした材で，厚さや幅は不明である。多数出土した削り屑の内の一つである。9は山形にカットされたもので，削り方は粗く不規則である。部材の一部と思われるが，全体の形状や用途は不明である。いずれも針葉樹の柾目材を使用。

枘を有する部材

建築部材（10）枘を有する断面台形の角材で，一方の木口は切断される。表面は四面とも丁寧に削って平坦にするが，腐植が著しいため工具痕は僅かしか確認できない。枘部分は鉇等の工具で丁寧に削られ，明瞭な加工痕が観察できる。枘の底面は木口側に緩やかに傾斜し，端部付近で屈曲して水平になる。木口も丁寧に削って平坦に仕上げる。他方の木口は枘とは90度方向を違えて斜めに切り落とされる。鉇等の工具によるものと思われるが切り方は粗雑で，何回かに分けて切断したため段状の切り口になる。両面の木口の加工方法は全く異なっており，前者は切り落としただけのもの，後者は平坦にするためのものとみられ，前者の切断は材の廃棄後に行われたものであろう。材は針葉樹の心持材である。

出土遺物からは埋没時期については確定できないが，5の平瓦は奈良時代のものと思われる。

⑤層出土遺物

須恵器（Fig.48，PL.27）

蓋（9）口縁部小片。全て回転ナデ調整で黒灰色を呈する。復元口径14.2cm。

鉢（10）いわゆる鉄鉢形を呈する器形で，底部は平底である。口縁は内側に強く屈曲し外面

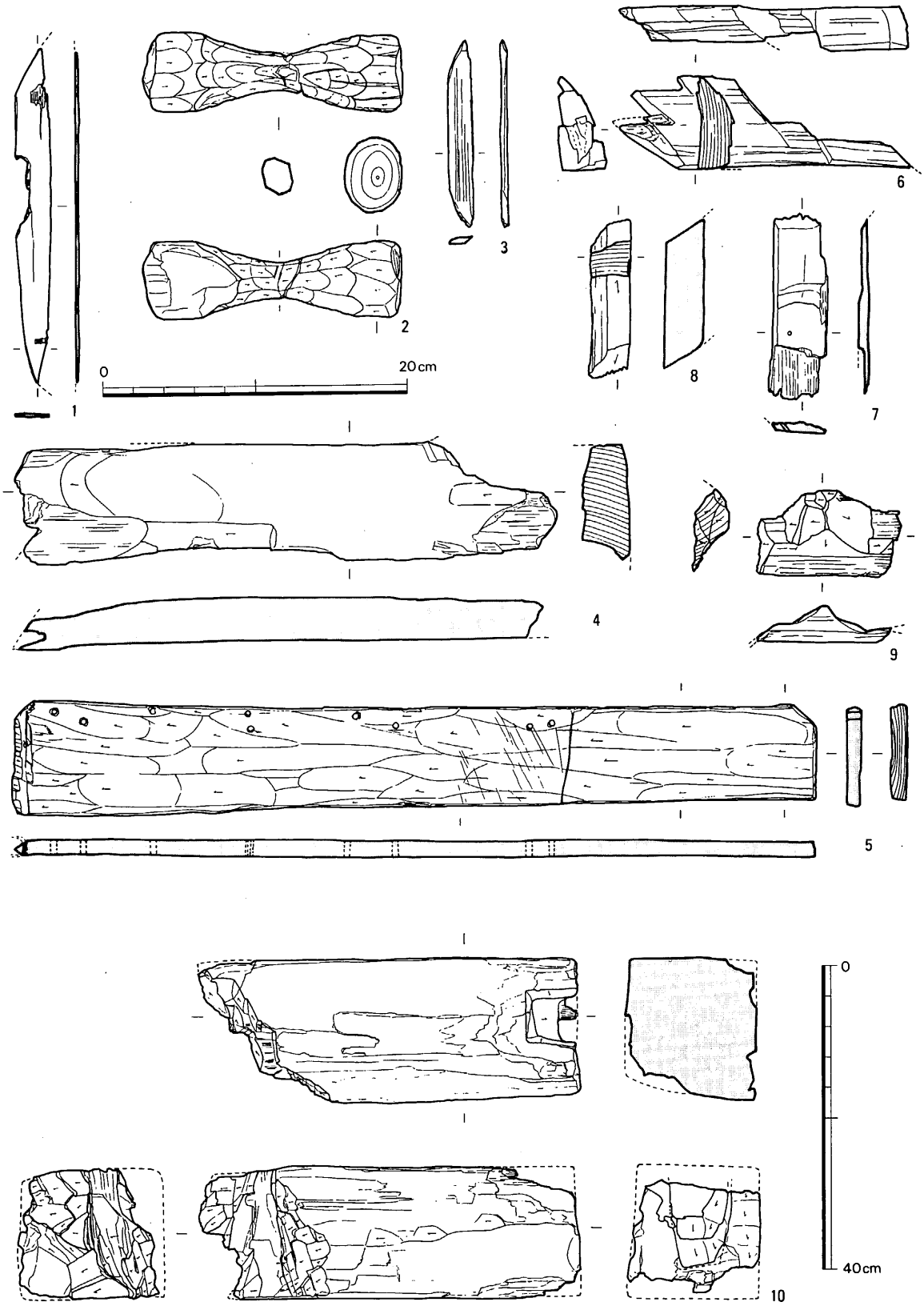


Fig.50　SX135出土木製品実測図（1～9:1/4, 10:1/8）

には緩く稜がつき，端部は外に摘み出す。底部は焼成時の変化によって表面が大きく剥落している。内外面とも丁寧な回転ナデ調整で，内底部は不規則なナデで仕上げる。復元口径16.0cm，底径9.6cm，器高7.2cmを測る。８世紀後半代の資料。

弥生土器（Fig.51，PL.27）

甕（11・12）９は口縁端部に刻み目を有し，他はナデ調整。10は平底の底部片。外面は縦位ハケ目をナデ消し，内面はタテナデする。底部は円盤貼り付けで，内面には指頭圧痕が顕著に認められる。二次的火熱を受けて赤変する。復元底径8.4cm。

木製品（Fig.50，PL.35）

木札（１）頂部を圭頭状にする木札で半分以上を欠損する。表面・側面は平坦に削られ，裏面は欠失する。残存長22.0cm，幅2.3cmを測る。広葉樹の板目材。

槌の子　槌の子（２）断面楕円形の自然木の両端を切り落としたもので，切断面はやや粗くではあるが平滑にする。中央は左右両側からの細かい削りで半分ほどの太さにして紐掛け部としており，工具の痕跡が顕著に残る。丸木面は薄く簡単に面取りされる。端部付近も面取りされ，全体に丁寧な造りである。長さ16.0cm，丸木部の太さ3.7～5.2cm，中央部の太さ1.8～2.4cmを測る。５～６年生の広葉樹である。

⑥層出土遺物

木製品（Fig.51，PL.35）

斎串　斎串（13）自然木などと共に出土した。頂部を圭頭状にカットするだけのもので，平城宮跡出土斎串の分類のⅠ式にあたる。切り込み等はなく，下半部は側面を欠失する。現存長11.8cm，幅2.0cm，厚さ0.2cmを測る。

へら状木製品（15）斎串とほぼ同じ場所から出土した。柄の端部を欠損する。先端は円形をなし，両面から刀子等の工具で削って徐々に薄くし，他の部分は粗い削りで仕上げている。現存長25.0cm，幅1.9cm，厚さ0.75cmを測る。

削り屑（19）両側端のみ加工され，他は欠損している。製品の製作時に排出した削り屑と思われる。現場では同種の木片が多数出土しており，そのほとんどが針葉樹の柾目材である。

杭(21)先端付近のみが残存する。先端のわずか約３cmの短い部分のみを加工して尖らせる。数度に亘って削るものの削り方は粗く，歪な形になる。部分的に表皮が残っている。現存長13.5cm，直径3.5cmの広葉樹の枝である。

⑦層出土遺物

須恵器（Fig.48，PL.28）

蓋（13・14）13は摘み部分の小片。摘みの中央部を窪ませ回転ナデする。外天井部はカキメ状のナデで内天井部中央は回転ナデ，体部内面には青海波が認められる。14は外天井部を回転ヘラケズリ，他を回転ナデで調整し，内天井部をナデで仕上げる。胎土には黒細粒を多量に含む。いずれも枕木の際から共伴する形で出土し，14は枕木の底面のレベルで出土した。

杯（15）身受けの返りを有するもので，端部は薄く若干外反する。回転ナデ調整で，外面は灰を被って白色化する。焼成は極めて良好。復元口径10.0cm。

以上は７世紀代の資料である。

木製品（Fig.51，PL.35）

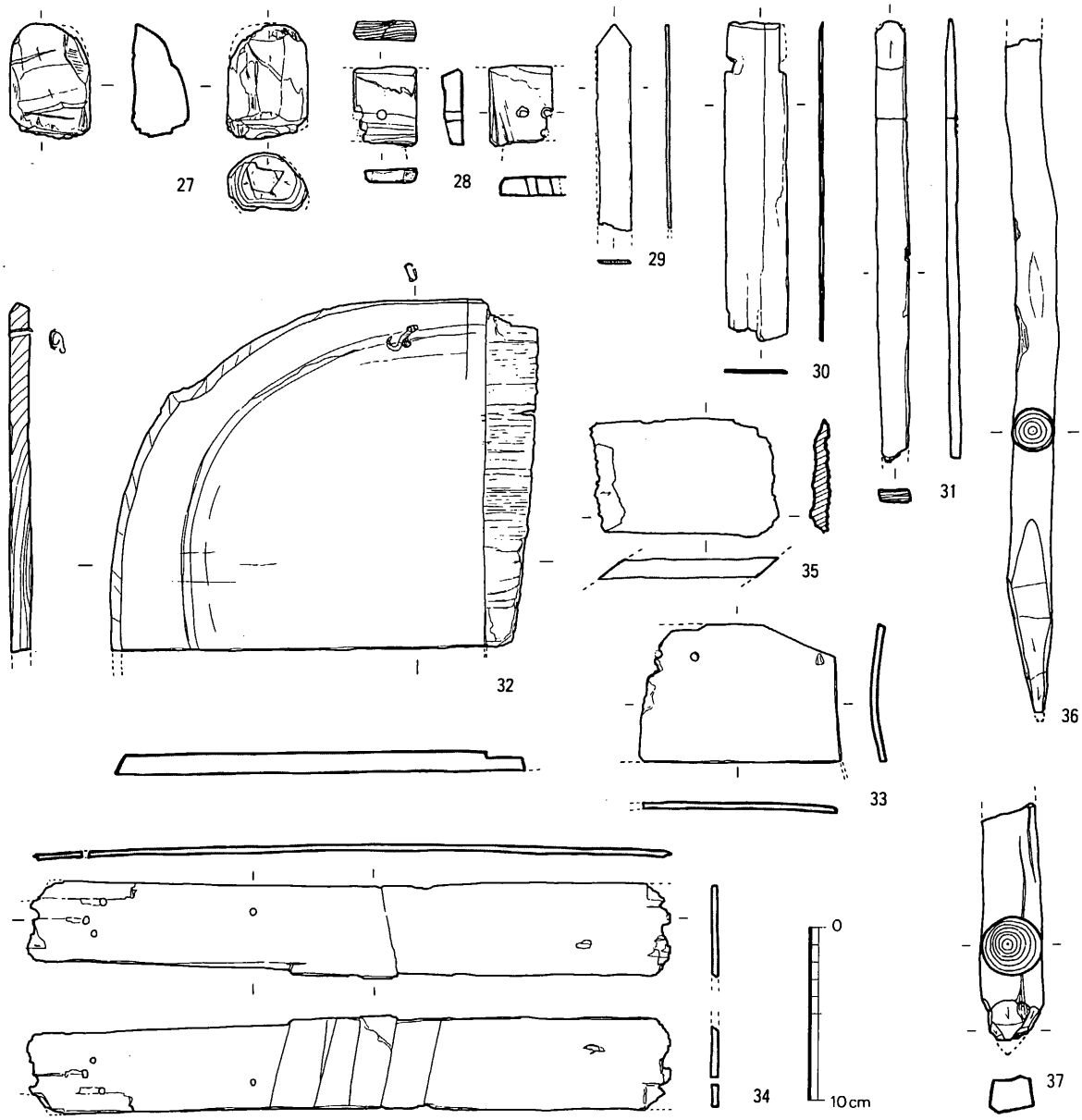


Fig.51　SX135・140出土木製品実測図（1/4）

杭（14）ほぼ直線的な枝を先端のみ粗くカットして尖らせたもので，表皮が残存している。先端のカットは3面で，一部未加工部分を残す。現存長38.2cm，直径2.2cmを測る。

板材（18）薄板に穿孔するもので，図面左下に切り欠きが見られ，折敷底板の隅部と思われる。穿孔は端部に平行して2ヶ所と，隅部に2孔一対が配される。表面には斜めの細い切り込みが入れられ，欠損部はこれに沿って折れている。後にまな板等に再使用されたものか。現存長36.3cm，幅5.2cm，厚さ0.4cmを測る。広葉樹と思われる。

枕木状木製品（Fig.52，PL.36）最下部で出土した，木樋の下底に置かれた枕木と考えられる角材である。断面長方形で側面は中央をケズリ，上下の端部は自然面を残す。木口は工具痕が観察できるものの凹凸が著しく，切り離しのままの未調整と思われる。現に片側の木口の工具痕は殆どが心に向かって削っており，切り倒した後粗く削っただけであろう。図上面には短

枕木状木製品

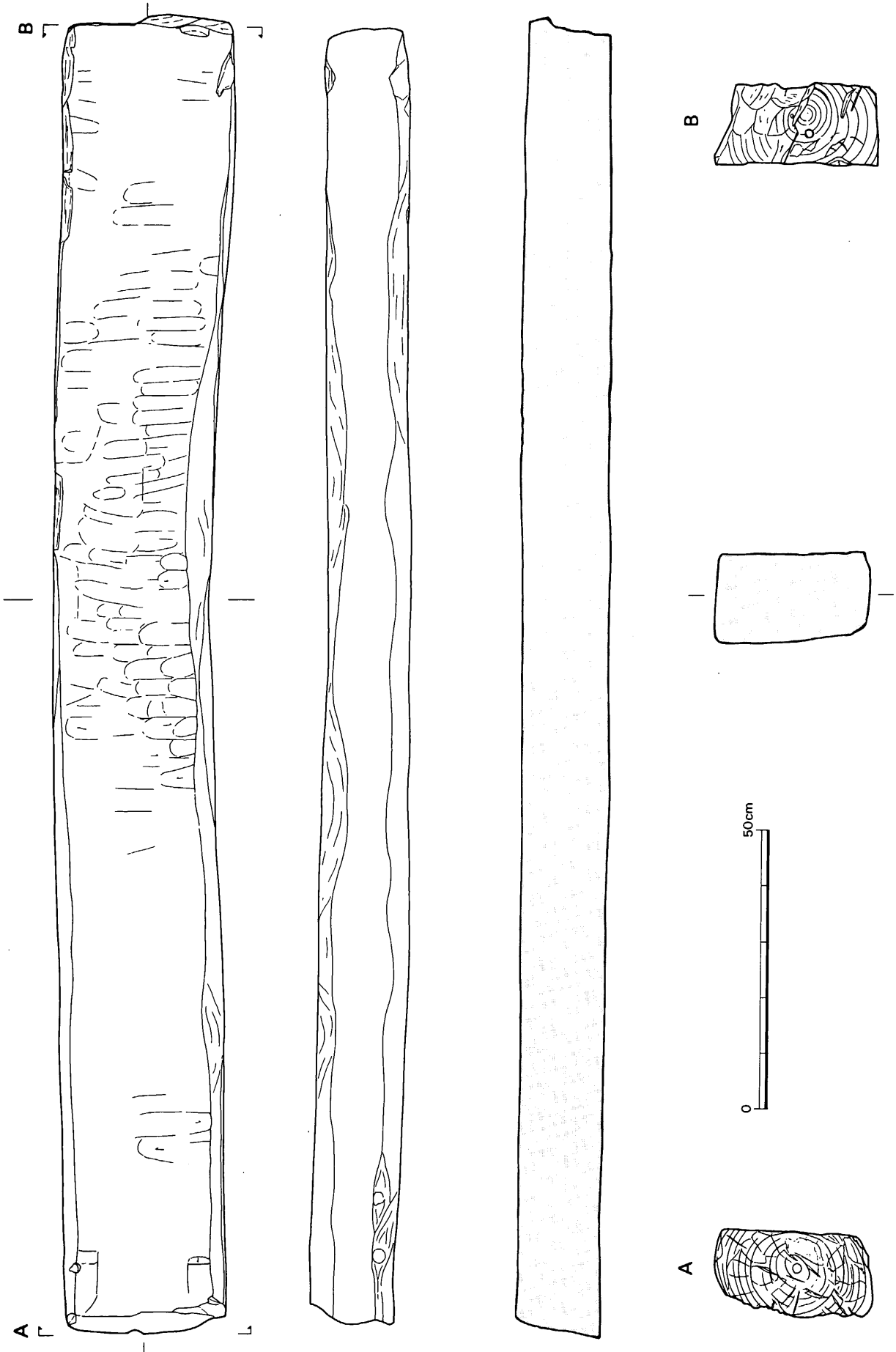


Fig.52　SX135出土枕木状木製品実測図（1/10）

軸方向の工具痕が全面に認められ，幅２～４cm程で，数度にわたって細かく丁寧に削られる。下面はケズリ痕が全く観察できず，枝部も切り落とした後は切り口を粗く平坦にするだけである。しかし面は平坦に揃えている。長さ23.3cm，幅28.0～31.0cm，厚さ14.0～16.0cmを測る。広葉樹の心持ち材。

⑥・⑦層の埋没はほぼ同時期と思われる。出土遺物からは奈良時代以降と考えられる。

溝状遺構

SD139（Fig.38）

調査区北壁際で検出した窪み状の遺構である。地山を掘り込む断面逆三角の溝状になると思われるが，上面と南側が削平されるため，確認できたプランからは全体の形状を知り得ない。埋土はほどんどが灰色砂で最下層に薄い粘土層が入る。溝とは確定できなかったが，堆積状況からここでは溝状の遺構として報告した。SXD135に切られており，木樋抜き取り以前の遺構と考えられる。性格については小結の項で検討したい。

窪み状

段落ち遺構

SX140（Fig.36，PL.25）

調査区のほぼ全域にわたる落ち込みであるが，調査区の関係からプランの一部を検出したのみである。プランはSX135より一回り小さくなる半楕円形で，位置的にもSX135の中にほぼ収まる。当初SX135の一部とも考えたが，南北中央ベルトの土層観察から，SX135以前の掘り込みであると判断した。木樋埋設時の遺構と考えられる。検出段階では青灰色粘土や灰色粘土の地山がほぼ垂直に立ち上がるものであったが，壁際に堆積する粘土と粗砂の混乱層の状況や，調査中に壁が若干崩落した際の状況等から，崩落によって直立した壁になったと判断した。以下埋土の各土層と崩落の状況について説明する。

ほぼ垂直に立ちあがる

a層　粗砂層でSX135の最下層に類似することから判断に窮したが，枕木状角材の出土状態や土層観察等からSX140の埋土とした。灰色粗砂中心の堆積で所々薄い黄褐色粗砂層が入る。また青灰色粘土塊が混入するのは下層の混入と考えられる。流水を思わせる堆積であり，SX135掘削以前に砂層が堆積する状況があったことが解る。出土遺物は少量で，弥生時代や古墳時代の土器類と木製品がある。

流水を思わせる

b層　当初，青灰色粘土の単一層と思われたが，大きな単位の粘土ブロックの隙間に黄褐色粗砂が入り込む。地山上層の青灰色粘土が崩壊した埋土と考えられる。粗砂が混入することや粘土塊の単位が大きいこと，粘土塊がローリングを受けていることからある程度の水流があったと考えられる。層中からの遺物の出土はほとんどない，主に調査区北西部から北東部にかけて堆積する。

ローリングを受ける

c層　灰色粘土塊と黄褐色・灰色粗砂が入り乱れており，b層と同じく地山下層の灰色粘土が崩落して堆積した層である。この層には流水の痕跡が見られず，同様の崩落状況が調査中にも起きたことから，崩落したまま堆積したものと考える。また壁面を観察すると粘土層の上面から縦に亀裂が入り黄褐色粗砂が入り込んでいる状況が見られる。剥離型崩落の現象と考えられ，SX140が湾状に開口していたことを裏付けるものであろう。遺物を全く含まないことから，

崩落したまま堆積

一時に堆積したものと思われる。

d層

粗い灰色粗砂の堆積層で，暗茶褐色と地山直上の埋土最下層である。調査区中央部から南部にかけては層が薄くなり上層の粗砂が混入しており判別できない。砂利に近い粒子の粗い粗砂で遺物を含まない。このことから短期間の自然堆積であると思われる。

自然堆積

SX140の掘削時期については，小結で検討する。

a層出土遺物

木製品（Fig.51，PL.35）

曲げ物底板（16）青灰色粘土の直上から出土した。把手付楕円形曲げ物の底板と思われる。側板連結の溝や段はなく，5㎜幅の側板の痕跡が白色の線として残っており，この部分が若干窪んでいる。痕跡の曲線は外形の曲線とは屈曲がずれており，欠損部の形状は残存部を反転した形にはならない。痕跡上には2個一対の結合孔があり，3巻分の綴皮が残存している。またこれと僅かにずれる形で楕円形の細い切り込みが認められ，側板を乗せる際の基準線であると思われる。側面は細かい削りで緩やかな曲面を形作っており，削りの痕跡が顕著に認められる。図下部は欠失しているが，右端は深さ2㎜の腰乗せ状の段となり，上面から1㎜部分は明らかに人為的な切り込みである。平坦面は摩滅が著しいため明瞭ではないが，本来の面と考えて良いようである。この場合，組み合わせ式の底板と考えられるが，結合孔もなく接合方法が復元できない。補修されたものであろうか。残存長横24.3cm，縦19.8cm，厚さ1.2cmを測る。

板材（17）柾目材の薄板で，隅部を斜めに切り欠く。側辺は下がやや広がっており，上辺より2㎝内側に穿孔を有する。少し彎曲しており，これが元の形状であるのか土圧による歪みなのかは解らないが，折敷底板が変形したものとも考えられる。残存縦長7.85cm，横長11.5cm，厚さ0.45cmを測る。広葉樹である。

d層出土遺物

須恵器（Fig.48，PL.28）

蓋（16）天井部と体部の境に稜を持つもので，口縁部は肥厚し天井部も厚くする。外天井部は回転ヘラケズリ，他は回転ナデ調整で内天井部をナデ仕上げする。復元口径13.5cm。

壷（17）口縁部小片の為、復元はできない。

杯身（18）軟質の底部片で，外底部を回転ヘラケズリ，他を回転ナデ調整する。外底部には「×」のヘラ記号が認められる。摩滅が著しく，白灰色を呈する。

「×」のヘラ記号

底部（19）体部は内彎し底部へ緩やかに移行する。外面中位は横位のカキメを施し，下位は回転ヘラケズリする。内面はヨコナデ調整で，底部との境に指圧痕が付く。胎土は精良で焼成は良好，暗灰色を呈する。横瓶か長頸壷になるものか。

甕（20・21）いずれも胴部小片。20は縦位の平行叩きを施し後に横位のカキメを施す。内面は青海波が残り，これをヨコナデでナデ消す。焼成は良好で茶褐色を呈する。21は縦位の条帯文状叩きを施した後2㎝ほどの間隔で横位のカキメを入れる。内面は青海波が残るがやや浅い。外面は自然釉がかかる。

土師器（Fig.48，PL.28）

甕（22）頸部小片で摩滅が著しい。胴部外面は横位のハケ目，内面はヨコヘラケズリ，屈曲部はヨコナデ調整する。器壁が薄く明橙褐色を呈する。

弥生土器（Fig.48，PL.28）

甕（23・24）23は端部に刻み目を有し胴部には縦位のハケ目が僅かに観察できる。他はナデ調整。24は平底の底部で磨滅が著しく調整は不明瞭だが，外面に斜位のナデ，内面にタテナデが観察できる。復元底径7.2cm。

木製品（Fig.51・PL.35）

木札（30）幅3.5cm，厚さ0.2cmの薄板の頂部を面取りし，両側面の頂部から約2cmの箇所に台形の切り込みを入れる。墨痕は認められない。

半球状（27）毬杖の玉の約1/3を欠いたような形状であるが，裏面は粗い削りによって平坦に造られている。上面は表皮に近いと思われるが，先端が斜めに断ち切る形で丸く作り出される。尾部は技の周辺から切り込んで中央部を降り取る形で切断されており，調整はされていない。現存縦長6.6cm，横長4.5cm，厚さ3.3cmを測る。

その他の遺物

耕作土出土遺物

須恵器（Fig.53，PL.37）

杯蓋（1）低い宝珠形のつまみ撮を持つ蓋で頂部のみの小片。外天井部は回転ヘラケズリ調整。胎土は精良で淡灰色を呈する。

長頸壷（2）頸部の破片で，胴部とは粘土紐接合面で剥離する。内外面ともヨコナデした後内面の屈曲部をケズる。内外面とも灰を被り，外面には一部指圧痕が付く。8世紀前半代。

硯（3）円面硯陸部小片。全体にヨコナデし，表面はカキメ状になる。陸表面は平坦で擦痕は認められず，端部の稜はシャープに造る。胎土は精良で焼成は堅緻。裏面には暗茶色の有機質が付着する。8世紀前半代。

緑釉陶器（Fig.53，PL.37）

取手（4）釉の痕跡が全くなく緑釉であるとは断言できないが，形態・胎土からここでは緑釉陶器として報告する。2条の溝によって3重孤を造りだしており，水注の取手と思われる。胎土は精良で土師質。9世紀代の資料。

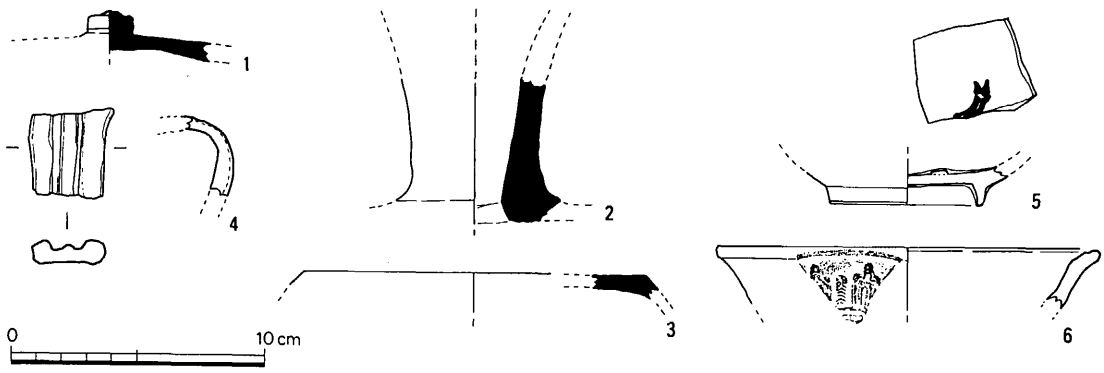


Fig.53　耕作土出土土器実測図（1/3）

杯（5）内面に松の浮文を持つもので，型作りのようである。釉の色は淡緑色で全体に施釉されるが，内面下位は透明釉の痕跡が見られる。胎土は精良で土師質。近世の資料。

青磁（Fig.53，PL.37）

椀（6）龍泉窯系青磁椀の底部片で，見込みに双魚の貼付文を有する。胎土は灰白色で青緑色の釉が厚く施され，高台畳付部のみ露胎となる。復元高台軽6.0cm。14世紀代の資料。

(4) 小　結

今回の調査では残念ながら木樋本体や，吐水口の構造を示す遺構・遺物については確認することはできなかった。しかし，木樋抜き取りの為に掘られたと思われる大型の掘形SX135や，枕木状木製品の出土，そして各層で出土した多量の削り屑などから，ここに木樋が埋設されていたことは，ほぼ確定的となった。そこで，今回の調査で確認できた木樋抜き取り掘形の堆積状況や，抜き取り以前の遺構と考えられるSX139・SX140などから若干の検討を試み，まとめとしたい。

まず，遺構についてまとめておく。

（1）段落ち遺構SX134の上端線は当初外濠の岸と思われたが，後世の掘削であることが判明した。その時期については，13～14世紀代と考えられる。

（2）木樋の抜き取り掘形SX135の埋土は，中層の④層（黒色粘質土）を挟んで大きく 2層に分かれる。④層は自然堆積の単一層で，0.8mの深さがあり，長期間窪み状のまま放置されていたものである。廃棄物や自然木を多く包含することからするとみて，周囲は木立となり，ゴミ捨て場状になっていたと思われる。そしてある時期に地山の粘土がブロック状に混入した粘

地盤強化　質土で一気に埋められている。しかし軟弱で湿地であったため，地盤強化（SX137）の措置をとっている。

土留め　杭列SX136は，SX137の整地とほぼ同じ時期に打ち込まれたものと思われる。土留め等の護岸として仮設的に造られたものであろうか。この上層は後世の切り込みなどがあるため，土層からの観察からは解らない。この上に近代の耕作土が盛土され，この盛土時に平坦に削られる。

下層については，層の性質に違いはあるものの，埋められた時期にさほど時期差はなものと思われる。枕木状木製品の出土状況や，他の出土遺物から考えても，抜き取り直後であろう。⑤層が人為的に埋められたものであることは確かだが，⑥・⑦層については人為的なものか自然の流れ込みかは確定できない。しかし埋め戻しに利用されたことは間違いないであろう。

また，埋土の各層には，各層に針葉樹の削り屑が多量に混入している。木樋が残存しておら

現地で加工　ず確定的なことは言えないが，この削り屑が木樋のものであるとすれば，埋設時に木樋を現地で加工がなされた可能性が考えられるのではないだろうか。

（3）木樋抜き取りの時期についは，確定するには出土遺物が少量である。しかし，SX134の埋没年代が13世紀前後であり，これより下層のSX135④層の堆積にかなりの時間を要したと思われ，④～⑦層の出土遺物の下限は8世紀後半期である。これらのことから奈良時代末～平安時代前半頃に木樋が抜き取られた可能性も考えられる。

（4）落ち込み遺構SX140については，一定の期間内側が開口していたものであろう。これは剥離型崩壊の状況がよく観察できることや，崩落した地山の堆積からも裏付けられる。また，

埋土に流転層があることから，開口部分に水流があったと想定できる。

（5）溝状遺構としたSX1139は埋土状況からみると，水流があったと考えられ，SX140と関連する遺構と思われる。調査区外に延びるため，プランの全容は不明である。

木樋埋設と吐水口の構造について

木樋埋設と吐水口構造

調査で得られた結果から，木樋の埋設状況や吐水口の構造について若干検討してみたい。

木樋や吐水口の構造材については，枕木1本を残して全て抜き取られ，持ち去られている。このため，構造物について考察することはできない。

木樋埋設場所については，述べるように若干の問題点はあるものの，ほぼ確定したといえる。仮にSX135の中心を取るとすれば，西門跡で検出した第Ⅰ期の門遺構の中心から約190m，第17次調査検出の木樋位置からは160mの距離になる。

次に木樋の埋設状況であるが，木樋の設置レベルについて見てみると，平成9年度の立会調査で検出した内側（太宰府側）での抜き取り掘形の底は，本調査区北側で検出した地山面よりも30cm以上低いレベルにある。過去の発掘調査の結果や考察などから，木樋底の傾斜が内側から外側に向かって低くなるとすると，吐水口（本調査区）での木樋底レベルはこれより更に低くなると考えられる。

A　木樋の先端がSX140内で収まる場合

仮定A

木樋が第17次調査例のように枕木直下まで掘られたとすると，木樋の高さが130cm前後として，その上面はSX140の上端レベルとなる。これは，内側の抜き取り掘形底レベルとの矛盾は生じない。このとき吐水口の位置は，SX135が最も深くなる位置より南側になると思われ，SX140の上端の約4m南の位置以南になる。この場合SX140のa層は木樋から吐き出されたか，もしくは水流により攪拌された砂の堆積であり，b層は水流により崩落した地山と砂層の攪拌土の堆積と考えることができる。また，SX140は木樋存在時に伴うものであり，吐水口が湾状になっていた事は間違いない。埋土の②層上面で自然木や木製品が多く出土したことや，剥離型崩落が観察できることもこれを裏付ける。そしてSX140の周囲が地山であり，むしろ北側が高くな

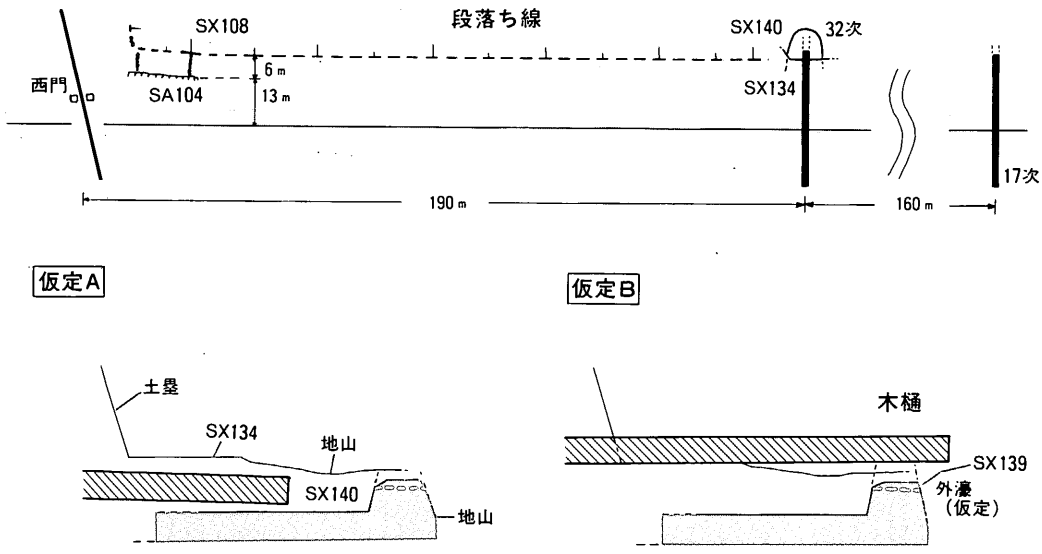


Fig.54　水城跡木樋埋設位置模式図

る状況から，この部分が外濠になることは考えられず，調査区の更に北側に存在することになる。つまり，木樋は湾状になった吐水口に水を吐き出し，不純物や土砂を沈殿させて，上澄みだけがSX139を通って外濠に流れ出すことになる。この場合少し想像を逞しくするならば，吐水による土砂や壁面の崩落土によってSX140がかなり埋没してしまったため木樋が機能しなくなり，抜き取られたということも考えられる。

仮定B

B　木樋がSX139の上を通って北側に延びる場合

木樋の先端が調査区外に出ると想定する場合である。先述の通り，地山のレベルから外濠を調査区内に想定することは困難な状況である以上，木樋が調査区外に延びるためには，調査区北側で検出した地山面より高いレベルにあることになる。そしてSX139を木樋設置の為の掘形の痕跡と見ることができる。しかし，この場合，先述の土塁内側の抜き取り掘形底レベルより高い位置にあることになり，矛盾が生じる。また，SX135が深く掘り下げられた理由や，SX140の性格が説明できない。吐水口の構造物が推測できない以上，この可能性がないわけでもないが，今回は指摘のみに留めておきたい。

外濠と吐水口の関係

外濠の位置と吐水口の関係について

外濠に関しては，段落ち遺構SX134の上端線が当初濠岸とである思われた。その根拠としては西門地区の調査で，外濠の岸と思われる段落ちSX108を検出しており，これを東に延ばすと，SX134に繋がることであった。また，このラインが，西門地区から調査区の西隣接地まで，現在も段落ちとなっていることも，それを考慮する大きな要因であった。今回SX137については中世以降に掘削されたものであると確認したが，このラインの一致は無視できないものである。SX108については，やや浅いことから外濠の本来の岸ではなく，段堀状になる外側の際であるとも考えているが，外濠の一部がこのラインから始まっていたことは確実である。ここでひとつ考えられることは，中世には西隣接地までSX108から延びる段落ちが遺存しており，これに併せてSX134を掘削したということである。では，調査区地点である吐水口の付近では外濠はどうなっているのであろうか。前述のように，調査区においては外濠は調査区より北側に想定せざるを得なくなり，その結果，

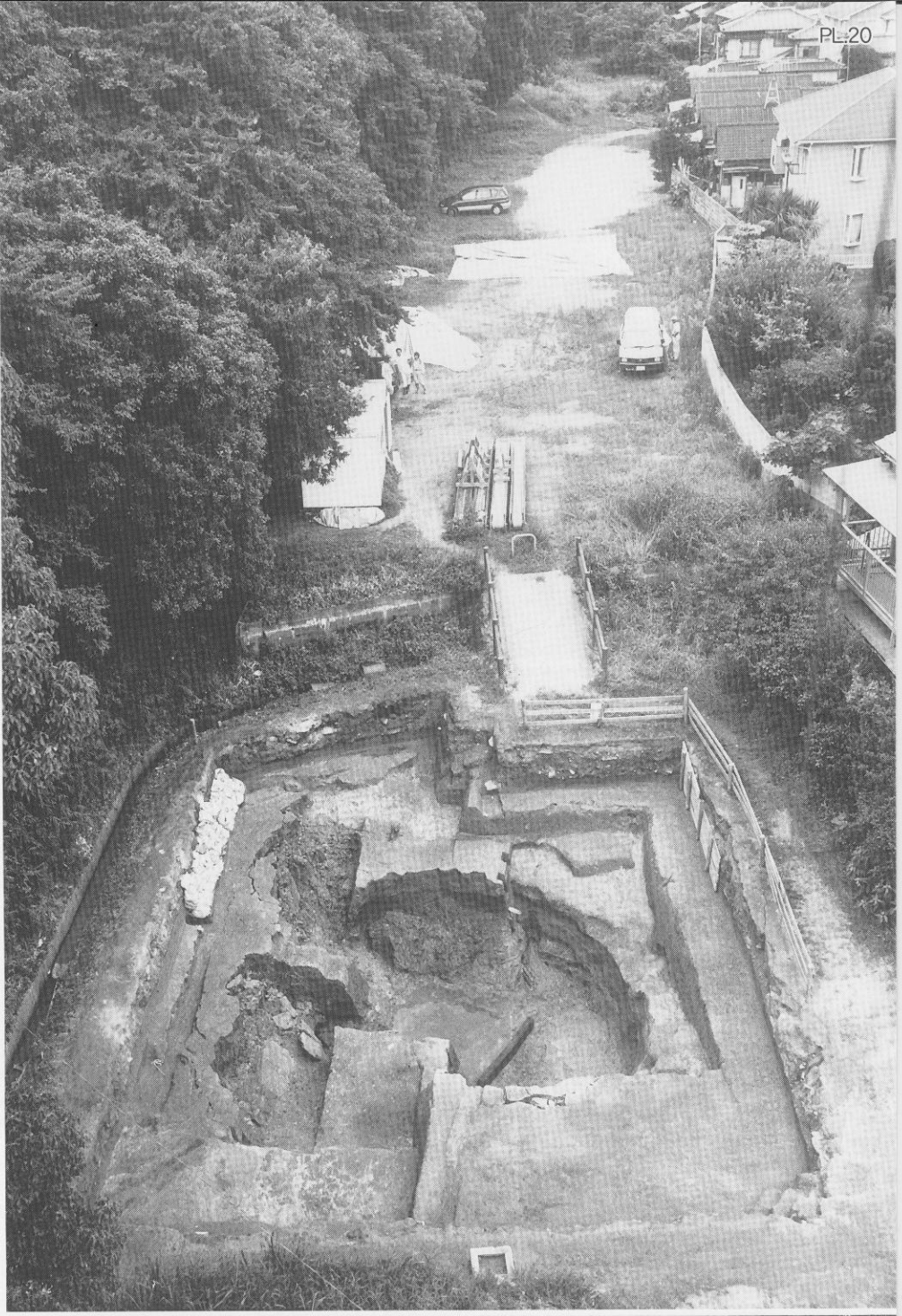
外濠の位置

(1)　外濠の岸は本来SX134の上端線であり，吐水口部分のみが特殊構造で外濠に突出する

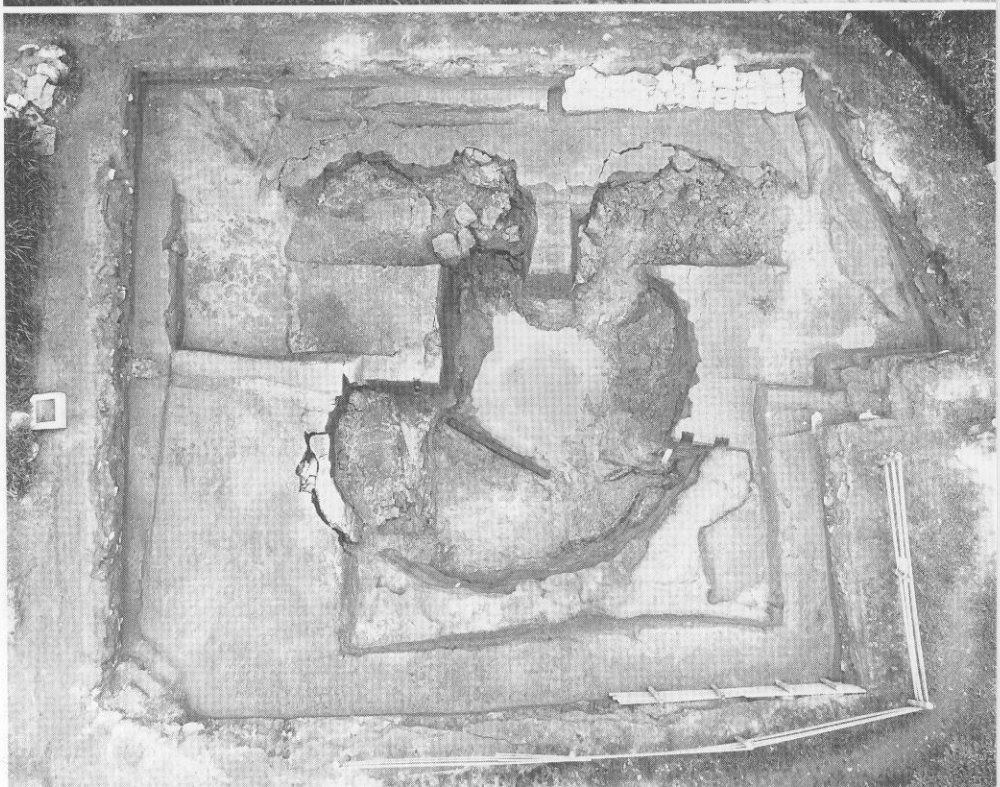
(2)　外濠の岸がSX108より北側にあり，本調査区の北側に繋がる

の2つが考えられる。今回の調査区内の地山の状況では，外濠の段落ちを示すものはない。このことのみに注目すると(1)の想定が有力ではあるが，隣接地を調査することによって北側で外濠の岸が検出される可能性も今後に残される。

以上，いくつかの仮定をして吐水口の構造と外濠について検討してみた。しかしながら，今回の調査ではこれらの仮定を確定できるような結果を得ることはできなかった。共通していることは，調査地付近では外濠が発掘区の北側に求められることであり，またA・Bいずれの仮定にしても，吐水口が特殊構造になっていたということである。東西に続く外濠との関係については，今回の調査区内ではこれを示す要素が無いため，言及はできない。今後，周辺地域についての調査を俟ち，また，他所の吐水口との比較検討を進めていかなくてならないであろう。



(1)　水城跡第32次調査調
　　査区全景
　　（空中写真 北東から）



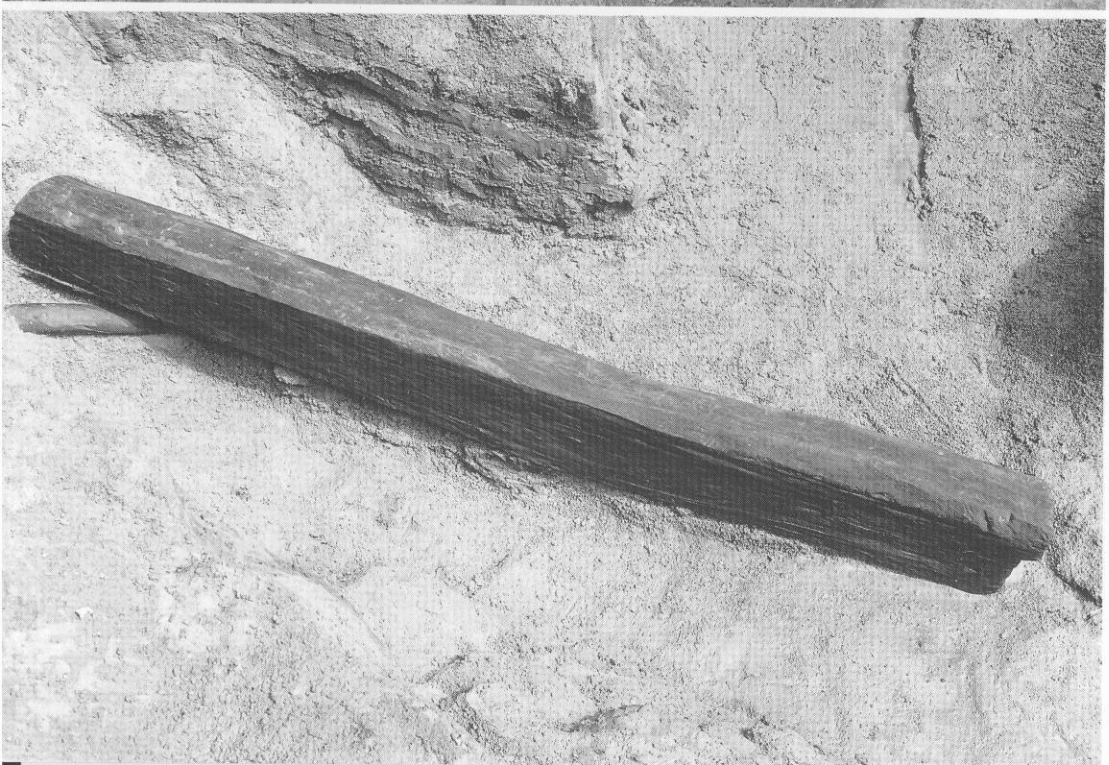
(2)　同上（空中写真）



(1) 調査区（上層）全景
（北東から）



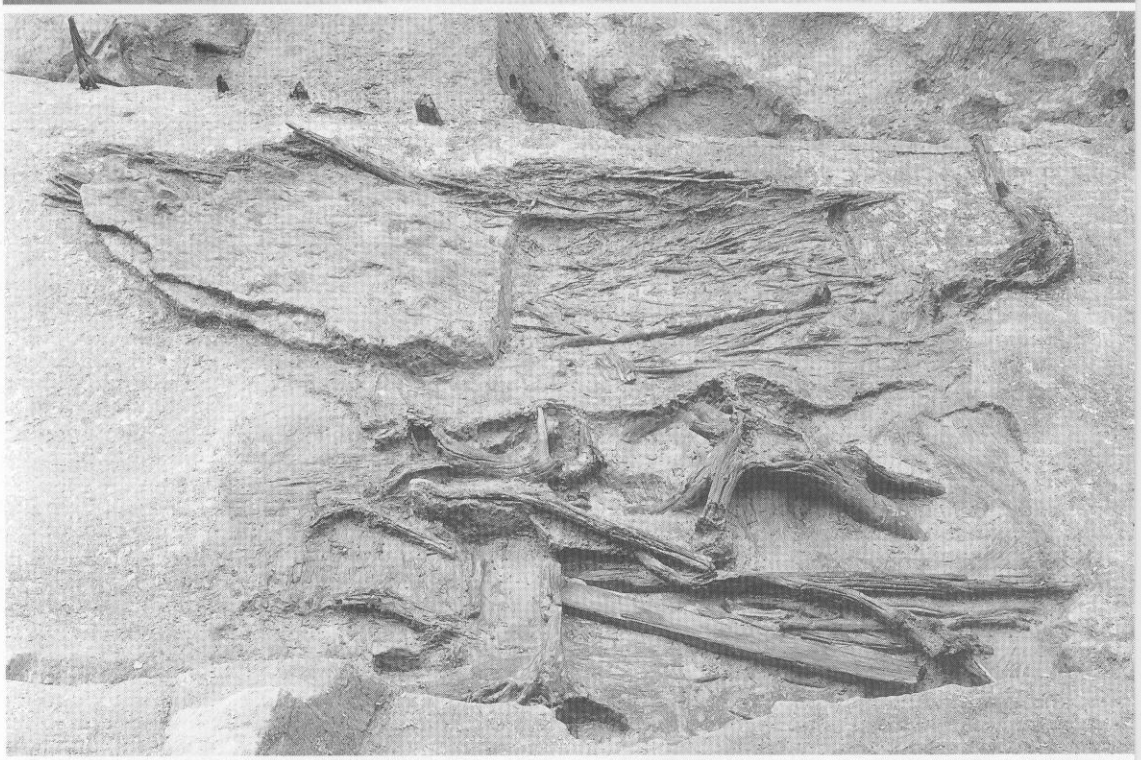
(2) SX135全景
（北西から）



(3) 枕木状木製品出土状況
（北西から）



(1) SX137　覆土土層



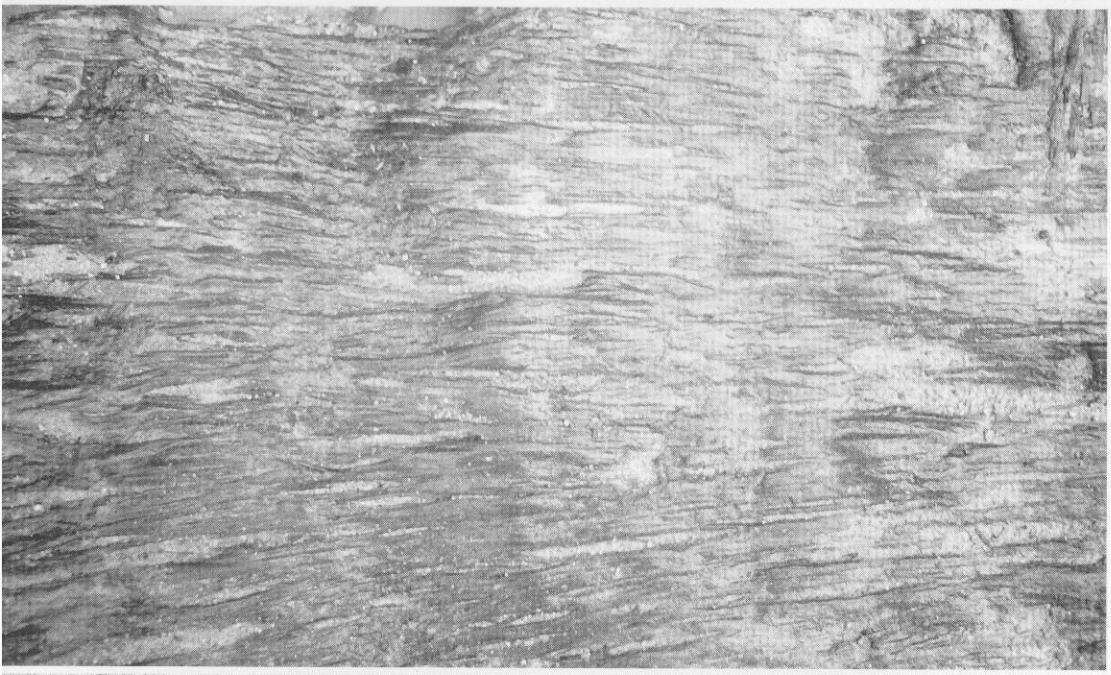
(2) SX137（南東から）



(3) SX137（北東から）



(1) SX137堆積状況
（北から）



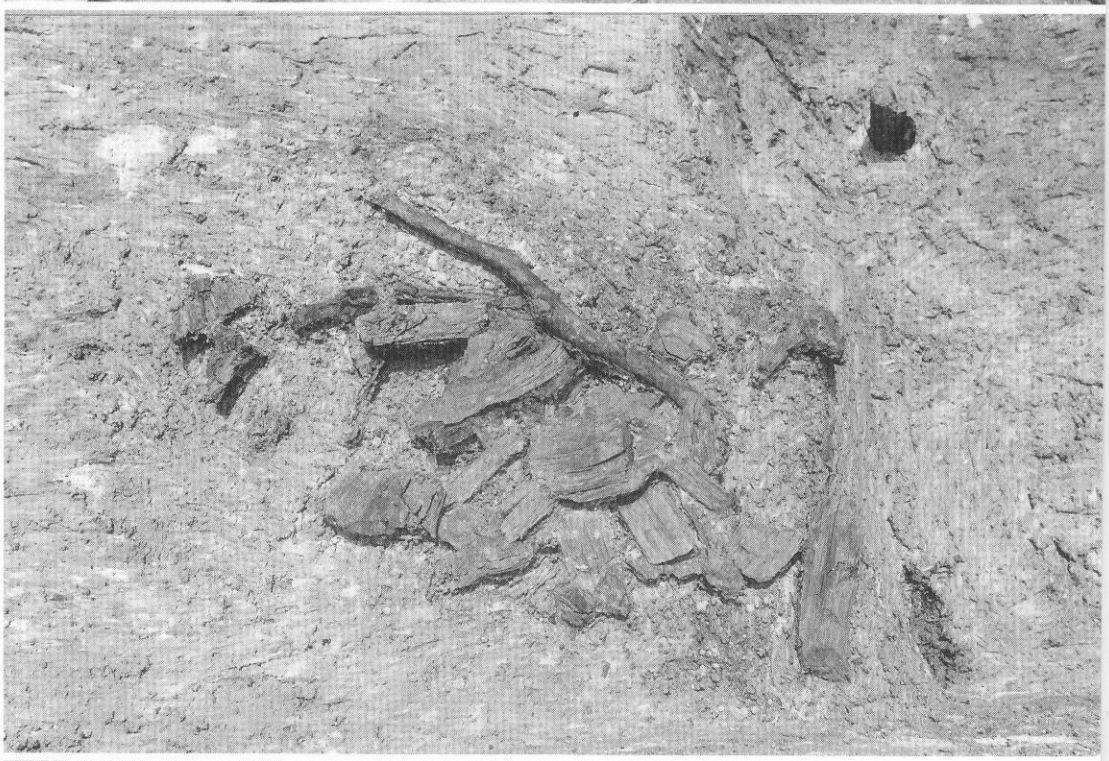
(2) SX137繊維細部



(3) SX137木製品出土状況
（北東から）



(1) SX136（北から）



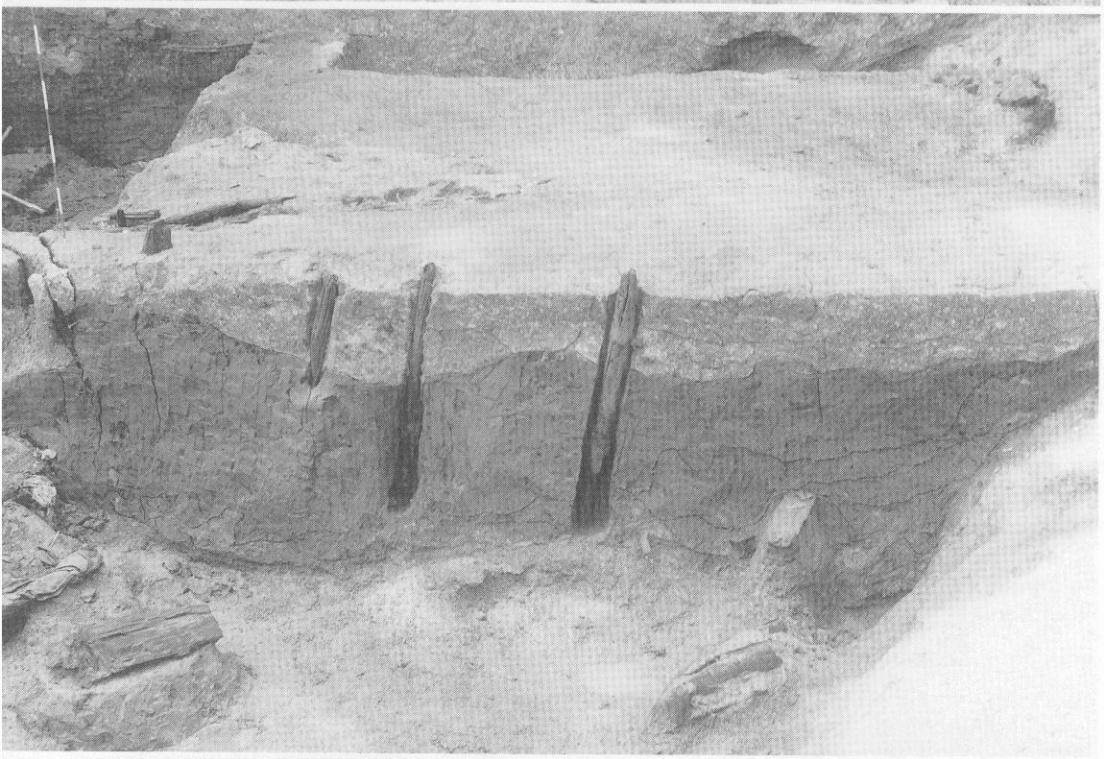
(2) SX138（北西から）



(3) 枕木状木製品共伴土器出土状況



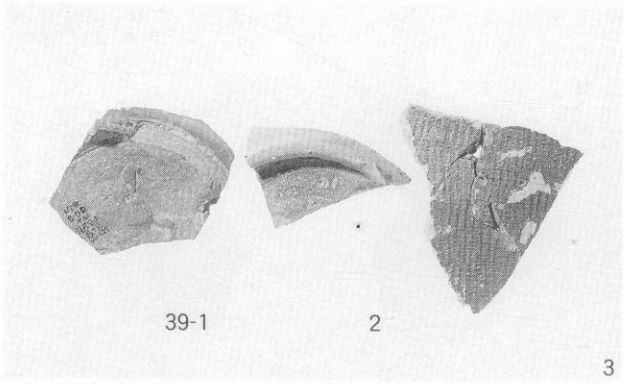
(1) 南北中央ベルト
北側土層



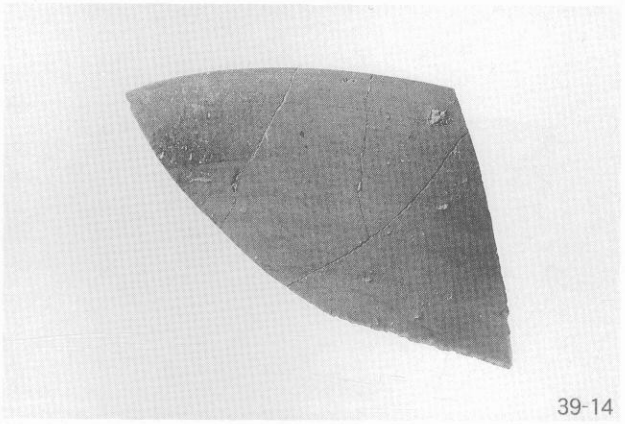
(2) 東西中央ベルト西側
土層



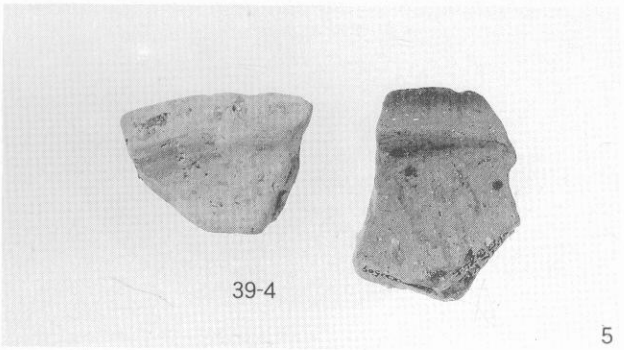
(3) SX140（南東から）



39-1　2　3



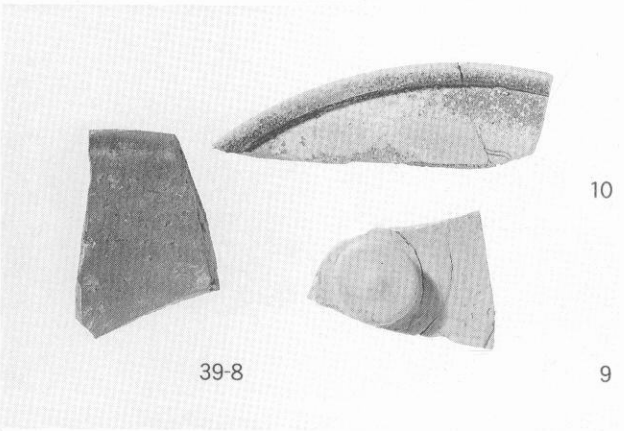
39-14



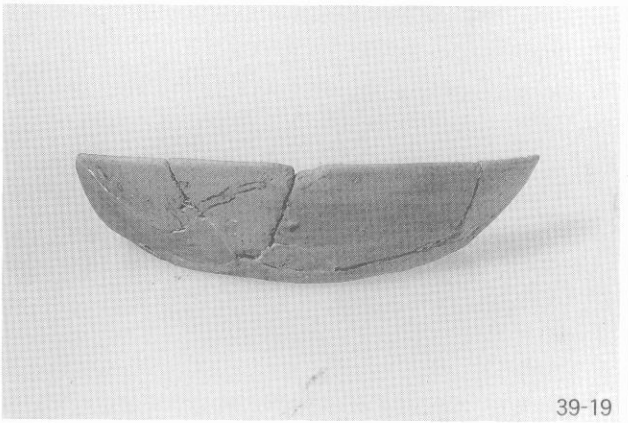
39-4　5



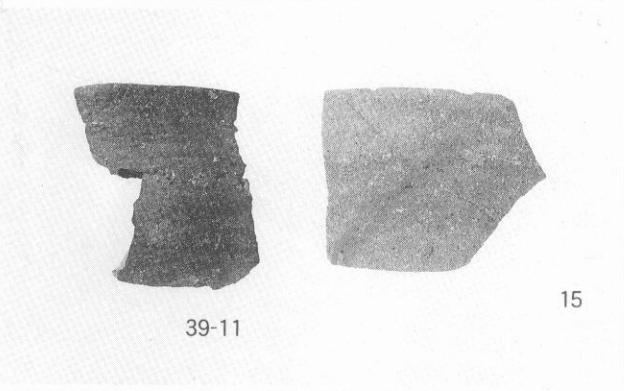
39-16



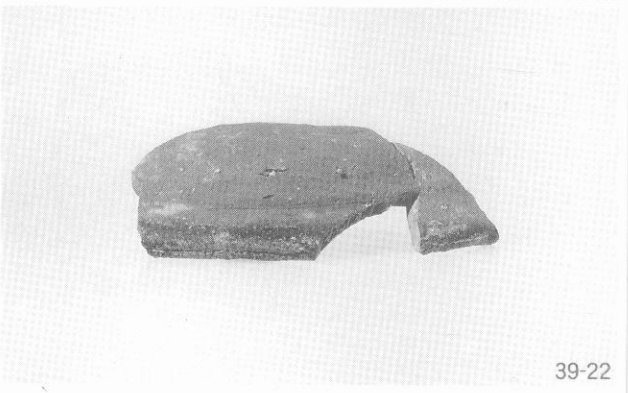
39-8　9　10



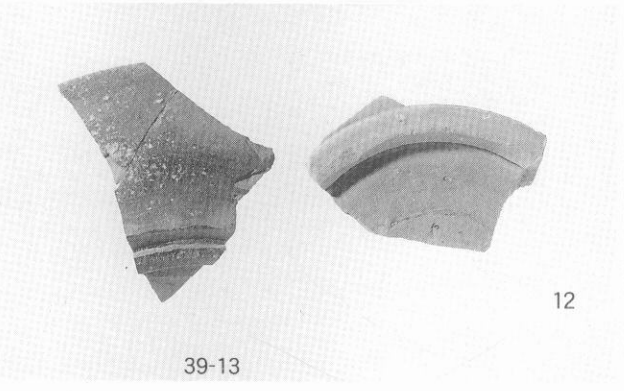
39-19



39-11　15

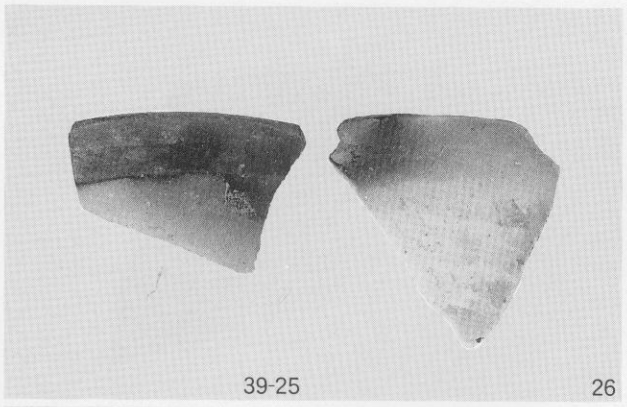


39-22

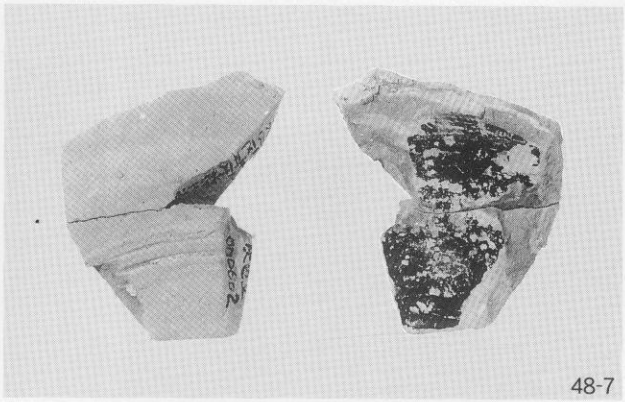


39-13　12

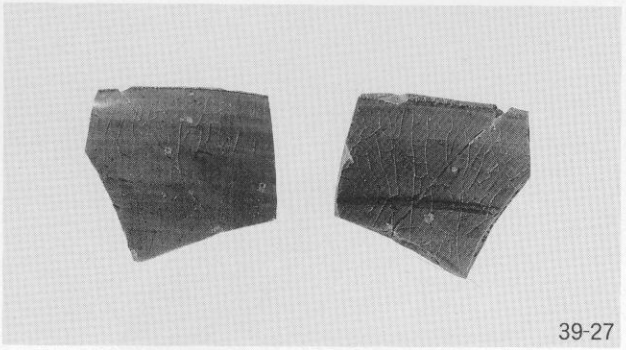
SX134・135出土土器



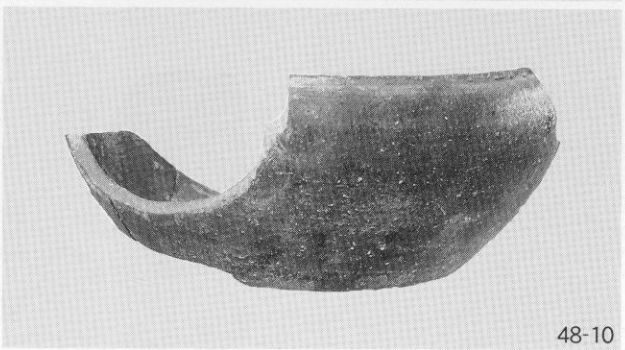
39-25　26



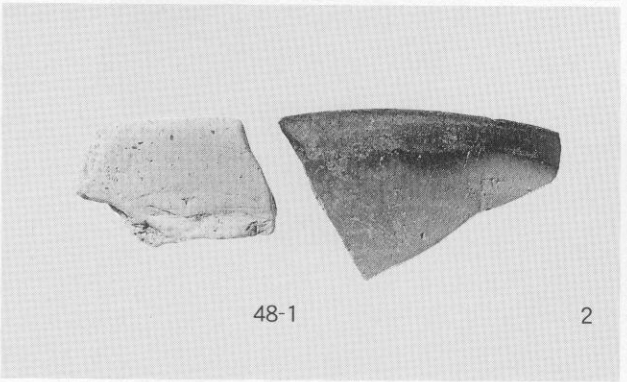
48-7



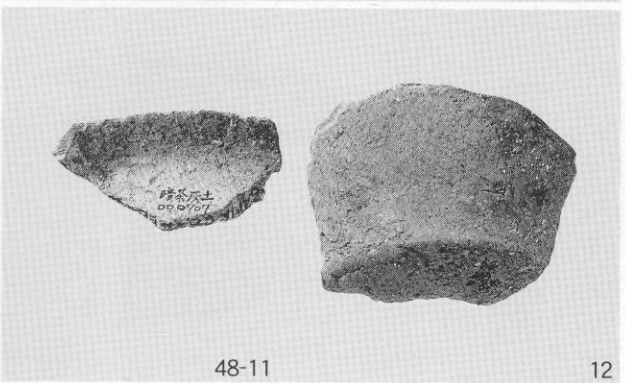
39-27



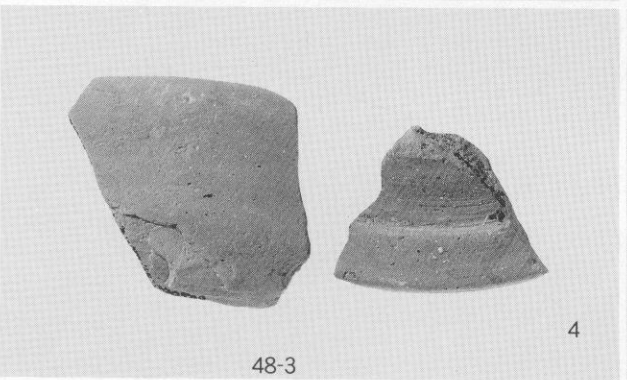
48-10



48-1　2



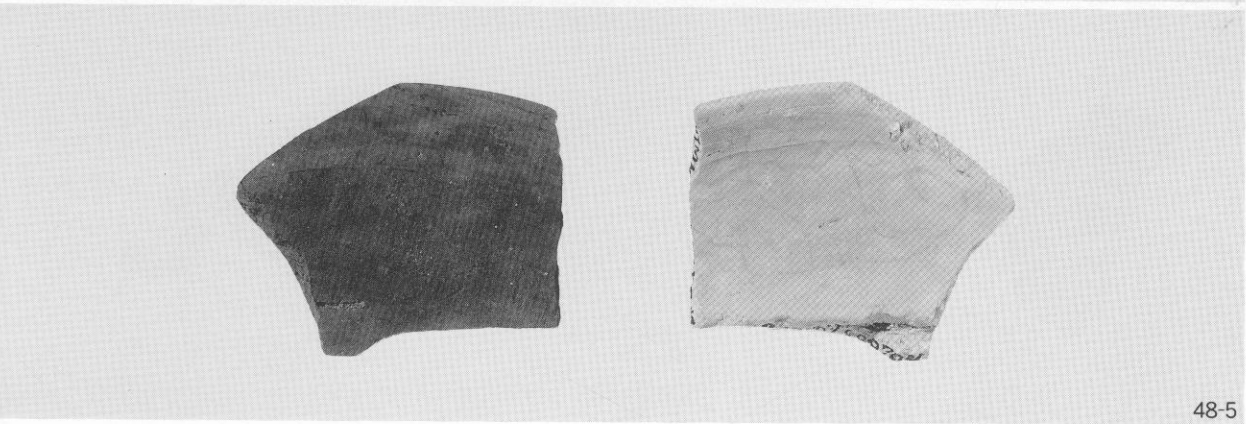
48-11　12



48-3　4



48-13

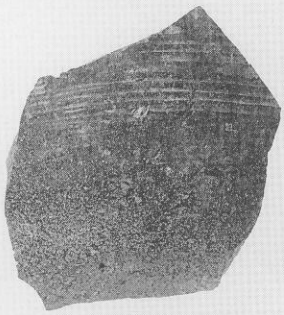


48-5

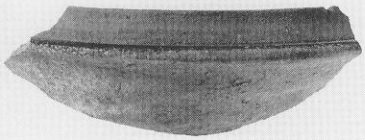
SX135・137出土土器



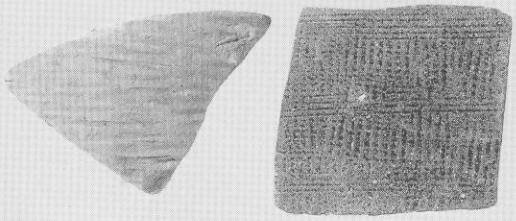
48-14

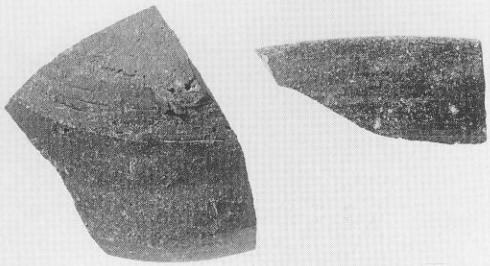


48-19



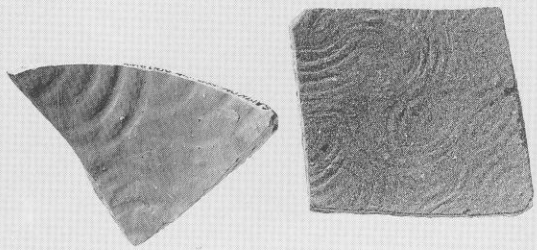
48-15



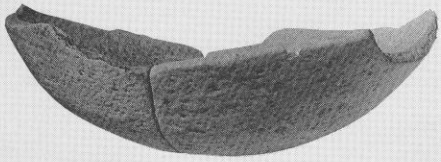


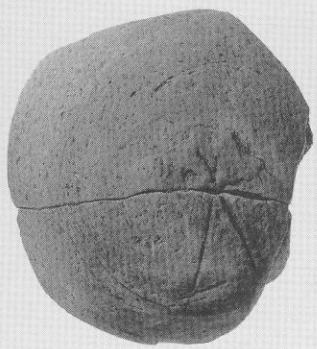
17

48-16



48-20 21





48-18



48-22

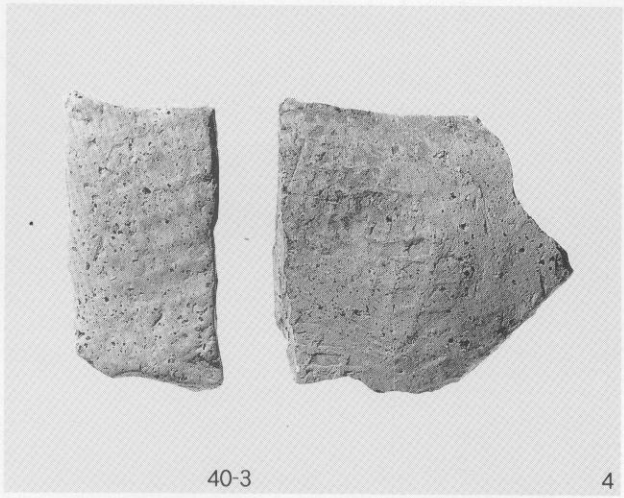


23 48-24

SX135・140出土土器

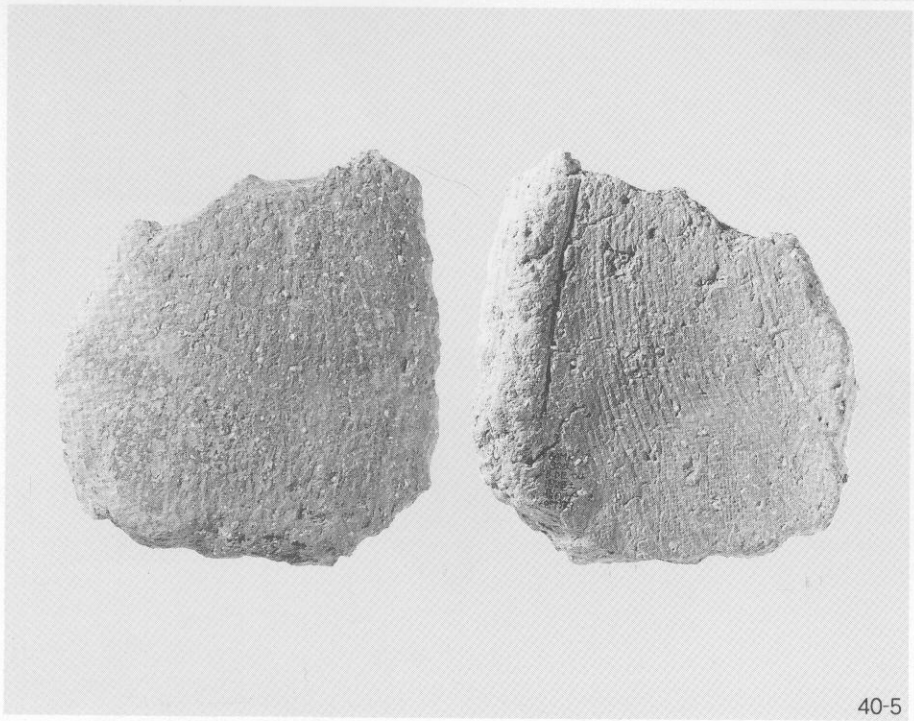


40-1

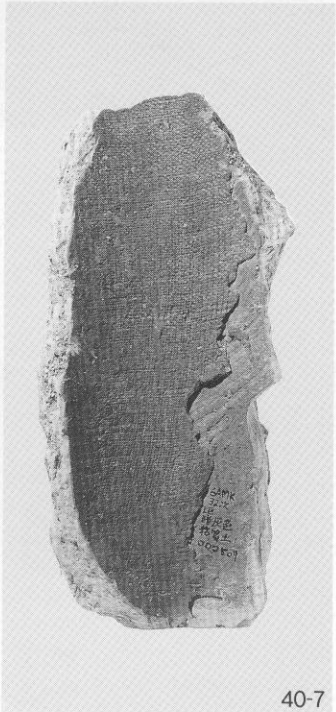


40-3

4



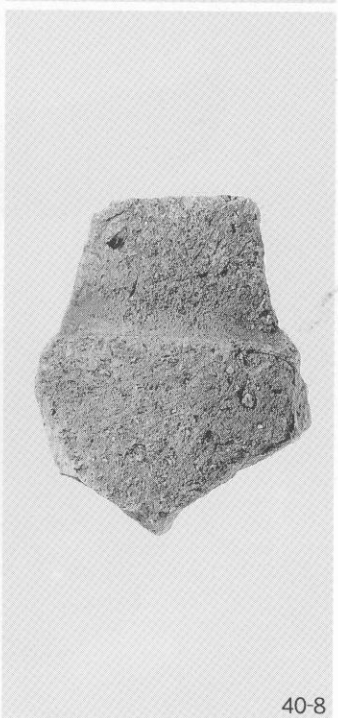
40-5



40-7

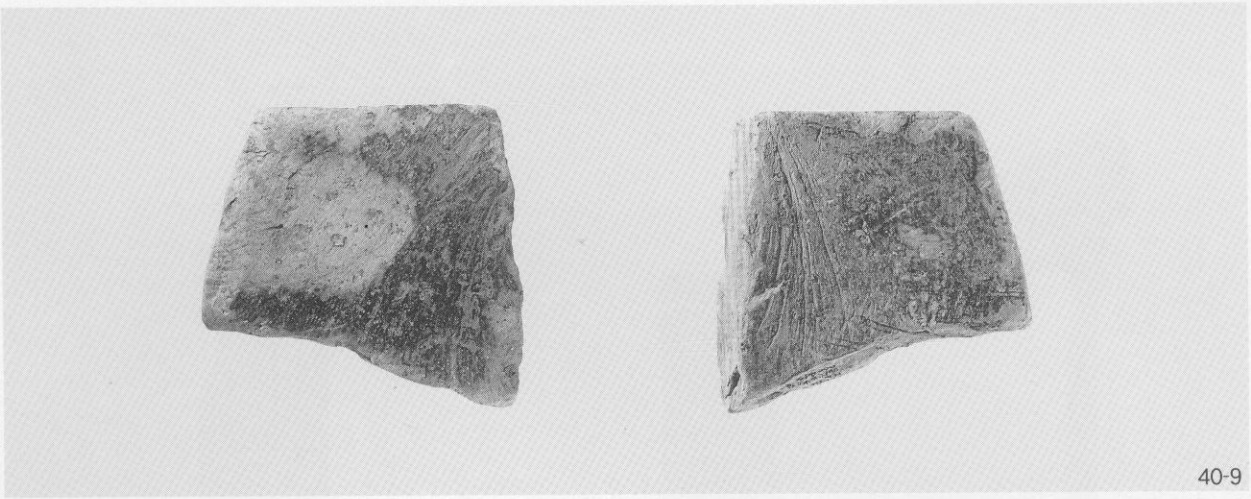


40-6

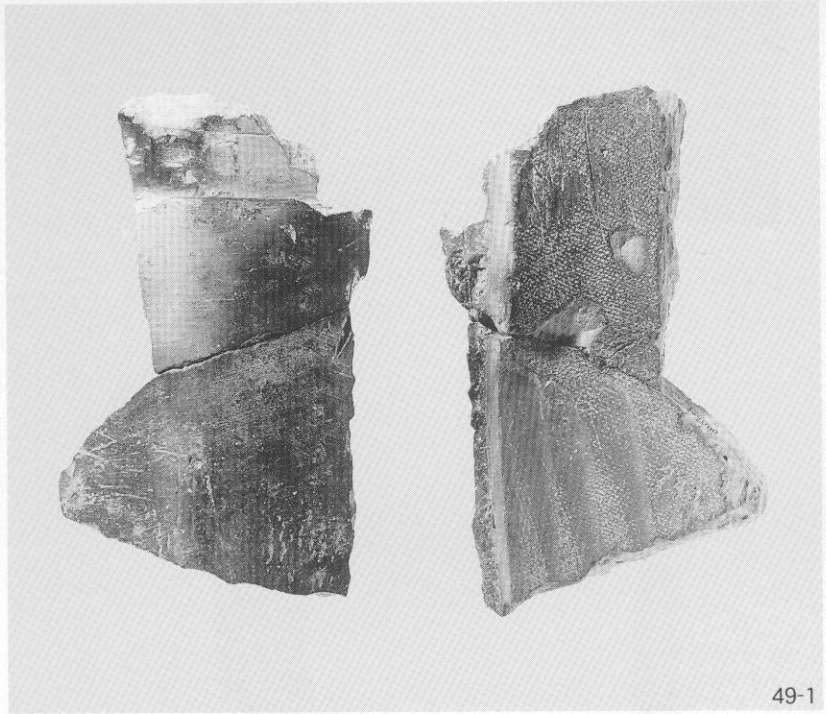


40-8

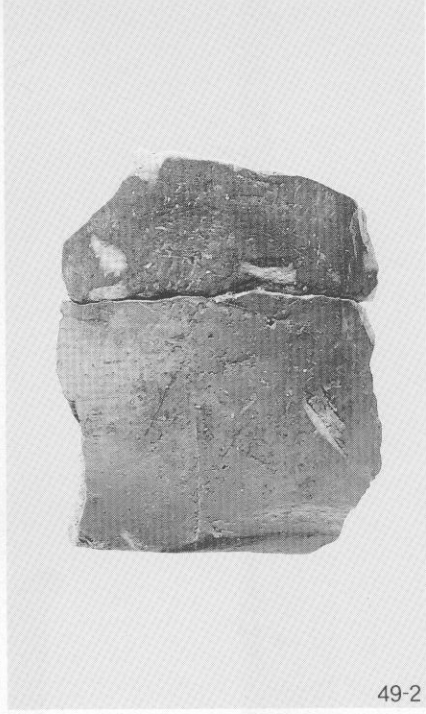
SX134出土瓦



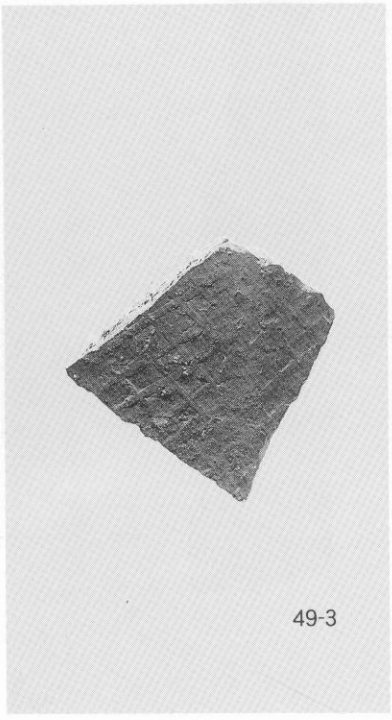
40-9



49-1



49-2



49-3

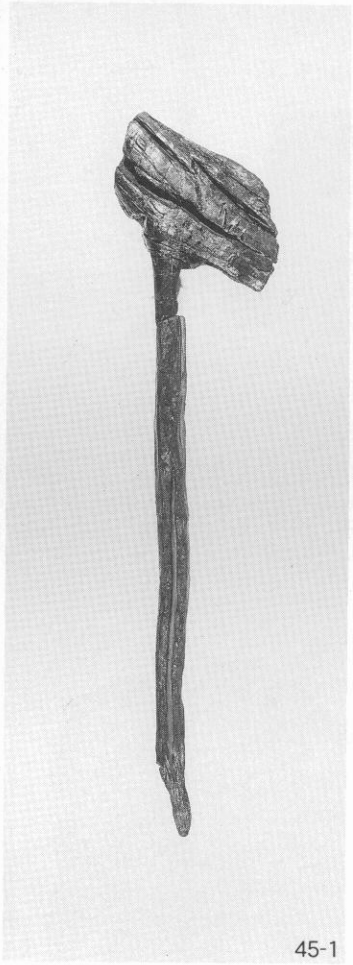


49-4



49-5

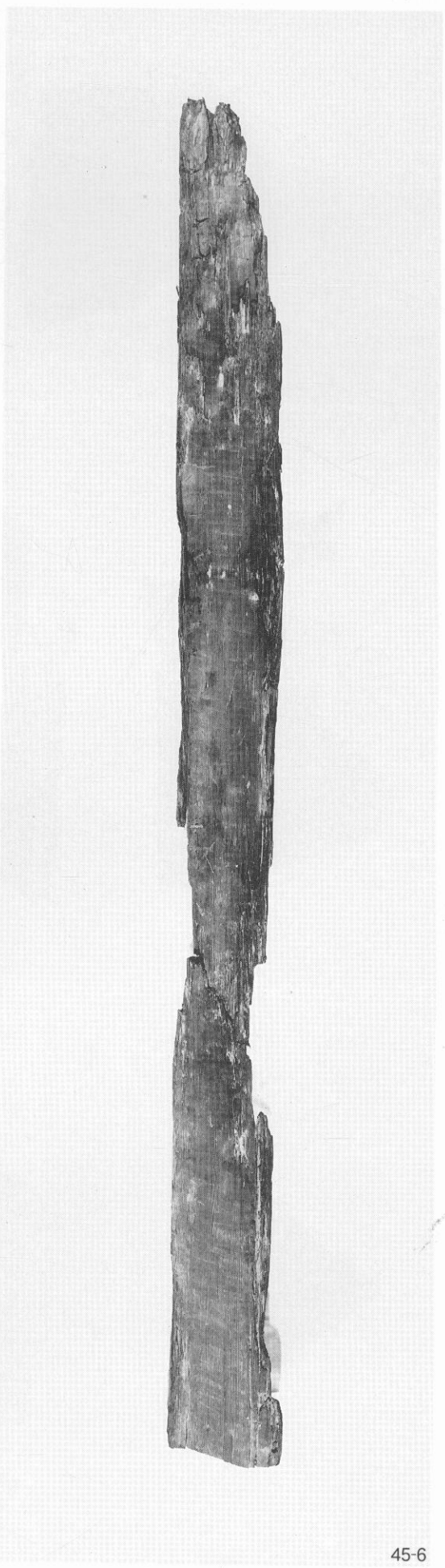
SX134・135出土瓦



45-1



45-2



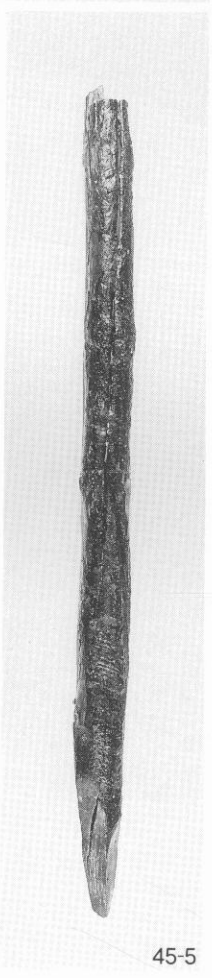
45-6



45-3



45-4



45-5

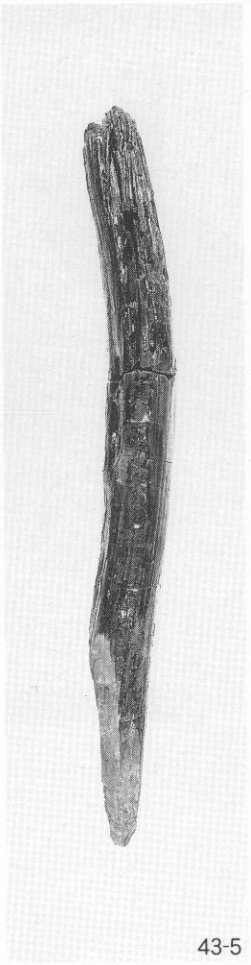
SX137出土木製品

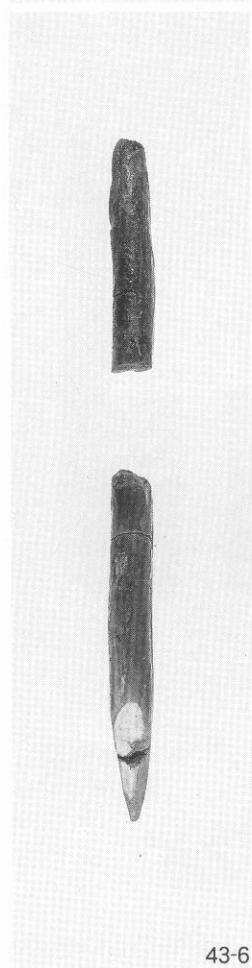

43-1


43-2


43-3


43-4


43-5


43-6

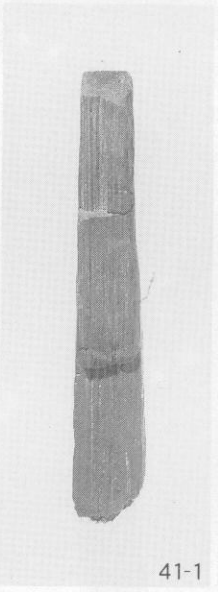

43-7


43-8

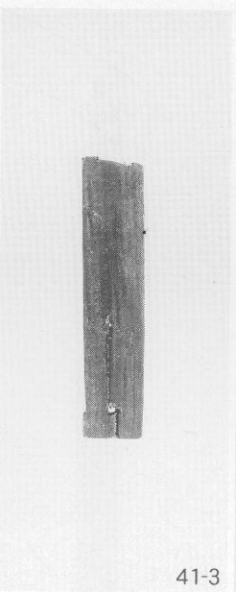

43-9

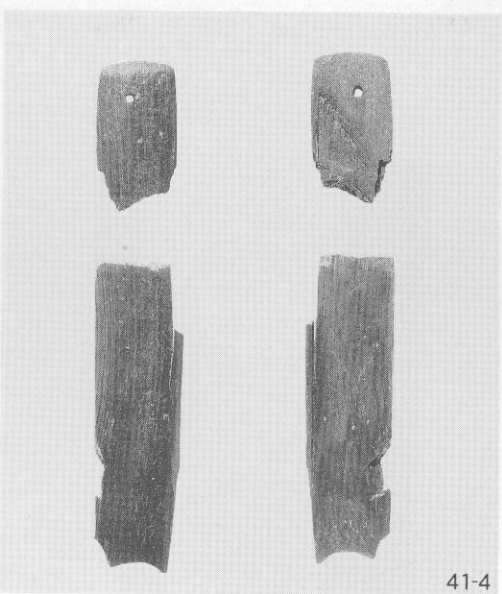

43-11

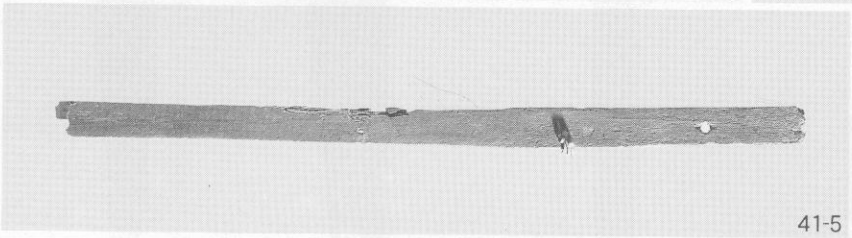
SX135・136出土木製品

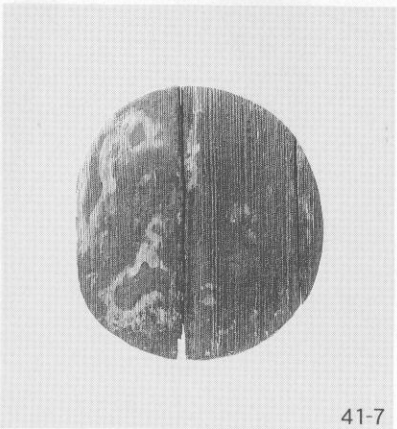

41-1

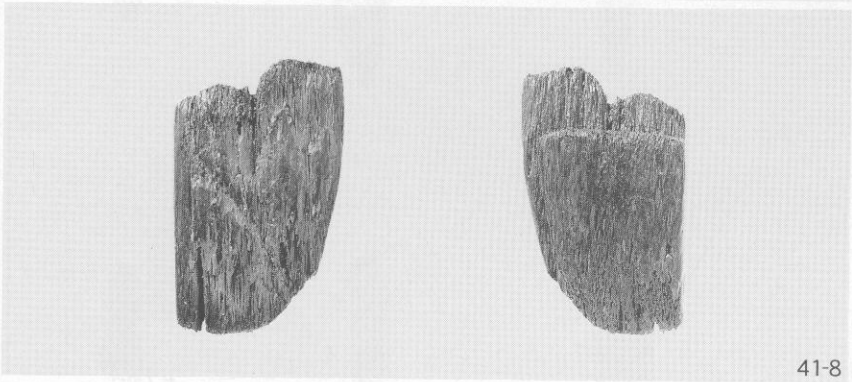

41-2

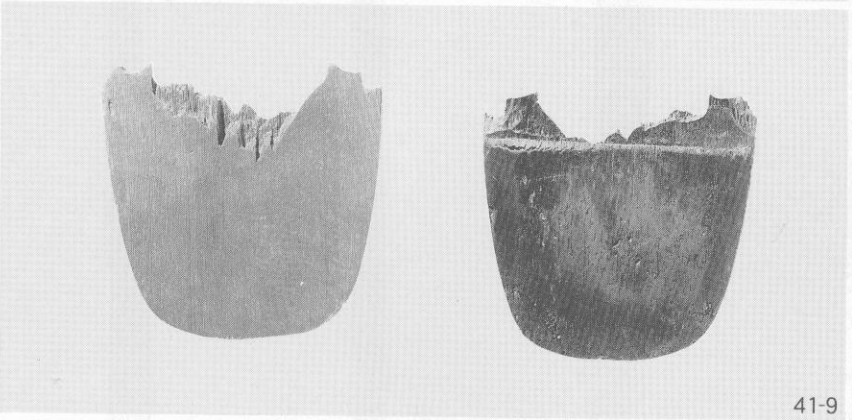

41-3

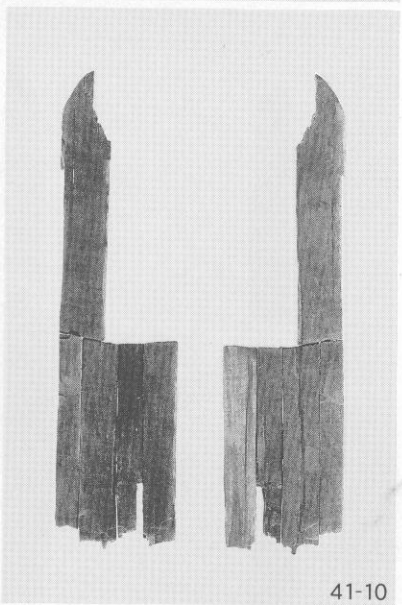

41-4


41-5

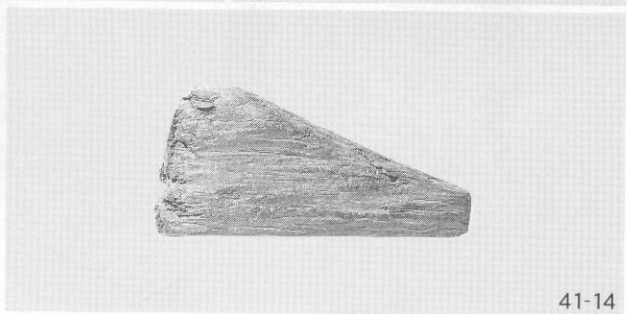

41-7


41-8

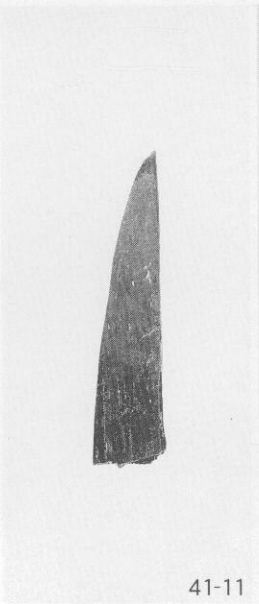

41-9

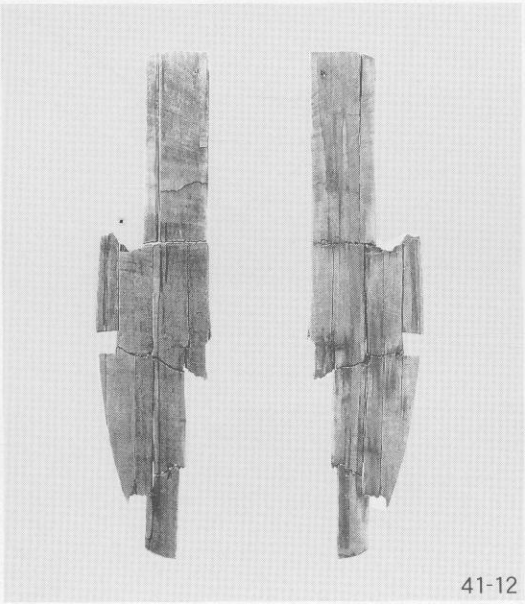

41-10

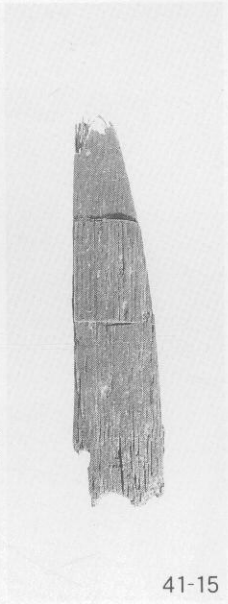

41-13

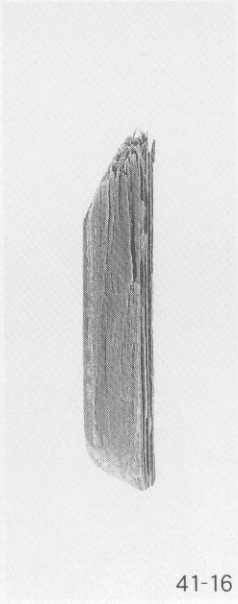

41-14

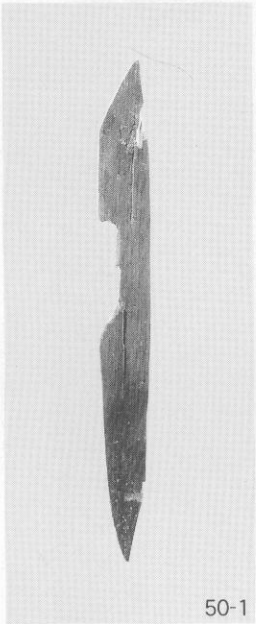
SX134・137・138出土木製品

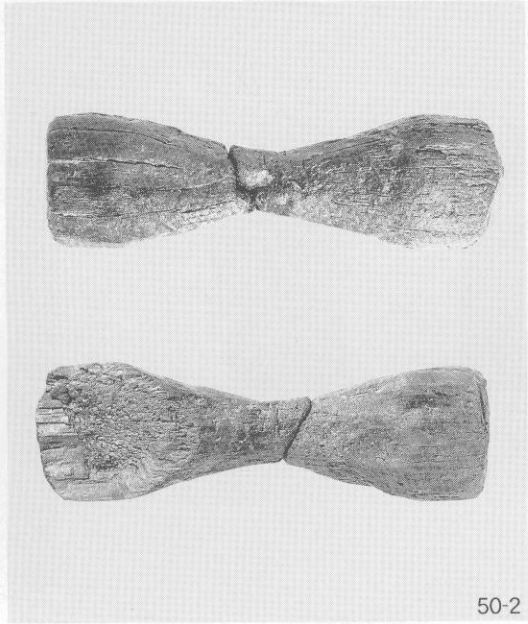

41-11

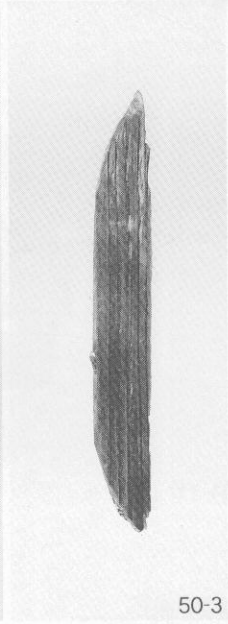

41-12

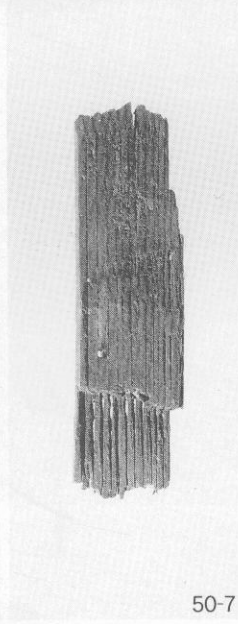

41-15

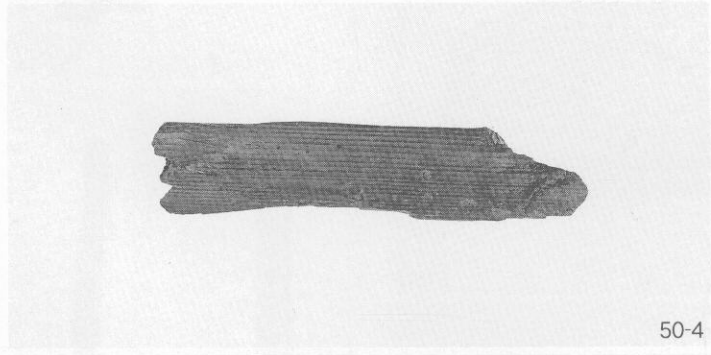

41-16

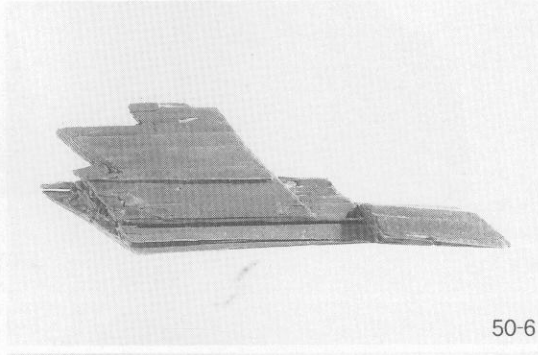

50-1

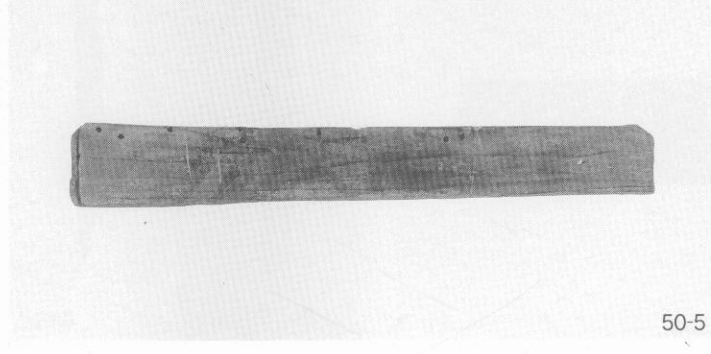

50-2

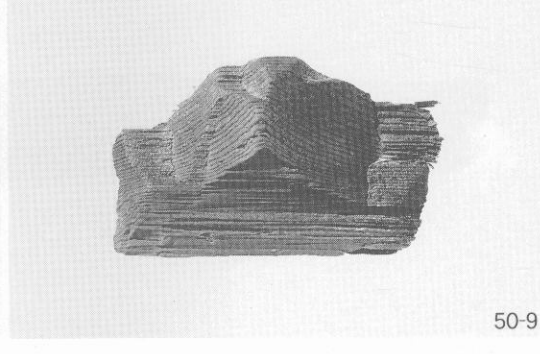

50-3


50-7

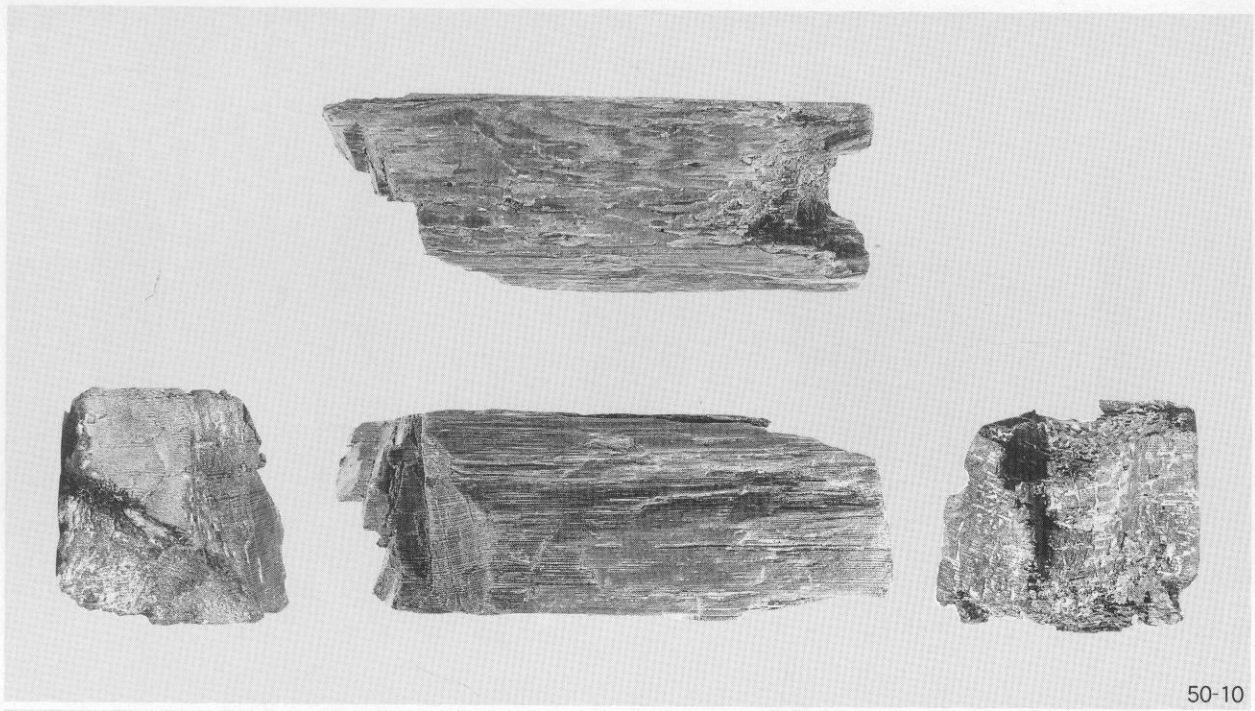

50-4


50-6


50-5


50-9

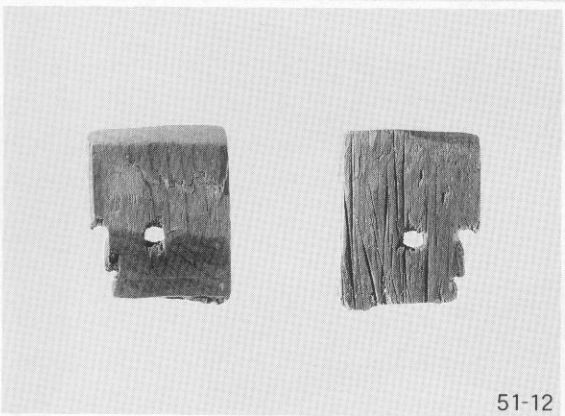
SX135出土木製品



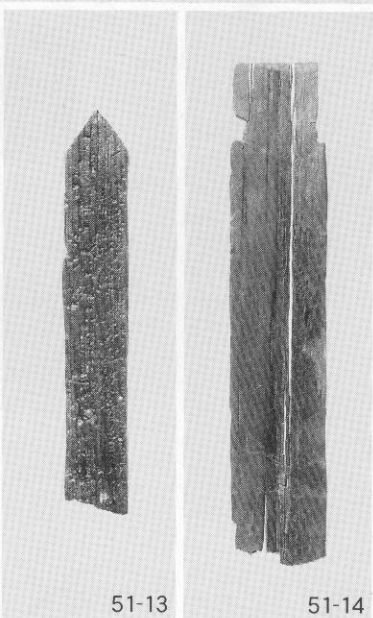
50-10



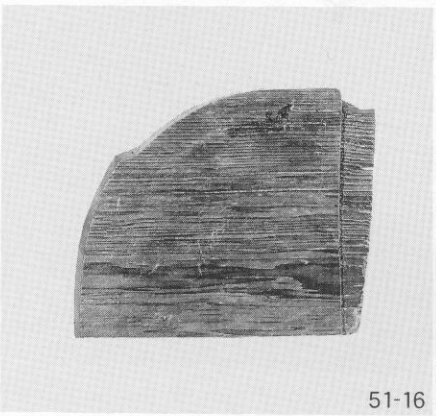
51-11



51-12



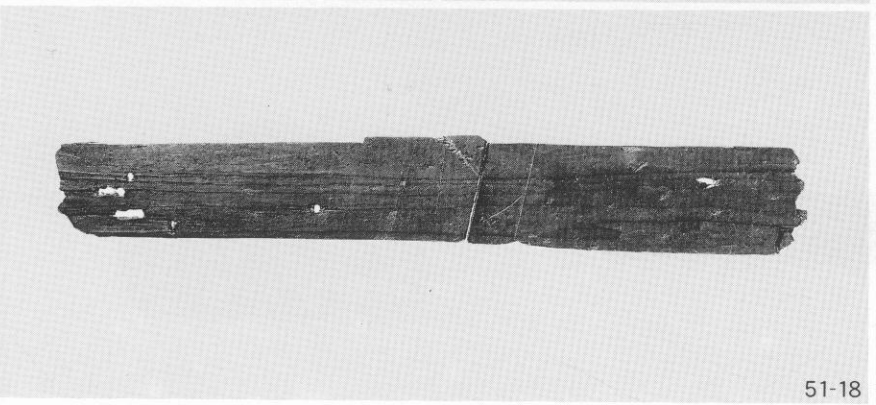
51-13 51-14



51-16



51-17



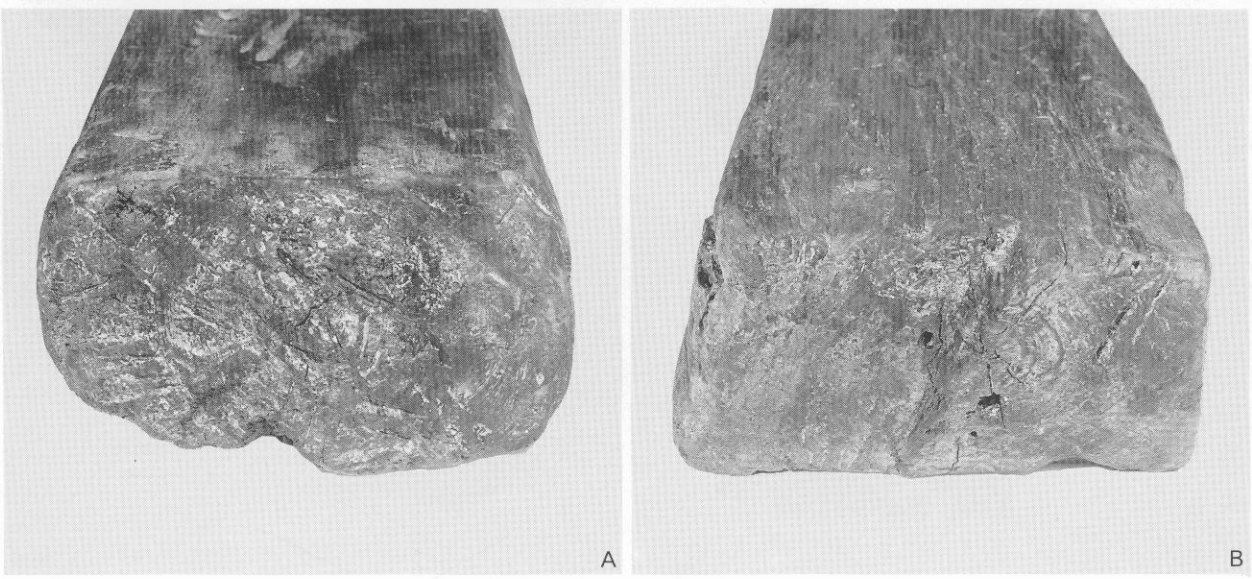
51-18



51-15 51-20

SX135・140出土木製品





SX135出土枕木状木製品



42-1

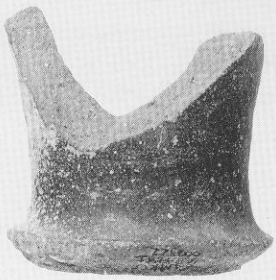


42-2



51-1

3



53-2



a



53-4



42-3

6

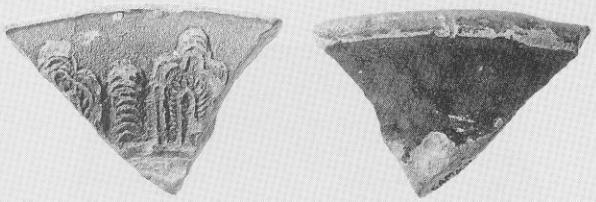
4



7

5

8



53-5



53-6

出土石製品・金属製品・獣骨、耕作土出土遺物

報告書抄録

ふりがな	だざいふしせきはっくつちょうさほうこくしょ　Ⅰ
書名	大宰府史跡発掘調査報告書Ⅰ
副書名	平成12年度
巻次	
シリーズ名	大宰府史跡発掘調査報告書
シリーズ番号	Ⅰ
編著者名	栗原和彦・横田賢次郎・中間研志・齋部麻矢(編集)・杉原敏之
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒818-0118　福岡県太宰府市石坂4丁目7番1号　　TEL (092) 923-0404
発行年月日	西暦2001年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大宰府史跡 第182次調査	太宰府市坂本三丁目13外	40221	210045	33°30′50″	130°30′57″	000808～ 000822	20㎡	住宅建替
大宰府史跡 第183次調査	太宰府市坂本三丁目22-1 太宰府市坂本三丁目16-1外	40221	210045	33°30′48″	130°30′58″	000807～ 001012	151㎡	下水道工事
大宰府史跡 第184次調査	太宰府市観世音寺四丁目808番	40221	210044	33°30′47″	130°31′20″	000831～ 000918	78.9㎡	住宅建替
水城跡第26次 調査補足	大野城市下大利四丁目1-1・2	40219	190130	33°30′45″	130°29′28″	001017～ 001124	50㎡	計画調査
水城跡 第32次調査	大野城市下大利四丁目691-1外	40219	190130	33°30′49″	130°29′35″	000221～ 000825	110㎡	計画調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大宰府史跡 第182次調査	官衙	平安時代	土壙　1基	土師器	政庁後背地
大宰府史跡 第183次調査	官衙	奈良時代～中世	柵　1条 溝　3条 土壙　3基 段落ち遺構　1基	須恵器・土師器・瓦質土器・陶磁器・瓦・鞴羽口・土製品・石製品・金属製品	政庁後背地
大宰府史跡 第184次調査	寺院	鎌倉時代～室町時代	掘立柱建物　1棟 石組み基壇　1基 土壙　1基	須恵器・土師器・瓦質土器・陶磁器・瓦・土製品・金属製品	観世音寺子院推定地
水城跡第26次 調査補足	土塁	白鳳時代～平安時代	水城土塁		版築時の杵突痕
水城跡 第32次調査	土塁	白鳳時代～中世	木樋抜き取り掘形 窪み状遺構　1基 杭列　1条 段落ち遺構　2基	須恵器・土師器・瓦器・陶磁器・弥生土器・瓦・木製品・石製品・金属製品・獣骨	木樋抜き取り

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード 2117104
登録年度 12	登録番号 0003

大宰府史跡発掘調査報告書　Ⅰ

平成12年度

平成13年３月31日

発　行　　九州歴史資料館
太宰府市石坂4丁目7番1号

印　刷　　株式会社川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6-41